
ヒーローの条件

中路太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒーローの条件

【Nコード】

N2983C

【作者名】

中路太郎

【あらすじ】

東町商店街には時々悪の組織とヒーローが現れます。八百屋のおっさんも魚屋の奥さんも住んでいます。買い物帰りの主婦も登校中の学生も居たりします。とにかく色んな人が色んな事をしています。…そういう話です。…いや、多分。

ブローグ　とあるいつもの日常

「だあああああつしゃあああああああ」

後ろ回し蹴りが蜘蛛型怪人の腹に直撃する。

その際放たれた右足は炎のように赤く輝き、鳩尾にめり込んでいく。
「ぐえええええ」

体を折り呻き声を上げるという怪人らしくないリアクションをとりつつも、何とか崩れ落ちるのだけは耐えたようだ。

たたらを踏みつつその場に止まるが、微妙に震える以外は体を動かさずにいる。

「今だ」

それを見て取ってヒーローが叫ぶ。

バイザーを緑の光群が走り抜け、体が淡く白い光に包まれた。

「とう」と一声して伸び上がって垂直にジャンプする。

人外の跳躍を見せると丁度アーケードの天井あたりで限界点を迎えた。

そこから自由落下を始めた時、ひときわ大きく声を上げた。

「必殺……」

纏っていた光が力強く輝きを増す。

目の前の空気を蹴り——「スーパ……」——伸身でひねりを加えたバク宙を決め——「シャイニング……」——着地して体を丸めてクルクルと三回宙返り……をすべて空中でこなした。

「キイイイイイック」

赤い光群がバイザーに流れる。

体を包んでいた光は爆発的にその光量を増していき、小さな太陽のようになっていた。

それが、一直線に落ちてくる。

狙点の中心には怪人の姿があった。

落下に合わせて楕円になった光は体中に塗された羽毛が風に剥が

されるように散っていき、その下から赤い人型の輝きが現れた。

同じ場所を何度も塗りつぶすような長い一秒。

実際は、ちよつと待って、とも言い切れない瞬間。

「ちよ、待っ……」

果たしてそれを蹴りと呼ぶ意味があるのか？

体重六十kgの火の玉が時速二百kmくらいで突っ込んできた時、そいつがどんな格好をしているかなんてのは、さして重要ではないと思うのだけれど……しかし、さもそこが大事だといわんばかりにヒーローは蹴りの体裁を保っている。

「ぎゃぶあろつしゅたぶろれぶるあああああああああ」

胸にキックを喰らい怪人は吹っ飛ばされたが、こうなってしまうえば、やはり何を喰らったかなんて些事でしかなかった。

災難のような攻撃によるベクトルが人幅大の溝を作っていく。

五十メートル程進んで停止すると、シューという出処のわからない音を立て始めた。

「……………」

沈黙とともにピクリとも動かなかった体が、矢庭にぶるりと震えた。

ぼんつと間の抜けた音を立てて爆発するとたちまち白い煙を吐き出した。

「あら、もう終わり？」

突然艶っぽい声が上がった。

ヒーローが声のした方を振り返ると、視界に見覚えのある一人の女が立っていた。

「ちっ」

思わず舌打ちがこぼれた。

四季を冒流するようなボンテージファッション。

黒い革のビキニに幅の広い同色のマント、ゴテゴテと蝶の装飾のされた半面の仮面をつけ、もう半分、素顔には同じように蝶をイメージさせるメイクをしている。

手袋にブーツ、チョーカーのように見えるのは首輪だ。
それぞれが黒い革製で出来ていた。

そんな格好の女が、口元に指を当て困ったように首をかしげている。
た。

「プルーム……」

忌々しげにヒーローが呟く。

返事のつもりかプルームと呼ばれた女はヒラヒラと手を振ってくる。

「おはよう。調子どう？」

「……おかげさまで最悪だ」

「あらん、それはお気の毒に」

色のある笑顔でそういうと、パチンと指を鳴らした。

「でも残念。今日は時間が無くて慰めてあげられないの」

彼女の背後に全身黒タイツの集団が現れた。

「そう言わずにゆっくりしていけよ」

「ダメ。さ、みんなはクモちゃんの回収」

「ウィー」と、ぎりアウトな掛け声を上げて全身タイツたちが散っていく。

「させるかつ」

駆け出そうとしたヒーローの足元で小さな爆発が起こった。

「ぐっ」

「邪魔しちゃダメよ。あれだってタダじゃないんだから。あれ一つあるとないとでどれだけ家計に影響を与えると……」

「なら、最初っからやるんじゃないっ」

言いつつもプルームから目を離さない。

爆発の後には小さな水溜りが出来ていて妙な匂いが立ち昇っていた。
た。

「ウフフ、それもイヤ」

からかうようにそう言うとき自分の唇に指を沿わした。

搦めとられるような視線にヒーローは後じさった。

ブルームはそれを楽しそうに見ている。

「……終わつたみたいね」

出し抜けにブルームがそう口にした。

耳を澄ませると、確かに背後からやり遂げたような「ウィー」が聞こえてきた。……どんなだ。

「名残惜しいけど、そろそろ行かなきゃ」

ブルームが親愛を籠めたウイंकを送ってくる。

「黙って逃がすとも思ってるのか」

「思わない。でも逃げるの」

言つと右手をすばやく振った。

カラだった指の間に緑色の液体の入った小さな試験管が挟まっていた。

「しまつ……」

次の瞬間、それは先ほどの水溜りに放り込まれていた。

パリンと試験管の割れる音がして中の液体が水溜りに混ざり合う。

俄に紫色の煙が発生して視界を奪い始めた。

「じゃあ、またね」

煙に巻かれる寸前、そう言い投げキッスをして走り去るブルームの姿が見えた。

「ぐっ、くそっ」

必死で手を振るうが簡単に払えそうも無い。

そうこうしてる間にも「ウィー」という声は確実に小さくなっている。

「ちつくしょうっ」

……そして。

「二度と来るなあああああああああああああああああああ
煙が晴れた時、虚しく叫ぶヒーローの姿が有ったとか無かったとか。」

第一話 ばれちゃった

待ちに待った黄金週間。^{ゴールデンウィーク}

素敵な彼氏と一泊二日のお泊り旅行……って、誰の話ですか、これ？

「おーい」

頭の上からニヤけた声が降ってくる。

聞き飽きるほど耳になじんだ声に顔を上げると、そこにはやはり国^{くに}東^{さき}歩^{あゆむ}の姿があった。

「あーあー不機嫌な顔して。」

どうしたの？ミルク？オシメ？」

「…溶けて失せる」

「それは難易度が高いよ」

笑いながら前の席の椅子をひっくり返し、どつかと腰掛ける。

ただ今、この席の本来の持ち主の姿は無い。

多分学食にでも行ったんだろう、昼休みは既に十分程が過ぎている。

俺はといえば、学食にも購買にも行かず、職員室から帰ってきてからずっと机に突っ伏していた。

「千葉ちゃんなんだって？」

国東が焼きそばパンの袋を破りながら訊いてくる。

千葉ちゃんとは、俺たちのクラス担任の千葉玲子^{ちかはれいこ}女史の事で、その可愛らしい容姿とは裏腹に、闇金の利息のような大量の課題を出してくることで有名な、担当教科数学、御年二十七歳、な女である。ちなみに独身。

俺は黙ってカバンの中から、厚さ五センチほどの紙の束を取り出した。

バサッと机の上に放ると、国東が哀れっぽい声を上げた。

「うあ、これ全部課題？」

「うい。…ゴールデンウィーク中寝るなって事だろ」

「手っ取り早く死ねって事なんじゃないの」

……縁起でもない。

国東はパンを口にくわえ、パラパラと課題をめくっている。

「一年の時の問題まであるんだね」

「しかもそれご丁寧に改訂版だと。なんか、とりあえず数字は全部違うらしい」

そして、当然のように課題はこれだけでは終わらない。

一年の総復習に、二年になってから今日までの復習、そしてこれから先の予習、丸々二章分。

それらを、ゴールデンウィークが明けてすぐにある数学の授業までに出せというのだから……これはやっぱり死の宣告かもしれない。

忌諱されるように投げ返された課題との、丸五日間の真剣勝負を
セメント
思うと気持ちは底知らずに下降して行くが、ただ嘆いているだけでは芸が無い。

何とか建設的な思考をしようと頭を捻るが、どうしても意識は今朝方の出来事へと飛んでいく。

そもそもこんな課題が出される羽目になったのもヤツ等が原因なのだ。

俺は肩で息をしながら、割れんばかりの拍手の中に居た。

高揚感など一切無く、軽い倦怠感と纏わりつくような疲労を全身で感じていた。

「なかなかの手際だったぜ」

見た事のある八百屋の親父が、馴れ馴れしく肩を叩いてくる。

「うるせえ……し……仕事……しろ」

整わない呼吸でそう答えると、野次馬を押しつけて、その輪の中から可哀相な自分を助け出した。

拍手は未だに鳴り止んでいないが、実を言うとアーケードを反射するこのマーブル模様の音の八割くらいは、悪玉であるヤツ等を送られた物であり、更に、その内九割以上がああのだるだる蝶々女へと向けられている。

まあ、中には怪人のために手をたたいているのも居るが、これは完全に少数派だろうし。
マイノリティー

暇人どもを背中に、釈然としない落ち込みを感じつつも「まあ、ヒーローなんて所詮悪者のアンチテーゼだし」と心に上手に嘘をつきながら俺は歩き出した。

と、突然、しょ気返っていた背中をおもくそハタかれた。つんのめりそうになりながらも、慌てて襲撃者の正体を探る。

そこに居たのは果物屋の看板娘だった。

「背中曲がつてるぞヒーロー」

ぽん、とリンゴを一個放ってくる。

「それ食ってシャキツとしろ」

そう言つと、呆然としている俺を置いて、とつと店の中へと戻って行った。

「……いや、なんだよ」

手の中にある信じられないくらい赤いリンゴを見ると、何故だか胸が詰まった。

「……………」

あ、ちくしょう、ちょっと傷ついてたからってこんくらいで泣くか、みつともない。俺は男だ、その上ヒーローだぞ。しかも、まだ朝の九時だから、ひとがいっぱいだし。そう、今は朝の……………ええ？

え、何？九時？今九時？！いや、いやいや、違う、今は九時じゃない。
ない。

今は九時い…………二十う…………二分か。余計ダメだ。

「……か、か、完全に遅刻だ」
涙は途端に引っ込んでいた。違う意味で泣きそうだったけど。
代わりに……

（おお、何だ、何か笑けてくんな）

「あはは、ちくしょう遅刻だ」

俺は笑いながら全力疾走でいつもの薄暗い路地裏に飛び込む。

ダンボールが幾つも重なって出来ている死角に体を滑り込ませた。

「……………変身」

一応周囲を確認してからキーワードを口にする。

バイザーにコマンドが走っていった。

右から左へと緑色の光の粒が流れきると、ベルトが淡く大きく光った。

全身を包んだそれがベルトを中心に収束していき、空気に触れた所から元の姿が現れてくる。

三十秒もしない内に徐々に輝きが収まっていくと、辺りに薄暗い路地が戻ってきた。

ダンボールを掻き分け隠しておいたカバンを取り出す。

「……ここから学校まで走っても十五分は掛かるな」

という事は、一時間目はほぼパーフェクトでぶっちぎる事になる。

考えてる時間も惜しくなり俺は走り始める。

「今日一時間目ってなんだったっけ……」

貰ったリングを齧りながら、頭に時間割を思い浮かべる。

今日は週の真ん中水曜日。

六時間目に体育がある日だから、一時間目は……。

「数学？」

サーッと血の気が引いていく。

千葉ちゃんの楽しそうな笑顔が脳みそ中を弾け回る。

「きゃっ」

考え事をしながら走っていた所為だろう。

体に軽い衝撃が走り、小さな悲鳴とともに誰かが倒れこんだ。

「あ、ごめん」

真正面からぶつかったいた事に気付いて俺は慌てて手を差し出した。

視界に長い二つの三つ編みと東高の制服が目に入った。

彼女は、ぶつかった所為で外れたメガネをかけなおし、躊躇いがちなながらも差し出された手を取ってくる。

……………ん、あれ？どこかで見た気が。

「あ、秋名くん？」

立ち上がりながら彼女が口にしたのは、何と俺の名前だった。

いや、当たり前だ、目の前に居るのは、俺なんだから。

あきな だいち
秋名大地 えいとひがし 映都東高校 二年三組 男 時々ヒーロー。

不思議だったのはそれを何で彼女が知ってるかって事だったんだけど、理由にはすぐに思い至った。

(何だ同じクラスの子じゃんか)

窓際の席の子だったと思う。

気付かなかったのは、教室にいる時の彼女と大分雰囲気が違う気がしたからだ。

名前は確か……………。

「水城さん」

国東の声で意識が一気に現実に戻ってくる。

ぎよつとして俺は国東の方を見た。

「な、何で呼んでんの？」

「突撃隣のスキヤンダル」

「……………は？」

「ねえ、いい？二人揃って仲良く一時間近く遅刻して、しかも一緒に教室に入ってくるってのは、こりゃ完全にラブラブスキヤンダルって事でしょ」

…… どういうシナプスしてんだこいつ。

しかも何時そんな話になった。

「ずっとその事聞いてたのに秋名はなんか上の空だしさ、だからもう一人の当事者に聞こうと思って」

国東がこちらを向いた水城さんに手を振る。

彼女の机の上には俺のと同じ課題があった。

既に取り掛かっていたのか何ページが進んでいる。

それを邪魔された、明らかに不機嫌な顔で立ち上がった。

机の上に新しい、機嫌の悪い影が差す。

「なに？」

愛想も何も無い声で彼女は尋ねてくる。

眉根を寄せて遊び毛を払った。

三つ編みが揺れて記憶のそれとダブる。

そこに、どうしようもない違和感を覚えた。

（ああ、そっか、目だ）

水城さんは何の関心も無さそうな目で国東を見つめていた。

冷たいんじゃない、悪意がある訳でもないのに、近づくと傷だらけになってしまいそうな視線。

周りと自分との間にある線をはっきりと引いてる人の目だ。

それに比べると記憶の中の彼女は表情が柔らかく、随分と無防備な目をしていた。

納得できた気がした。

今朝、彼女の名前がすぐには出てこなかったのは、俺の中で今日の前に居る彼女こそが水城真琴みづき まことだったからだ。

「僕らとお話しようよ」

国東が屈託の無い顔で、そう提案する。

誰と相對しても態度の変わらんこいつも相当だな。

半ば感心しつつ俺は水城さんの方を見た。

「…課題やつてるからいい」

水城さんはなぜか俺を睨んでいる。

「…明らかに、イライラしているご様子だ。

「まあ、そう言わずにさ」

意に介した様子も無く国東は強引に水城さんの肩をつかむと、無理矢理自分が座っていた席に座らせた。

「ちよっ…」

自分も新しい椅子を持つてきて、そこに腰掛ける。

その強引さに水城さんが呆れた様に口を噤み、それで、なんとなく場が出来てしまった。

「でさあ水城さん…」

口を開きかけた国東の懷で携帯が鳴り出した。

聞こえてくるのは三週連続くらいランキング一位の曲だ。

「あ、ごめん、ちよっと、出て来るね」

「「え!?!」」

立ち上がった国東に、図らずも声を合わす俺達。

「はい、もしもし」と小さくなっていく背中にはベランダで動きを止めた。

微妙に声は聞こえてくるが内容までは聞き取れない。

「…気まずい沈黙が流れる。」

「……」

「……」

で、このまま黙ってたらバターになっちゃうんだっけ?……うん

?……違う気がするぞ。

「…あの人は」

不思議そうな声で水城さんが喋りだした。

腕を組んで忙しく指を上下させている。

「いつもあんななの?」

あの人って、ああ国東か。

「ああ、大体ね、基本的に自分勝手に無神経だし」

「人を呼び出しておいて電話しに行っちゃうみたいなの？」

「そうだね、ざらにあるな」

「今みたいな事が？」

「……いや、普段はもつと酷い」

「……それで、何で友達続けてるの？」

心底分らないという顔で聞いてくる。

「んー……時々ほんとにむかつく事もあるけど、根っから悪い奴ってわけじゃないし、面白いから……かな」

（何かちよつとまじめに答えてしまったぞ）

俺がそう言うのと急に水城さんは俯いてしまった。

「……私は、人に迷惑をかける人は嫌い。その人がどんなにいい人でも」

「え？」

聞き返そうとした時、国東が戻ってきた。

「あれ、何の話？」

「いや……あ」

「それじゃ、私用事があるから」

そういつて立ち上がると水城さんは教室を出て行ってしまった。

「……ほんとに何の話してたの？」

「なんでもないよ、お前こそ電話なんだったんだよ」

「んー美貴ちゃんからだった」

椅子に座りながら、携帯をいじくっている。

「ああ、つて、誰だそれ？」

「彼女」

ふーんつてあれ？

「ん？お前なんか五組の子と付き合ってたっけ？」

「あー、うん、でもこないだ別れちゃった」

「はあ？まじで？だって二週間前とかじゃなかった？付き合い始めたの」

「うん、多分ね。でも三日くらい前に別れちゃった」

「はやっ！そいで今美貴ちゃんって子と付き合ってたの？」

「うん、あ、でも、もう違うのかな？」

「は？」

「今さっき電話で別れちゃったし」

「ああっ？」

「いや、何で秋名がキレてんの」

「そりゃまあ俺がキレる道理はないけどさ。」

「何で、別れてんだよ？」

「ええー？どうしてそこまで言わなきゃいけないの？」

「良いから言えよっ」

「横暴だー」

それでも国東はしぶしぶ喋り始めた。

「だってお昼ご飯一緒にしようって言うんだ」

「ああ、それって欧米でカップルが別れる一番多い理由でしょ？」

「へえ、そうなんだ」

「そうなのじゃないよ。」

「それでなんで別れんだよっ！？」

「ええっ、だってこれからみんなでお話しようって時にだよ。もっ

と空気読んでよ。」

しかも、僕パン食べてたし……。だから無理だよって言ったら、何かその人たちと自分とどっちが大事だ、みたいな事聞いてきたから美貴ちゃんとはそんなに長い付き合いでもないし、秋名と水城さんだって答えたんだ。そしたらなんか怒り出しちゃって……」

………は
っ。

イカン、思考がフリーズしてた。

「それで別れちゃったのか……」

「うん。……って、僕から話したいって言った訳じゃないのに何でそんな顔してんのさー」

—— 何で、友達続けてるの？

水城さんの言葉がフラッシュバックしてくる。

「なあ、国東」

「なに？」

「俺達なんで友達なんだっけか？」

「な、なんだよそれ」

何で、友達続けてるの？って、そんなの解んないよ。

放課後、千葉ちゃんに呼び止められた俺は、なぜか今日二度目の職員室を訪れていた。

「今日の遅刻といい、最近他の教科の先生からもあんまり授業態度が良くないって聞いてるよ」

何か書類を書きながら千葉ちゃんがとがめるような声で言う。

何を言われているかというと簡単に言えば昼休みのお説教の続きだ。

椅子をくると廻し俺と視線を合わせた。

「授業中よく居眠りしてるみたいだし、お家で何かあった？」

「……いや、別に」

千葉ちゃんの大きなアーモンドのような目を見ながら俺は答える。視線を逸らす訳にもいかず、まさかヒーローやってますと答えるわけにもいかない。

「私は一年の頃から秋名君の事知ってるから、君が何の理由もなしに授業サボったりする子じゃないのは知ってる。だから私で力になれることなら出来るだけのことはしたいと思ってるんだけど、どうかな」

そう言ってまっすぐに俺を見てくる。

……この眼は苦手だなあ……全部見透かされていそうで。

言葉がつまらないように気を付けながら、俺は口を開いた。

「……あの、先生が言ってくれてる事は凄い有難いんですけど、本

当に何でもないっスよ。今朝のは只の寝坊だし、授業中寝ちゃった事があるのも、多分前の日に夜更かししてたとかってだけで、別に……」

言ってから唾を飲むのを止められない。

ゴクツとやけに大きな音が喉でなつた時、千葉ちゃんが溜息をついて視線をはずしてくれた。

俺の視線に負けたわけでも、納得したわけでもない。

多分見逃してくれたって言うのが一番近いと思う。

「ハア……じゃあ一つだけ。私は一年の頃から二年になった今も秋名君の担任で……これだけ長く一緒にいれば、今君に何かあるって事は分かってるつもり。それに君がその事を他人に話すべきじゃないって判断したなら多分それは尊重されるべきなんでしょう。でも、教師は生徒の安全を守らなきゃいけない立場にあるの。その為には嫌がられても秘密を暴かなきゃいけない時もある。ただ、まあ、今回は取り敢えず先生は知らない事にしておく。……だから、これは教師としてじゃなく、君と一年以上付き合いのある一人の大人としての忠告ね」

「もし、君に言えない事、隠したい事があるなら、最初からそんなものまるで無い様に振舞いなさい。これは、何の言い訳もしない今の君のとらなければならぬ最低限の責任。体調を崩してもダメ、倒れるなんてのは問題外。もちろん学校休んだり遅刻もダメよ。きちんと、誰にも悟られないように、責任を持って無理をしなさい。……いい？ 隠し事をするっていうのは、本当のことを言わなければ良いってことじゃないんだよ。その事で最後まで誰にも不安を与えないって事なんだからね。それが出来ないんじゃあ隠し事なんかしちゃダメ……解った？」

「……はい」

「イヤ、担任と数学教師から、みたいなこと言ってるけど、それ千葉ちゃんが一人で言ってる事じゃなか。な、なんかちょっと違うんじゃないかなあって」

「…そうかしら……………だったら、君の隠していたい事って一体なあに？」

「な、なんですって？」

何言い出してんだこの人！？先刻は見逃してくれらって…。

「だって千葉ちゃん一人が言ってる事なんですよ、千葉ちゃんは真正銘教師だもん」

「……………うぐっ……………」

「…やっぱり、教師として生徒の事はきちんと把握しとかないと、ね」

こ、この、女ア。

だから先刻「一人の大人としての忠告」なんて言い方したのか。

「……ハ、ハメヤガッタナ」

「んゝなんのことかしらゝ」

って、めちゃくちゃ楽しそうじゃねえか。

「か、勘弁してよ千葉ちゃん」

「千葉先生、でしょ。ほら、とつとと行く。園芸部の子待ってるよ」

「さ、詐欺だああああああああ」

「じゃあ秋名先輩はここをお願いします」

と、それこそ花が咲き乱れんばかりの笑顔で俺に割り当てられたのが校舎裏の花壇だった。

園芸部の子はとても明るく可愛くて、俺をだました大人達とは違い、花をお花さんと呼ぶくらいとてもピュアだった。

しかし、女である以上、いつ何時あの詐欺教師や家の婆さんのようになるとも限らん。油断は出来んが……………って、だめだ、ちよつと

女性不信になりかけてる。

と、とにかく水遣りだ。

校舎裏の花壇は三棟ある校舎の内、東棟と中央棟の二ヶ所にあるらしい。

何が植わってるのか詳しい事は知らないが、水の遣り過ぎ以外、特に注意が必要な花も無いそうだ。

まず最初に俺は、園芸部の部室のある東棟の花壇から始める事にした。

量としては畳二枚分くらいの花壇が三面、そこにバランスのいい間隔で花が植わっている。

ここにある花で知っていたのはパンジーくらいだった。

ちなみに如雨露は使わない。

先にシャワーがついたホースを園芸部の子が貸してくれていた。本当にいい子だ。

滞りなく東棟の水遣りを終えた俺は、ホースを回収して中央棟の校舎裏へと向かった。

中央棟は俺達二年生が使っている校舎だ。

時々目に入っていた季節ごとに姿を変える花壇。

オートマチック

なんとなく、自動的にそこにあると思ひ込んできていた物が、実は誰かの手によって維持されているという事実は、清々しい新鮮味をもって俺の頭の中に入ってきた。

中央棟に着いた時には更に濃厚なオレンジが辺りを包んでいた。

時刻は午後五時を過ぎている。

最近この時間まで学校にいる事が無かったから、なんだか妙に懐かしい感じがした。

(……不本意ながら、いつもならこの時間には商店街に居るからな)
今日は多分もう大丈夫だろう。

一日に二度なんてのは今まで無かったから、なんとなく気は楽だった。

……代償は高くついたけど。

水のみ場の蛇口にホースをセットする。

本当は花壇の近くに水遣り用の水道があるらしいんだけど、なぜか今は閉められていて使えないんだそうだ。

ホースをズルズル引きずりながら校舎裏へと向かう。

次の角を曲がると、もう後は花壇しか無いっ、という所で、叫ぶような声がした。

「馬鹿みたいに黙ってないでなんとか言ったらどうなんだよ！」

……随分、口の悪い花だな。

超音波みたいにきーきー聞こえてきた声は女のモノだった。

ホースを静かにおき、そーっと影から顔を出す。

見ると、数人の女子——六人かな——が小さな輪を作っていた。

おそらく、その中心には、無口な女の子が居る事だろう。

手前の子の所為でその姿は確認出来ないけど。

「とにかく、何とか言いなっ」

一人の子が疲れたようにそう言った。

どれくらいそうしているかは知らないが、声のトーンから今始めたという事はないようだ。

（それにしても、びっくりするくらい死角になってんな、ここ）

辺りを見て俺は驚いた。

校舎はここに面しては窓が一つも無く、学校を囲む目隠しの高い塀が、外からの目線もカットしている。

日の光もあまり入りそうにないし、場違いに花が少し心配になった。

見てみると、幾分元気が無いようには見えるが、花は健気に咲いていた。

「あんた自分が何やったか分かってんの？」

最初に聞こえてきた声で女の子が叫ぶ。

てか、ここが幾ら死角になっていると言ってもそんなに大声を出したら誰か来そうなものだけだ。

そうでもないのかな？まあ俺もここに来るまで気付かなかったしな。彼女達のやり取りを眺めつつも、俺は途方に眩れていた。

本音を言えば、花に水を遣ってとっとと帰りたかった。

こんなケンカには全く興味が無いし、正直他所で遣れとすら思う。責められてる子は確かに気の毒だけど、俺は別に誰も彼もを助ける正義の味方じゃない。

まあ、このまま放つとくのも人としてどうかと思うんで…先生でも呼んでくるかな、と踵を返しかけた時だ。気になるやり取りが耳に入ってきた。

「あんたこの子の彼氏とったんだよ」

そりゃ酷いな。

「もういいよ、やめてより力」

ああ、この子が不幸にも彼氏を略奪された子か。

既に歩き出していた為声しか聞こえなかったが、なんか弱々しくしてるけど随分と裏のありそうな作り声だった。

まあ、ほんとに止める気があるならもっと早くに止めてただろうしな。…とは、あんまりな言い方だろうか。

「ミキは黙ってて、私はこういう子が一番許せないんだ」

それはまた随分ご立派な信条ですな。

他人の色恋に口出した上に大勢で一人を槍玉に上げるって言うのは。

(ん？)

何かが引つかかって俺は足を止めた。

「でも」

ミキと呼ばれた子の縋り付くような声が聞こえてくる。

…そうだ、なんか最近そんな名前を聞いた気がする。

しかも、もの凄くいやな事に、この状況に至りかねない心当たりまである気がする。

多分引きつっているだろう顔に、嫌な汗が流れ始める。

ゆつくりと、なるべく現実になるのが遅くなるように歩いて校舎裏に戻っていく。

「あのさ」

再び、疲れたような興味無さげな声がしてくる。

もしかしたら、この子の気だるげな声は、デフォルト設定なのかもしれない。

しかし、直ぐにそんな思い付きがどうでも良くなるような事をこの子は口にした。

「とにかく、そのアキナってもう一人の子連れてきなよ」

スゲー知ってる気がするよ、俺、その子の事。

……つうか、多分俺だ。

「あの〜」

声を掛けると何人かが慌てたように振り返った。

（あゝやっぱりだ）

泣きたくなるくらい滑稽なシチュエーションながら、これが現実だ。

—— 事実は小説よりも馬鹿馬鹿しい。

最近ただでさえそう思い知らされてるのに……。

一言喋ったつきり黙ってしまった俺の目に、割れた人垣の間から少しだけ驚いたように口を開いた、水城真琴の姿が映っていた。

水城さんを囲んでいたのは三年の先輩方だった。

俺はきちんと誤解だという事を説明し、最後に穏便に一言付け加えた。

「出来ればですね、先輩達が何の為にここに居て、俺が誰と仲が良いかってことを考えていただきたいんですよ」

「……言ってる意味がわかんない」

美貴先輩が俺の方を見ながら言ってくる。いや、分かっているだろ

その顔は。

てか、やつぱ、コメディネーター演技だったかこの人。

……まあ、純粋な天然とは思ってなかったけど。

「何言ってるかわかんないし、もういいや、なんか。いこ、みんな」

「え……いいの？」

そう言った友達を無視して、急にキャプテンシーを発揮した美貴先輩が背中を向けて歩き出す。

これでお終いにしてくれるという事だ。少なくとも俺達に関しては納得出来ない様子その他の先輩達の中で、やっと終わったと言わんばかりに欠伸をした先輩が居たのが印象的だった。

去り際に口だけで「悪かったね」と言っていたようだが、確認するわけにもいかずそのまま見送った。

そして俺達は今、中央棟の中庭で、そこに置かれたベンチに腰掛けていた。

「じゃあ、あの人たちが言っていた彼つて国東君のことだったの？」

妙に話を通じなかった水城さんに最初から事情を説明し終えたと

彼女は驚いたようにそう言った。

まさか国東が絡んでいたとは露程つゆほども思ってたようだ。

仮にも当事者とは思えない状況認識だけど仕方が無いのかもしれない。

国東がしてた電話の内容を彼女は知らなかったのだ。

彼女からすれば真正銘ただの言い掛りをつけられた形で、たまた国東が俺と水城さんの名前を出したばかりにこんな事に巻き込まれてしまった。

同情を通り越して、非常に申し訳ない気持ちで一杯だった。

「でも何できちんと説明しなかったの？誤解で責められて腹立たな

「かった？」

「…苛々はしたけど、そもそも何をどう誤解されてるのかも分からなかったから。あそこに連れて行かれた時点で、あの人達もう感情的になってたし」

誰もまともに説明しなかったのか。

「ただ、先刻の先輩…悪かったなって言ってた人だけど、あの人だけつまんなそうに、アキナって子知ってるか？って」

「？。それで、なんて言ったの？」

「知らないって言ったよ」

そこで少しだけ楽しそうに笑顔を作った。

眼鏡の奥の瞳が柔らかく細まる。

「だって、先輩の彼氏を取っちゃうような、アキナって女の子に心当たりなんて無かったもの」

「そ、そりやそうだ、つうか女の子と間違われるって…」

俺がそう言うと、水城さんはおかしそうに体を折った。

揺れる三つ編みにメロディーをつけるみたいに鈴の音のような笑声を立てる。

「それにしても、あの人達全部勘違いだったんだね」

まだ少し残る笑い声を引きずりながら彼女が言う。

「うん、きっとそれに気付いたからあの人たちもすぐに引いたんだろうけど。…それにしても、本当にごめんな、なんか、俺らの所為でこんな事に巻き込んだんじゃって」

向き直って頭を下げる。

「別に秋名君の所為じゃないじゃん。…それにちよつとあの先輩の気持ちも分かるしね。流石にあそこまでしようとは思わないけど。国東君は酷いヤツだな」

冗談めかしてそう言いながら手を組んで顔を俯けた。

俺の脳裏に昼休みに彼女が呟いた言葉が蘇ってくる。

……私は、人に迷惑をかける人は嫌い。

誰でも勿論そうなんだろうけど、妙な近さが彼女のあの言葉には

あった。

「これでもまだ国東君と友達？」

突然、水城さんが覗きこんで来た。

急に近づいてきた顔に少したじろいでしまう。

「ま、まあ、保留かな。あの人と別れたのはどうやら正解っぽいし」

美貴先輩の去り際の伶俐な顔が浮かぶ。

只モンでなかったのは確かだ。

……まあ、曲者具合じゃ国東も負けてないと思うけど。

「うーん、そうかもね」

そういつて水城さんは空を見上げた。

寒色と暖色が混じり合うことなく共存する空。

夕方よりは深く、夜には少し早い。

そこに知的な顔が綺麗に映えた。

撫でるように雲を追う視線には教室で見せるような興味無げな様子は無い。

——……私は、人に迷惑をかける人は嫌い。

何か関係があるんだろうか…。

そう思うのは強引な気がしないではないが、普段の彼女と、今の彼女。

その違いの理由を思った時、浮かぶのはこの言葉だった。

「あのさ……」

思い切ってそのことを俺が聞こうとしたときだった。

ビーツ…ビーツ…ビーツ…ビーツ…

突然、雰囲気壊す電子音が鳴り響いた。

「な、なに？」

驚いた彼女が、すっと立ち上がった。

音が聞こえてくるのは俺の左腕からだった。

そこに巻かれたゴツイ腕時計がけたたましく騒いでいる。

「あ、秋名君の時計？」

「う、うん」

戸惑いながら答える。

…これは商店街からの緊急呼び出し音だ。エマージェンシーコール

商店街に怪人が現れた時に、商店街そちにいる祖母ばあさんの子分が俺にそのことを知らせるためだけに使うホットライン。

これが鳴ったってことは間違いなくやつらが現れたって事だ。けど……。

（一日に二回もかよ）

そんな事いつもなら有り得ない。

少なくとも俺の代になってからは初めてのことだった。

正直かなり戸惑ってはいたが、このままボーっとしてる訳にもい
かない。

俺は立ち上がると水城さんに向き直った。

「ごめん、用事出来た」

「え？」

「悪いけど、先に帰るな」

「そ、それはいいけど……これ……って秋名君っ」

最後まで聞かず俺は走り出した。

この時間、商店街は人で溢れていてとても変身なんか出来ない。
道中にも身を隠せるところはないし、少なくともパニクッてる今思
いつくところは一つしかなかった。

俺は中央棟の校舎裏に飛び込んだ。

制服の前を開け、ベルトを外気に触れさせる。

右手でそれを撫でると鼓膜を圧迫するような起動音がした。

一瞬ベルトの表面が煌めく。……待機状態に入った。

後は音声入力式のこれに命令「命令」を通せばいい。

変身のためのキーワードはもちろん……。

「……変身っ！」

ベルトに熱量が生まれ、それが全身を駆け巡っていく。

臍の辺りに新しく出来た心臓から、血液が送られていくような感覚。隅々まで渡っていき、体の機能の一つ一つが強引に解放されていく。

体の表面にもう一枚皮膚が張られていき、徐々にそれが馴染んでいくのがわかった。

最後に、ぱんつと弾ける様に輝いて、それは完了した。

「……………」

体の具合を確認する。

一日に二度の変身は初めてだったが、どうやら、問題はなさそうだった。

「……よしっ」

商店街に行こうと身を翻した。

「……………」

な……。

「あ、あの」

何で……。

「ご、ごめんなさい、あの」

何で……ここに居るんだ……？

「鞆、置いていったから、明日からゴールデンウィークだし、課題もあつたから……」

おずおずと水城さんが鞆を差し出してきた。

呆然とそれを受け取る。

それは確かに俺の鞆だった。

バイザー越しに彼女の戸惑った顔が見える。

その時、彼女が口にしたのは……

「あ、あの、ご、ごめんね。秋名君
なんと俺の名前だった。」

幕間　ゝ悪党どもの挿話ゝ

薄暗い部屋。

世の小型化の流れをあざ笑うかのように、巨大な演算装置がカタカタと音を立てている。

オシロスコープの青白い画面が、暗闇の中にボウッと光り、そこにモノクルをつけた白髪の男を浮かび上がらせた。

この過去の遺物展のような場所こそ、東町商店街に出没する悪の組織の秘密ラボである。

部屋の中央にベッドが置かれ、その周囲にたくさんのモニターが置かれてあった。

ベッドの上には、蜘蛛を歪形わいけいさせた体を持つ人型の何かが横たえられていた。胸の中心には深い凹みがあり、体中にコードが繋がれていて、それが、医療機器に見えなくもないものへと伸びていつている。

「ふむ……」

ベロベロベロベロベロ……と機械から吐き出された紙に書かれた数値を見ながら、男は顎に手を当てた。

「どう思うね」

背後を振り返り、紙を差し出しつつ尋ねる。

暗闇に片羽の蝶が浮かんだ。

細長い紙を受け取ったブルームは、それを一瞥すると興味なさそうに手を振った。

「さあ？考えるのは私の仕事じゃないし」

ベッドに横になっている蜘蛛男を撫でながら、婉然たる笑みを見せる。

「とにかく、もうこんな事は勘弁して欲しいわね」
いわれて決まり悪そうに男が頭を掻く。

「んー、悪かったとおもつとるよ。お前にもあの坊主にもな。どうしても新しい人工知能を試したくてな」

そう言くと、蜘蛛男の体からコードを抜いていく。

「ん、問題ないじやろ」

手を当てて首をコキツと鳴らす。

「それで、アレはいつ頃完成しそうなの？」

ブルームが期待するような目で男の方を見る。

「ふむ、外装自体はもう出来とるしな、今回の事で人工知能の欠陥も見つかった。…まあ、無駄足にはさせんですみそうじゃよ」

「お願いよ」

にいくつと猫のあくびのような笑顔を浮かべた。

と、その時。

「きゃあああああああああああああああああああああああ
あああ」

頭上。地上の自宅で叫び声が上がった。

「「あ」」

ブルームと男が、しまったと言う様に顔を見合わせた。

ガタガタと何かが揺れる音がし、カーテンと何かが倒れ、カシャーンと割れたのは一体なんだろうか。

ラボから地上に繋がるエレベーターが上昇しだし、直ぐにまた降りてきて、地上で飲み込んだものを吐き出した。

「何で起こしてくれなかったの?!」

「おはよう。まあちゃん」

陶然としたブルームが、現れた少女に抱きついた。

「いや、ちゅう、は良いからお姉ちゃん」

顔を近づけてくるブルームの顎を押さえつつ少女は男の方を見た。
「どうということ? おじいちゃん」

「ん、いや、実はな、この蜘蛛男が逃げ出して……」

「あ、ごめん、やっぱ聞いている時間無いや」

「う……う、む」

残念そうに俯いた男を尻目に、少女は時計に目を遣る。

ちゅ、つと音がして頬に湿り気を感じた。

「隙あり」

「ちょ、止めてって……あ、ほらもう口紅付いちゃったじゃんかー」

「うふふ、可愛いまあちゃんが悪いんだもん」

「もう、まあちゃんはやめてっていつてるでしょ」

手鏡を取り出してハンカチで口紅の後を拭き取っていく。

「まあちゃんはまあちゃんだもん」

ブルームが少女の後ろから抱き着いて頬ずりを始めた。

「お、お姉ちゃん、面が痛い、面が」

「あーほれ急がなくていいのか？」

じゃれ合う二人に、落ち込んでいた男がそう言っただけでブルームに睨まれる。

「もう、だからお年寄りって空気が読めないとか言われるのよ」

がくーんと肩を落とした男を慰めるように少女が笑顔を見せる。

「ああもう、おじいちゃん落ち込まないで。ほら、今日は何番でいけばいいの？」

そう言われて嬉しそうに顔を上げた男がモニターの方を見た。

そのうちの一つを指差す。

「今は五番じゃ。人通りが一番少ないからのこの時間」

嬉々として教えてくれる男にクスツと笑みこぼした少女はエレベーターに乗り込んだ。

五番のボタンを押す前に一緒に乗り込んでいたブルームを追い出すのを忘れない。

「ああん、まあちゃあん」

「もう………いつてきますっ」

扉が閉まって、エレベーターが動き始めた。

モニター音は遠くなつて行く。

「まあちゃああん、カンバツーク」

「お前ホントに直らんな、その病気だけは」

病名、重度のシスコン。

ブルームはモニターを凝視していた。

「ん？」

男の目が別のモニターに一人の男子学生が走ってくるのを写した。少女の乗ったエレベーターは地上に彼女を吐き出した後、既に地下へともぐつている。

「……こいつも遅刻かの？」

モニターの中、少女は眼鏡を拭いていた。

ラボではたばたしていた時にはこりでも付いたのだろう。

走ってくる少年には気付いている様子は無い。

一方、男子学生の方も、リングを銜え何故か蒼い顔をしながら走っている。

心ここにあらずとその顔に書いていた。…二人が同じ画面に映る。

次の角を曲がった時、二人はぶつかってしまうかもしれない。

「この坊主も東高の生徒か………もしかして、これが原因で何かが始まつたり……」

「ない」

「いや、もしか……」

「ないから」

未だかつて無いほど冷たい目で見られ男は黙った。

只、ブルームの想いはともかく、モニターの中で二人は正面から衝突してしまっていた。

第二話 負け、負け、負け

……どっかの歌姫ディーヴァが歌ってたっけ。

人生は選択することだって。

選択してこそ人生、ビバ、チョイス。

……だったら俺も選んでやろうじゃないか。

1、何とかごまかす

2、逃げる

俺は脱兎のごとく逃げ出した。

とにかく今は逃げる。逃げて、これから迎える死闘の事だけを考える。そして、家に帰って電話線を抜く。ぐっすり寝て新しい朝を迎える。それから、ゴールデンウィーク中とにかく布団をかぶって「いないって言って」と言い続ける。ゴールデンウィーク後、学校で水城さんに会う。そこで新しい俺を見もらう。全身全霊をかけてしらばつくれる俺を。

そんな素晴らしいプランを、しかし水城さんの手が止める。

しっかりと握られる俺の上腕二頭筋。

「は、はなして」

そして、殺人鬼に襲われる少女のような悲鳴を上げる俺。

夜が、地上から熱気を吸い上げていく。

寒暖の優劣が逆転し、世界の半分はこれからゆっくりと冷えていくんだろう。

なのに、俺の腕を掴んだ手は、妙に熱いままだった。

俺はといえば嫌な汗をいっぱい掻き、希望する心肺活動も儘なら

ない。…出来て第三希望「ぜえはあ」

……彼女は言った。

——ご、ごめんね、秋名君。

何を謝ったかは解らないが重要なのは彼女が今の俺の姿を見ても秋名君と呼んだことだ。

体を包むのはパツと見、赤い全身タイツ。

近づいてみると、昆虫の外皮のような光沢と硬質さがあるのが解る。通気性も伸縮にも不便しそうな見た目とは裏腹に、着てみるとこれが結構快適だったりする。

少しばかり大きく見える頭部は、フルフェイスのヘルメットを被っているようにも見えるが、趣味的な細部はこのメットメーカーも連想させない。

そして、臍辺りにでんつと鎮座する派手なベルト。

初めて変身した時、鏡の前で思わず膝をついた姿が今ここで同級生に曝されている。

しかも唯一の救いであつた匿名性は既に失われていた。

「あの、秋名君だよな」

一言も喋らない俺に怪訝そうな顔を向けてくる。

ひよっとして今否定したら何とか誤魔化せるんだろうか。

「イエ、違います。私は通りすがりのヒーローです」

「……」

「……」

一瞬、いけるかと思う間があつたが

「それは……流石に……」

……どうやら、呆れられていただけのようだ。

それにしても、彼女はやけに落ち着いている気がする。

パニックの真つ最中の俺としては非常に羨ましいんだけど。

「……行かなくていいの？」

きよろきよろと辺りを見回した後、未だにビーツビーツなり続けている左手首をさしてそう言った。

「……行つていいの？」

コクンと頷く。

「だって呼ばれてるんでしょ？」

今度は俺が頷いた。

「えと、じゃあ……」

走り出そうとした俺の腕を、掴んでいた手がグンツと引っ張る。

「あ、あれ？」

「その代わり、明日お昼に東公園ね」

腕に掛かった手に力がこもる。

どうやら逃がしてはもらえないようだ。

「…来なかつたら、どうなるか分かつてるよね」

そういつて上目遣いの水城さん。

潤んだ目に頬が少し朱い。

典型的なおねだりフェイスだけど、俺がされてるのは脅迫だ。

そんなものに屈するヒーローなんて聞いた事……

「お昼食べてからでいいかな」

無いだけだ。

……俺は自分の不勉強を現実の所為にしたりしない。

「じゃあ一時に東公園で」

そんな約束を交わし、俺は商店街へと走り去った。

しかし、闘いを前に今日はもうコテンパンにされているような気がするのには気のせいだろうか。

ベルトを挟んで俺と祖母さんが対峙する。

十代には酷な沈黙だった。

を求めて悲鳴を上げた。

「はっ……はあっ……はあっ……はあっ……はあっ……はあっ……」
呼吸が速く浅くなっている。

天井から蜘蛛男（改）が糸をつたって俺の直ぐ横に降りてくる。
ストンと地面に降り立つ瞬間、俺はネック・スプリングで跳ね起きると、着地したヤツの足を払う。

これには意表をつかれたのか、ヤツが尻餅をついた。

そこをすかさずサッカーボールキックをするが、片手で簡単に受け止められてしまった。

「むっうん」

再び投げ飛ばされ、体が宙を舞った。

テナント募集と張り紙のされたシャッターまで飛ばされそのまま地面に落下した。

「くっ……」

小さな悲鳴が口から漏れる。

（……こいつ、違うっ、強い……）

体中に痛みを感じながら、頭の中で呟く。

ヤツは余裕を持ってこちらに近づいてくる。

何とか上半身を起こすが足に力が入らない。

立つ事もできず、見ているだけの俺の顔を、蜘蛛男（改）が無造作に蹴ってきた。

「ぐあっ」

吹っ飛ばされて、地面に倒れこんだ。

ゆっくりと歩いてきて俺の首に手をかけ、そのまま片手で体ごと持ち上げられた。

グツと喉を絞められ息が出来ない。

「……っは……っは……っは……」

浮いた足で蜘蛛男（改）の腹を蹴るが、びくともしなかった。

「あら？もう終わりなの？」

霞む視界に、ブルームの姿が映る。

「プル……ム……」

蜘蛛男（改）が俺の首を持ったまま、手を突き出すようにしてシヤッターに叩き付ける。

背中の衝撃と地面の感触を感じながら、俺は酸素を求めた。

「ごほっ……けほっ……ヒィー……ハァー……ハァー……」

這いつくばって、呼吸をする俺にブルームが哀れっぽく声を掛けてくる。

「……もう無理みたいねえ……。クモちゃん帰る？」

そういつて踵を返そうとするブルームの足を掴む。

「じよ、……冗談……だ……だろ……」

ブルームにしがみ付く様に立ち上がろうとする俺を、蜘蛛男（改）が蹴り飛ばす。

「あん、もうっクモちゃんっ」

頬を膨らませて蜘蛛男（改）を叱るブルーム。

完全に舐められている。

……もういい、わかった。

いいよ、はつきり言っただけ見てた。

今朝の事もあつたし楽勝だと思つてた。

自分がまさかこんなになるとは思つても見なかった。

……これじゃあ、祖母さんにぶつ殺されても文句言えねえ。

けどなあ。

俺は脚に力を入れて何とか立ち上がる。

それを見ていたブルームが驚いたように口元に手を当てる。

「もう……そ、れ……終、わりだ……」

蜘蛛が耳障りな笑い声を上げた。

「それは、お前の事かっ」

ブルームが止めるのも聞かず、蜘蛛が飛び出してきた。

顔に拳がめり込み、腹に膝が入る。

「もう止めなさいっクモちゃんっ」

「ですが……」

ブルームの言葉に蜘蛛の攻撃が一瞬やむ。

今だっ。

ちよつと卑怯だけど……俺はその隙を見逃さずに叫んだ。

「ヒーーーーート」

ぐるっと体を一回転させチョップを繰り出した。

それに気付いた蜘蛛が、先ほどの軌道を見ているかのように体を沈めた。

俺はあらかじめ予想していた通りにチョップの軌道を変える。

顔を狙って斜めに打ち下ろされたチョップは蜘蛛男に難なく受け止められる。

こいつ…。

顔が蜘蛛の癖に笑っているのが分かった。

勝ち誇ったように叫び声を上げる。

「バカがっ！！！」

そりゃ、おめーだっ。

「クモちゃんっ」

ブルームが叫ぶ。

おせえっ。

俺は受け止められていた右手でこちらから蜘蛛の手を掴んだ。

「パンチッ」

——ヒートパンチ。

バイザーを緑の光が一瞬でよぎる。

ベルトが命令を受けつけ身の内を焼くような力が全身を駆け巡って行った。

その力が左手に集まっていき、青白い光を放つ。

それを、体を振りながら、がら空きの顔面へ……。

「……………」

幕間　それぞれの思惑　イン　東町商店街

この商店街で、人垣が出来、怒号が乱れ飛ぼうとそれを喧嘩だと思ふ人は少ない。

実際はもつと非常識な遣り取りがそこでは行われているのだが、夕飯前のこの時間、その事で足を止める地元主婦の数は少ない。

その場にいるのはこの時間には体の空いている下校中の学生や、この商店街の話を聞きつけて集まってきた観光客、イベントを求めるカップル、そして、忙しい時間にも拘らず、それが始まると店をほっぽり出して飛び出してきてしまう商店街のおっさん連中。すっかりしてないほう

奥さん方で今更この騒ぎをジツと見ていられるほど暇を感じている人は少ない。

もう、何十年も繰り返されてきた日常。

代替わりがあつたらしく、ヒーローは中身が明らかに女から男に。悪玉の方も、表に出てくるのが、研究者風の男から、露出度の高い女へと替わっていったが、昔から総じて緊迫感は少なかった。

野次馬の中から、張り詰めた声が聞こえてくる。

「ね、ねえ、止めた方がいいんじゃない？」

「…つつか、どうやってだよ」

ふらふらになりながら立ち上がるヒーローに、蜘蛛男の拳が飛ぶ。ヘルメットが破損し細かい破片が宙に舞った。

どういった仕組みでか、破損部分は直ぐに補填リカバされるが、ダメージはそうもいかないらしい。

膝をつき、うずくまった所に容赦なく蹴りを入れられている。

視線の先で繰り返される暴力にギャラリイは一樣に息を呑んでいた。

「……いや、誰か止めるよ」

耳元で誰かが呟いた。

目の前で繰り広げられる光景に玲子は齒噛みする思いだった。
踵を返し、野次馬の輪から抜けた。

最終的にどちらが勝つにしろ、自分が最後まで見ている意味はない。
商店街の出口を目指しながら、忌々しさから舌打ちをする。

……昨日、いや今朝までの彼らとは明らかに様子が違っていた。

（……ちんどん屋みたいな呑気な連中だと思ってたのに）

だからこそ、干渉しない事に決めた。

それが、昨日の今日だと言うならまだしも、同じ日に失敗ミスだったと分かるなんて……。

（これじゃあ全然話が変わってくるじゃない）

肩を怒らせながらずんずんと歩く。

不機嫌を隠すことなく歩いている玲子を、通りすぎる人が怪訝そうに振り返る。

（……こうなったら、もう、形振り構なりふってられないわ、あの子もこ
つちに巻き込んでやる）

「ふふふ、ふふ、ふふふふふふ」

ヤケクソ気味に笑いながら、玲子は足を速めていった。

くずっと、ずっと、見つめていたい　もっと、もっと、強く抱き
しめて

アイドルの新譜を携帯でダウンロードしながら歩あゆは歩いていた。
イヤホンに耳を傾けディスプレイに目を遣りながらも、視界の片隅
に映った人物に足を止めて振り返る。

「…千葉ちゃん？」

その人物は直ぐに人波に吞まれていった。

しかし、波間から見えた後姿には確かに見覚えがあったような気がする。

（なんか面白い顔してたけど…）

引きつったような笑顔に見えた。

眉根を寄せて不本意そうに、それでも笑うしかないとその顔が言っていた。

首を傾げながら歩いていくと少し先に人だかりが出来ているのが見えた。

……歩も地の人間である。

いつものあれか、となんとなく通り過ぎようとしたが何か様子が違っている。

気になって、イヤホンをはずしつつ、いつもより静かな人の輪に加わった。

人ごみを掻き分け、輪の中心へと進んでいく途中、俄ににわか歓声が起こった。

何事かと思うまもなく、二つの影が人の輪を飛び出していった。

「???」

要領を得ないまま、背伸びをして歓声の送られている中心を見越す。

そこには、満身創痍のヒーローの姿があった。

……今にも倒れそうにふらふらしている。

（うあ、ぼろぼろだ）

ヒーローがギャラリーに揉みくちやにされそうになった一瞬、誰かが彼に歩み寄っていったように見えた。

……微かにだが、歩の目に映都東のスカートが翻るのが写った。

ヒーローに群がるようにしながら、その実、誰も近づけないようガードしている集団の隙間を少女はすり抜けていった。

彼女の到着を待っていたかのように、ヒーローが前のめりに倒れてきた。

彼女の肩に頭を預け、だらりと体から力が抜けていく。

「ぼろぼろ」

気だるげにそれでも微かな親しみを孕んだ声で、体を支えた。

「…よくやったね」

背中に手を廻し、抱えた頭を優しく撫でてやる。

良く見ると直りきっていない傷がマスクには無数にあった。

それ以外にも、おそらくたくさんの打ち身や捻挫を負っている事だろう。

「…重いわ、誰か早く代わって、とっとと自宅に連れて行きなさい。それから、直ぐに薫様に連絡して」

ときばきと指示を出しつつ、近づいてきた男に、慎重にヒーローを預ける。

なるだけ人目につかないように去っていくその姿を見送ってから、散っていく仲間とともに自然に人ごみにまぎれていく。

「…ご苦労様、アキナ君」

そう、疲れたような声で呟いた。

「分かりました」

受話器を置き、秋名薫は相好を崩した。あきなかある

この日を待ち焦がれていた。…それはもう長いこと。

惜しむらくは、その場に立つのが自分ではないという事だ。

現在の自分の体調を思うと、そんな事をしていられないのは、分かっているのだが。

「随分、待たせてくれましたね…」

万感の思いを胸に、自然にこぼれた言葉だった。

「それにしても…」

もう直ぐここに運ばれてくる孫のことを思う。

「こんな事くらいで、自分で帰って来られなくなるなんて、鍛え方が足りなかったでしょうか？」

二人を良く知る人が聞けば、真っ青になって倒れてしまい兼ねない事を呟きながら、薫は受話器を持ち上げる。

「やっぱり樹ちゃんも呼んでおいた方がいいでしょうね」

長いコール音が、薫の耳に響いていた。

「……何だ？」

「…薫様だった」

「……何だと？」

「…助太刀がいるそうだ」

「……誰だ？」

「…樹を」

二人は頷いた。

ベッドに横たわった蜘蛛男を見て、男は溜息をついた。

「また派手にやられおって」

白髪頭を掻きつつ、破損箇所をチェックする。

顔、右手と来て、殴られた左腕を見た時、息を呑むように声を上げた。

「これは……」

そこには今までにないダメージが見て取れた。

取り敢えず、肘から先が、煙になってしまったかのように消え失せ

ていた。

「何があつた？何か普段と違う事があつたはずじゃが？」

「さあ？…クモちゃんが顔をかばった時のでしょ？」

ブルームが大袈裟に肩を竦めて見せる。

「一応悩むようなそぶりでも口を開いた。」

「…んと、いつもと違う事って言ったら…あ、そうそう、パンチした時、手が青く光ってたかしら、いつも赤なのに」

「ふむ…」

男が顎を撫でる。

「自己防衛装置の一種かの。危機に際して発動するのも知れんなもつともらしくそう言い、直ぐに頭の痛そうな顔をした。」

「しかし、こいつはもう無理じゃな、骨格に無理をさせすぎとる」

「あら、でも一緒に走って逃げて来れたわよ」

ブルームが不満そうに呟く。

「それが止めになったんじゃない…。まあ、頭の方は無事じゃし、収穫もあつたようじゃからな」

先程ブルームが口にした事だつた。

——クモちゃんが顔をかばった時のでしょう？

それは男が期待していた反応だつた。

「後は、こいつの人工知能をアレに適合させれば」

「完成ね」

ブルームが嬉しそうに笑う。

「言つたとおり体のほうはもう既に出来上がつとるからな」

「んー、そう言えば、まだ見てなかったわね、彼女の事」

「見たいか？」

男が顔を輝かせた。

「言っておくが自信作じゃぞ、そりゃあ、ありとあらゆる資料を見ては、改修に改修を重ね、そして……」

『ただいま』

男の言葉を遮るように玄関を映すモニターに少女の姿が現れた。

「お帰りiiiiiiii、まあちゅわーーーーん」

ブルームが一目散にエレベーターへと駆けて行く。

乗り込んでから三十秒もたたない内にモニターに彼女の姿が現れた。

「まあちゅあーん」

「ただい…って、うわあ、抱きつかないでっ、ちゅうはやめてっ」

玄関で何やってんだって光景が映る。

「……はあ」

溜息をつきつつ、男がスイッチを押す。

部屋の壁がスライドして、巨大な筒状の水槽が現れた。

「どうやら、お披露目はまだ先のようにゃな」

水槽の表面を撫でると、栄養液が返事をするように、ボコツと泡を立てた。

幕間 くそれぞれの思惑 イン 東町商店街く（後書き）

クライマックスに向けての前フリです。

取り敢えず一部が終り、位のつもりで読んでください。

この話自体このペースでいくと、二部とちよつと位で終わりそうですので、宜しければもう少しお付き合い下さいませ。

第三話 戦う理由と三人の事情（前書き）

難産でした（笑）

第三話 戦う理由と三人の事情

夢は見るものじゃなく、掴むもの。

叶えたり、空のリュックに詰めこんだり、右のポケットに入ったりするもの。

……だけど、大抵は儚いもの。

だったら、せめて寝てる間くらいは良い夢が見たい。

夢を見ていた。

雲の上を歩いている。

いや、本当はどうやって移動しているのかなんて分からない。

けど、俺は雲の上を前へと進んでいる。

足元にあるフワフワとした感触を、捉えている。

(スゲー気持ちいい)

その場に惜しみなくあふれる光は、心地よい暖かさで俺を包んでいた。

……風呂で言うところジャスト三十八度。

半身浴でじつくりと汗をかき、持ち込んだ文庫本も半分くらいは読みきろうかという時間を進み続けた俺は、行く先に大きな光の塊があるのを見つけた。

長時間移動したにも拘らず、不思議と体に疲れはない。

まあ、こういう手段でここまで来たかも定かではなかったし、何よりこれは夢だ。

そんな事より、俺の興味は既にこの目の前の大きな光へと移っていた。

近くで見るとかなりデカイ。

高さは俺の身長三つ分くらいで、両手を目いっぱい伸ばした人が二人いても、端と端とを繋げないくらい幅があった。

小さい頃に読んだ本に「ちょうほうけい」と書かれていた図形が、

馬鹿でかくなつて縦に落ち着いた感じた。

光の直射を避け目を窄めてみると、かすかに概観が見て取れた。
真っ先に浮かんだ言葉は、窓だった。

光で形成される窓枠、その中を走る規則的な格子。

開け閉たてに便利なよう、取っ手の様な物までついた両開きの扉。

ジツと観察していると無性にそれを開けたくなくなった。

反射にも似た本能の欲求で、この向こう側にはもっと素晴らしい世界があるという事を俺は何故か分かつていた。

分かつていながら、窓を開けるのをためらってしまう。

そわそわと落ち着かず、きつとそうすることが正しい事なのに、何かが服のすそを掴んだ。

突然鐘の音が鳴り出した。耳を劈つんざくような大音量にますます焦燥は募った。

しばらく鐘はなり続け、取っ手に手をかけようかどうか俺が迷っている間に、だんだんとその間隔が長くなっていった。

やがてゆっくりと、鐘の音は静かに収まっていき……辺りは完全に沈黙を取り戻した。

「どうわああああっ」

俺は跳ね起きるようにして目を覚ました。

全身にかいた汗と、激しく上下する両肩。

体に掛けられていたと思われるシャツが腰の辺りで細くまとまっていた。

顎を伝う汗をぬぐうことなく、俺は夢の情景を思い返す。

（あ、あれはどう考えても、天国ヘンズドアへの扉だろ）

……良い夢過ぎる。

開いた先にあるのはそりゃあ素晴らしい場所だったろう。

ただ、焦りに負けてあの取っ手を掴んでいたらどうなっていた事か。

所詮は夢のこととはいえ、なんだろうこの激しい動悸。

取り敢えず、正月の中華街チャイナタウンで破裂する爆竹みたいな心臓を落ち着けて、現状を確認する。

……ここはどこ？わたしはだれ？、なんて一度は言ってみたい台詞だったけど、あいにく意識も記憶もはつきりしていた。

ここは俺の部屋のベッドの上。

あの蜘蛛野郎と戦って意識をなくした俺は、誰かにここまで運んでもらい、傷の治療まで受けた。

視線を下げると、全身に巻かれた包帯が目映る。

「ご丁寧に下着まで変えられていて、穿いた覚えのないパンツまで穿かされていた。」

これは、記憶にあるパンツと違う柄だと言う意味で、普段はノーパ
ンだぜ宣言というわけじゃない。

まあ今の姿はパンツ一丁な訳だけど。

俺は少し痛む体をちゃんと起こして、もう一度周囲を見た。

間違いなく俺の部屋だ。見覚えのあるスピーカーに見慣れたポスター、見飽きた顔が映る鏡に見知らぬ女、いつも邪魔だと思っている枕もとのランプシェードに……。

「おはよう」

「ああ、おは……誰ッ?!」

思わずベッドの端まで飛びのく。

シートで何故か胸までかばい、直ぐにベルトの所在を確かめる。

服より先に求める辺り、割と頼りにしてるのが分かってイヤだった。

きよるきよると部屋を見回す俺に、事も無げに女が動く。

「……これ？」

背後からずるりと取り出したのは、今まさに探していた馴染みのベルト。

釣果を自慢するようにぶら下げられているが、彼女の顔には、もう帰りたいと言いだした子供の表情がある。

「そ、それです」

自室なのに何故か敬語。……パンツ一丁って不安。

「…はい」

そういつてベルトを突き出した彼女の元へ、未だにシーツを胸に当てたまま這うように近づいていく。

警戒心もあらわに、そーっと、ベルトに手を伸ばした。

「別にとつて食べたりしないわよ」

疲れたようにそう言う。

ため息と共に出てきたような言葉だったが、俺はそれがデフォルト設定なのを知っている。

「あ、あの校舎裏で会いましたよね」

放課後の校舎裏。水城さんを囲んでいた人の輪の一部。美貴一派の構成員の一人、のはず。

つまらないように欠伸をしたのが印象的で、去り際に「悪かった」と口にした意味が分からなかった。

「会った」

あの時と同じような、興味無げな顔でぼそりと口にする。

名前、出身地、利き足、知りたい事はたくさんあったけど、差しあたっては取り敢えず…。

「……あの、ココで何してんすか？」

東町商店街に実しやかに流れる噂の一つに、“薫派”というのがある。

知ってる人からすればそのものズバリだが、知らない人からすれば、本当に意味が分からないという、極端な噂。

たひなめはる

橘美晴と名乗ったこの人が言うには、彼女と彼女の父親は、この

“薫派”の一員らしい。

手っ取り早く言って祖母さんの子分さん。

ビービーと俺の時計を鳴らすのも、彼らがやっている事だ。

「じゃあ、俺をここに運んでくれたのは？」

「うん」

橘さんが頷いた。

彼女のショートヘアが浅く揺れる。

「このベッドに寝かせてくれたのも？」

「うん」

「傷の手当をして包帯を巻いてくれたのも？」

「ん」

う、を省略しやがった。

けど、だとしたら、もしかして……。

「あの……」

おずおずと顔色を伺うように俺は尋ねる。

「…下着を…替えてくれたのも…？」

「……」

何でそこで黙るんですか…。

「下着は別の男の人が替えた」

そ、そうでしたか。

「あ、それは……」

「私は横で見てただけ」

…全然意味がないですね。

「そ、そっすか」

「……ふう」

お願いですからそこで意味深なため息は止めてください。

プライドだか純情だかがいたく傷ついた気がするけど、おおかたの事情は分かった。

「ありがとうございました。ホント何から何まで」

俺が礼を言つと、橘さんは首を横に振った。

「いい、好きでやってることだし」

その言葉が本心からであることを表すように、するりと何の淀み

もなく口から出て来た。

こういう人に出会つと、改めて祖母さんの凄さが窺える。

「それに私には君らに謝らなきゃいけない事もあるから」

謝らなきゃいけない事、と言う割には顔色が何一つ変わらない。

まあ、言い辛そうな顔、と言えなくもない表情ではあるが、この人は基本的に喋る事自体が億劫そうだ。

……にしても、君らつてのは俺と誰の事だろう。

しかも、謝って貰わなきゃならない事がある程の付き合いはないはずだけど。

「誤解だつて分かつて、大島美貴を止めなかった」

大島……って美貴先輩？

「私らがフォローをしているアキナ君に実際会つてみたかったから」
そう言つて少し笑つた。……だから「悪かつたね」か。

彼女は直ぐに元の表情に戻つたが、俺としてはなんとも言いにくい。会つてみてどうでした？、なんて聞けるほどの自信家でもないし。

ああ、それにしても、水城さんは本当にとぼちりだ。

このままじゃあ、俺は、迷惑を掛ける嫌いな人リストに名を連ねかねない。……てか、もう入つてるかも。

なんだかやけに落ち込む想像をしてしまつたが、おかげで思い出した。

「すいません、今つて何時いつの何時なんじですか？」

「ゴールデンウィーク初日の午前十一時十五分」

質問を予想してたわけでもないだろうに、考えることなく答えてくる。

「そっか……」

思わずため息を吐いた。

取り敢えず、遅刻してこれ以上評価を下げるのだけは避けられたようだ。

「……デート？」

あからさまにホツとした様子の俺に橘さんが聞いてくる。

とても本気で興味があるようには見えないが。

「それだったらどんなにか良かったでしょうね……」

明らかにトーンダウンした俺に橘さんが首を傾げる。

「実は……」

言いかけて俺は口を噤んだ。

橘さんは俺の正体を知っているから油断していたが、この人は”薫派”の人間だった。

正体がばれた、なんて軽々しく語ったら、彼女はともかく、そこから伝わった祖母さんに何をされるか分かったものじゃない。

三つ子の魂百まで。

幼少より祖母さんがしいた血と鉄の掟は未だに俺の中で息づいている。

……またの名をトラウマ。

その中に嘘をつくくなつてのが無かった訳じゃあないんだけど。

——このことに関しては、普段から嘘つきまくってるわけだしなそれが、祖母さんに限っては何の理由にもならないと分かりつつも、思っていたことと違う事を口にしてしまう。

「……実は、その水城さんと会う約束をしてるんです」

「水城さんと……？」

「そうです。俺達昨日、一時間目を完全にぶっちぎっちゃって、数学の千葉先生にたっぷり課題を出されてまして」

ああ、と呟く。

千葉ちゃんは三年生も受け持っているから、橘さんが彼女の悪癖を知っていてもおかしくはない。

「それで、仲良く勉強会ってわけ？」

「……まあ、そんなトコです」

本当は俺は一人のほうで集中できるから誰かと一緒に勉強なんて考えられないんだけど。

そんな事を俺が考えている間、橘さんはまだ首を傾げていた。その表情からは何を考えているのかは全く窺えない。

……と言うか何も考えてないんじゃないだろうか。

「アキナ君は昨日あいつらが現れたから遅刻したのよね」

「はい、そうですけど……」

「彼女は どうして？」

「え……」

まっすぐに俺を見たまま言葉を続ける。

「水城さんは普段から遅刻が多い子なの？」

「いえ、そんな事はなかったと思いますけど……」

そういえば何でだ？

普段は人との接触を避けるように、いつもギリギリに教室に来てたけど、遅刻というのは昨日が初めてかもしれない。

しかも、まれに見る大遅刻。

あんだだけ遅れたのは俺だって初めてだ。

俺のほうは奴らと戦ってたっていう、理不尽で遣る瀬無い理由の所為だけど……。

水城さんは どうして？

「ん、疲れた」

橘さんが急にボソツと呟いた。

——ぐうつうつうつうつうつうつうつうつ。

それにこたえるように俺の腹が鳴った。

そういえば丸一日何も口にしていなかった。

「何か食べた方がよさそうね」

鳴り続ける腹に赤面しつつ俺は頷いた。

「そうみたいです」

そう言ったあと、何故か見詰め合ってしまう。
いや……。

「あの、服を着たいんですけど」

「……」

「……」

「どうぞ」

正座したっきりの橘さんが勧めるように手の平を見せる。
……出来れば出て行って欲しかった。

大型連休の初日とあってか、東公園に人の姿はあまりなかった。
元々が貯水池のおまけとしてくつついていた広場だから、遊具らしい遊具もない。

敷地の三分の一を占める池が貯水池として使われなくなってから
は、そこにボート小屋が立てられたものの、直ぐに妙な噂が立つて
しまい利用者は極端に少ない。

いわく——この池のボートにカップルで乗ると、男女どちらか
一方が、醜いアヒルの姿になってしまう。

……都市伝説というより、もはや童話の世界での話だ。一体誰のど
ういう呪いなんだか…。

とにかく、ここに居るのは、年中働いてて休みなんか関係ない商
店街の連中か、行く当てか金、もしくはその両方のないカップルだ
け。

普通の人たちは、こんな広いだけの公園なんか見向きもせずに、某
大型二足歩行動物群のいる巨大パークへと出かけることだろう。

そして、ここで力なくベンチに腰掛けてる俺も、つまりは普通の
人でないと言う事になる。

……現に普通ではない。おそらく今月最も普通じゃない。

一体この世界の何人くらいが正体がばれる可能性を抱えて高校生
をしているのだろうか。

それもヒーローの。

その絶望的に低そうな可能性に落ち込みつつも、頭のどこかで未
だに何とか誤魔化せないものかと思案している自分がいた。

まあ、ここに居る時点で九割以上自白したも同然なんだけど…。

少し遅れてやってきた水城さんが「遅れてごめんなさい」と頭を下

げながら俺の前に現れたときに「違っんだよ」と第一声を発したのはつまりはそういう理由があったのだ。

妙に緊張しながら挨拶を交わした後、俺達は日陰になっているベンチへと腰掛けた。

ふう〜、と二人ため息をついて、早くも黙り込んでしまう。

予定ではこの後際限なく沈黙が続く事になっている。
と、いうか…。

（どっちがどう切り出せばいいんだ…）

それこそカップルなら話は簡単なのに。

これが告白なら好きな方から言い出せばいいし、別れ話なら嫌いになった方から言い出すんだろう。

けど、こういう場合は一体どっちから切り出せばいいのか分からない。

—— 暴いた方？ —— 暴かれた方？

「あなたって実はヒーローなんでしょ？」

「俺って実はヒーローなんだ」

だめだ、どっちにしろ俺はヒーローの部分に引っかかっている。

ずっとこうしていても埒が明かないのは分かっていたので何とかきっかけを探す。

どんなに馬鹿馬鹿しい事でも始めなければ終わらせる事もできないのだ。

「「あの」「

…そして可哀相なくらいベタな俺達。

視線の先にお互いが来ただけで、再び沈黙してしまう。

ふと……水城さんの目の中に俺の顔が映っているのが見えた。

茶褐色の虹彩に、黒い鏡で写したような左右が逆の歪んだ姿がある。

「……それ」

水城さんが何かに気付いたように、声を上げた。

「ふえいつ?!」

食い入るように彼女の瞳を見つめていた俺は、上擦った返事をし
てしまう。

「……どうしたの、それ?」

彼女の人差し指は首の辺りをさしていた。

「それって……」

手で触れてみると、ざらざらとした肌以外の感触がする。

——ああ、これが。

俺は首に巻かれた包帯をいじりながら言葉を探した。

「えつと、これは、その………あそつか」

そうだ、彼女は知ってるんだ。

今日ここに居るのはそのためだった。

と言う事は、この話題はいいきつかけになる。

「実は、昨日の、そのう、闘い、の時、に、ちよつ、と、ね」

言葉が途切れ途切れなのは気持ちちが少々前のめり気味だったから。
頭のどこかで、もう一度くらい、彼女が本当に気付いているか確か
めとけばよかったのに、なんて言葉も聞こえてくるけど、もう遅
い。

「……怪我してるの?」

彼女が不安そうに聞いてくる。

うーん、怪我と言えるかどうか。

包帯は目隠しの為にしてるし、ここに付いてるのは擦り傷とか切り
傷ではない。

羞恥プレイのような着替えを終え、洗面所に行った俺は鏡の前で
啞然としてしまった。

首筋に真紫の手の跡が付いていた。
それも首を絞め殺さんばかりに力強く握られた跡が。

直ぐに昨日の事が頭をよぎった。

――吹っ飛ばされて、地面に倒れこんだ。ゆつくりと歩いてき
て俺の首に手をかけ、そのまま片手で体ごと持ち上げられた。

――蜘蛛男（改）が俺の首を持ったまま、手を突き出すように
してシャッターに叩き付ける。背中の衝撃と地面の感触を感じなが
ら、俺は酸素を求めた。

「あの、蜘蛛野郎がああ」

怒りに戦慄^{わなな}く俺の姿が、齒磨き粉の散った鏡に映る。

クリア・クローンも、力強く握られた手の中じゃあプラークコント
ロールもままなるまい。

その後、橘さんから痣になった部分に包帯を巻いてもらい、見た
目は余程マシにはなったのだけど。

「だから怪我してるってわけじゃないんだ」

生半可な怪我よりよほどショッキングな映像ではあるが。

事情を説明し終えて、俺はため息をついた。

喋りだした時には、喉に何かが引つかかっているように、出て行き
にくかった言葉が、最後辺りになるとすんなりと話せるようになって
いた。

限定的とはいえ秘密のない体に清々しさすら感じている。

只、そんな俺とは対照的に、ただ事でない様子なのが水城さんだ
った。

「……………」

顔が真っ青になり、体が細かく震えていた。

何かを言いかけたままの形で口が開いて固まっている。

「ど、どうした？」

「ごめんなさい」

覗きこんだのと、頭を下げたのが同時だった。

「ぐおおおおおおおおおおおおおお」

形としては鼻っ面に頭突きを喰らったことになる。

そのまま倒れて鼻を押さえながら転げまわった。

攻撃する前に謝るなんて律儀なのかなんなのか…。

「きゃ、きゃあー」

水城さんが悲鳴を上げて立ち上がった。

休みだと言うのに丁寧に編まれた髪が、揺れながら遠ざかっていく。公園の隅にある水道でハンカチを濡らしてから走って戻ってきた。

それを、アホみたいに上を向いている俺の鼻に当ててくれた。

冷たいハンカチが熱と共に痛みをゆつくりと和らげていく。

「だ、だいじょうぶだから」

水城さんからハンカチを引き取り、姿勢を戻す。

痛みも引き、血も止まりかけてはいたが、しばらくはこのまま抑えていた方がよさそうだ。

「それで？」

すっかり落ち込んでしまった水城さんに続きを促す。

まさか、ホントに攻撃する前に謝ったわけではないだろうから、あの「ごめんなさい」には続きがあったはずだ。

それを聞けば彼女の様子が変だったのも分かるだろう。

落ち込んではいえるものの、今のアホな遣り取りで肩の力が抜けたのか、水城さんは思い切って話し始めた。

「あ、謝らなきゃいけない事があるの」

…またか。

今日目を覚ましてから二時間も経っていないのに、出会う奴出会う奴に謝られていく。

「そ、その怪我とかって、うちのおじいちゃんの所為なの」

……………。

皺の少ない俺の脳みそじゃあ、言葉が入っていつてくれない。

「それは水城さんのお祖父さんが、あの蜘蛛男って事？」

だとしたら不味くないか？　だって俺あいつの左腕ぶっ飛ばしちやっただよ。

「……………」

水城さんが黙って首を横に振る。

良かった、あんな動きする高齢者なんてイヤすぎる。

「じゃなくてあれを造ったのが、うちのおじいちゃんなの」

……………頭の中でクラクションが聞こえる。

思考の渋滞の中、抜け道を教えてくれる便利なナビも、スムーズに高速を乗り降りする為のETCも付いてない俺のポンコツ頭脳がもたもたと小銭を取り出していた。

「私が六歳の時に、家が火事になってお母さんが死んじゃったの」

水城さんの顔に申し訳なさとは別の暗さが宿る。

「お父さんは私が生まれる前に病気で死んじゃってて、私とお姉ちゃん二人だけが残された」

何故か、生前彼女の母親は自分の実家のことを話したがらなかったらしい。

幼い二人は寄る辺を無くしていたそうだ。

「それから少しして私達が預けられてた施設に電話が掛かってきたの」

それが、彼女のじいさんって訳か。

「寮母さんに代わってもらった電話の声は全然知らない声だったけど、とっても優しくった」

「……………その人が、一緒に暮らそうって？」

水城さんが頷く。

「私達さえよかったらって」

そう嬉しそうに笑った。

「で、でも」

……そう、でも、だ。

「行った先の家でおじいちゃんやんはヒーローと戦ってた、と」

心底申し訳なさそうに頷いた。

「あ、じゃあ、あの蝶々、プルームって」

「……お姉ちゃん」

…あれが？

あれが一児の、じゃないけどお姉さん？それも水城さんの？

「いつもお姉ちゃんが迷惑掛けてごめんなさい」

水城さんが頭を下げてきて、いえいえこちらこそ、なんて意味の判らないことを返しながら頭ではまた別のことが浮かぶ。

「えっと、俺の正体っていうのは……」

「そ、それは言ってないっ！私はおじいちゃんのお手伝いしてないし……」

お手伝いねえ…。

水城さんは肩から垂れてた二本の三つ編みを両手でぎゅっと握ってそう言った。

…眼鏡がちよつとずれてる。

それにしても危ない所だった。

知らなかった事とはいえ只ばれたってだけじゃなかった訳だ…。

だけど、恐縮千万といった態度で縮こまる水城さんを見てるとなんだか何も言えなくなってしまう。

俺は溜息を吐いて、だらしなくベンチに体を預けた。…なんか妙に疲れた。

「俺さあ昨日水城さんが迷惑を掛ける人が嫌いって言ってたのが凄いい気になってたんだけど、この事だったん？」

「……嫌いっていうのはちよつと違ったけど、嫌だなあって」「でもッ……」

俺は勢いをつけて体を起こした。

「あい…の人たちって商店街とか普通の人とかにほとんど迷惑掛けてねえじゃん」

そう言った俺のほうを水城さんはちらちらと見てくる。

「いや、ほら、そこは…だって、秋名君には実際もの凄い迷惑を、掛けてるわけで…」

あ、そっか、俺か。

…確かにちよっと、いや、かなり迷惑は迷惑なんだけど、それを水城さんが謝るのは違うと思う。

大体、個人的な迷惑って言うなら俺のほうが多く水城さんに掛けるわけだし。

そんな感じの事を言って俺はさらに続ける。

「それにさ、俺が一番納得いってないのは多分ウチの祖母さんになんだよね」

言われて水城さんはきょとん顔。いや、当たり前か。

…何の事情も説明せずに、俺にこんなモン預けた我が家のルール。俺はこの闘いの間にある因縁すら良く知らない。

「水城さんは、お祖父さんが何でこんな事してるか知ってる？」

何気なく聞いた俺の言葉に、しばらく考えてぼそりと口にした。

「……約束」

約束？

俺は水城さんの方に向き直った。

「そう言ったの？」

「うん。…前に、何でこんなことしてるの？って聴いた事があるんだけど、その時に笑いながら約束だからなって」

約束…か。

…もしかしてウチの祖母さんとのなんかな。

「心当たりある？」

「いや…ない」

そう言ってから考えずにいられない。…約束ねえ。

粗方聞きたい事を聞き終えると、話す事がなくなった。

行間毎くらいに謝っていた水城さんは、その度に頭がどんどん下に低くなっていった。

今は、膝を抱えるように顔を埋めたところで落ち着いている。

「今までならね、それでも、まだ良かったんだ」

くぐもった声が耳に届く。

「でも、今日、秋名君の怪我とか見てたら、ちょっと自信なくなってきた」

確かに昨日のあいづらは、今までと違っていた。

ただ、肝心なところでブルームは蜘蛛の事を止めていたから大きく趣旨が変わった訳でもなさそうだ。

「もし、この先何かあったら……」

水城さんの声は不安に怯えるようで、その先は言葉にならない。

この先も、あの人たちは水城さんの好きなお姉さんやお祖父さんでいられるのだろうか。

その時、ふと、脳裏にひらめくモノがあった。

「じゃあさ、それを俺の闘う理由にしていいいかな」

水城さんがゆっくりと顔を上げる。

「どういうこと？」

「俺、みんなみたいに闘う理由がないんだ。水城さんのお祖父さんは誰かとの約束が在るみたいだし、ウチの祖母さんにも多分なんか思うところがあるんだと思う……じゃなきゃ俺が可哀相過ぎる。ちようちよ……お姉さんは少なくとも嫌々やってる訳では無さそうだし……」

……俺だけが何も無い。

ただ、祖母さんに言われたから、言われた事をやっている。

まあ、やらなければ命が危ないって言うのは立派な理由になるか

もしないが、積極的に闘わなければいけない理由にはならない。
極端な事をいえば負けたつていいわけだ。

「だから、もし、この先何かありそうな時には俺が全力で止める」
水城さんが、あの人たちをずっと好きでいられるように。

それは、今まで思いついた自分への言い訳の中で一番上等なものの
気がした。

「だって、そんなの、何か変だよ」

「そうかな？」

「これ以上秋名君に迷惑掛けられない」

「迷惑っていうか、どっちにしろ俺は祖母さんに言われればやんな
きやいけないんだけどね」

何故なら刀を振り回すから。

言われた事が例え発情期のヒグマと闘うという事であってもそれは
やらなければならぬのだ。

……トラウマパートツィー。

「だから、自分の気持ちとして、何か理由が欲しいんだ。どうして
も、やらなきゃいけないっていう理由が」

言ってる意味は分かってくれたのか、悩むように眉根を寄せてい
る。

直ぐに、何かを思いついたらしくこちらに詰め寄ってきた。

「じゃ、じゃあ、私にも何か手伝わせて」

「え？」

「だって、何もしないで見てるだけなんて無理。どっちも当事者に
なりきれてない同士、情報交換とかも出来そうだし」

いや、俺、割と君のおじいちゃんの作った色んなのと戦ってんで
すけど。

「…ね、おねがい」

またあのウルウル目で迫ってくる。

「…聞いてくれないと、言っちゃうかも」

ナニヲデス力……？

しかし、今回はこちらだって弱みを握っている、条件としては互角なはずだ。

「そ、そんな事言ったって、俺だって言っちゃ…」

「これ」

俺の言葉を遮って水城さんが妙に真顔で、眼鏡のフレームを叩いてみせる。

「伊達めがね」

「え？」

「何の為にこんな物して、こんな面倒くさい髪型してまで優等生やつてるか分かる？」

ま、まさか……擬態？

ていうかキャラ変わりすぎじゃないかつ？！

「何を言うつつもりか知らないけど……信じてもらえるといいよね」

そういつてにつこり笑った顔はまるで天使のようだった。

……何で俺の周りにはこんな女しかないんだろう。

こうして、近年まれに見る不平等な条件の下、”俺達いまいち当事者になりきれてねえ同盟”は結ばれることとなった。

……ただ。

「秋名君……ありがとう」

そう言つて赤く染まった頬が、レンズの中で微かに歪んでいるのを俺は知っていたけど…。

ゴールデンウィーク
黄金週間二日目。

二日目にして既に、どこがっ黄金っ？！と、問いただしたくなる俺の状況は置いとくとして、街はそれなりに賑わっていた。

道行く人、人、人の波は連休らしい幸せなオーラに包まれている。

何故俺が大量の課題をほっばらかしてまで、こんな楽しくもないオーラの泉にいなきやいけないかと言うと、その原因は一時間前に掛かってきた電話にあった。

数度のコール音に、充電器につないでおいた携帯を開く。

ディスプレイを見るとそこには見知らぬ番号が表示されていた。

「……もしもし、秋名ですけど」

「あ、秋名くん？担任の千葉です……今、何やってた？」

…千葉ちゃん？

俺はテーブルの上に眼をやった。

そう広くも無い四角形に、PCの取り説のように分厚い課題と、一、二年時の教科書とノートが所狭しと広げられていた。

「……どつかの誰かさんに出された課題をやってました」

「あら、どこの誰子さんかしら、その美人さんは？」

「……」

…切ってやろうか。

しかも何か言い回しが微妙におばさん臭いぞ。

「……今、何か、そっちからネガティブな波動を感じたけど」

「い、いえ」

電話越しにそんなもの感じないでください。

「そ、それで何か用ですか？……てか、どうして、俺の携帯番号知ってんすか？」

「国東君に聞いたの」

頭の中に国東の馬鹿面が浮かんでくる。

あいつはいまいち、個人情報とかプライバシーとかって言葉に疎い気がする。

「それで、何か？あの、出来ればとっとと、課題を終わらせたいんですけど」

多少言葉に含ませた皮肉にも、特に意に介した様子もなく答える。
「秋名君今から出てこられる？」

人の話し聞いてないのかこの人？

「だから、課題が……」

「話があるの。君の隠しておきたいことについて」

特に含みのある言い方をしたわけでもないのに、千葉ちゃんの言葉は冷たい塊となって胃の腑に落ちてきた。

——い、いや、千葉ちゃんが知ってるわけない。

昨日の事があつたから必要以上に動揺してしまったが…橘さんたちは元々特別なんだ。

水城さんには俺の不注意からばれたけど、あの場に千葉ちゃんはいなかったはずだし。

多少不自然な間を作ってしまったものの、何とか落ち着いた声を出すことに成功した。

「それは、一昨日ちゃんと説明したじゃないですか」

電話の向こうから一瞬沈黙が聞こえた。

電話の持ち手を替えたか、姿勢を変えたかでもしたんだろう。

「…簡単に言うとな事情が変わったの。それで、電話じゃあ話にくい事だから会って話したいんだけど」

軽い口調だったけど断定的な物言いに俺は誤魔化すのを諦めた。

とにかく、会って話を聞いてみる必要を感じた。

「…今、どこに居るんすか」

その時指定されたのが、電車で二駅行つた彩音^{あやね}という町にあるファミリーレストランだった。

「ファミレスなんてこっちにもあるじゃないですか」

という俺の言い分には

「私の家から近いし、もうそこに居るもん」

とのお言葉。

腑に落ちないものを感じながらも、こうして俺は今見慣れぬ町を、
僻み根性丸出しで歩いていた。

駅から歩いて十五分くらいの所に、指定されたファミレスはあった。

驚くほど、家の近所にあるモノと同じだ。

改めて理不尽さを感じながら俺は店の中へと入っていく。

いらっしやいませーと、見えて逆に悲しくなるマニュアル笑顔で
店員が寄って来る前に、手を上げた千葉ちゃんを見つけた。

窓際の禁煙席でコーヒーなんか啜っている。

そちらへ歩いていくと、俺が席に着くのを待ってから声を掛けて
きた。

「お腹空いてない？」

「いえ……」

時計を見ると、まだ十一時前だった。

朝飯を食ってこなかったから正直空腹感はあるけど、我慢できない
ほどじゃない。

それに今は食べたい気分でもなかった。

「こつちが持つから何頼んでくれてもいいよ」

につこりと笑いながら言ってくる。

……なんだか別の意味で食ったらダメな気がしてきた。

きつと、ヘンゼルとグレーテルはお菓子の家でこんな笑顔を見た事
だろう。

「や、け、結構です」

「そお？……」

残念そうにしながら千葉ちゃんはその先の言葉を飲み込むように
口を閉じた。

ただ、間に合わずに漏れ聞こえた小さな声が……でも、どっちにし
る……だったのが非常に気になる。

「それで、話っているのは何ですか？」

直球で放られた俺の言葉に千葉ちゃんも少しだけ姿勢を正した。

「…まあ、この際回りくどい言いかたしてもしょうがないか」

そう言つてハンドバッグから取り出した小さな長方形の紙片をテーブルの上に置いた。

俺の目の前にスーツと差し出されたそれはどうやら名刺らしかった。

いや、今更千葉ちゃんの名刺なんか貰ったって……。

俺がそれを覗き込もうとしたとき、対面からとんでもない言葉が飛んできた。

「商店街のヒーローって君でしょ」

「えっっ!!?」

ガツと大きな音。

口に水を含んでいればブツで、それが牛乳なら掛かったやつは悲惨、ホットコーヒーならあっちだったけど俺は何も口に入れていなかった。

その代わり勢い良く立ち上がるとして、テーブルで膝を強打した。

「つつつ……」

「大丈夫？」

通路に飛び出して、膝をさすりながら飛び跳ねる俺に掛かる呆れたような声。

「な、な、な、な、な、な、な、な、な、な、なん……」

即興の素人スクラッチ。

な、を繰り返しながら千葉ちゃんの方を差した指をピコピコ上下させて口をパクパクさせる。

「ちよつと……落ち着いて」

千葉ちゃんは思わずといった感じで失笑しつつ、そういつて俺を席に座るよう促した。

「な、な、なん、な、な、な、な、なんで………なんでっ？」

座る事だけには成功した俺が、「お、お客様」とウェイトレスに宥められながら、身を乗り出す。

「大丈夫だから」

そう言って、ウェイトレスを引っ込めると、黙ってテーブルの上の名刺を指差した。

俺は文句を言いながらも一応それに従う。

「今更千葉ちゃんの名刺なんか見たって仕方ないだろっ、それより、今……の……なにこれ?……」

まじまじと名刺を見てしまう。

驚きよりも不可解さが勝った。

そこに書かれていたのは……。

——フィクション対策部 千葉玲子

…うん、フィクション対策部ってなに?

ウェイトレス達が今度は急に静かになった俺達に不審の目を向けていた。

フィクション。

本当ではない作り話。

本当ではない作り話ではないから本当ってかなり遠回りな意味のノンフィクションって言葉の生みの親。

映画評論なんか見えてこれらの言葉と一緒にリアリティーなんて評論家が言い出したら俺なんかはもう意味が分からなくなる。

——え?フィクションの映画なのにリアリティー?ノンフィクションって言ったって映画は作りモンじゃないの?

あと、オフ会とか天然パーマとか……言葉って奥が深い。

「…そのフィクション?」

「うーん、どのフィクションが良く分からなかったけど…多分」

困ったような顔の千葉ちゃんを見てると、どうやら俺の説明は分

かりにくかったらしい。

(に、しても)

俺はもう一度手の中にある名刺をまじまじと見た。

これは所謂^{いわゆる}子供の遊び道具とかじゃないの？オモチャ銀行的な。

「一応、国の機関よ、非公式だから組織図のどこにも名前はないけど」

———なのに名刺がつ？！

とは、素直な疑問だろう。

：いや、そんなことより、彼女の言っている事は本当のことなのだろうか？

千葉ちゃん表情を見てると少なくとも嘘を言ってるようには見えない。

もちろん俺なんかに見破られないようにはしてるんだろうけど、なにより、こんなものまで作って俺を担ぐ意味も分からないし。

疑いよりも戸惑いに近いモノを感じて俺は眉をしかめた。

「で、千葉ちゃんはここの人なの？」

名刺から目が離せず、顔も見ずに尋ねる。

「そうよ」

あつさりと肯定された。

まあ、名刺まで見せてるわけだしな。

千葉ちゃんは立て続けにされた俺の疑問にその都度きちんと答えていつてくれた。

「いつ俺のこと知ったの？」

「最初から。……あのねえ、一体どこに問題抱えてそんな生徒をほったらかしにする教師がいると思うの？」

それはもしかしたら居るかも知れないけど…。

「やっぱ詐欺じゃねえか」

「だから否定しなかったでしょ」

そっという問題か？

「先生っていうのは？」

「監視の為の方便。ただ教員免許は本当に持つてるけどね」

「監視？」

「そ、映都東町商店街に出没する悪の組織とヒーロー、私は特に君のほうね」

そう言つて意味深な笑顔を浮かべる。

「えと、もう一回聞きたいんだけど、この、組織は本当にあるモンなの？」

だって非常識だろう、とは、ヒーローやってる俺が言えた義理じゃないんだろうけど。

やっぱりおいそれとは信じられない。

「うーん……秋名君は”空想できるものは、存在できるもの”って言葉聴いた事ある？」

…あるような気がする。

そんな風な言い回しで聞いたわけでは無かった気はするけど、多分ある。

「…それがどうかしたんですか？」

頷いてから、俺は尋ねた。

「…ある国の然る絶大な権力者が、遊びに来ていた友人からこの言葉を聞いたの。普段なら気にもしないような言葉だったんだけど、その時、彼は寝室のキャビネットの上にある今読んでいる本のことを思い出した」

何か嫌な予感がする。

もの凄く馬鹿馬鹿しい事を聞かされそうな。

「その時、彼が読んでいたのが、シェリダン・レ・ファニユの”カ―ミラ”だった」

「……真に受けちゃったんすね……」

千葉ちゃんが力が抜けたように頷く。

「…だから、シェリダン法とかカ―ミラ条約とか呼ばれたりするんだけど……」

非公式だから統合できてないのか。

それにしても、やっぱりそんな、なんともいえない理由からだっ
たのか。

「ただ、大事なのはどう生まれたかよりどう育ったかよ。シェリダ
ン法は全世界であらゆる人の役に立ってる」

自分に言い聞かせるように拳に力を入れる千葉ちゃん。

「あの、その人、つて人にはどんな人がいるんですか？」

ああ、ややこしい。

千葉ちゃんは少し躊躇うようにしながらそれでも教えてくれた。

「まずは、もちろん吸血鬼でしょ、狼男にフランケン……」

……怪物王国か。

「宇宙人に未来人に天使……はもう何十年も交流がないらしいけど……」

……魔法使い、超能力者、改造人間、死神にミュータントに元人魚、
それから希少な空想動物達の保護。他にもやることといったら敵性
の説得もしくは排除、人間に溶け込んでいこうとする人たちへの助
成は勿論、イレギュラー的にそこにいる人達の保護、送還まで、と
にかく何でもやるのが私達の仕事」

思った以上に沢山いる。

というより、ごった煮という印象の方が強い。

ジャンルは一体なんになるんだ。

「……あ、忘れてた」

一瞬空中を見上げるようにして、千葉ちゃんと言う。

まだいるの……？

「……それから、ヒーローもね」

殊更に口の動きを強調するようにそう言っただけのほうを見る。

先程とは比べ物にならないくらいの嫌な予感が悪寒となって全身を
駆け巡った。

そうだ、俺も一つ聞き忘れてることがあった。

「……そ、それで、なんでそんな事を俺に話してくれたんすか？」

良くぞ気付いたと言わんばかりに、にや～と口の端を持ち上げる。
表情から俺の考えている事は分かっているんだろ。

「んふふふ、先生、君のそういう察しのいいところ好きだなあ。……それで、秋名君にはちょっと、先生のお手伝いをしてもらいたいな……なんて思ってるんだ」

さも、決定事項であると言わんばかりの表情で千葉ちゃんが笑った。

……どこが黄金週間？

「と、言っても、秋名君には今までと変わらない生活をしてもらうだけでいいんだけどね」

目の前のフォークを取りながら千葉ちゃんはそう言うとかルボナーラをそれに巻きつけた。

思った以上に話が長引いた所為で、いつの間にか昼食の時間を少し過ぎていた。

今度は奢るという言葉をそのまま受け入れ、俺も注文させてもらった。

目の前にジュージューと音を立てるステーキが置かれている。

普段はあまり頼まないのだけど、気持ち的には自棄食いに近い。

俺もナイフとフォークを手にそれに取り掛かる事にした。

「そっなんすか？」

口に肉片を放り込むと、醤油ベースのソースの味が口内に広がった。

「実は今までの行動を見てて、あまり、彼らを重要視してなかったの。だから圧倒的に情報が足りなくて。……まあ、それだけじゃなく、意外と巧くやられてたっていうのもあるけど……」

少しだけ悔しそうにそう語る。

「それで、なんで今更俺のことを」

「……昨日の戦いを見たから」
「やっぱり、そうか。」

「昨日の戦いを見て、少し危険だと思ったの。今は、君との戦いに

夢中だけど、いつ、そのベクトルが変わるとも限らない」

だから、せめて、目的くらいは分かっておきたいのだそうだ。

「その為の時間稼ぎですか俺は？」

「君も、負ける気でやってるわけじゃないと思うけど、モチベーションって大事でしょ。昨日みたいな強いヤツが出てきた時、負けられないって思いは力になる」

まるで自分がそうであるかのように、力を籠めて言う。

「俺が断るとは思わなかったんですか？」

あれだけ話しておいてそれが一番不味いんではなからうか。

しかし、千葉ちゃんは笑いながら「そんな事微塵も思わなかった」と言った。

「俺がヒーローだからですか？それとも先生が秘密を握ってるから？」

俺がそういうと千葉ちゃんは首をゆくりと振った。

直ぐには口を開かずに、答えになっていないような事を口にする。

「……言っただでしょ。少なから君の事分かってるって」

そう言っただ笑った千葉ちゃんの顔を見ると、なんとなく何もいえなくなってしまうって、無言で肉を切る作業に没頭した。

「あ、それより君、課題は進んでるんでしょうね」

急に教師に戻った千葉ちゃんの言葉に口の中のものを吹き出しそうになった。

「え、だって俺、ほら、色々事情があるし、千葉ちゃんも遅刻の理由知ってるでしょ」

俺がそういうと千葉ちゃんはため息を吐いて首を振った。

通訳すると”あゝあ、これだ”

「あのね、相手の事情で罰の重さが変わってたら罰の意味がないでしょう。罰はどんな時にも平等であってこそ意味があるんだから」

刑事裁判にだって情状酌量はあると言うのに。

その辺、諸々含めて、あえてもう一度問う。

……ねえ、ホント、どこが黄金週間？
ゴールデンウィーク

幕間　く目を覚ます者、迷う者く

鼻をつくのは何もかもが燃える匂い。

炎そのものと熱気が頬の産毛を焼いていく。

「おかあさん」

佳乃は母親の手を引っ張っていた。

「佳乃……」

弱々しく自分を呼んでくる母親へ涙にまみれた顔を向ける。

「……よく聞いて……」

力なく持ち上げられた手で頬を挟まれる。

ジワリと熱い体温が伝わってきた。

「……おかあさん」

その熱で溶かされた何かが涙となつて流れてくる。

「……お母さんは、一緒に逃げられない」

母親が佳乃の視線を促すように、自分の足元へと顔を向けた。

うつ伏せに倒れた体、足の上には燃える瓦礫が詰みあがっていた。

「だからあなただけで逃げなさい」

「や、だあ」

泣き声をあげて首をイヤイヤと振った。

そんな佳乃を母親が上半身だけを無理矢理起こして抱きしめる。

「……それで、真琴の事をお願い」

耳元で呼吸の荒い声がした。

佳乃の脳裏に四つ下の妹の姿が浮かんた。

母親は少しだけ佳乃から体を離して、その目を見つめた。

「……あなたが、辛い思いをしてまで守ってくれなくていいから……」

その代わり、あの子の事をずっと大好きでいてあげて」

母親の真剣な声に、躊躇いながらも佳乃はこくと頷いた。

小さな胸の中に、生きる理由というには幼いしこりが出来た。

頷いた佳乃を見て母親が安心したように笑う。

「…佳乃」

もう一度強く抱きしめて、佳乃の頬に何度もキスをした。

「あなたが大好きよ」

「おかあさん…」

どれくらいの時間かは分からない。

抱き合っていた二人の耳に、どこかで、何かが激しく崩れる音が聞こえた。

「……行きなさい」

佳乃はもう嫌だとは言わなかった。

「おかあさんも行こう」

その代わりお願いをするようにそう言った。

母親は返事をしなかった。

目を瞑り顔を俯けて、その下で最後の顔を作る。

……ゆっくり顔を上げる。

につこり笑って…

「大好き」

佳乃の体を突き飛ばした。

「おか……」

急激に転がる視界の中に、崩れていく燃える天井と、そこに飲み込まれていく母親の姿が見えた。

「お姉ちゃんは？」

ラボへと降りてきた真琴は一人で作業中の祖父に声を掛けた。

「ん？そういえばまだ、来ておらん」

きよろきよろとお座なりに顔を動かしてからすぐに作業へと戻る。
「大方まだ寝とるんじゃない」

そう言つて、再び目の前のコンソールに集中しだした。

「……何やつてるの？」

思いつきり不審の目を向けながら真琴が尋ねる。

訊かれて祖父がキラキラとした顔を上げて嬉しそうに真琴の方を見た。

——うわ、めんどくさそう

「今、暇か？」

あいにく、課題には既に目処が立っていた。

今日は誰かと会う約束もないし、ぶっちゃけド暇だった。

「う、うん」

躊躇いがちに頷くと更に祖父の顔が輝いた。

「じゃあ、ちょっと見ていけ」

実は先程から気になっていたのだが、中央のベッドに妙なふくらみを持った布が掛けられていた。

見たところ中身は人型の何かだという事だけは分かる。

——また怪人か何かだろうなあ

そう予想をつけ、既に秋名への弁明を考え始めた真琴に、祖父が大きな声で訊ねてきた。

「真琴はこれまでの怪人を見てどう思った？」

「どうつて……」

——はた迷惑だなあ、とか、やめてくれないかなあ、とか……

黙ってしまった真琴を気にすることなく、祖父は言葉を続ける。

「これまでの怪人はみな一様に人の嫌悪感や恐怖心を刺激するようなフォルムをしておつた……しっかーし」

大声を上げて拳を振り上げる。

「そんなものつ、慣れてしまえばこれほど戦いやすい相手はいないつ」

唾を飛ばしながら顔を真っ赤にするお祖父ちゃんに真琴は少し引いていた。

……孫娘なんて所詮こんなもんだ。

「……何してるの？」

「お姉ちゃんっ！」

エレベーターから降りてきたばかりのブルームが怪訝そうな声を上げる。

助かったとばかりに、真琴はブルームに飛びついた。

「あら、今日は熱烈ね、まあちゃん」

おねえちゃん、助かったよーと胸の中で言っている真琴の頭を優しく撫でてやる。

包み込むような柔らかい目が真琴のつむじを見ていた。

「よし、お前も聞け」

張り切る祖父にブルームが声をかけた。

「…完成したの？」

「うむ、今真琴に説明していた所じゃ」

言われた当人は、しなくていい、しなくていいと首を振っている。

「…どこまで……そうじゃっ……これほど戦いやすい相手はいないっ」

ずびしつと律儀にリプレイされる時間。

……これは鬱陶しい。

そんな事気にもせずに続けるハッスルお祖父ちゃん。

「そこで、わしが考えたのは、逆に人の庇護欲、つまり、守ってあげたいと思わせるビジュアルを持ったもの……」

ベッドの布をがっつと握り締める。

「それが、この、美少女怪人、如月^{きんづき}ハニ子じゃっ」

ガバツと布が剥ぎ取られると、そこにはベッドに横たわる裸の少女がいた。

………。

「……いや、普通にアウトだっつて」

確かに出来は良かった。

どこからどう見ても普通の女の子が眠っているようにしか見えない。

「次点に子犬、子猫というのがあったんじゃが、どうしても、戦闘

力が上がらなかった」

酷く残念そうに言うお祖父ちゃん。

丁寧に布をたたみ傍らに置く辺り、育ちの良さがうかがえる。

「設定年齢はあの坊主の歳を想定して、十六〜十八歳、高校生あたりじゃな。もう、とにかくありとあらゆる雑誌や書籍を日夜読み漁り、さらに黄金率を元に全身と顔を形成し完成した、究極の、美少女アンドロイドといっても過言ではない」

お祖父ちゃんの勢いに飲まれて真琴はベッドの上に仰向けに寝ている少女を覗き込んだ。

目を瞑っている為定かではないが、確かに整った顔をしていた。すつと通った鼻筋に、可憐な印象を与える唇。細い眉毛は最近の雑誌を読み漁っていただけの事であり綺麗に整っていた。

妙に小さな顔に青っぽい髪と言うのが、読んでいた雑誌に混ざったイレギュラーを思わせるが、概ね良く出来てはいた。

体のほうも細身のスタイルだが、均整の取れたきれいなものだった。好みもあるだろうが、なるほど男の子受けしそうな外見だと真琴は頷いた。

「じゃなくて問題は名前だって」

この名前はダイナミックな誰かを想像させる。

真琴の言葉を見無視して、お祖父ちゃんはスペックを語りだした。

「身長百五十四センチ、体重八十一キロ、少々重めじゃな」

というかもの凄い隠れ肥満だ。

「わし特性の特殊合金で体を作り、わし特性自家培養人工皮膚でそれを覆った」

恐るべき自給自足。

ただしプレゼンには向かず。

「また人工知能は、より人らしい動きを可能にする為、研究に研究を重ね、つい先頃完成したばかりのスーパー人工知能を使用」

とにかく、最新の科学には一切頼らずに完成させた、お祖父ちゃん究極の一品らしい。

アスリート風に言うと自己新記録。

「…うーん、本家よりボリュームが無いのね」

ブルームが胸を触りながら言う。……いや、本家って。

「そうじゃな、まあ、ミサイルでも詰もうと思えば、でかくもするんじゃが……さて」

また、すれすれの事を言いながら、お祖父ちゃんが、コンソールの方を向く。

画面には簡略化されたハニ子の姿があり、隅の方を、縦に数値やらが流れて行っている。

「いよいよ点灯式ね」

ブルームがそう言ったが、クリスマスツリーを前にしたような高揚感我真琴にはなかった。

——また変なモンが出来上がろうとしている

呆然としながらも、多少の興味があるのは否めなかった。

「スイッチ……オン」

きゅい い い い い い い い い い い い い い い い。

ハニ子の体から耳の奥に綿を押し付けられるような音が聞こえてくる。

「動いた…」

いつの間にかハニ子に釘付けになっていた。

その手が足が確かめるようにゆっくりと握ったり開いたりを繰り返す。

続いて、瞼がピクリと動いた。

重たそうにゆっくりと持ち上げていき、開ききったところで、数度瞬きを繰り返した。

「綺麗な目ね」

エメラルドグリーンの瞳の色。

よくよく見ると虹彩の部分は小型のカメラになっているのだが、よっぽど近づかない限りそれも分からない。

「凄い…」

思わずこぼれた真琴の言葉にお祖父ちゃんが嬉しそうに目を細める。

そうこうしている内に、ハ二子は上半身を起こそうとしていた。きちんと肘を突いて、手で支えるようにして体を起こす。

上半身が起きると今度は周囲を確かめるように頭を動かした。

真琴、プルーム、お祖父ちゃんの順番で、きちんと顔の位置で視線が止まっていく。

それから、観察の対象は自身の体に移って行った。

手で確かめるように、一箇所一箇所を恐る恐る触っていく。

「この子喋れないの？」

真琴がお祖父ちゃんに向かって訊ねた。

「いや……ほれ」

胸を触っていたハ二子が三人の方を向いて、ゆっくりと口を開こうとしていた。

「……ぺ」

ぺ？

見守るのにも何故か力が入る。

きつと子馬が立つのを見守るのはこんな心境だ、とすっかり入れ込んでる自分に気付かない。

眉毛がゆっくりと八の字になり口を尖らせ、完全な不満フェイスになるハ二子。

「…ペタンコであります」

ボソツと悲しげにいうハ二子に顔からこける真琴。あわてて真琴を抱き起こすプルーム。

「…それはまた別のアンドロイドじゃな」

一人だけ冷静なお祖父ちゃん。

本当に色んな本読んだんですね。

こうして、如月ハ二子は無事目を覚ましたのである。

「困った」

駅を出るとそこは人で溢れていた。

道に迷うなどというレベルじゃあない。

そもそも一步目のきっかけすら掴めずに、枝村樹は立ち尽くした。

えだむらつき

村の人間の話だと、薫様の使いの人が駅の構内まで迎えにきてくれる筈だったのだが、初めて見る人の多さに圧倒されてる内に、気付けばここまで流されていた。

（これだけの人がいて、果たして使いの人間は私を見つけてくれるだろうか）

ぼつと立ち尽くしていると、不安ばかりが浮かんでくる。

樹は改めて自分の着ている物を見直した。

初めて村から出るということ、村の皆から渡された都会用の洋服。

二十年くらい前からすっかり見なくなったような格好を見つつ、

樹は愕然としてしまう。

（まるで遜色なしっ！）

何てことだ、恐ろしいほどの溶け込みよう。これじゃあ、絶対に使いの人間に見つけてもらえるわけがない。

絶望的な気分に関われている樹には周りの人間のボソボソと噂し合う声など聞こえていない。

……一番多かったのはタイムマシン？という意見だった。バブルからゴー。

（いやっ）

打ちひしがれていた樹は拳を握った。

（ここで、ジッとしていても埒が明かない。こうなったらとにかく動いて活路を見出さねば）

完全に道に迷う人間の思考回路で、樹は歩き出した。

（とりあえず西へ！）

力強く始まる一人西遊記。目指す映都東町商店街は、はるか東…

…。

「名前は？」

「如月八二子であります」

「わしが誰か分かるかの？」

「水城善一郎博士^{みずき ぜんいちろう}。わたくしの生みの親であります」

「ふむ……」

淀みなく答える八二子に、お祖父ちゃん……善一郎は満足そうに頷く。

「お前の目的は？」

「につききサンレッドを倒す事であります」

「……だれそれ？」

振り返ってブルームのほうを見る。

さあ、と肩をすくめた。

「あの子ってそんな名前だったかしら？」

「……いや、特に名前なんてなかったと思うが……」

戸惑う二人に、八二子が初めての大声を上げる。

「ダメであります！あらゆる存在には名前が無くてはいけないのであります。私を見てください」

ドンと無い胸を叩く。

「私には如月八二子という立派な名前があります。それゆえに身の内から輝くような個性も生まれようというものであります。

それが、例え敵とはいえ名前が無ければ憎しみも半減するものであります」

「……あなた特A級のパクリなんだけどね」

ブルームの言葉は置いとくとして、善一郎はうーんと唸った。

「まあ、わしらが困るわけでもないしな、好きに呼ぶがいい」

八二子がぱあっと顔を輝かせる。

「さすがデガスターの大幹部であります。度量が……」

「ちょっと待て」

ハニ子の言葉を速攻で遮る。

「……それは？」

「それ、とは？」

ハニ子が首を傾げる。

「そのデガスターって言うのは？」

「ああ、われらが組織の名前でもありますか？」

わ・れ・ら・が・そ・し・き・？

「ださい」

ブルームの言葉を心外だと言わんばかりに、口を尖らせる。

「ダサくないであります！ 名前はいるのであります！」

「そうかの？ 他に比べる対象も無いのに名前なんかいるとは……」

「イヤでありますっ。名前はいるであります。名前をつけてグダグダだった昨日にサヨナラするのでありますっ」

彼女なりの克己心らしい。

伺うような善一郎にブルームが笑って答える。

「まあ、昔から泣く子には勝てないって言うしね」

……こうして、商店街の長い戦いの歴史において初めてドラステイックとも言える改革が行われる事となったのである。

第四話 ヒーローの条件 前編（前書き）

こんなに長く、遅くなってしまうとは思っていませんでした。

第四話 ヒーローの条件 前編

悪を射抜く正義の眼差し。

腰にきらめく勇気の証。

弱きを助け強気を挫き、日曜出勤にも嫌な顔一つしない。

それが……。

それが、ヒーローの条件？

ゴールデンウィーク最終日。

二十四節気で立夏とはいえ、五月の第一週と言えば気持ち的にはまだまだ春だ。

にも拘らず、頭上には興奮剤を呷ったかのような過剰な陽気があった。

初日から立て続けに無駄にした二日間を取り返すべく、この数日俺は教科書と首っ引きで課題に取り組んだ。

そして実感。…意外と何とかなるもんだ。

両手をつ張るようにして掲げた紙の束を見て、思わず口元が綻ぶ。

五センチ程の厚みを持っていた課題は、いまや数ミリを残すのみとなっていた。

明日これを目の前に突きつけたときの、千葉ちゃんの悔しがる姿が目に見え。

……いや、悔しがんのかよ。

とは言っても、全部が終わったわけではない。

完遂の難しさを説く言葉なんて世の中には腐るほどある。

気を引き締めつつ、課題の残りに取り掛かるうとした時、それは

鳴った。

ビーツ…ビーツ…ビーツ…ビーツ…
「ウーツプス」

昨日、夜中にやってた映画の所為で、プチアメリカナイズされた脳が、口から妙な呻き声をはじき出した。

——なんか、俺ってもの凄く間が悪くないか

最近特に感じていた事だが、口には出さなかった。

別に誰かに確認したかったわけではないし、口にしたらホントになりそうな気がする。

喧しく鳴っているゴツイ腕時計を止めて、俺は体ごと落ち込んだ。

……じゃあ、ちよつと商店街へ。

残された課題を前に、俺は深い深い溜息をついた。

地球温暖化ってのはありやホントだな…。

空にある太陽はすっかり夏用のメイクを施していた。

昨日までと打って変わったお天気、町行く人たちも、気の早い衣替えを済ませている。

春物の柔らかな色を脱ぎ捨て、涼しげな夏色へ。

様子を変えた街を走り、商店街にたどり着くと、アーケードの中には意外にも涼しい空気が流れていた。

各店舗から漏れて流れてくるクーラーの冷気が商店街全体を冷やしていた。

スツと汗が引いていき、人心地ついた気持ちになるが、これも温暖化の一因になっていると思えば、複雑な気持ちだ。

こんな事をしているから地球がどんどんダメになっていきやがて機械たちの反乱に人類はなすすべも無く……。

……頭を振る。

これは昨夜の映画のあらすじだ。

そんなに印象に残る内容だったかなと首を捻っていると、正面から、俺にとって最近意味の変わった顔が歩み寄ってきた。

「おはよう」

にこやかに手を振りながら、千葉ちゃんが俺の前で立ち止まる。

「おはようございます」

挨拶を返した俺に、体を半分開いて、後ろを指し示した。

「あっち」

例によって例の如くと言うか…そこにあるのは、溢れんばかりの人ごみと、妙な過疎地帯だ。

現場まで少し距離があるからここからじゃあ暑苦しい程の人山にしか見えないけど…多分間違いない。

「…どんなヤツでした？」

俺の質問に千葉ちゃんは難しい顔をした。

「…多分、あいつらだとは思っただけど」

チラリと視線の先を人ごみにやってから、結論を出し切れずに表情で答える。

「…なんていうか、趣旨がえ？」

「…いや、俺に聞かれても」

「…あいつらかどうかはともかく、俺もこれで呼ばれたんで」

そう言っ、俺は腕に巻かれた時計を持ち上げて見せた。

「ああ…けど、あのブルームってヤツ、ゴールデンウィーク中はおとなしくしてるみたいな事言ってなかった？」

言っていた。

「…まあ、悪の組織の言う事ですし」

友達の家？の悪口は言いたくなかったし、自分でも納得はしてなかったけど、理由なんて考えたって正しいかどうか判断できるモンでもない。

取り敢えずそう結論付けて、俺はほかの事を聞いた。

「根拠も無いのに、なんであいつらだっと思ったんすか？」

「ヒーローはいねがあ、って暴れてたから」

…まさかのナマハゲ仕様だ。

今度のは秋田県出身者らしい。

「…君が何考えてるかは分からないけど多分違うと思うわ」

対ナマハゲ戦のシミュレーションに入っていた俺の思考を千葉ちゃんが呆れた声で引き戻す。

……具体案が何一つ出てこなかったから別に良かったけど。

「見た目は普通の女の子…ううん、かなりの美少女ね」

千葉ちゃんの視線に合わせて、野次馬達に目を移す。

言われてみれば、男の数が多い気がする。

「…少なくとも、ああいう馬鹿者共が、ものの五分で集まるくらいには可愛い子だったわ」

ああいう馬鹿者共、に軽侮の視線を送りつつため息をつく。

俺としては、場合によっては馬鹿者共になりかねないので、コメントは差し控えていただく。

「それで…大丈夫？」

心配そうな顔で千葉ちゃんが聞いてくる。

ファミレスでもそう言って体の具合を聞いてきた。

「…負けられると不味いですか？」

なるだけ意地悪に見えるような顔を意識して、そう訊ねる。

本心で…本音の中には0.1パーセントくらいはそう聞きたかった気持ちがあったり、なかったり。

「…意地悪言わないでよ」

少しだけ痛そうな顔をしながら千葉ちゃんが笑ってみせた。

……正直その顔を見ただけで満足だったりする。

「…冗談ツす」

俺は笑いながら、いつもの路地へと駆けだした。

しかし、ふと思いついて足を止める。

「もし勝ったら、課題を…」

「それはダメ」

…手厳しい教師の顔はそのままだった。

今日はいつもの以上に変身時に気を使わなくてすんだが、変身後に誰かが待ってるっていうのは変な気分だった。

人の輪に向かう前に、頑張つてと千葉ちゃんに背中を叩かれる。女子マネージャーのいる部活動の連中は試合前にこんな気持ちになるのだろうと小さな感動。

…かなりの確率で馬鹿者共に加わる可能性を自覚する。

人だかりに近づいていくと、やはり、男連中の数が多いことに気付いた。

いつもの商店街の面々に加え、普段見かけないような人たちの姿もちらほら、後は、暇をもてあました人間がいつもと同じくらいの数居る。

その人たちを、ソコノケソコノケと押しのけて、輪の中心に出た。「うわあ」

眼前に、いかにも「ひと悶着ありましたよ」という光景が広がっていた。

そこには、ウチの制服を身につけた青い髪の女の子と、その子にノサレタと思われる男数人が横たわっていた。

地面の彼方あちこち方には、小さな拳大の穴が幾つも穿たれている。

女の子は、横たわる男達を担いでは、一箇所に集め、人で出来た小山を大きくしていく作業に没頭していた。

散らかったおもちゃを片付けるように何度か往復し、最後の一人をクリスマスツリーに星を乗つけるようにそっと頂上に乗せると、ふうと息をつき、汗なんか掻いてもいない額をぬぐった。

その途端、観衆から歓声が沸いた。

降り注ぐ賛辞の声に、少女は照れたようにグリーンの瞳を細め、手を上げてそれに応える。

……………ああ、よし、帰ろう。

歓声に応えていた少女の動きがぴたりと止まった。

身を翻そうとしていた俺と暮ろに視線がぶつかったのだ。

——しまった。見つかった。

と思ったときにはもう遅い。

先程までとは意味合いの違う笑顔を浮かべ、ビツと指差して俺をマ
ーキングする。

「見つけたっ」

彼女の声と行動で、その場に居たほぼ全員の視線が俺に集まる。

……うわ、見られてるよ。

二億六千万程ではないにしても、これだけの瞳に注目されるのは初
めだった。

……普段は、ブルーム目当ての人が多から。

人々の視線に正直ビビッていると、少女は嬉しそうに言葉を続け
た。

「遅かったな、ヒーロー、いやっ……」

後ろを向き、変な溜めをつくる。

「……紅戦士……サンレッドツツツ……!!」

……顔からこけるかと思った。

少女はくるりとこちらに向き直り、名前らしきものを叫びながら
俺を指差した。

「ど、どういふつもりだっ!」

満足そうな少女に渾身の力を籠めて問いかける。

「……この人サンレッドだつてよ」

「なんで?」

「わかんねえ、赤だからじゃない(笑)」

「いや、サンどこいったんだよサン(笑)」

「よく見ると凄い赤いな(笑)」

…ぐっ、ギャラリーの皆さんの声が聞こえる。
若干数、笑いマーク付き。

「て、撤回を要求する」

「却下だ」

腕を組み、少しばかり表情を硬くした少女が、半身の構えで俺のほうを向く。

「…貴様は今日からサンレッドだ」

…俺は今日からサンレッド……。

な、なんて不思議な文章なんだ。

「こ、断るっ！大体なんでお前にそんな事決められなきゃいけないんだ！」

「黙れ。発言を許可した覚えはないっ」

そう言つて、戦意むき出しで少女はこちらに向かって駆け出した。

「いや、取り消せよっ」

仕様が無く俺もサークルの中心に身を投げ出す。

見ている人の中から巻き添えが出てもしたら祖母さんに何をされるか分かったモンじゃない。

距離が縮まつていき、少女が初撃を打ち出してくる。

恐ろしく早い右ストレートを、何とか拳の甲で弾いて体の外に逸らす。

彼女の懐に入る形になった俺が拳を振り上げる。

「きゃっ」

その途端、少女が怯えるように身を縮めて目を瞑った。

「えっ」

思わず拳を引き、動きを止めてしまう。

パチッと片目が開き、少女の顔がにこつと笑顔に変わる。

つられる様に笑顔を返そうとした時（マスク、してるのに）、腹に衝撃が走った。

「ぐ…あ」

彼女の左拳が俺のわき腹にめり込んでいた。

痛みから腹を押さえて身を屈めた時、少女の姿がぶれた。

下半身を引つ張るように上半身を回転させ、後ろ回し蹴りを放ってくる。

硬い踵で側頭部を強かに叩かれ、俺はなすすべもなく吹っ飛ばされた。

「……がつ……」

人垣が綺麗に割れ、出来た隙間に突っ込んだ。

身を硬くして何とか衝撃に耐える。

「……くそっ」

頭がふらふらしたが威力自体は大した事無く、持続しない痛みを振り払い立ち上がる。

猛然と少女の方へと駆けて行く。

「ヒーーーーート……」

俺がチョップの構えを取ったとき、少女がまたも身を縮めた。

…ふ、ふん、もう騙されるかつ。

俺のそんな考えを読んだかのようなタイミングで少女は顔を上げる。

「…たたくの？」

……ぐっ、ふ、ふんっ…だ、騙されるかつ。

「…ねえ、たたくの？」

潤んだ瞳で、窺うような上目遣い。

エメラルドグリーンの瞳に悲しげな色が浮かぶ。

……だ、だ、だまさ……だま……だ……。

「…ぐ…い、いや……」

またも直前で急ブレーキ。

眼前で止まったチョップを見つめ再び笑顔が浮かぶ。

しかし、今度はつられたりしない。

死刑囚のような心境で、そのときが来るのを待つ。

「そう……」

少女が少し飛び上がる。

「…ありがとっ」

左足を軽く上げ、それを下ろす時の反動を利用して、右足を振り上げる。

…天使のような笑顔を浮かべながら。

「がぺ……」

顎をつま先で突き上げられ、浮き上がった体が、逆海老に^{ゆみなり}なる弓形になった俺の腹に、そのまま振り下ろされる右足。

「げ、はあ」

情けも何も無い踵落としを叩き込まれ、数度バウンドしながら、避け損なった人垣に突っ込んだ。

「…その程度かサンレッド？」

勝ち誇ったような少女の声が聞こえる。

…サンレッドは止める。

しかし、これはちよつとシャレになってない。

一発ずつの威力はそう高くないものの、この速さで手数で来られたら、反撃の余地が無くなる。

…何より、あの叩かないでバリア。

あんなアピールしなくても、そもそも女の子を殴るなんて出来そうもないし。

「大丈夫？」

いつの間にか隣に屈んでいた千葉ちゃんが肩を貸してくれた。

「ほら、掴まって、あき……サンレッド」

人の目を気にしてか、ついたばかりの名で俺を呼んだ。

…ああ、外堀が埋まっていく。

「…どうしよう、ちよつとやばい」

小声で彼女に訴える。

「取り敢えず時間を稼いで。何をどうするにしても少し時間が欲しい」

真剣な調子で言う千葉ちゃんの声。

「…わかった」

掴まっていた肩から手を離し、俺は一人で立ち上がった。
腹の中で覚悟を決め、少女に向き直る。

俺の雰囲気を感じ取ってか、真剣な表情で少女も身構えた。
ゆっくりと間合いを計りつつ円を描くように移動する俺達。
二人の空気に当てられて周囲もいつの間にか沈黙していた。

一周してもとの位置まで戻ったとき、俺は足を止めてゆっくりと
右手を持ち上げ、ビシッと少女を指差した。

「そう言えばっ、お前はいつたい何者なんですかっ？」

突然の俺の発言に、周囲の空気が少しだけ凍った。

…なんて言うの、シャーベット？

(こうなったら死ぬ気で時間を稼いでやる)

という俺の悲壮な覚悟は妙に場をしらけさせたが、どうやら、
当たり”だったらしい。”

少女が急に顔を輝かせ、良くぞ聞いてくれたと言わんばかりの表情
で腕を組んだ。

「ふん、貴様なんぞに聞かせてやる必要も無いが、仕方あるまい…
冥土の土産というヤツだ」

そんな事言ってる割に、嬉しそうに笑顔を浮かべている。

「…わたくしは、デガスターの美少女型アンドロイド如月ハニ子だ
! ……ちなみに、昨日目覚めたてのほやほやだ」

ハニ子……の発言にさらに凍る周囲の空気。

…なんて言うの、カチ割り？

野次馬の中から「いいの？」と何かを心配する声まで届いてくる。

対策を講じてくれているはずの千葉ちゃんが俺に耳打ちしてきた。

「…それって奥歯を噛んだら速く動けたりするってやつだっけ？」

それはどちらかと言えばサイボーグかと…。

何にせよ、時間稼ぎという面ではまんまと上手くいった。

自称アンドロイドのハニ子は胸をそらせて誇らしげに腰に手を当てていた。

さつきも思ったのだが、わりとお調子者なのか乗せられやすい性格らしい。……アンドロイドの癖に。

続けてした質問にもあまり考える事無く答えていた。

「デガスターってなんだよ」

「貴様……今まで散々戦ってきた相手の名前も知らなかったのか」
呆れるように、と言いかちよつとガツカリした様な表情で俺を見る。

……そんな事言っただって、今まで名乗らなかったじゃんよ。

「……そりゃ、悪かったな……お前らデガスターって言っのか……」

「そうだ、昨日わたくしが名付けた」

「……それじゃあ、知ってるわけ無いだろう!!」「」

俺含め、ギャラリーからの総つつこみ。

「……え?……え?……」

急に周りから不満の聲が上がり、不安そうにキョロキョロと首を振る。

……まあ、デガスターが新しい敵とかじゃなくて良かったけど。

「……それにしても、美少女型ってなあ、自分で言うか?」

「だ、だって、わたくしはそういう目的で造られたのだ。相手が油断し、なおかつ攻撃を躊躇^{ためら}ってしまふようにと。その為可愛い容姿をしているらしい」

ヒンシユクを買いそうな台詞を、まだ不安から抜けきっていない表情でハニ子が口にする。

目がキョロキョロと動いているところを見るとよほど動揺しているらしい。

随分とえげつない事を考えるものだとは思っけど。

「……あのさ……それって、俺に喋っていい事なのか?」

「え?」

「だって作戦だって分かってて、攻撃をためらうヤツなんているか

？」

自分のことを随分高い棚の上に乗つけてから、揺さぶりをかける。

「……………？…えつと？」

答えを求めるように、見物人の顔を次々に見ていくハニ子。

何人かは目を逸らし、何人かは目を瞑って首を振った。

いや、まあ、と言ったきり口ごもったヤツもいる。

「…なあ、お前ってさあ……………」

お調子者なんだとばかり思ってたけど…もしかして…。

「……………ばか？」

ビクツと肩がはね、顔を俯け、丸く青い頭がプルプルと震えだすのを見て……………しまったと思った。

背中からフルオーケストラでも足りないほどの「あゝあ…」が聞こえてくる。…続く言葉は「泣」かせた」

……………うつ、わかってるよ。

「い、いや、ご、ごめんな、言い過ぎた」

拳をぎゅっと握り、何かを堪えるみたいに力を入れてるように見える。

……………もの凄い罪悪感だ。

自分自身を責める気持ちと周囲の冷たいプレッシャーに圧され、いっちょ土下座でもしようかと俺が一步足を踏み出したときだ。

「…ふ…ふ……………ふ…ふ…ふ…ふ…ふ…ふ…ふ…」

地の底から響いてくるような、不吉な笑い声が聞こえてきた。

発信者は目の前の打たれ弱いアンドロイド。

震えていた体が止まり、きつ、と顔を上げる。

……………あ、目じりに光るものが。

「…こんな屈辱を受けたのは生まれて初めてである」

そりゃ、生まれて二日じゃあ、しょうがないんじゃないかな、とはいくら迂闊な俺でも言わない。

涙目で凄まじい笑顔を浮かべるハニ子を前に、その場にいる誰もが成り行きを見守るだけの案山子となった。

そんな俺達を前に、泣き虫アンドロイドは左手で右の手首をグツと握り締める。

「これは使わないつもりでいたが」

… 大変嫌な予感。

もはや狂気すら感じる表情で、左手に力を籠めたのが分かる。

シュポンッと、卒業証書を入れる筒を開けたときのような音を立てて、手首辺りから右手を引っこ抜い…… 引っこ抜いたっ?!

い、いや、アンドロイドだったらこれくらいは出来るんだろうけど。随分ショッキングな映像を見せられた俺達は、断面に表れたものを見てさらに度肝を抜かれた。

腕よりはもう少し口の狭い銀色に光る円筒。

暗い口の中、深い闇の入り口近くにかろうじて数スジの螺旋状の窪みが見えた。

…… どの角度から見ても砲身。どう鼻屑目に見ても銃口。

「四十二ミリハニ子 砲^{カン}」

そんな物騒な名前を涙声で言われても。

発射口は確実にこちらを向いていた。

「ちっ」

舌打ちを一つして俺は走り出す。

腕を顔の前でクロスさせ、口の中だけでコマンドを呟く。

「ライジング…… パンチ」

目の前を走る赤い光の群れ。

右腕に集まる力を感じながら、俺はさらに加速した。

なるべく周りの人間から離れて、ハニ子に近づいて、発射された砲弾をパンチで叩き落す。

…… 頭の中で描いていたそんな絵図面は、直ぐに音高く崩れ去った。きゅいひひひひひひひひと耳を押さえたいくなるような音を立てて、砲身の中に吸い込まれていく光の粒子。
いや、ビーム系かよつ。

早速作戦をオジャンにされた俺は、陸上の三段跳びみたいな大股

でハニ子に駆け寄っていく。

ハニ子が腰を落とし、体を安定させる為に足を開く。

銃口の先で陽炎のように空気が揺れるのが見えた。

「……ハニ子 砲^{カン}…発…」

発射と言い切る前に、俺は、ハニ子の右手を蹴り上げていた。

つま先で捉えた手ごたえを信じて、思い切って力を入れる。

ハニ子は下手クソな操り人形師のパートナーのように、弾かれた右腕を不自然に吊り上げた。

その瞬間、恐竜の咆哮のような鳴き声を上げながら、右腕から黄色い光の柱が立った。

一秒にも満たない時間で光は消えたが、後には、アーケードの天井にポツカリと人の頭くらいの穴が残った。

「……お、お前…これはシャレになってねえ…だ……ろ？」

抗議の声を上げる俺をハニ子が満面の笑みで見つめていた。

いつの間に装着したのか元の位置に右手が戻っている。

……あれ？

「……ふふふ……ハニ子ッラー……ッシュ!!」

そう叫んだかと思うと突然パンチを連打してきた。

「民間人が大勢いる場でこんな物本気で使うわけがなかるうつ」

顔、胸、腹、上半身のあらゆる部分を叩きながら、ハニ子が嬉しそうに叫ぶ。

「そんなことも分からんとは貴様も相当の、バ、カ、だな、馬鹿がつ、ばーかつ」

な、なんて心の狭いアンドロイドなんだっ。

殊更に、ばか、という言葉強調しつつ、俺に乱打を浴びせる。

…よっぽど悔しかったらしい。

「うりゃあつ」

高速で繰り出される打撃を、長時間かわすのは不可能だった。

それでも何発かを逸らしていた両手を、ハンマーナックルのような攻撃で弾かれる。

裂帛の気合と共に繰り出された蹴りを喰らい、俺は吹っ飛ばされてしまった。

「ぐっつ」

俺を倒したハ二子を見て周りから歓声が沸き起こる。

…うっ、俺だつて地元民なのに。

ハ二子が手を上げて歓声にこたえた。

こいつは、今まで戦った敵の中でダントツの馬鹿だし、考えられないくらい心が狭いけど、それでも一番の強敵だった。

俺は地元でアウェイの洗礼を受けつつ、唯一の味方といっていい千葉ちゃんの方を見た。

千葉ちゃんはスケッチブックみたいなのを掲げて、しきりにそれを叩いては何かを俺にアピールしている。

…なに？…あ、何か書いてある…えっと…

『キ・ニ・セ・ズ・ヤ・ツ・チ・マ・エ・！』

それが出来りゃあ苦労してねえんだよっ！！

役に立たない助っ人のアドバイスを俺が憤激していると頭上に影がさした。

「…こまってる？」

背後から、頼りになる疲れたような声が聞こえてきた。

「橘さんっ……………その人、だれ？」

振り返ると、珍しく本当にしんどそうな橘さんがそこに居た。

肩で息をする彼女の隣に、見たことのない、何ていうか、個性的な格好をした女の人が立っていた。

「…迷子」

整わない息でそう答える。

隣に立つ女の人が申し訳なさそうに笑いながら頭を掻いた。

…よく見ると、二人はしっかりと手をつないでいた。

「枝村樹だ、樹でいいよ秋名大地君」

快活な笑顔で空いたほうの手を差し出し出してくる。

今、おもいつきり本名で呼ばれたけど。

……気にしてる人もいないから良いけどさ。

「ど、どうも」

おずおずと差し出した手を力いっぱい握られる。

「…分かってる。この子が誰かって事が気になってるんでしょ」
いいえ。

いや、勿論それも気になるんだけど、今はこの人がなんでこんな格好してるかって事で頭がいっぱいです。

そんな俺の気持ちを知ってか知らずか、橘さんは彼女の素性を説明してくれる。

「彼女、樹は秋名の分家の子なの。薫様がこの間の戦いの後、アキナ君の助っ人として呼び寄せていたの」

「す、助っ人すか？」

この人が？

俺はにつこりと頷いた樹の方を見た。

まず背が高い。俺と同じか少し高いくらいか。まあ、履物がハイヒールだから確かな事は言えないけど。

すらっと伸びた体にはあまり肉はついておらず、何故かラインの良く分かる細身の体はとても武道をやっているようには見えない。

「ん？……なるほど、ホントに私が戦えるかが気になっているんだな」

いいえ。

あ、いや、ホントにそれも気にはなるんですけど、今はやっぱりその、なんでそんなものを着てるのかなって。

怪訝そうな俺の表情を取り違えた樹が、俺の肩に手を置く。

「心配しなくてもいいぞ」

繋いでいた手を離して、パンと拳を叩く。

細い逆三角形に歪めた唇を楽しそうにぺロリと赤い舌が撫でた。

「え、ちよつと」

ズイツと身を乗り出し樹は円の中心、ハニ子の元へと歩いていく。高いところで一つに括られた髪が揺れる背中を見ながら、橘さんが愚痴をこぼすようなトーンで言ってくる。

「大丈夫。あの子から強さをとったら残るのは方向音痴だけだから」
……うーん。

そうかあ、方向音痴なのかあ。

……。

結局、俺は、樹が何故真っ赤なボディコンを着ているのかを聞くことは出来なかった。

最近はやクザ映画でも見ないような格好で樹がハニ子の前に対峙する。

突然現れた血の気の多そうな水商売風の女の子に、周囲は沈黙を選んだ。

…賢い。

「誰ですか？」

「枝村樹」

怪訝そうな顔のハニ子に簡潔に樹が答える。

「下がりなさい。ここは闘いの場です」

警告を孕んだハニ子の言葉に、ハイヒールを脱ぎながら樹が笑顔を返す。

そんな仕種に少しだけ周囲がどよめく。

しょうがねえヤツらだと思いつつ、気持ちは分かる。

「私は彼の代理だ」

そう言って視線で俺のほうを指し示す。

視線を追っていった八二子とばかりと目が合った。

言外にこのバトルホステスはなんだと聞いてくる。

…俺だって良く知らないよ。

「どうやら、彼はあんたとは闘い難^{にく}そうだし、私が代わろうということになつてな」

コキコキと首を鳴らしたり足や腕の筋を伸ばしたりと準備に余念が無い。

そんな光景を見ながら八二子はふいつと顔を逸らした。

「下がちなさい。私は民間人とは闘いたくありません。ですが、敵性と認めた時点で貴方を攻撃しなくてはなりません」

えらく常識的な事をいう八二子の肩を叩いて樹が不適に笑った。

「それは重畳」

……果たして、この場にいる人間で、たった今何が起こったか理解できた者が、いただろうか。

「へ？」

八二子が目の前にある樹の顔を見て頓狂な声を上げた。

——な、なんで、樹があそこに居るんだ？

樹は特に走るでもなく、ゆっくりと、八二子に近づいていった。

大体、半歩分くらいの歩幅で六歩歩き、またゆっくりとした動きで八二子の肩を叩いた。

俺だけでなく恐らくその場に居た人間全てがその光景を一部始終見ていた。…見ていたはずだった。

にも拘らず、そのことを正しく理解した人間は多分一人も居なかった。

呆氣にとられている俺達の前で、樹が体を振る。

0、10、0、の線グラフをなぞるように肘の先が動く。

細く鋭い山形を描き、その先端にある八二子の顎めがけて暴力の風が吹いた。

「くっ」

気合の声一つ無く放たれたそれを、上半身を反らして八二子がかわす。

それでもチツと音がして、顎の先に摩擦の跡が浮かんだ。

「ほっ」

感心するような声が樹から漏れた。

心底楽しそうに「やるなあ」と笑みこぼしている。

八二子が余裕をなくした顔で後ろへと飛びのいた。

それを見て樹が上半身を倒し、追う格好を見せた。

——ただ……。

先程よりは速い速度、それでも駆け足程度で八二子の方に駆け寄ると、なんでも無いように懐に入り込み体を縮める。

胸の前でクロスさせた腕を収縮できるだけ収縮させ、限界点を迎えたところで一気に解放させた。

弾丸のような速度で打ち出された右拳が八二子の鳩尾にモロに叩き込まれた。

もう片方の手は空気を叩くように反対側に突き出されている。

両足も開いて綺麗なシンメトリーになった樹の視線の先で、未だに何が起こったか理解できていないような八二子が苦痛に顔をゆがめながら、運動の法則に則^{したが}って吹き飛ばされていく。

「ち、ちっ」

八二子は滑走する体を地面を叩く事で無理矢理跳ね上げ、空中で翻り片膝について着地した。

満身創痍と言った体に悔しそうな表情が浮かぶ。

人間だったら肩で息しているだろう。

「…どうなってるんだ？」

思わず呟いていた。

マスクが無ければ目を擦っている所だ。

樹の動きにはどうしようもない位の違和感があった。

例えば、振りかぶる、だとか、殴る、だとかの行動を”点”とする

と、”点”と”点”とを繋ぐ”線”に当たる部分に幾つも穴とか途切れがあるように感じるのだ。

——行動の間の部分が掴みづらいというか、曖昧というか。

「歩行と呼吸」

「え？」

突然口を開いた橘さんの方へ俺は顔を向ける。

「…の、工夫らしいんだけど、専門家じゃないから詳しい事は良く分からない。樹の動きでしょ？」

頭を掻きながら面倒くさそうに語る橘さんに、アホみたいに首を縦に振ってみせる。

「人の虚をつく方法って言ってたからどうかと思ったんだけど、ロボットにも問題なく通じるみたいね」

視線を闘っている二人にやってボソリとこぼす。

「…でも、あの子って加速装置で三倍くらい速くなれるんじゃないの？」

それは違う上に、何かが混ざっています。

……赤いボディに立派な角のついた八二子。

『悪い子はいねがぁ』

…まさかのナマハゲ仕様だった。

「名前は？」

ゆっくりと立ち上がりながら、八二子が問いかける。

「いつき」

樹が律儀にもう一度答えてやり、にっこりと笑う。

「では、イッチー」

……何故？

「あなたを正式にわたくしの敵と認定します」
サーッと八二子の周囲を風が巻いた。

ふわりと青い髪が浮き上がり、近くにあった塵芥を一緒くたにして風は空中に舞い上がっていった。

「もう手加減は無しである」

ハニ子の両手が淡い黄色い光を帯び始めた。

気を張って様子を見つつ、それでも樹は楽しそうだった。

ゆっくりと腰を落とし構えをとる。

――迎え撃つ気が……

辺りを緊張が包んだ。

張り詰めた風船のように膨れ上がり、あとは針が落ちるのを待つだけとなった時、場違いな声が響き渡った。

「もうっ、ハニちゃん！」

「……プ、ブルーム？」

そこに現れたのは人の姿をした蝶だった。

俺がギャラリィの中に居るのを見て少し首をかしげながら、ハニ子のほうへ駆け寄っていく。

何かシュウシュウとオーラみたいなのを出しているのも気にせずに、ハニ子の頭をガキンと叩いた。

「い、痛いであります」

「勝手に出歩いたらダメって言ったでしょ」

「で、でも、わたくし、いてもたってもいらなかったんで……い、いた……イタ……」

口答えするハニ子を容赦なくガンガン叩くブルーム。

言う事を聞かない子供を持った母親みたいで、このままいけばハニ子に頭を下げさせかねない勢이었다った。

そんな光景を見て樹は息をついて構えを解いた。

「……どうやら保護者が出てきたようだな」

少し残念そうにしながらも笑いながら肩の力を抜く。

直ぐに俺と橘さんは樹の元へと駆け寄って行った。

「おつかれさま」

橘さんはそう言って、樹の脱いだハイヒールを差し出している。

そちらは任せるとして俺はブルームのほうに向き直った。

「おい」

俺の声に説教を続けていたブルームが振り返る。

「あら」

「あら、じゃねえよ…ですよ」

ああ、変な言葉遣いになってる。

これが水城さんのお姉さんかと思うと、今までみたいにぞんざいな口も聞けない。

かと言って今更敬語っていうのも変な気がするし。

案の定ブルームは変な顔をしていた。

「どうしたの？」

「どうしたのじゃねえのですよ」
「なんだそりゃ。」

「お……あ、あんた、ゴールデンウィーク中は来ねえみたいな事言
ってなかった、ですかい」

一体俺は誰なんだ。

ブルームは心配そうな顔をしながら首をかしげた。

「……まだ調子悪い？」

「ほ、ほつといてくれ……さい。こつちにも事情があんだよ…っす」
そう言つと「ふーん」と唇に指を当てた。

「そ、そんなことよりっ」

「ん？あそつか。ほら、ハニちゃん」

ブルームがハニ子の背中をぽんと押す。

不本意な力で一步前に出たハニ子がついッと横を向いた。

「イヤであります。こんなヤツに頭を下げたりしないであります」

駄々っ子モードに入つたハニ子に、笑顔で拳を振って見せるブルーム。

「うっ」

いや、目が笑ってないって。

「く、屈辱である、こんな屈辱生まれて、はじ……」

「先刻もおんなじ事言つてたじゃねえか」

「ぬ、塗り替えたのである。記録更新したんだ」
陸上競技かよ。

「…うう、二度もわたくしの初めてを…」

「誤解されそうなんで二度とその表現は使わないように」

本当にしぶしぶといった感じで八二子は頭を下げた。

どうやら今回の事は目を覚ましたばかりの彼女の暴走だったらしい。
頭を下げる姿を見て満足そうに頷くとブルームはこちらに向き直った。

「じゃあ、また日を改めてってことで」

「ん、ああ、そうだ……じゃなくてっ！」

思わず乗せられそうになってしまった。

俺は頭を振って構えを取った。

「今度こそ逃がさねえぞ」

身構える俺にブルームが笑って見せた。

「……一つ提案があるんだけど」

いつもと同じ艶然とした微笑。

「……だけど、どこか…」

「今日はこれで終わりにして……次で最後にしない？」

「………は？」

「…え？何？どういう…」

「だから………」

いや、やつぱり、いつもと同じ表情で。

「次が最後の闘いって事で」

からかうようににっこりと。

第四話 ヒーローの条件 前編（後書き）

…後編に続きます

第四話 ヒーローの条件 後編（前書き）

続きです

第四話 ヒーローの条件 後編

最初に反応したのは橘さんだった。

「それはそちらの総意？」

「そうよ」

事も無げに答える声に肩を落とすように「そう」と小さく呟いた。
「ちょ、ちよつと待って、それってどういう事だよ。最後ってどうすんだ？」

もう言葉遣いなんて気にしていられない。

詰め寄るように聞いた俺にブルームが笑顔を向ける。

「そのままの意味よ。次の闘いで貴方達が勝ったら私達は二度と姿を見せない」

それは……いや、待て待て。

「……そ、それで、もし、あんたらが勝ったら？」

「え？」

ブルームが驚いたような表情になる。

「だって、それは……」

真剣な顔で俺のほうをまじまじと見て……プツと吹き出した。

「そっか、あなた知らないんだ」

ブルームがおかしそうに笑う。

なんか、この人の笑顔は結構見てきたけど、こんなに楽しそうに笑うのははじめて見た。

……じゃなくて。

「な、何それ、俺なにを知らないの？ちよつと……」

「ううん大丈夫、それは多分他の人が知ってるから」

「え？」

弾かれたように橘さんの方を振り返ると、気まずそうな顔……
は別にしておらず、いつも通りのお疲れ顔だった。

……このポーカーフェイスちゃんめ。

樹も別に今までと変わらない表情をしていた。
俺と目が合うと「たはは」と笑って頭を掻いた。
さてはお前も知らないな。

ただ、周りを囲んでいた人たちのほうには多少なり動揺が広がっているようだった。

きつと”薫派”の人たちだろうが、ざわざわと小声で何かを言い合っている。

「な、なんだよ、教えてくれよ」

「なーいしょ」

そういうとブルームは踊るように身を翻した。

「待って」

いつの間にそこに居たのか千葉ちゃんが横合いから声を上げた。

「貴方達の目的はなんなの？ 一体何の為にこんな事……」

足を止めたブルームが振り返ることなく答えた。

「約束」

その言い方が笑えるくらい水城さんに似ていて、脳裏にあの時の言葉が浮かんだ。

—— うん。……前に、何でこんなことしてるの？ って聴いた事があるんだけど、その時に笑いながら約束だからなって

「約束？」

聞き返す千葉ちゃんの言葉に、今度は答えずにブルームは歩き出した。

「行くわよハニちゃん」

いわれたハニ子は着脱可能な右手の食指で樹をビツと差した。

「決着はつけるからなイツチー。首を洗って待っている」

言われた樹は手を振りながら「おー」とやる気の無い長閑な返事をした。

「お、おー、じゃないっ、絶対だからな、ちゃんと、おぼえてろー」

……それはやられ役の台詞だぞハニ子……。

ブンブンと腕を振り回す姿がどんどん小さくなっていく。

——それにしても

「次で最後……か」

商店街の誰かが俺達の気持ちを代弁してくれた。

縁側に腰掛け、まだ丸くなる前の月の光を浴びていた。

「眠れないのか？」

澄んだ声をかけられて振り返ると、そこには樹の姿があった。

「うん……まあ」

そう曖昧に返して俺は月を見上げる。

夜についた明るい傷口に千切れた雲がかかっていた。

あの後、仕事に戻ると言って帰っていった千葉ちゃんを除く俺達三人は、祖母さんに報告をするという橘さんと、挨拶をしたいという樹と一緒に、揃って俺の家に帰ってきた。

フラフラと直ぐにどこかに消えそうになる樹の手を引いて家にたどり着いた時には、時間は丁度昼時になっていた。

二人を祖母さんのもとに案内すると、樹が突然手について、硬い、とても長くなりそうな挨拶を始めた。

祖母さんはそれを軽く受けて「まずは…」と、二人に昼食を勧めた。

俺の希望もあって万事は昼食後という事になり、いつもは二人だけの食卓に倍の人間が座って昼食をとった。

「大きくなりましたね、樹ちゃん」

昼食後、俺達は祖母さんの私室へと移っていた。

橘さんから一通りの報告を受けた後に、樹の方を向いて祖母さんが微笑んだ。

へへへーとばかりに樹が頭を下げる。

…ここはおしらすか。

「お久しぶりでございます薫様」

顔を上げて、嬉しそうにそう言う樹に優しげな笑顔を向けてから、俺のほうへ向き直った。

「大地さん」

「は、はい」

緊張で体がこわばる。

いつもの様に祖母さんの直ぐ隣には日本刀が置かれていた。銘はないが出は確かな物らしい。

切れれば良いという事らしいが、今の日本で何故そんな価値観が成立するのかが俺には分からない。

「手も足も出なかったそうですね」

「いえ、出なかったのではなく、出さなかったんです」

「同じ事です」

せっかくの橘さんのフオローも一蹴されてしまう。

「す、すいません」

実った稲穂のように頭を下げた。

……うう、本当におしらすにいる気分だ。

俺はお奉行のお沙汰が下るのを黙って待った。

「ベルトを」

トンと畳に手を置く。

ここにおけという事か。

言われるままに腰からベルトをはずして、畳の上に置いた。

祖母さんは流れるような手つきでそれを取り上げると、すっと樹の前においた。

「次は樹ちゃんに闘ってもらいます」

成り行きを見守っていた樹が驚いたように目を見開いた。

「や、それは」

俺と祖母さんの間で視線を往復させながら、困った顔で口ごもってしまふ。

「薫様」

橘さんが身を乗り出すように祖母さんに詰め寄る。

「先程報告したとおり次が最後の闘いです。ですから…」

「だからこそです」

祖母さんが真剣な顔で橘さんを見つめる。

「だからこそ負けられないんでしょ」

橘さんはもの凄く複雑な顔をしていた。

いろいろな事情が織り交ざってそんな模様にしかなかったという顔だ。

……やっぱり橘さんは色々知ってたなあ。

お役御免を言い渡された本人である俺は、どこか他人事のようにその様子を見ていた。

——元々好きで始めた事でもないし。

気にしてくれる二人には悪い気はしたが、それでも、ホッと息をつきたい気分だった。

「次に、その、パピ子とかいうのが出てきた時貴方は闘えますか？」

「…無理でしょうね。…それからハニ子ですお祖母様」

パピ子じゃ冷たくておいしそうだ。

「では、異論ありませんね」

祖母さんが俺に聞いてくる。

「…本当にそれでいいのか？」

樹は今迄に見たこともないような真剣な顔をしていた。

——気にする様な事なんて

俺は黙って一度頷く。

「…ありません」

——何も無い。

「……ない……ハズだったんだけどな」

誰に聞かせるとも無く呟いた俺の隣に、しばらくウチに滞在する事になった樹が腰掛けていた。

「なにがだー？」

俺達はアホみたいに上を向いて夜空を眺めていた。

返事は返しても相手を見ることはしない。

「んー？んー、理由」

そういえばこれは水城さんとの約束を破る事になるんだろうか？

「理由？」

「うん。……俺さ、別に好きで闘ってたわけでもないし、祖母さんから無理矢理やらされてたからさ。だから正直全然平気だったんだよ」

樹はこちらを見たかもしれない。

視界の端で身じろぎするように動くのが見えた気がする。

「ベルトを樹に渡すこと。これは本当に平気だったんだ。……けどさ、何ていうか、今この辺りがもやもやしてるんだよな」

ちよつと頭を動かして、樹のほうへ顔を向ける。

予想通り夜のような色の瞳と目が合った。

上にある景色から小さじ一杯分くらい掬ったような星空がそこに写っている。

俺はもう一度その部分、自分の胸の辺りを触ってみた。

「なんか、落ち着かないっていうか……」

樹はそれには何も言わず、再び空へと視線を上げた。

それに倣って俺も上を向いた。

「自分で分かっているんじゃないかー？」

樹が言う。

語尾が延びるのは上を向いて口が開いているから。

「……かもなー」

俺は夜空に溜息をこぼした。

自分で分かっている。

分かっている限りでは俺は残念がつている。

自分の手で決着をつけられないことを……

最初から迷惑以外のなんでもなかった。

こんな気持ちになっっている今でも良かった思い出なんか一つも思い出せない。

「いや、ちがう、こうだつ、こうつ、……ちがうなー」
…なにが？

困惑する俺を尻目に樹はまだブツブツ言いながら、震える体で、四角を描く。

「ちよつと、何やってんの？」

「何って……」

ぴたりと動きが止まる。

「…あの、今の質問は、どれくらい大事な質問なんだろうか」
今の質問って……どんなトコに住んでるかってやつか？

「…イヤ、別に大した事じゃないけど」

「そ、そうか」

あからさまにホツとしたように額を拭う。

長い前髪が夜の空気に流れた。

「いや、実はな、私の住んでいたところというのは狭くて人があまり居ない所で、殆ど知り合いしか居ないから、一言二言で何が言いたいかわかるんだ。だから私は武道以外の何かを他人に説明するっていうのが大の苦手らしくて」

今十分説明してくれてたけど。

…意識するとダメってことなのかな。

………。

「だからあんまり、質問とかしないで欲しいんだが」

「…ん？ん、ああ、分かった、ところで………」

………そこって、どれくらい人が住んでたんだ？」

かた……。

………面白い。

三日後、放課後、教室。三十九脚の机椅子、三十九分の十八の生徒、十八分の一の俺。オレンジ、濃い黒、二つに染まる他の色。…

…、この表現、もう限界。

あの妙にあっさりしたヒーロー交代劇から三日が経っていた。
胸のモヤモヤは相変わらず、風呂場の黒かびのように消えずに残っている。

靦^{てきめん}面なカビ取り剤の存在も思いつかず、帰るきつかけもつかめず、俺は机の上にだらしなく伸びていた。

「秋名帰んないの？」

「あゝ、まだ居るわ」

教室の出入り口から、帰り支度の済んだクラスメイトが声を掛けてくる。

手のひらを振って返す俺に、首をかしげながら、他のクラスのヤツと歩いていった。

どうやら人待ちをしていたらしい。

特に待ち人もいない俺は、セルフ腕枕で横に見える教室から、徐々に人の減っていく光景を眺めていた。

数ヶ月前まで当たり前に過ごして来た風景の中、妙に軽い心だけが変に不自然に感じられる。

課題も無事提出する事ができたし（あの日の深夜、樹にまで手伝わせず終わらせた。殆ど役に立たなかったけど）本当にやることの無い俺の懷で携帯がうるさく振動した。

ディスプレイに表示された名前は橘 美晴。

一段速いテンポでなり始めた心臓をなだめつつ、ゆっくりとそれに耳を当てる。

「もしもし秋名ですけど」

「もしもし」

背後から騒がしい音が聞こえていた。

にも拘らず、その声は不思議なほど際立った存在となって、俺の中に染み入るようにゆっくりと落ちて置いていった。

「来たわ」

淡泊に発せられた言葉に、俺は椅子を蹴って立ち上がった。

これが西部劇なら、二人の間に力サカサと枯れ草のようなものが転がっていた事だろう。

けどココは言わずと知れた商店街。

入り口のアーチには首吊りの死体では無く、安っぽい装飾が垂れ下がり、あちこちに馬の変わりに自転車^{自転車}が列居している。

酒場から聞こえてくる女達の嬌声がここでは八百屋のおっさんのだみ声になって響き、この辺りでシェリフといえは自転車で巡回してくる高橋巡査の事だ。

テキサスでは無く東町。名前からして、西部とは程遠い。^{ウエスタン}

そこに、見た目だけは美少女と言っていていい二人の姿があった。

一方はバトルホステス枝村 樹。

腰にはベルトを巻いて、腰辺りまである長い髪を高い所で結っている。

ポニーテールの女の子というよりは、時代劇の風来坊のような印象を受けるのがいかにも彼女らしい。

いつものように楽しそうな表情で、とつてる姿勢は完璧なまでの自然体。

あの、時代を感じさせるボディコンは家に着いた時点で着替えさせ、今はシンプルなジーパンとTシャツを着ていた。

もう一方は、奇天烈アンドロイドの如月八二子。

攻撃をさせない、という一点のみを重視した可憐なビジュアルで、且つ、その見た目に合わない戦闘力を有している。

エメラルドグリーンの虹彩に、青みがかった髪という風体がどうにも国籍不明だが、実のところはチャキチャキの日本産。

どころか、メイド・イン・ご近所だったりする。

そんな彼女に俺は手も足も出ずに完敗させられた。

八二子の八二は八二トラップの八二に違いない。…それ以外は考えられない。

この、蓋を開ければ実はいるもんという二人の後ろには、それぞれセコンドのように寄り添う人影があった。

ハニ子の後ろにはブルームと白髪の男性の姿。

背が高く姿勢もしっかりとしたこの三白眼の老人は、恐らく水城さんのお祖父さんだろう。

スーツに白衣をまとった姿で、何を思っているのかジッと押し黙っている。

そして、樹の後ろ、目の覚めるような鮮やかな色あいの和服を着ている人物に、俺は思わず声を上げて驚く羽目になった。

「お、お祖母様？」

こと、秋名 薫は目の鞘を閉じて静かに佇んでいた。

流石にその手に刀はない。…普通に考えて銃刀法違反だし。

「秋名君」

そんな当たり前のことに感心していると、後ろから声を掛けられた。

水城 真琴が、そこに居た人たちを押しつけながら俺のほうへ駆け寄ってくる。

「水城さん、来たんだ」

「だって、気になるし」

このメガネと三つ編みの同級生には、ベルトのことはもう話してあった。

”俺達いまいち当事者になりきれてねえ同盟”唯一の同志である彼女に、俺は意識して秘密を漏らしている。

それには彼女との約束を守るのと同時に、自分の心の安定を得るという意味合いもあった。

野次馬が作るわっかの最前列、バスケットで言うとコートサイドに陣取った俺達の耳に不審げなブルームの声が聞こえてきた。

「あら？いつものあの子じゃないのね」

樹のしているベルトを見てブルームは唇に手を当てる。

「あの子は今回の闘いにはそぐわないと思ってはまずさせて貰いまし

た」

答えたのは祖母さんだった。

世代を超えてあの子呼ばわりされた俺は微妙な心境だが、当の樹は随分リラックスしているようだ。

鼻歌でも歌いだしそんな雰囲気でジツと成り行きを見守っている。

「不味かったでしょうか？」

祖母さんの問いかけに「いや」と答えたのは水城さんの祖父さんだった。

「あの人、お祖父さん？」

念のために問いかけた俺に水城さんが頷く。

「うん、善一郎お祖父ちゃん」

と周りに聞こえないように小声で教えてくれた。

「別にかまわんよ」

祖母さんの方を見ながら、善一郎さんはなんでもないように答えた。

この場の平均年齢を高くしている二人の間に微妙な空気が流れる。

「イッチー」

空気を読めない最年少が声を張り上げた。

「うん？」

と樹は余裕綽々で答える。

こちらもあり空気が読めているとは思えない鷹揚さだ。

「決着をつける時が来たのである」

「そうだな」

初めて出来たライバルに嬉々として宣言する八二子に対して、樹の態度は平坦そのものだった。

決着といわれても元から楽しそうな表情に目に見えた変化は無い。いつでも変わらない態度、もしかしたらそれは彼女の姿勢スタンスなのかもしれない。

「な、なんか、あっさりなのである」

あからさまに寂しそうな顔をしてみせる八二子に樹は頭を掻いて

笑った。

「いや、まあ、あまり気を張っても仕方ないことだしな」

このやり取りだけでも、なんとなく互いの実力の程が知れそうなものだったが、実際にやってみなければ何が起るかなんてのはわからない。…まあ、二人のうちどちらに賭けるかと問われれば確実に樹の方なただけ。

「……そろそろ始めていいかしら？」

ブルームが一座に向けて声を掛ける。

皆は頷いて同意を示した。

「あ、ちよつと待った」

構えを取ろうとするハニ子を手で押しとどめつつ、樹が声を上げる。

「変身」

ベルトに触れ、まるでおやすみを言うようなテンションで呼びかける。

辺りを光が包み、その中心からヒーローが姿を現した。

その妙に体のラインを強調させるフォームに周囲の男達が沸いた。

「…馬鹿じゃないの」

凍傷をおこしそうな程の冷たさを孕んだ声でぼそつと呟くように言う水城さん。

こちらを窺うように見てくる彼女に言わ猿と聞か猿が緊急出動。

見猿は絶賛稼働中。……いや、ほら見なきゃ、決着。

「うむ、サンレッド対デガスター最後の闘いである」

満足そうにハニ子が頷く。中身にこだわりは無いらしい。

どうでもいいけど、そう言われるとなんだか大手歯磨き粉メーカー同士の商戦のように聞こえるのは俺だけだろうか。

…勃発プラークコントロール戦争。

目で見えそうなくらいに空気が変わった。

ハ二子は表情を硬くし、樹も、その表情は分らないが、体に緊張感を漲らせている。

セコンド連中は二人から距離をとり、それぞれ両端の輪の内径まで下がってきた。

ふと、祖母さんに近づく人影が見えた。

その傍にそつと寄り添ったのは橘さんだった。

彼女は”薫派”という何が楽しいのか祖母さんを支援する団体の一員をしている。碎けて言うとなんでもしてくれるファンクラブ。

そんな橘さんが、深刻な表情で祖母さんに何か声を掛けていた。祖母さんは穏やかに笑うと彼女の頭を優しく撫でた。

その時、輪の中心で示し合わせたかのように二人が同時に地面を蹴った。

ゼロコンマの世界で距離が縮まっていく。

先手を取ったのは樹だった。

ハ二子の左側頭部を狙ったハイキック。が、軽い。それを両手で受けられる。空いた軸足を狙ってハ二子が蹴りを繰り出す。それを片足だけで跳ねてかわし、上半身を無理矢理捻って、ハイキックの情性から宙に浮いたままバックブロー。ガツキと嫌な音がしてハ二子の頭が揺れる。しかし、意に介した様子も無くハ二子のハンマーナックルが空中にいる樹に襲い掛かる。狙点を読んで、そこを両手を十字にしてガードする。防御に成功しつつも木の葉のように吹き飛ばされる樹の体。地面に激突する瞬間バレーのトスのように両手で地面を押し綺麗な回転を見せて着地した。

……………ふう。

誰かがため息をついた。

息つく間のない一瞬の攻防。

樹は着地点で、体を伸ばして首を捻っている。

ハ二子も自分の拳をぶつけ合いながら嬉しそうに笑っていた。

「今日は最初から全部乗せて行くのである」

そう言つと、シユポンと音を立てて右手を引き抜いた。

——ハニ子砲！？

脳裏にあの常識外れの黄色い光の柱が浮かぶ。

「あはは」

いや、笑ってる場合じゃないって。

樹は右手を持ったハニ子を指を差して笑っていた。

「笑っていられるのも今のうちである」

青筋立てそうな顔でハニ子が右手を持ち上げる。

不気味に光る銀色の先が紅いスーツに向けて固定される。

「……ふむ」

呼吸と一緒にそうこぼすと、樹はダツとハニ子に向かって走り出した。

虚を突かれたハニ子が狙点を絞ろうとするが、のたうつ蛇のような軌道にフラフラと銃口は揺れるばかりだ。

「一般人が居る場所でそんなものは使わないんじゃないのか？」

あつという間に切迫する樹に、ハニ子が向けた表情は……笑顔だった。

「その通りである」

ポンとこの場にそぐわない間の抜けた音が響いた。

銀色の凶器から吐き出されたのは、白いピンポン玉のようなものだった。

小さな白い塊は、緩いカーブを描いて樹の方へと飛んでいく。

思わず距離をとった樹は一瞬対応に迷ったように動きを止めた。

避けるべきか、防御すべきか、迎撃すべきか。

樹は迎撃を選んだ。

「ヒートチョップ」

バイザーに緑の光が流れる。

刀を抜くように下から上へ、斜めに手刀が走った。

ベルトの使い方は今日まで俺がちゃんと教えてある。

……これも前任者としての勤めだ。

しかし迎撃されるはずだったそれは、攻撃が当たる寸前パチンと

シャボンが割れるような音を立てて弾けた。

バツと広がったのは、両手をいっぱいに広げたくらいの直径を持つ大きなネットだった。…しかも嫌な事を思い出させる蜘蛛の巣形。
「むっ」

チョップはネットの一部を切り裂いたが、大半はその右腕にギブスのように巻きついていった。

ピキピキ言いながら固まっていき、一瞬のうちに樹の右腕を三角形に固定してしまう。

「おお。…参った、動かん」

校歌を歌う応援団のように腕を振り回しながら、樹は左手で頭を掻いた。

「はっはっはっ、どうだ、”蜘蛛の巣”の威力は」

「うん、全く動かない、大したもんだ」

そう言つて、空いた手で八二子の腕を掴んだ。

———これがあった。

いつの間にか八二子のそばに現れた樹を事後認識しつつ、俺は今の動きを思い返す。

えらく狭い歩幅で数歩歩き、ゆっくりと八二子の腕に手を伸ばす。固まった腕を肩から廻しながら、確認するように頷いていた。

後は、このまま、この間のようにどうしても攻撃すればいい……
そう思ったときだった。

「あまい」

八二子が掴まれた腕を器用に返し、樹の手から逃れる。

驚いたように立ち竦んだ樹に、俺が見えただけで合計七発のパンチが叩き込まれた。

「ぐっ」

衝撃に樹の体が宙に浮いた。

ただ、そこは都会に出てきたバトルマスター。

只やられるだけで無く、バックステップでダメージを逃がしつつ、手だけで裏拳を八二子の顔にヒットさせていた。

腰の入ってない、ハリセンで叩かれる位の威力しかないような攻撃だったが、ハ二子は驚いたような顔で頬を押さえた。

「……ふー、やるなあ」

人垣の中から大してダメージを感じさせない動きで樹が立ち上がる。

その声からは堪え切れようの無い、喜びみたいなものが感じられた。
「そっちこそ、驚いたのである」

ハ二子も叩かれたところをまだ押さえながら、ゆっくりと構えを作っていた。

「まさか、この動きが見破られるとはなあ、ちよつと悔しいぞ」

あははと鷹揚に笑いながら、体の埃を払う。

言葉とは裏腹に、その声からはまだまだ余裕のようなものが感じられた。

「一度見た技は通用しないのである」

「……ま、アンドロイドの強みじゃな」

ちっちゃな胸を張るハ二子に水を差すように善一郎さんが言う。

「……こうなつて来るとそれが邪魔だな」

樹はそう言つてハ二子砲を指差す。

「よっ」

俺達の虚を突いて距離をつめた樹がハ二子の右腕めがけて蹴りを放つ。

ハ二子はそれをギリギリでかわし、直ぐに銃口をターゲットに向ける。

狙点が定まる瞬間、樹の白く固まった右腕が振り下ろされた。

ガツと音がして、砲身が無残にひしゃげた。

「かかったな!!」

歓喜の叫びを上げ、攻撃終わりの隙だらけに見える樹の体へ、ハ二子は左手を突き出した。

カキンと手首辺りから折れて、ぶら下がった手首から先の上に、右手と同じ形の砲身が現れた。

「これで終わりである――！」

……しかし、勝ったのは樹だった。

発射された”蜘蛛の巣”を、崩れた態勢のままボールのうちに左手で掴み、拳の中で破裂させた。

ボクシングのグローブのように拳を包んだ”蜘蛛の巣”ごと、その見た目の用途のままに八二子の頭に叩きつける。

――ガッン。

単純明快な破壊音と共に八二子は地に伏せていた。

八二子の頭を中心に地面のひび割れが放射状に広がっている。

……に、人間だったら間違いなく死んでるな。

「お、終わったのかな」

そんな水城さんの言葉に反応したわけではないだろうが、倒れていた八二子の睨みがピクリと動いた。

「……まだか」

どこか嬉しそうに言いながら、樹が八二子から距離をとる。

「……いったー……い」

手首の無い右手で頭を押さえながら、涙目で八二子は立ち上がった。

キツと樹を睨むと震える涙声で叫んだ。

「もう、ホントに許さないのである――！」

ブワツと周囲の空気が一変した。

八二子の周りに空気が集まり、細かい風の集まりになって彼女の周囲を巻き上げていく。

勢いをつけて左手を元に戻し、ひしゃげた砲身に右手首をかぶせた。ファイティングポーズをとると、内側から水があふれ出るように拳に黄色い光がまとわりついた。

「小細工はもう無しだ」

頭から、尻まで小細工の塊けつぺんのようなこいつに言われたくは無いが、樹は特に気にしないようだ。

「おう」

と弾むような声で叫ぶと、両腕についた白い塊同士をぶつけ合った。

ガラスのように甲高い音を立てて、”蜘蛛の巣”が粉々になる。

「ライジングパンチ」

拳が赤い光を帯びた。

闇を照らす為だけにあるかがり火のように、迷いの無い真摯な炎が二つの決意を包む。

「……殴り合いである」

ハニ子の言葉に、なんとなく樹がいつもと違う表情で笑った気がした。

…只の勘だけど。

アーケードに差し込む西日が、ぶつかり合う二つの影を濃く長く伸ばしていた。

ハニ子の言葉どおり、俺達の目の前で繰り広げられたのは、およそ文明と程遠い原初の闘いだった。

殴る、避ける、蹴る、生後五日のびつくりどつきりメカにいたっては、その小さな口で噛み付いても見せた。

凄惨………を通り越して、もはや、呆れさえ沸いてくるドつき合い。

ハニ子のレバーブローが樹の体を折り、樹の頭突きが印判を据えるようにハニ子の額を打った。

よろめくみたいにして二人が距離をとり、十分近く続く闘いに何度目かの空白が出来る。

「そ、そ、そろそろ限界じゃないのかイチー」

体中のあらゆる所にすり傷のような跡のついたハニ子が、吃り^{ども}ながら樹に問いかける。

その表情には余裕ぶった笑顔があったが、誰の目にも満身創痍なのは明らかだった。

「はあ……はあ……さあ、どうかなあ」

それに答える樹も流石に息が上がっていた。

呼吸で忙しく上下する全身に、乳酸が飽和しているのが分かる。

「む、無理せず、ギブアップを勧めるぞ」

「いや……それは……ガラじゃ、ないからな」

倒れるときは前のめり。綺麗な顔して漢前だ。おとこまえ

「そ、そうか」

なんだかガツカリしたように肩を落として、ゆっくりと姿勢を整える。

「ふう……しかし、いい加減……決着かたをつけないとな」

樹も、ん、と背筋を伸ばして構えを作った。

「……………」

お互いの地面を蹴る音をゴングにして再開される取っ組み合い。

しんどそうにしても、闘いが始まると動きに精彩が戻るのは、

二人が根っからのファイターだからだろう。

「……不味いな」

独り言のような声のした方に顔を向ける。

決して近くでもないし、呟くように言ったのにも拘らず、はっきり耳に入ってきたのは善一郎さんの声だった。

……何が不味いんだ？

眉根に皺を寄せた彼の視線を追っていくと、闘いに興じるハニ子の姿があった。

その表情に……あれ？

よくよく、表情を見ると、そこに異変があった。

彼女の綺麗に輝いていたエメラルドグリーン瞳が、時折チラリと覗くように暗く明滅している。

……もしかして、電池切れ？！

確信は持てないけど、あの老マッドサイエンティストと、規格外アンドロイド親子の態度を見ると、こちらにとって悪い状況ではないように思える。

「……辛そうだな、腹でも減ったか？」

ココからでは、ハニ子の動きに目立った変化はないように見えるが、実際闘っている樹は何かを感じ取ったらしい。

貫手を首を傾げてかわしながら、そう訊ねた。

「そ、そ、そんなこと無いのである」

すらりと言葉が出て来なかったのは動揺からか疲労からか。

どちらにせよ瞳の明滅は、明と暗の立場が入れ替わろうとしている。

……言われてみれば、ハニ子のエネルギー源はちよつと気になる。本当に電池という可能性もあるが、頭に浮かんだのはちゃんな単三電池だ。

……そんなところから俺のハニ子に対する評価が知れようというものの。

「そう言えば、お前はナニで動いているんだ？」

俺の気持ちを察してくれたわけではないだろうが、樹がたった今気になっていたことを訊ねてくれた。

彼女は答えるのは苦手なくせに、好奇心に任せて人一倍色々な事を質問してくる。

現に三日前も、家路の途中であれこれと指を差しては、初めて街に出たラストエンペラーのように俺達に質問を向けてきた。

……キョロキョロと動く瞳に樹が方向音痴である一因を見た気がした。

ハニ子が、向けられた拳をパリーしながら、嬉しそうな笑顔になった。

基本的に自分に興味を持たれたり、注目が集まるのが好きらしい。弾むような声でこう答えた。

「重油」

……お前はタンカーか。

漫画とかアニメとかで人型のロボットやアンドロイドが、オイル缶にストローを突っ込んで中身を啜る姿は見た事があるが、あのビジュアルで、黒だか茶色だかのドロツとした油を啣^{さま}る様は出来れば見

たくない。

そんな光景を思い浮かべると思わず身震いしてしまいそうになるが、その事とは別に何か嫌な感じがした。

……なんだろうこの嫌な予感。

普通の高校生同士のように会話しながらも（重油はともかくとして）、一瞬の攻防は続いている。

樹の蹴りをしゃがんでかわしたハニ子の瞳は、明滅を止め一段暗い輝きで落ち着いていた。

折った膝を思い切り伸ばして、アッパー気味のボディーブローで反撃しながら、口にはのん気な質問がのぼる。

「そう、言う、イチーは、普段どんなものを食べているんだ？」

「…………ツ…………」

ギシツという音が聞こえたような気がした。

——ちくしょう、これかつ、嫌な予感は

頭の中で弾けた言葉が口について飛び出していく。

「避ける！ 樹っ！」

樹が固まっていたのは一瞬の事だ、けど、致命的な一瞬だった。

俺の言葉に弾かれたように腕を下げるが、間に合わない。

拳が命中したスーツの一部が砕け、破片が飛ぶ。何かが、折れる音がしたのがわかった。

ハニ子は何が起こったか理解していないようだったが、一度始まった攻撃は止まらない。

逆の拳で上半身をガードしている腕を二度打つ。

肘。

手首。

ピンポイントで関節を攻撃。

樹の腕が少しだけ下がった。

それを見逃さず、続けざまに振りぬかれた右腕が、樹の頭を揺さぶった。

傾いだ体を既の所で踏み出された右足がとめる。

「か、勝ったであります、わ、わたくし初勝利を収めたのであります」

嬉しそうに飛び跳ねるハニ子の頭をブルームが優しく撫でた。

「勝ったんです。わたくしが長き闘いにピリオドを……」

大喜びしていたハニ子の動きが急に止まった。ついにガス欠かと、顔を覗き込むと、なにやら真っ青な顔をして体を震わせている。

「か、勝ったのはいいんですが、わたくしはこれからナニを目標に生きていけば……」

生後五日にして早くもアイデンティティクライシス。

まあ、人間なんてどうやったって生きていけるし、アンドロイドにその言葉を当てはめてはいけないという法も無い。その辺の事はじっくり考えていけばいいんだろう。

わなわなと体を震わせながら天を仰ぐハニ子を笑っていた樹が、表情を引き締めて祖母さんの方を振り返る。

「というわけで、すみません、負けてしまいました」

頭を下げながらも、その声には悔しさのかけらも無い。

不本意な負け方のようにも思えたが、彼女の中ではこの闘いにきちんと決着がついたらしい。

祖母さんは誇らしげに頷くと、樹の肩に手を置いた。

「謝らないで。私は、やはり貴方をお願いをして良かったと思っていますよ」

そう言って祖母さんが微笑みを向けると、嬉しそうに樹も笑った。

「……じゃあ、私は一足先に病院に行かせて貰おうか」

「誰か手を」

橘さんが指示を出すと、ギャラリーの中から何人かが出て来て、樹に肩を貸した。

「大地」

数歩進んだところで樹が足を止めこちらを振り返った。

「私は約束を守れたか？」

「…うん、樹は一所懸命闘ってくれたよ。ありがとう」

俺がそういうと、樹は笑って親指を立てて見せた。

……最後まで漢前なヤツだ。

小さくなっていく背中を見送っていると、後ろから、楽しそうな声を掛けられた。

「それじゃあ、こっちの約束も守ってもらおうかしら」

ブルームが腕を組んでこちらを見ている。

……忘れてた。

俺は身構えるようにして祖母さんの前に出た。

「お、姉ちゃん」

不安そうな顔をしている水城さんにブルームがウインクを投げかけた。

——貴方達が勝つたら私達は二度と姿を見せない

三日前、ブルームはそう言って、次を最後の闘いとするといった。

……けど、俺達は負けた。

勿論こちらが負けた時にも条件があるらしいが、俺はそれを知らない。

緊張している俺と水城さんを尻目に、何もかも知っているらしい橘さんが祖母さんに近づいていく。

やはり、条件は祖母さんに関係のあることらしい。……まあ、当たり前か。

じつと祖母さんの目を見つつ、橘さんは何かを言おうとしていた。

……なんだ？

逃げるとか、再戦の要求を進言したりするのかな。

なんとって彼女は”薫派”の人間だ。

祖母さんの為に色々尽くしてきた人間で、祖母さんに不利益があればナニをするか……。

「おめでとunggざいます」

そう、おめで……………は？

橘さんの言葉を口火に、ギャラリーの中からも沸き起こる、拍手とおめでとうの嵐。

”薫派”の人だけでなく、その他の人たちもつられる様に拍手をし始める。

何が起こっているか解らないながらも、口になっているおめでとう。気のせいか、祖母さんの頬に赤みが差していた。

……………なにこれ、テレビ版の最終回？

もしくは、空気の読めないサプライズパーティーか。

しかし、祖母さんの誕生日はもっと暑い日のはず。

確か八月の五日。根っからの夏女だ。

関係者でオロオロしているのは俺と水城さんだけだった。

善一郎さんがゆっくりと一歩踏み出して、祖母さんの前に立つ。

「随分とお待たせしました」

「……はい」

照れたように祖母さんは短く頷いた。

……………誰でもいいから事情説明プリーズ。

「善一郎様と薫様は幼馴染だったの」

なんだかピンク色の雰囲気放了ちだした二人から離れて、橘さんが俺のそばに寄ってきた。

俺と水城さんの顔を交互に見ながら、事情を説明してくれる。

……………って幼馴染？！

「お二人はとても仲が良かったんだけど、家の事情で、薫様はご結婚される事になった」

それは、何ていうか、ドラマの中の話みたいだ。

家のために引き裂かれる二人。

「えと、おじいちゃん達は恋人同士だったんですか？」

わずかに目を輝かせながら、水城さんが身を乗り出した。

……………こういう話好きなんだ。

「うっん」

それに答えたのはプルームだった。

「どちらかといえば兄妹みたいなものだったそうよ。少なくとも、お互い好意はあっても自覚は無かったみたい」

今や核シエルターのような空気を築きつつある二人を見て、嬉しそうに微笑んだ。

「……けど、突然の結婚話にお祖父ちゃんは自分の気持ちに気付いたの」

陶然と語るプルーム。……やっぱ姉妹か。

ふんふんと熱心に聞いている水城さんの肩越しに、ハニ子が動きを止めたのが見えた。

……ああ、ついに電池切れを……。

「でも、お祖父ちゃん照れ屋さんだったから、一回のデートに誘うのでイッパイイッパイだったのね」

「……そして、薫様も極度の恥かしがり屋だった」

プルームの言葉を引き継いで橘さんが言うと、二人してため息をついてしまう。

「誘われても、薫様は断ってしまった」

「でもうちのお祖父ちゃんも薫さんの性格を知っていたから、それが只の照れ隠しって解って、しつこく誘っていたんだって」

「……それで素直じゃない薫様から出された条件が」

私に勝つたら……って言っちゃたのか。

……それにしても、なんて色気の無い条件を。

しかも、それでこんだけ引つ張るって、どれだけ素直じゃないんだよ。

「でも、結局祖母さんは別の人、うちの爺さんと結婚してるじゃないですか。てか、そもそも、その事情って言うのはなんなんですか？」

俺の言葉に何故か橘さんが顔を伏せた。

「……それは商店街の人たちのため」
え？

「…その当時、こちら辺一帯は区画整理の対象になっていた。その所為で殆どの住人に立ち退きが言い渡されて、地上げ屋とかまで来てたらしいわ」

地上げ屋って…。

「…その時の反対住民達を中心に秋名家だった。…アキナ君も知ってるでしょう、君の家が、昔、道場を開いていたの。商店街の人達も殆どそこに通っていたから、自然とリーダーみたいになっていたのね」

橘さんが疲れたようにため息をついた。

水城さんも眉をひそめて真剣な表情に戻っている。

「その所為でアキナ君の家が地上げ屋に狙われてしまった。嫌がらせとか、完全に違法な手段を使われて、いつの間にか金銭的に道場は立ち行かなくなっていた」

「…そこにウチの祖父さんとの結婚話が飛び込んできたんですか？」

橘さんが頷く。

「話自体はそれより前からあったらしいんだけど、薫様は和巳様に会う事も無く断っていたらしいわ」

脳裏に今は亡き祖父さんの顔が浮かぶ。

厳しい祖母さんとは対照的に、笑ってる顔しか浮かんでこない。

「…話の腰を折るようで悪いんですけど、なんかチョットシヨックっていうか、祖父さんが金に物言わせて結婚迫ってたって言うのが…」

橘さんが、俺に微苦笑を向ける。

それは違うと首を振った。

「私もちよっと、気になってしまって薫様に聞いた事があるんだけど、『家の為とはいえ、私が愛してもいない男と結婚すると思いませんか？』って逆に聞かれたわ」

「は、はあ、そうっすか」

身内のそういう発言は自分のことでもなくても妙に恥ずかしい。

顔を赤くした俺をブルームが笑っていた。……くそ。

「それで、薫様は和巳様に会うようになった。和巳様の家は良家だったし、お金があつたから。最終的に結婚の決め手になったのは和巳様のお人柄だったかもしれないけど、きっかけとしては、家のためだったかもしれない」

……まあ、まず、そうだろうな。

「だから、橘さんたちは俺達に色々してくれてたんですね、その時の事を恩義に感じて」

「……ホントはね、当時のご当主、薫様のお父様はその結婚に反対していたの。薫様がお家のために無理して結婚を決めたんじゃないかって思われたみたいで。反対運動もやめて、道場も畳もうとしていたみたいなの。その時に道場内が二派に分かれてしまった。それで出来たのが、当主である始様についた”始派”と薫様についた”薫派”。……”薫派”の人たちが色々な事情を知つたのは、薫様のご結婚された後だった。……だから、私達がやっているのは、ただの罪滅ぼし」

俺は周りで二人の為に手を叩いてくれている人たちに目をやった。喜色満面で自分の事のように喜んでくれている。

かなり年配の方達の中には目に涙まで浮かべている人まで居た。

……ただの、なんかじゃないじゃん。

「……千葉ちゃんが言っていました。『大事なのはどう生まれたかじゃなくてどう育ったか』だって。だからいいんだと思います。だってウチの祖母さんの為にあんなに喜んでくれてんだもん」

だから、色々あったとしても多分ギリギリセーフ。

俺の言葉に橘さんは何も言わずにただ頷いてくれた。

「……それで、どうして貴方はそのことを知らなかったの？」ブルームがおかしそうに訊ねてくる。

うんうんと、水城さんまでが頷いている。

「……そんなこと俺が知りたいっすよ」

不満気に橘さんの方を見ると、しれっとした態度で口を開いた。

「もし、この事をアキナ君に言っていたら、君どうしてた？」

「そりゃあ、とつとと負けてましたよ」

俺には痛い思いまでして人の恋路を邪魔する趣味は無い。

そうと知っていれば、とつとと負けて、こんなメンドクサイ事から解放されていた。

まさに、一石二鳥だ。……………いや、良く考えたら俺得して無いや。

「だからよ」

簡潔な答えにブルームのほうが先に合点がいったようだ。

なるほどね、と楽しそうに頷いている。

「君の御祖母様が、簡単に負けることを是と思う？」

……………いいえ、思いません。

つまり、俺含めてココにいる殆どの人が、祖母さんの負けず嫌いに付き合わされたってことか。

やはり、橘さん達が気にする必要は無かったんじゃないかと思えてくる。

「それに、単純に恥かしかつたんじゃないかしら、あなたにそのことを話すのが」

座り込んでしまった俺に、ブルームが殊更に優しく声を掛けてきた。

……………今はなんだか、その同情が気持ちいい。

「可愛い人だね、秋名君のお祖母さんって」

水城さんが笑いながらそう言ってくるが、完全なリアクション間違いだ。

「……………この事、樹は知ってるのかな……」

俺は思わず呟いていた。

知らないとしたら彼女こそ好い面の皮だ。

「あの子も知ってるわよ」

橘さんの答えに思わず顔を上げてしまう。

「え、だってあの時」

三日前、俺が見たときには……………。

「……あ、そつか」

樹は俺のほうを見て笑いながら頭を掻いていた。

あの時は彼女も理由を知らないんだろうとばかり思っていたけど、何のことは無い、知らないんじゃないかと、説明できなかったんだ。それに、樹ならその事で鬨を躊躇ったりはしなさそうだし。

「……なんだよ、じゃあ、俺だけかよ、今こうして凹んでんのは」
ガツクリと肩を落とし蹲る俺。

一身にワリを食った形になった俺の頭上で幸せそうな歓声と拍手の嵐が吹く。

……あ、ワリ食ったのは八二子もか。

今ならあいつと肩組んで慰めあえそうな気がする。

ただ残念な事に、彼女は今重油が切れてお休み中だ。

綺麗どこ三人が、俺の背中を、まあまあと叩いてくれる。

「その内きつといい事があるわ」

「げ、元気出して」

「楽しかったわよ」

いや、かなり、微妙、なんだけど。

……ま、
いつか。

こうして、長年にわたって商店街を舞台に続いた鬨は終わった。
一部にかなり微妙な感慨を残して……。
おれ

第四話 ヒーローの条件 後編（後書き）

かなり色々カットしてしまって、完全にタイトルが置き去りになっていますが、後編です。

闘いは終わりましたが、本編はもうちょっと続きます。
宜しければもう少しお付き合いください。

幕間　　ゝ……………ゝ

白い廊下、白い壁、白い天井、白い照明。

雪の女王も辟易しそうな白一色の内装は、人の主観を拒否するように清潔なフリをしている。

そこに蔓延る好奇心や探究心を無視するように、高らかに靴音が響いた。

続けて起こったのは怒号と悲鳴。

各所で時間差と共に響いていた銃声は今ほ鳴りを潜めていた。つい数分前までの喧騒が嘘のように、静かに入り口が開く。

「首尾はどう？」

「ばっちりであります」

アルコール度数の高そうな声と、知能指数の低そうな声。

後者から前者に渡されたのは、黒い球体だった。

愛おし気にそれを撫でると、二つの影は月明かりから逃れるように姿を消した。

堆く詰まれた教材を前に、千葉玲子^{つずたか}はため息をついた。

今彼女の頭を悩ませているのは、目の前の小山とは関係ない、商店街での顛末である。

——報告書になんて書こうか。

玲子の感覚では、小二レベルの恋愛偏差値しかない二人が、中学生日記を第四シーズンくらいまで、オールキャスト変更なしで続けていた、という感じである。

そんなものを、どうやって、もってもらしく書けばいいのか。

ノートパソコンの画面では、小さな黒い棒が、「早く書け、早く書け」と彼女を急かしている。

「…分かってるわよ」

睨むように画面を見つめていた彼女の懷で、携帯電話が音を立てた。
「もしもしっ」

苛立ちを隠そうともせず、相手も確かめずにそれに出る。耳に入ってきたのは少々懐かしい声だった。

「…ご注文」

「切るわよ」

ぷち。

懷に携帯を戻そうとすると、手の中で再び振動が起こる。

ディスプレイに表示された名前に目をやる。

『渡 わた 康平 こうへい』

「すゝは………もしもし」

「深呼吸してたろ」

電話に出ると楽しそうに凶星を突いてくる声。

「いや、切るな切るな」

ボタンに伸びかけた指が、慌てた声によって止められる。

いちいち行動を読まれているようで、ますます不機嫌を募らせながらも、玲子はようやくまともに受け答えする気で声を出した。

「何か用？」

酷く冷たい声に相手の笑声が重なるように響く。

「ああ、相変わらずだな」

それはあんだでしょうがっ。

口には出さずに、その言葉は身の内燃える炎にくべられた。

「聞いたぞ、そっちの事」

思わず眉間に皺ができる。

いけないいけない、と、そこを指で撫ぜながら、声からはトゲが抜けない。

「それが何？笑いたいんだったら、忙しいんで次の機会にしてくれる」

「いやいや、ご苦労だったなって……お前ますます被害妄想に磨きがかかってるな」

「大きなお世話よ」

机を叩いて立ち上がった玲子に、職員室に居たほかの教師達が驚いた顔を向ける。

「……そこ、まだ学校の中だろ、そんな地を出していいのか？」
良いわけがない。

笑顔で同僚に手を振りつつ、額に浮き上がりそうになるバツテンを何とか抑えた。

電話口を手で隠すようにして小声で話し始める。

「それで何の用なの？私本当に忙しいのよ」

「報告書か？昔っから書類仕事に時間かけてるよな」

「うるさいってば、用が無いなら本当に切るわよ」

「いやあ、あのな、アレが奪われた」

「アレ？」

「タイムマシン」

危うく、口に持っていたこうとしていたマグカップを落とすところだった。

「それ本当？」

「ああ……水城善一郎は映都東町にいるんだよな？」

「うん」

「そつか…多分、直ぐにお前に命令がいくと思う。その前に教えとこうと思つてな」

玲子は口につけずじまいのカップを机の上に置くと、本日何度目かのため息をついた。

「……疲れてるな、ちゃんと飯食つてるか？」

聞きとがめられて、心配そうな声で聞かれる。

こういうところも学生時代と何も変わっていない。

「食べてるわよ、あんたは私のお母さんか」

「俺がお前の母親だったら、そんな事よりお前の婚期を心配してるって」

「…殺すよね、もう、文句無いよね」

ゆらりと立ち上る玲子の怒気に、隣に座った若い女の教師が、ひつ、と悲鳴を上げた。

「あはは、んじゃあ、そういう事で、なんかあったらまた掛けるわ」

「…うん、奥さんと澪ちゃんによろしく」

「ういゝっす」

電話を切ると、息をついて肩を落とした。

一難去つてまた一難。

これから、学校では中間テストも始まるというのに。

空白の多いノートパソコンの画面を見ながら、耳の奥に残る康平の声がりフレインする。

頭を掻き篦りたくなるような衝動に駆られながら、玲子は机に伏した。

……それにしても、もしかしたら自分の偏差値の低さは、人のことを言えないのかも知れない。

小声で呟いた言葉の八割くらいはため息で出来ていた。

最終話 誰かが涙を流す時

——何もかもが燃えていた。

「自滅」

水城善一郎は当時のことをそう評した。

当時の事というのは、映都東町に昔持ち上がったいた都市計画の事だ。

その所為で馬鹿馬鹿しい闘いに巻き込まれた身としては、是非とも当人の口から詳細を知りたかった。

「元々杜撰というか稚拙だった計画に限界が見えて、首魁^{スキャンダル}じゃった当時の市長の醜聞^{スキャンダル}の発覚が重なってな、まあ、後は早かったの」

リビング…というより居間と言ったほうが相応しい畳張りの和室に俺は座している。

こげ茶色の足の短い和風の広いテーブルに、俺と向かい合うように善一郎さんが胡坐をかいていた。

俺は今、水城さんの家に招かれていた。

木造二階建てで、昔ながらの建物の多い近所と比べても、一巡り分くらい時代がかった外観。

目隠しの植木は綺麗に剪定され、庭には善一郎さんの趣味だろう、盆栽が幾つも並べられていた。

何とはなしに森深い洋館を想像していた俺は、その姿に呆気にとられた。

どこをとっても日本家屋。周りを見ると住宅街。

住宅地に佇む、歴史を感じさせる日本家屋が、つまりは悪の組織の本拠地だったのだ。

…悪の組織という今はもう語弊があるか。

水城さんに招じられて、からからと音を立てる玄関をくぐる時、

ココから出て行くブルームと怪人の姿を思い浮かべて、思わず吹き出しそうになった。

家の上がり口に入ると、板張りの長い廊下が目に入った。

障子や襖が連なり、外見からは決して大きく見えなかったが、そこにはえらく奥行きを感じた。

ぱっと見の印象で言うと、田舎のお祖父ちゃんち。

両親共に実家はこちらにあって、俺には田舎なんて無いからイメージ上のソレだ。

靴を脱いで上がりかけた俺の目に、イメージの中には無い物体が飛び込んできた。

……サウナ？

二階へと続く階段のそばに、一人が入れそうな、縦に長い木の箱のようなものが鎮座していた。

俺がそれに目を奪われていると、横に居た水城さんが説明してくれた。

「それ、地下に通じるエレベーター」

……秘密基地めいてきたじゃないか。

ただ、そこまでだった。

あとは、何の変哲も無い廊下を歩き、通されたのが、この妙に落ち着く畳の空間だった。

「それじゃあ、ウチの祖母さんは結婚なんかしなくても良かったんじゃないですか？」

善一郎さんは手に持ったドライバーの先で頭をこりこりと掻いていた。

話なんか聞いていないかのような風情で口を開く。

「実際立ち退いたった家もあったしの。あの人が、ああせんなら、もっとたくさんの方がココから出て行っとたろうよ」

そう言って目を細める。

これは別に、昔日に思いを馳せているのではなく、細かい部品を良く見るためにやっていた。

鼻の頭にちょこんと老眼鏡が乗っている。

「…に、したって…」

そうそう納得は出来ない。

橘さんたちの事もあるから、人身御供とまで言つつもりは無いが、もつと他にやりようは無かったのだろうか。

…せめてもう少し様子を見ていれば。

「まあ、当時は皆必死じゃったからな。神ならぬ身ではなかなか事の全容は見えてこんよ。…あの人は昔から頭が良かったが、それでも当時まだ十代の娘っ子じゃったし、入ってくる情報も限られとったからな」

そんなことを聞くとますます納得が出来ない。

祖母さん本人はウチの祖父さんとは納得済みで結婚したらしいけど、それとこれとはまた話が別のところにある。

…十代でそんな選択をしなきゃいけない状況ってなんだよ。

それも自分で招いた事ならともかく、どっかの業突くなおっさんの所為でそれを決意するって、昔の祖母さんが可哀相だ。

…何故か今の祖母さんに同情する気は起きないけど。

結果として俺が生まれたのだから、とやかく言う筋合いは無いのかもしれないけど…どうやら俺は憮然とした表情をしていたらしい。善一郎さんが顔を上げて笑った。

「確かに、上手いやり方じゃなかったかもしれない。じゃがな、昔を”愚かだった”と言うのは簡単な事じゃよ。本当に愚かしいのは、そこから何も見出せん者の事を言うんじやないかな。お前さんも言つつたじやろ、大事なものは”どう育つか?”…どうじゃ?あの人はずつまらなそうに毎日を過ごしてるか?」

……全然。

特に刀を振り回してるときが楽しそうです、とは、この人に言っている事なのだろうか?

なんとなく空白の出来た場に、襖を開ける音が響いた。

お盆に氷の入った麦茶を載せて、水城さんが入ってきた。

「お茶持ってきたよ」

そう言つて俺達の前に、汗を掻いたコップを置いていく。

水城さんは今日は三つ編みにしていなかった。

長い髪を一つにして後ろで括り、薄い生地の淡い色のワンピースを着ている。

それだけで大分印象が変わる。

完全に夏の装いだ、実はあの最後の闘いの日から一週間と経っていない。

「最近お祖父ちゃん機嫌がいいんだよ」

俺の隣に座った水城さんが、嬉しそうに小声で話しかけてくる。なるほどそれはそうだろうと頷いた。

善一郎さんは、今、変身ベルトをいじくっていた。

それが今日ココを訪れた理由で、この間の闘いのダメージを見られるためだが、その後ろに、服やら髭剃りやら、生活用品が散らかり、中央に大きな旅行鞆があつた。

「……それにしても、世界一周旅行ねえ」

何十年も前にした二人の約束。

善一郎さんが勝つたら、たった一度だけ祖母さんとデートする。その答えがこれだった。

世界一周旅行。

それも、ツアー会社が企画したものではなく、自分達で行き先も日程も決めると言うのだから、何週間、いや、何ヶ月かかるかわかったものじゃない。シンエモンさんのケツあごが割れんばかりの悪知恵だ。…この悪一休カップルが。

祖母さんに、しばらく旅に出る、と、武者修行者みたいな言い方でこのことを告げられた時、俺はひとつ気になっていた事を質問した。

「もし、樹が勝っていたら、どうしてたんですか？」

二人の約束を聞いてからずっと気になっていた事だ。

祖母さんはにこりと微笑むと

「その時はこちらからお茶にでも誘っていましたよ」

ケツあごよ、割れよ、砕けよ、と言わんばかりの答えだった。

その柔軟さがもつと早くに表に出なかったのは、孫としては悔やまれる所である。

だらだらと取り留めのないことを話しつつ、俺が麦茶を飲み干した時、善一郎さんが顔を上げた。

「ふむ、特に問題はなさそうじゃな。ただ、保証はできん。あと一回が限度だ、と考えとったほうが、間違いが無いじやろ」

そう言つて、ベルトを俺の手に返す。

「……そうつすか。どうも有難うございました」

やけに軽く感じるベルトを受け取り、俺は礼を述べた。

うん、と返事をして、善一郎さんが眼鏡をはずしながら立ち上がる。そうして、いそいそと旅行鞆の方に歩いていった。

「…それで、秋名君は今日はこれからどうするの？」

声を立てずに笑いながら、水城さんがこちらを向く。

「そうだな、樹の見舞いにでも行こうかと思ってるんだけど、良かったら水城さんも行く？」

「あ、迷惑じゃなかったら、そうさせてもらおうかな」

「迷惑じゃないだろ、暇そうだったし」

樹は市内の病院に入院していた。

言うまでも無く、あのときの闘いが原因でだ。

あばらを何本か折っていて、腕にも数箇所ひびが入っていたらしい。医者からは全治三ヶ月を言い渡されているが、見た目の印象どおり、じっとしているのが苦手らしく、病院内を徘徊しては看護婦さんにこっ酷く叱られている。

顔見知りになった若い看護婦さんが言うには、既にブラックリスト

に載っているとのこと。

じゃあ、と俺達が立ち上がりかけたとき、ポケットで携帯電話が振動した。

「あ、ごめん」

そう断ってから、俺は一人廊下に出た。

相手を確認すると、掛けて来たのはどうやら千葉ちゃんのようにだった。

「ハイ、秋名ですけど」

「秋名君、千葉です。君、今、水城さんの所にいるのよね」

「そうですけど、何で知ってるんですか？」

「薫さんに聞いたの。悪いけど、直ぐに戻ってきてくれる」

「戻るって、俺んちにですか？」

「そう、それでね……」

部屋に戻ると、準備を済ませた水城さんが待っていた。

ほんの数分席を外したただけなのに、肩越しに二本の三つ編みが垂れ下がっていた。

「電話……千葉ちゃんからだった」

「千葉先生？何て言ってたの？」

「…うん」

俺は携帯に目を落とす。

要領を得ない電話だったけど、何か慌てていたのは確かだ。

「直ぐに家に帰って来いって……それから」

俺は旅行の準備に忙しい、善一郎さんに目をやった。

視線に気付いて、顔を上げる。

「水城さんと善一郎さんも一緒に来てくれって」

俺の言葉に、二人は同時に首を傾げた。

水城さんの家から、歩いて三十分。

商店街を丁度、等距離で挟むように、俺の家がある。

そこを五分で家に到着した。

……あのエレベーター、ウチにも欲しい。

水城さんたちと連れ立って祖母さんの部屋の中に入ると、そこで行われていたのは、

「普段はとても真面目なんですけどね、時々授業中に居眠りしてしまふみたいで」

「そうですか、私からもきちんと注意しておきますので」

二者面談だった。

「うーお」

「雨後？」

「海髪？」

「た、ただの呻き声です」

ちなみに前者は雨の後と言う意味で、後者はオゴノリという海藻の別称だ。

「…何やってんですか？」

肩を震わせる俺を見やって、千葉ちゃんが湯呑みを持ち上げる。

「お茶をいただいていたんだけど…」

断じてそういうことじゃない。

「じゃなくて、何でこんな所に学期末の風景が広がってんですか」

まだ中間テストも始まってないのに。

とりあえず、後ろで呆然としている水城さんたちに座布団をすすめ、俺も祖母さんの対面に腰を下ろす。

計ったように家政婦さんが入ってきて、俺たちの前に緑茶の入った湯呑みを三つ置いた。

それを持ち上げつつ、俺は二人の顔を交互に見る。

「で、用があるのはどっちなんですか？」

「私」と小手を上げたのは千葉ちゃんだった。

俺たち三人の方に向き直り、真剣な顔に、珍しい寒声で言葉をつむ

ぐ。

「……一昨日の深夜、とある施設が何者かに襲われました」とある施設、っていうのは多分、”フィクション対策部”とかいうふざけた団体絡みのものだろう。

千葉ちゃんの真剣な視線の先、水城さんだけが、わけがわからないと言っように首を傾げている。

「侵入した賊達は、あるモノを奪って逃走しました。その際、施設内の職員から重傷者六名、軽傷者十二名、それから……」

キツと善一郎さんを睨むように、視線を動かす。

「髪が未だにべとついている者が、重軽傷者達も含めて数十人出ています」

べと……洗えば？

って、そういう問題じゃないか。

「この粘着性のある物質を調べたところ、先日回収した、あるモノに成分が酷似していました。……あなたの作ったあのアンドロイドが使っていた”蜘蛛の巣”とか言うやつです。……これはどういうことでしょうか？」

驚いたように顔を向けている水城さんの耳に、善一郎さんは手をそえ口を寄せた。

「なんか、ストレスの多そうな先生じゃな」

千葉ちゃんの眉の間の溪谷が一際険しくなるのを見た。

「何か知っている事があれば教えてください」

教えてくださいとは言葉だけの詰問口調に、善一郎さんはそっぽを向いて唇を尖らせた。

「……佳乃よしののヤツ、何もこんなタイミングでじゃなくても良いじゃろうに……」

佳乃？

俺が首を傾げていると、驚いたように声を上げたのは水城さんだっ

た。

「お姉ちゃんもそこに居たのっ?！」

お姉ちゃん??

二駅分くらい遠回りをして、脳が映像を結ぶ。

佳乃さん↓水城さんのお姉さん↓ブルーム。

チーン。

「あの人佳乃っていうのっ?！」

……リアクションを間違えた気がする。

それにしても、あの格好で佳乃っていうのは。

……一体何の反動なんだ。

一人釈然としない俺を残して、会話は続けられる。

「お、お祖父ちゃん又なにかやったの?」

抗議するように善一郎さんが、じと目で水城さんを見る。

「別にワシはなんも言つとらんぞ」

「でも、何か知ってはいるんですね」

迫ってくる千葉ちゃんに困ったように、善一郎さんは頭を掻いた。

「……まあ、隠すな、とは、言われとらんけどな」

「だったら教えてください」

「おじいちゃんナニを知ってるの?」

勢い込んで詰め寄ってくる二人に困ったような顔をして、一度だ

け水城さんに迷いのある視線を向けた。

しかし、ふう、と諦めのため息をつく、静かに語り始めた。

「……確かに、アレを盗んだのは佳乃じゃろう」

「ごくり、と水城さんが喉を鳴らす。」

「お前さんの言うとおり、ハニ子も一緒じゃろうし」

千葉ちゃんが無表情で頷く。

「それで、彼女達は、アレを持って今どこにいるんです?」

「……あの、ごめんなさい」

おずおずと、俺は小手を上げた。

「さっきから気になってたんですけど、アレってなんですか?」

俺の申し訳なさそうな口調に千葉ちゃんが簡潔に答える。

「タイムマシーン」

「へ？」

「は？」

俺と水城さんが予想外の角度から来た事実と同時に声を上げる。声を失ってしまった俺達の耳に、ずずずと、祖母さんがお茶を啜る音が聞こえてきた。

「君には前に話してたでしょう？」

呆れ顔で俺に言ってくる千葉ちゃん。

「そ、そんなこと話す機会なんてありましたっけ？」

どう考えてもタイムマシーンについて千葉ちゃんと話し合った事なんてなかったと思うけど。

「ほら、前に彩音のファミリーストランで」

彩音のファミレス？

んゝと首を捻る俺に、じれったそうに千葉ちゃんが言う。

「ほら、君がどんな”人”たちがいるか聞いてきたときに」

「あ」

思わず声を上げた俺に、やっと気付いたかと言わんばかりの顔を向けてくる。

確かに、直接的にはないにしろ、それに関係しそうな類の人たちの名前が出てた気がする。

——宇宙人に未来人に天使……はもう何十年も交流がないらしいけど……魔法使い、超能力者、改造人間、死神にミュータントに元人魚、それから希少な空想動物達の保護。他にもやることといったら敵性の説得もしくは排除、人間に溶け込んでいこうとする人たちへの助成は勿論、イレギュラー的にそこにいる人達の保護、送還まで、とにかく何でもやるのが私達の仕事

「もしかして、未来人？」

「そうそう」

千葉ちゃんが嬉しそうに手をたたく。

水城さんが本当に意味がわからないと言う顔で、俺を見てくる。

「どういう事？」

千葉ちゃんの方を見ると小さく頷いたので、俺は掻い摘んで水城さんに説明する。

「……はあ」

聞き終えて水城さんは、ため息みたいな驚きの声を出した。

「それで」

説明し終わると勢い込んで俺は疑問を口にする。

この場合は千葉ちゃんより善一郎さんに話を振ったほうが早そうだった。

「その、佳乃さん、は、そんなものを持ち出してどうする気なんですか？」

真っ直ぐに善一郎さんのほうを向く。

「……茅乃^{かやの}さん、母親を助けるつもりなんじゃろな」

「お母さん？」

心細そうに三つ編みをいじりながら、水城さんは不安気な顔で善一郎さんを見ている。

「……ごめん、ちよつと電話してくる」

そういうと、千葉ちゃんは立ち上がって誰かに電話をかけ始めた。早足で歩いていき、襖の向こうへと消える。

「何で、お姉ちゃんはそんなものがあるって知ってたの？」

「わしが教えたから」

「教えたって……」

あっさりと答える。

「……真琴、お前さんとも無関係な話じゃないが良いかな？」

真剣な表情に、水城さんが少し後じさる。

しかし、直ぐに姿勢を正すと力強く頷く。

それを受けて、善一郎さんも頷きを返した。

一瞬表情に優しげな笑顔を浮かべる。
襖が開いた。

黙って来いってのよ、とか、何とかぶつくさ言いながら千葉ちゃんがもと居た場所に腰を下ろす。

チラリと呆れたような顔で千葉ちゃんを見て、善一郎さんは水城さんに視線を戻した。

「これは、お前の父親の話じゃ」

架^か梶^{さき}山は町を囲むようにその稜線を伸ばしている。

緑濃い山の頂上には電波塔がたち、今でも時折猿などの野生の動物の姿が見られている。

夜ともなると辺りをほぼ完全な暗闇が覆い、地の人間でも入り込む事は無いのだけど、二人には関係の無い事だったらしい。

善一郎さんが二十一歳、祖母さんが十五歳の頃だ。

逢瀬というほど色っぽい関係でもなかったそうだから、単に星見ついでに話をしたりしていただけだろう。

その日も二人は、山の中腹辺りの視界の開けた場所で話をしていた。

当時の事なんか俺には良く分からないが、町の灯りも頼りなく、空ばかりが明るい夜だったらしい。

小一時間ほど話をしていると、ただひたすら静かなはずの森が、何故か突然うるさくなった。

警戒する動物の鳴き声と、夏木立の騒ぐ音。

そして、光だけの爆発。

ゆっくりと小さくなっていく眩い球体を二人は追っていた。

追いつく前に光は消えていったが、その中心と思われる場所で、一人の男の子が倒れていた。

見た感じ歳は五、六歳という所、脇に大事そうに黒いバスケットボールくらいの玉を抱えていた。

全身に細かな傷をおい、命に別状は無さそうだったが、軽く呼びかけたくらいでは目を覚ます気配はなかった。

二人はこの子をどうするか迷った。

それでも結局善一郎さんの家に連れて行くことにしたらしい。

その時既に善一郎さんの両親は亡くなっていて、家には彼独りしか居なかったそうだ。

男の子は深刻な状態でも無さそうだったし、とりあえず家で応急処置をして、もし次の日になっても目を覚まさなかったり、変調があれば医者に連れて行くということになり二人は山を降りた。

翌日、男の子はあっさりと目を覚まし、善一郎さんに子供とは思えないしつかりとした態度で話し始めた。

自分が遠い未来からこの時代に避難して来た未来人であること、あの黒い球体は”フィックス”と呼ばれるもので要はタイムマシンであること、そして出来ればこの”フィックス”を安全な場所に保管して欲しい事。

最初ナニがなんだか理解できなかった善一郎さんだったが、話を聞き、幾つか証拠となりえるモノも見せてもらうと彼に協力を約束した。

それを聞くと、彼は安心したように妙に大人びた表情でため息をつき、その段になってようやく自分が自己紹介もしていない事に気がついた。

自分の迂闊さを恥じるように、顔を赤くして笑いながら名乗った。

「僕の名前は、ノゾミといいます」

「……お父さんの名前だ」

小声で呟く水城さんに善一郎さんは頷いてみせる。

「……わしは直ぐに心当たりに連絡を取った。大学の先輩でそうい

った事に詳しい組織に所属している人がいての、その時はもう卒業してたんじゃが、良くしてもらってたから、そのときも頼った。その人は直ぐに快諾してくれたよ」

「ウチの組織の人間ですね」

そう質す千葉ちゃんに再度頷く。

「その人に”フィックス”を託すと、わしは、ノゾミを養子として迎えた。行く所が無いと言ったし、これも何かの縁じゃと思つてな」

「……当時は既に何例か未来人の来訪は確認されていましたから、そう難しい事ではなかったんだと思います」

「……そうじゃな、まあ、あの馬鹿者はワシより先に病氣なんぞで死におつて、とんだ親不孝モンじゃったがな」

懐かしそうに目を細めて、湯呑みを持ち上げる。

そんな善一郎さんを見ながら、水城さんが静かに口を開いた。

「……お祖父ちゃんは、お父さんの事助けようとは思わなかったの？」

どこか責めるような口調で。

善一郎さんがふつと苦笑する。

「……ノゾミがそれを望んでなかったからな。お前たちのことはもちろん心配しとったが、それと同じくらいあの”フィックス”を使う事を嫌がとった」

「それでも……」

「それにな、わしは、お前さん達より少しかり歳をとつてな。

……わしは人が死ぬ事を知つとる」

良く分らない。

そう言いたげな顔で、水城さんはじつと話に耳を傾けている。

「……運命だった、って事ですか？」

おずおずと口を挟んだ俺に善一郎さんがおかしそうに笑う。

「そんな大そうなものじゃない……いわば道理じゃな。生を受ければ、死もまた等しくそこにある。難しい事じゃなく、どんな生き物

も生まれれば死ぬ。お前さんたちや、茅乃さんの事も気になったが、わしはあいつの言う事を尊重した」

「それでどうして、お孫さんを止めてくれなかったんですか」

憤るような千葉ちゃんの言葉にも、動揺する事無く善一郎さんは答える。

「簡単じゃよ、わしと佳乃が違う人間だからじゃ。わしが出来るのは説得とアレの危険性についての説明だけ、それでも聞かないと言うんならわしにやることは無いよ」

「だ、だとしても、どこにあるかとか、説明しなくてもいいじゃないですか」

「だって、ワシ可愛い孫に嫌われたくないもん」

「かつ」

絶句する俺達を意に介した様子も無く、のほほんとお茶を啜る。

……この人は間違いなく祖母さんと同類だ。

しばらく、呆気に取りられていた千葉ちゃんだったが、気を取り直して、善一郎さんに向き直る。

「きよ、協力はしていただけるんですね」

「推測でよければ、どこに行ったか位は教える。でも、それだけじゃな」

「ついて来ては貰えないんですか？」

「言っただじやろう、とつくに説得はしとるって、それに、ワシ旅行の準備で忙しいし」

「そんな無責任な」

「あんな……」

まるで出来の悪い生徒を正すような態度で、善一郎さんは続ける。
「これは、お前さん方と佳乃の問題じゃろ。それに責任というなら、きちんとアレを管理すると言っただにも拘らず、奪われたあんた方にあるんじゃないか？」

たいした言い分だ。

しかもそれを、しれっと言うのが憎たらしい。

「そ、それは、あなたが教えたからでしょう」

「ワシはどこにあるかは教えたが、そこがどんな所かまでは言っておらんぞ、そもそも知らんし。それに、佳乃なら、場所くらい直ぐに突き止め取っただろうしな」

何だその余計な信頼感。

「で、でも」

尚も食い下がろうとする千葉ちゃんに面倒くさそうに首を振る。

「だから協力せんとは言うとらんだろ。場所は彩音町、細かな事は真琴が知つとるよ」

いつせいに水城さんの方を見る俺と千葉ちゃん。

少したじろぎながら、水城さんが髪をいじる。

「…そ、それって、私達の家があつた所？」

その言葉に善一郎さんが頷いて、行き先が決まった。

車は街中を走っている。

道はすいていて、時速六十キロの景色が、目に入っては流れていく。車は八人がけの大きなファミリーカー。

俺と水城さんが広い後部座席を占領し、助手席には千葉ちゃんが座っていて、ナビもせずにブスツと窓の外を眺めていた。

「久しぶりの休みだったんだぞ」

ハンドルを握っている男性の悲しそうな声が、カーステ代わりに車内に流れている。

車が赤信号で止まった。

男性はステアリングにあごを寄せ、恨みがましそうな目で千葉ちゃんを見る。

「それをこんな簡単に呼び出しやがって」

「すいません」

揃って頭を下げる俺と水城さんに、打って変わったような、快活な声で返事をする。

「いや、君らは謝る事ないよ。どうせこいつに巻き込まれたんだろ」
信号が青になり車は走り出した。

前を向いたまま、千葉ちゃんの方を親指で差す。

「こいつ、昔っからそうなんだよ。いっぺん信用した人間にはこと
とん甘える所があつて、まあ、基本的にだらし無い人間なんだな。

前も夏に……ぶへばがっ」

「余計なこと言わないでっ」

一閃する右ストレート。

……何でもいいけど、前向いて運転してくれ。

「お、お前、危ないだろっ流石に」

頬を押さえながら片手で運転しているこの人の名前は渡 康平と
いう。

千葉ちゃんの学生時代の友人で、同じ”フィクション対策部”の人
間らしい。

「だったら黙って運転してなさいよっ」

ウチで千葉ちゃんが電話していた相手はこの人だった。

目的地までの足として呼んだといっていたが、不満そうにながら
も素直に來ている辺りで、関係は推して量るべし。

既婚者らしく、さつきから折角出来た子供との時間を潰されたと
嘆いてばかりいる。

とんだ減点パパぶりだけど、こっちとしては申し訳なさで一杯だ。

隙を見ては謝っているのだが、ヒラヒラと軽く手を振り、不満は全
て千葉ちゃんに向けられていた。

「そんだから、結婚でき……べっっ」

「か、関係ないでしょっ」

……ただ、からかつてるだけの様にも見えるけど。

隣を見ると、水城さんは肩をすくめて首を振った。

しらねーってことらしい。

「と、ところで、その、”フィックス”でしたっけ？それを使つた
ら、具体的にどうなるんですか？」

映画とかを見ていると大体タイムマシンの弱点みたいなものは予想できるのだけど、いつまでもキャンキャンとやり合っている二人にいい加減頭痛がしてきたところで、俺は強引に話を変える。

二人はピタリといちゃつくのを止めた。

そして、渡さんが予想してなかった答えを口にした。

「別に何も起きないよ」

「ちよつと」

千葉ちゃんが慌てたように、彼のほうを向いた。

「折角手伝ってくれるって言うのに、話さないのはフェアじゃないだろ」

その言葉に千葉ちゃんが何か反応する前に、俺は口を挟んだ。

「何も起きないんですか？」

水城さんも少しだけ身を乗り出して、当事者に戻った。

諦めたようなため息が聞こえる。

「……そうよ」

体を座席に沈めて、覚えてなさいよ、と、隣に呟いてから続ける。
「タイムマシーンって言っても、”フィックス”の真価は時間移動には無い。……”フィックス”はその名前の通り”固定するもの”なの」

「……固定するもの？…なにを？」

「時間………歴史、って言ってもいいけど。…例えばここに大量の”つくね”があるとする」

……もの凄く想像しづらい例えだ。

「それが、一列に不安定な様に置かれている。これが歴史とか時間の流れ。ここに他からの力、時間移動による変化が加わった時このつくねはどうなる」

……ああ。

「好き勝手に転げまわります」

「そう…そんなことが起きないように、串を刺すのが”フィックス”の役目。つまり、現状を記録^{セーブ}してくれるの」

……それにしても、昨夜は焼き鳥で飲んだのか？

「じゃあ、お姉ちゃんしてる事は意味の無い事なんですか？」

……そう、いう事だよな。

”フィックス”は現状を固定して、変化が起きないようにする物らしい。

何をやっても、”フィックス”を使った時点でその瞬間に影響は無い。

しかし、そうになると、”フィックス”での時間移動は出来ない事になるし、そもそもする意味が無くなる気が、する……けど……あれ？

「……でも、水城さんのお父さんは、この時代にやってきて、子供まで出来てますよね」

渡さんがハンドルを切りながら話に加わる。

「”フィックス”自体は一種の特異点のような物らしいんだ。そして”フィックス”が固定するのは、世界や歴史にとって重大な影響を及ぼすものだけだ。その基準がどんなものかは知らないが、少なくとも、”フィックス”がこの時代に存在する事や、人の生死なんかは、世界やあの玉ところにとっては大して重大な事じゃないみたいだな。歴史的な事実を補完するなら、それが実際に本人でなくてもいいって事なんだろう」

いい加減だろ、と、付け加えて再び運転に集中する。

「……まあ、そのオカゲで大国やテロリストに狙われる事も無いんだけどね」

そりゃそうだ。

苦労して手に入れても、使って変化が無いんじゃ骨折り損も甚だし

い。
「……じゃあ、どうして、”フィックス”を使っちゃダメなんですか？」

「困るからだよ」

そう言いながらハンドルを切る。

外の様子が変わって、街から住宅地へとシフトしていく。

「命の価値がどの辺りにあるかは知らないけど、あんなものポンポン使われたんじゃ、人は多分今より命を軽んじるようになる。それじゃあ今まで築いてきた価値観の根底がおかしくなるからね。常識とかつてのは疎んじられがちだけど、概ね正しいからあるモノなんだよ」

「……お母さんの命が掛かってる水城さんには悪いけれど、そう言う訳で、前例を作るのは避けたいの。……解ってくれるかな？」

申し訳ないような千葉ちゃんの言葉に水城さんは頷いた。

「……なんとなく解ります」

「……ありがとう」

そんな風に水城さんは答えたけど。

……俺だったらココまで割り切れるだろうか。

無意識にベルトを撫でながら、体の中心で何かが揺れているを感じた。

「ココです」

水城さんのその言葉で、車は停止した。

列座する家々の中に、ぽつんと置き去りにされたような空き地。立て看板が背中を見せて倒れているその場所に、二つの人影があった。

「お姉ちゃんっ！」

そう叫んで車から飛び出していく水城さんの後を、俺達もあわてて続く。

「まあちゃん？」

こもった声で人影の一つが振り返る。

「そんなものどこにあったのっ？」

「イヤ、水城さんそうじゃない」

追いついた俺は、脱力して彼女の肩に手を置く。

……まあ、そう言いたくなる気持は解らなくもない。

彼女の普段露出度の高いお姉さんは、この暑い中何故か宇宙服を着ていた。

「NASA？」

反問調でそう答える。

胸元にアメリカの国旗が見て取れた。

「だからそうじゃないだろ」

俺の言葉を無視するように、二人は続ける。

「そんな物どうやって手に入れたの？」

「ネットで買ったの。払い下げ品であつたから」

「それを、何で、今着てるのっ」

「ん」

と、俺のほうに意味深な笑顔を向けた……んだと思う。
黒いシルドの張ったバイザーからは、表情が見えない。

「だって時間移動って大変らしいんだもん。普段着じゃだめだつてお祖父ちゃんが言うから」

腕を広げて、もたもと一回転してみせる。

「これって思ったより着心地が悪いのね」

「もうっ、こんな事止めてよ、お姉ちゃん」

「何でっ？」

ちまちまとした動きを止めずにオドケタ調子で逆に訊ねてくる。

「だって、お母さんの事助けられるのよ、まあちゃん。話は聞いたんでしょ？まあちゃんは、お母さんに会いたくないの？」

「それは……」

言いよどむ水城さんをフォローするように千葉ちゃんが割って入る。

「水城佳乃さん。私は”フィクション対策部”の千葉玲子です」

「あら、千葉先生お久しぶりです」

「ああ、おひ……じゃなくてっ。水城さん！こんなことは止めて、アレを返してください」

そう言っ指差した先に、もう一つの人影、ハニ子が居た。

いつものうるさい口は黙り、目を閉じて大事そうに黒い球体を抱え込んでいる。

……アレが”フィックス”か。

「どうしてですか先生？」

「せ、先生はやめてください。……アレが危険なものだからです」

「でも、”フィックス”の性質上、他の人達に迷惑を掛けることはないと思うんですけど」

「現に今掛かってますっ！……それに、一度使ってしまったら、それは次に使う時の理由いいわけになりかねません。今返してくだされば他の事は不問にしますから」

「……諦める理由としては弱いわね……。……それで、もし、断ったら如何するんですか？」

「……残念ですが、その時は実力を持って……」

事態の推移を見守っていた俺の肩がポンツと叩かれる。

「……え、俺?!」

「当たり前でしょ何のために君を連れてきたと思ってるのっ」

グイツと襟首を引かれ、顔がアップになる。

「い、嫌だっ、何で俺が」

「ここまで来といて、それは無いでしょ。君もそのつもりだったんじゃないの？」

「そんなわけあるかっ！大体そういう事ならもう一人いるでしょ適任がっ」

そう言っで渡さんのほうを指差すと顔の前で手を振っていた。

「あ、俺今日オフなんで」

……なんてビジネスライクな。

「いいから早く変身しなさいっ」

「無茶苦茶言っな。自分でナントカしろよ」

「協力してくれるって言ったでしょ。ほら、取り押さえるだけいいから」

「うわっ」

ドンツと背中を押される。

つんのめる様に前に出てきた俺に、文字通り、表情の見えない顔が向けられる。

「こんにちわ」

「こ、こんちわ」

「久しぶりね」

「そ、そっすね」

当たり障りの無い挨拶をしている間に、姿勢を正した。

「……そ、それで、諦めてくれる気は無いんすか？」

「君なら諦められる？手段が無いならともかく、目の前にそれがあるって、大切な人を救えるチャンスが自分の手の中にあつた時、それを不意にする事ができる？」

そんなの……。

「……無理だと思います」

「ちよつと」

千葉ちゃんが慌てて駆け寄ってくる。

「しっかりしてよつ。君ヒーローでしょ。弱きを助け強きを挫き、みんなのピンチを助ける為にそのベルトがあるんじゃないの？」

「そりゃそうかもしれないけど……」

「そのベルトはそんな事の為にあるんじゃないわよ」

「「………は？」」

肩を揺さぶっていた千葉ちゃんの手が止まり、二人して間拔けな声を上げる。

「だって、それ防護服だもの。」フィックス”を使う時の」

腕を組んだ宇宙服が、一歩前に出てくる。

「他の戦うための機能は、行った先で危険に遭遇した時にあるモノで、本当は時間移動をするときの衝撃に耐えるように使われてるものよ」

「ああつなるほど！そいつは未来のモンだったのか。いや、出所は気になっていたんだが、そっかそっか」

うんうんと、渡さんは頷いている。

「何でウチの祖母さんがそんな物持ってんすかつ？」

「お父さんが”フィックス”と一緒に処分してくれってお祖父ちゃんに頼んだときに、だったら頂戴って持って行っちゃったんだって」
「……あの、ババア……」

じゃあ、ホントにヒーローでも何でも無かったんじゃねえか。

「でも、あなたのおしてる事は犯罪よ。今の話は彼が戦わない理由にはなっても、あなたが許される理由にはならないわ」

千葉ちゃんが睨むように宇宙服を見る。

「そうね。でも私はお母さんを助けるの。どんな事をしても」

「お姉ちゃん……」

にらみ合う様に対峙する二人に、水城さんが呟いた。

一見余裕の佳乃さん（そんな風に見える）に一際厳しい顔をして
いる千葉ちゃん。

弥が上にも緊張感が増していく中、俺は考えていた。

——弱きを助け強きを挫き、悪は絶対に許さない。

それは、テレビでヒーロー番組を見ていた殆どの男の子の中にある、
絶対のヒーロー像、そして、正義の形。

……でも……

それは、ずっと感じてた疑念。

「よっこいしょ」

そう言つて、佳乃さんがヘルメットを外す。

ふあさりと音を立てるように髪が垂れて、長い前髪が顔の半分を隠す。

けったいな化粧も、仮面もかぶっていない、素顔。

分厚い手袋が、顔を隠した前髪に伸びた。

「お姉ちゃんっ?！」

「……っ」「」

そこに表れたのは顔半分を占める引き攣った火傷の跡だった。
炎によって縮んだ皮膚が凄惨な表情を作っている。

その場に居た誰もが息を呑んだ。

佳乃さんは俺達の様子を見て、ふっと笑ってから、手を下におろした。

深い闇色の髪が、夜が落ちるみたいに傷跡を隠していく。

「お姉ちゃんっ」

駆け寄っていった水城さんの頭を、佳乃さんは優しく撫でた。

水城さんは泣きそうになっていた。

「……どうして、……見せたりしたの？あんなに嫌がってたのに」

「何でもするって言ったでしょ」

胸元に抱きついていている妹の頭を撫でながら、俺達の方を向いた。

「今のは、お母さんが亡くなったときについた傷よ。私もその場に居たから。……私はお母さんに突き飛ばされて助かったけど、その後気絶してしまって、玄関に倒れていたところをやって来た消防士さんに助けてもらったの」

「……どうして、俺達に傷跡を見せたんだ？」

感情を押し殺した声で、渡さんが尋ねる。

「……少しでも同情しなかった？何でもするって言ったけど、私だって暴力とかは嫌なのよね。ちよつとでもあなた達が同情して、助けてやつてもいいかなって気になれば、私も楽なもの」

あっけらかんと答える佳乃さん。

裏にある感情の何物も感じさせない声。

優しい手つきで、しゃくり上げる水城さんの頭を撫でていた。きつと、ずつとそうやって守ってきたのだろう。

「……足りないんだったら、土下座でも何でもするけど」

千葉ちゃんが泣きそうな顔で渡さんのほうを向いた。

「……決めるのはお前だよ千葉。彼女は屈辱を武器にするくらい本気だ。……お前がどう結論を出そうと、俺だけは絶対許してやるから自分で決めろ」

そう言われて千葉ちゃんの表情が揺れる。

やがて、そこに決然とした光が宿った。

「……あなたには、とても同情する。……でも、…」

「ちよつと、待って」

弾かれた様に三人の顔が動く。

怪訝そうな顔色が一樣に向けられた。

ゆつくりと、水城さんが顔を上げた。

その泣き顔を見た俺は、頷いて一歩前に進んだ。

「準備完了でありますっ」

場違いに明るい声が響いて、俺は頭からこけそうになった。

「"フィックス"へのアクセスに成功し、時間設定も終わったのであります。後はタイムジャンプするだけなのであります」

黒い玉を両手で持ち、それを頭上に掲げる『とつたどー』のポーズ。

「……あのな、空気読めハ二子」

「貴様に軽々しくハ二子とか呼ばれる筋合いは無いっ……………って、あ、あれ？」

頭を抱える俺たちを見て、ようやく状況が理解できたらしい。

保護者の方を振り返り、不安そうに尋ねる。

「な、何か、あったのでありますか？」

「んゝ、ちよつとね」

愛しげに水城さんの頭を抱えながら、佳乃さんが笑う。

「あ、ああゝっ、どうして真琴様は泣いておられるんですか
っ?!……………ま、まさか」

そう言つて、俺のほうを向くハ二子。

「あ、あほかっ、違うわっ。何で俺が水城さんの事泣かさなきゃいけないんだよ」

「貴様が不逞な劣情に駆られて、口にするのも憚られる行ないをしたんじゃ……………」

「するかあああっ！目え覚ました途端わけわからん事口走ってん

じゃねえっこのエロポンコツがつ！」

「エ、エロポ……」

あまりの悪口に虚脱状態になったハニ子を見捨て、俺は千葉ちゃんの正面に立った。

「……どういふつもり？」

「悪いですけど、俺、こっちに付きます」

「……どうして？」

……ス、スッゲー怖い顔してんだけど。

「……………」

「……彼女の言葉に同情したから？」

どこまでも厳しく千葉ちゃんの声は響く。

「……それもあります」

千葉ちゃんが全然可愛くなく首を傾げる。

——で？

「……俺も男なんで、ちっさい頃にヒーローのテレビとか見て、憧れてたりとかしてたんですよ」

「話が見えないけど……。だったら、なおの事解らないわ。ヒーローっていうのは弱きを助け強きを挫くモノなんじゃないの？悪いヤツを憎むものじゃないの？」

「……それなんすよね。ヒーローとか大好きだった筈なんですけど、ちっさい頃からそれだけが分かんなくて。……じゃあ、強い人とか悪い人とかはどうしたら良いんですか？」

「……は？」

「……だって、どんなに強い人だって、助けて欲しい時くらいあるんじゃないですか？……悪い事した人全部が、手助けもして貰えないほど酷い人なんですか？」

「それは、そんなことはないでしょうけど、それとこれとはまた話が別でしょ」

「そうっすかね？……俺は、祖母さんにこんな物押し付けられて、遅刻とか課題とか良い目なんて一つも見えてないし、しかも、こ

いつ、本当はヒーローのベルトとかじゃ全然ないインチキベルトらしいんですけど………それでも、こいつを付けてる間は俺はヒーローなんですよ」

ペチンとベルトを叩く。

抗議するみたいに、きらりと光って見せた。

「どついうヤツがヒーローになれるかなんて俺には解らない」

……想像くらいはつくけどね。

それはきつと、心から悪を憎める人。

弱い人達の為に自分が傷つく事を厭わない人。

苦しみながらも、絶対に自分の信念を曲げない人。

そして、結果的に正しいことが出来る人。

公正で決して折れることのないヒーローの条件。

……とてもじゃないけど、そんなものにはなれない。

「解らないですけど、小さいときにずっと思ってた。もし、俺がヒーローだったら……」

多分、見境なく色んな人に同情しまくって、そのくせ中途半端でぶつぶつ不満を零して、敵に負けても割りと平気で。

——それでも。

「……俺にもし、ヒーローって呼ばれるような力があるんだったら……」

視界の端に、抱き合うようにして話を聞いている水城姉妹が目に入った。

不思議と、今から言おうとしている事は、間違っていないと信じれる気がした。

「……俺は……目の前で泣いてる人を助けてあげたい」

……例え誰かに否定されても。

「ただの我がままだけど、それでも」

可哀相、なんて、単純で軽い動機で、手を差し伸べたい。

「……だから、俺は、水城さんのお母さんを助けます」

「……秋名君の言いたい事は分かったけど、それでどうするの?」
「えっと……見逃してくださいっ!」

思いつきり頭を下げる。

「……はあ?」

頭の上から冬の雨のようなもの凄く冷たい声が降ってくる。

「それで通じると思ってるの?」

「まあ、通じるだろうな」

渡さんが口を開く。

「ここにいる俺達全員が口を拭ってしまえば、誰に伝わる事もなく、
隠し………すいません」

千葉ちゃんの鍬きりよりも鋭い視線に刺されて、押し黙ってしまう。

「お願い千葉先生」

「お願いします先生」

俺の両隣で水城さん達も頭を下げる。

深々と腰を折る、三つのブーメラン。

「うっ」

流石にたじろいだ様子で、千葉ちゃんの足が下がる。

……あ、水城さんあのウルウル目だ。

「……なぐんか、お前悪いヤツみたいだぞ」

「う、うるさいな。き、君達もね、そんな事くらいで、私が頷くとも思つて……」

「思ってます」

「え、ええええ」

俺は顔を上げて、千葉ちゃんの目を見つめる。

気圧される様に彼女の足が更に一步下がった。

「千葉ちゃんとは、言つても一年以上付き合いますからね。」

俺だって、先生の事、少しは知ってますよ」

「ぐっ………ちょ、ちよっと、あんたも何とか言つてよ」

「…お忘れのようですけどねえ、さっきも言つたように、俺は今日

オフなんですよ、残念ですけど」

恨みがましくそう言って、財布から写真を取り出す。

そこには、綺麗な奥さんと可愛い女の子が写っていた。

その二人を抱きしめているのは、ここには居ない幸せそうな渡さんだ。

「ちょ、……だって……くっ……ああ、もう、……わかったわよっ、好きにすれば良いでしょっ」

「マジでっ」

俺たち三人がいつせいに顔を上げる。

「だって、しょうがないでしょ。君達に私一人が力ずくでって言うのも無理な話だもの」

「あ、ありがとう先生」

水城さんが千葉ちゃんの手を取って、ぶんぶんと振り回す。

「あゝ、もう良いから。……その代わり、こうなったからには、絶対秘密は守ってもらうわよ」

「……は、はい……」

悪魔すら怖気を震いそんな笑顔で俺達の手を取ってくる。

「そうそう、人間素直が一番だよ千葉……」

「あ、あんたが言うなああああああああああ」

「ふぎやあああああああああああああああああああああ
ああ」

肘鉄を胸に食らって、吹っ飛ばされる渡さん。

……何ていうか、千葉ちゃんなら俺達くらい簡単に鎮圧できた気がする。

敷地の柵に叩きつけられて、渡さんはびくんびくん痙攣していた。

……とんだホリデーだ。

「それから、秋名君っ」

猫の威嚇音みたいにフーツフーツ唸っていた千葉ちゃんが、キツとこちらを向く。

「ひっ、は、はいっ」

「君は色々私の言った事を覚えてるみたいだから、勿論他の事も覚えてるわよね」

「な、何のことでしょう？」

ばきばき拳を鳴らしながら、眼前まで迫ってくる。

ヒュツと音を立てて拳が振るわれた。

「ひいひいひいひい」

思わず目を瞑った俺は胸のうちに思いつくだけの祈りの言葉を吐いていた。

そして、胸の中心辺りに感じたのは、しかし、軽く触れるような感触だった。

「教会、教会をいっぱい建てますから命だけは……て、え？」

腕の伸びた先、固く握られた拳は、心臓の上にそつと置かれていた。

……これはこれで、なんだか酷く居心地が悪い。

「……怪我せず絶対に帰ってきなさい。前も言ったけど、教師つて言うのは生徒を危ない目にあわせちゃいけないの。だから、これからやる事が危ない事にならないくらいに、君は頑張りなさい。それから、やるからには、水城さんのお母さんを必ず助けるのよ。……もし、これらが守られなかったり、学校を欠席、遅刻したりしたら、その時は見たことも無い様な量の課題を出すから」

「き、肝に銘じておきます」

良しつと腕をポンと叩かれ解放……いや、激励される。

「大丈夫か？」

いつの間にか立ち直っていた渡さんが俺の隣に立って笑いかけてくる。

「いや、完全に、こっちのセリフですよ」

「大丈夫、大丈夫慣れっこだし」

それはどんな地獄絵図ですか？

「そんな事より、気楽にな。まあ、人の命が懸かってるから、そうも言ってられんだろうが、緊張しすぎても良い事無いぞ……」

そう言つて、ぶつ倒れた。

「ちよつと、渡さん?!」

「い、いいか、俺の、ようには、なるな、よ」
「がく。」

「わーたーりーさー……………」

……………。
……まあ、大丈夫だろ。

取り敢えず、千葉ちゃんが平気な顔をしているので、渡さんは放つて置いた。

俺はハニ子のそばで、何事かを話している水城姉妹の方へ駆け寄つていった。

「あ、秋名くん」

俺の姿を認めて、水城さんも小走りで近寄つてきた。

「本当にありがとう。先生を説得してくれて」

「ああ、うん。これで、約束は守れたかな？」

「やくそく?…ああ、あはは、うん」

そう言つて嬉しそうに笑った。

——だから、もし、この先何かありそうな時には俺が全力で止める。

「お姉さんのやろうとしてる事を俺が代わりにやる、っていうのは随分曲解した、つて言うか屁理屈っぽいけどな」

「そんな事無いよ、本当に感謝してる。ありがとう」

「いや、もういいよ」

「二人とも」

ハニ子を引き連れた佳乃さんが後ろから声を掛けてくる。

「仲がいいところ悪いけど、そろそろ、お願い」

「分かりました」

俺が頷くと心配そうに水城さんが三つ編みをいじっていた。

「気をつけてね」

「ういゝ」

目を瞑ってベルトを触る。

鼓膜を圧迫するような感覚が久しぶりに訪れる。

……自分から望んでって言うのは初めてだな。

水城さんの祖父さんとウチの祖母さんの大事な思い出のベルト。

実際は馬鹿馬鹿しくて、はた迷惑な闘いだったけど、大切な二人のつながり。

……まあ、だから今日くらいは、最後だし。

胸を張って、

「変身！！」

体を心地よい違和感が走り、外皮が構築されていく。

一秒と掛からないうちに、俺は、多分、最後の変身を終えた。

俺とハニ子を囲むように皆が立っている。

「向こうに着いたら、なるべく迅速に行動してね。ハニ子のエネルギーに、もうあまり余裕がないから」

つつても、こいつのエネルギーって重油だよな？

だったら向こうでも手に入るんじゃない？

思っていた事をそのまま口にするのと嗜める口調で佳乃さんが答える。

「ハニ子自体のことはそれでもいいの。問題は”フィックス”の方。

”フィックス”はハニ子から直接エネルギーを吸収してるんだけど、

一瞬でもエネルギーの供給が切れると、”フィックス”のデータが

初期化しちゃうのよ。データの再編はハニ子でも出来るだろうけど、

正確さの面でやっぱり頼りないのよね。だから、なるべく早く行動

して欲しいってわけ」

「分かりました」

「……一応、調べた通りに行けば本当に火事の真っ最中に放り出されると思うけど……」

「大丈夫つすよ。ちゃんとお母さんは助けますから」

そう言って拳を叩いてみせると、初めて見せる真剣な表情で、佳乃さんは頭を下げた。

「……母を、よろしくお願いします」

「は、はい、承りました」

見慣れない態度に、呆氣にとられつつ、八二子のほうに近寄る。

「……サンレッドとわたくしとの初めての共同作業であるな」

「だからなんで一々お前はそういう表現をするかな、てか、サンレッドは止めろって」

苦笑しつつ、彼女の肩に手を置く。

「よし、じゃあ始めるぞ」

八二子が目を瞑り、修験者が瞑想をするような集中を見せる。それに呼応するように”フィックス”が鳴動を始めた。

ベルトのモノとは比にならないほどの圧力。

俺と八二子以外は皆片膝をついていた。

「アクセス」

”フィックス”に無数の幾何学の光の線が走る。

大地の揺れは更に激しくなり、それに伴って圧迫感も尋常ではないものに変わって行った。

「& a m p ; % · U H U I O Y F D D Y T N Z ? L — ￥ ￥ I I %

\$ # 2 ” ! & a m p ; R U O < < P O I P ”

八二子の口からは人間の言語形態から著しくかけ離れた音が発せられている。

「アクション」

そういった途端ピタリと全ての現象が無くなった。

音、揺れ、そして、不可視の圧迫感。

「来るぞっ。……レッツ、バー……ン——」

唐突に起こった光の爆発。

八二子の声は飲み込まれ、ただ、真っ白なだけの世界が視界に広が

……

——何もかもが燃えていた。

今まで、火事なんて一度も見たことが無かったが、真っ先に、強烈に、視界に入ってくるのは、頭上の煙だった。

根の深い雨雲のように、圧倒的な広がりを見せる黒い影。

真昼間にも拘らず、自身と同質量の暗影を地上にもたらしていた。

そして、その中に潜むように時折姿を見せる真っ赤な炎は、生身ではとても耐えられない熱波でもって、周囲を傷つけている。

光が収まった時、視界に現れたのは、そんな光景だった。

不思議なほど物が燃える匂いを感じられず、正常に機能していたのは視覚と聴覚のみ。

胸を締め付けられるような赤い色と、何かが爆ぜる音。

肩をつかまれ、呆然としていた俺を八二子の声が現実に取り戻す。

「何ボーっとしてるんだ。時間が無いって言われただろ」

「あ、ああ」

未だに半覚醒状態だったが、ようやく、思考がまともに働き始める。

……聴覚が正常でホントに良かった。

「そうだっ、水城さんのお母さん、い、入り口は」

冷静な状態とは言えないまでも、見回すところはどうやら裏庭であることに気付いた。

炎に煽られて倒れた物干し台や、辛うじて原型をイメージできるガーデニングの跡があちこちで朽ちかけている。

「落ち着くのである。……ほら、あそこ」

そう言って八二子が指差した先に、炎の中にぼっかりと開いた口があった。

裏庭に降りる出入り口。

ガラスが割れて、窓枠だけが炎に飾られる様に虚しく残っていた。

「お、おう、じゃあちよつくら行つて来る」

「時間があんまり無いからなつ。急げよ」

八二子の声を背中で感じつつ、俺は炎の中に飛び込んでいった。

「水城さーんっ」

大声を上げて名前を呼んでみるが、返答は無い。

いたる所に炎の川が流れていて、およそ目に付くもの全てを飲み込んで黒い塊に変えて行く。

思つたより広い家だ。

しかも想像以上に炎の勢いが激しい。

スーツが無ければ、入り口に近づく事すら出来なかったと思う。

「誰かつーいたら返事してくださ……」

その時、俺のほうに向かって赤色を纏った柱が倒れ掛かってきた。

「くっ」

腰ダメに拳を固めて、叫ぶ。

「ヒーーーーー、パーーーーー、ンチッ……」

派手な音を立てて呆気なく柱は粉々になる。

……やばいな、別の意味で時間が無いぞ。

「水城さーん、どこですかっ……」

足の裏にかすかに熱を感じつつ、俺は叫び続ける。

佳乃さんの話の感じじゃあ、二階って事は無いだろう。

リビングを出て長い廊下を慎重に歩きつつ、廊下に面した一部屋に入った時だ。

……声が聞こえる。

俺はその部屋から飛び出した。

細い糸を辿るように、頼りない小さな声を頼りに俺は足を急がせた。

…そして。

……居たっ！！

炎の先端に揺らぐような二つの人影。

小さな十歳くらいの女の子が必死で、倒れこんだ女の人手を引っ張っていた。

女の人の足には、燃える瓦礫が詰みあがり、とても幼い少女一人での救出は無理だった。

……急がなきゃ。

駆け寄ろうとした俺の目の前に、天井の一部が落下してくる。

「くっ、……邪魔だああああああああああ」

腕をふるって、それを横合いに吹っ飛ばす。

かなり大きな音を立てたが、二人に気付いた様子は無い。

母親の方が、少女を抱きしめて必死で何かを伝えている。

やがて身体を離し、少女はこくと小さく頷いた。

悲しそうに母親が少女を抱きしめる。

俺はというと、必死で足を進めてはいるのだが、炎に邪魔されて思ったように近づくことが出来ない。

——みしり。

不吉な音に俺は視線を上に向けた。

……天井が崩れる？

先程落ちてきた一部を失ったことで、均衡を保てなくなった天井が嫌な音を立てつつかすかに揺れていた。

母親の方もそれに気付いたのか、抱いていた手を緩めて少女を離す。

何事か言葉を交わしてから、母親が俯く。

頭上から聞こえてくる音はますます不吉の度合いを増している。

……マジでやばい。

焦りが水草のように俺の脚に鈍く巻きつく。

……いくつかの事が、同時に起こった。

母親が顔を上げて、信じられないくらい綺麗な顔で笑う。

炎に照らされた、どこか非現実的な表情を脱力して見ていた少女が母親に突き飛ばされて廊下に身を投げる。

天井がバリバリと音を立てて、その重い体をゆっくりと地上に沈めようとする。

「ライジング……」

目の前を走る赤い光の群れ。

炎にも負けない真摯で力強い紅。

「パ————ンチ!!!!!!」

全身から力がみなぎり、それに合わせる様に白い光が沸き溢れてくる。

拳があたつた天井の一部が弾けて碎ける。

……まだまだまだまだまだっ！

そのまま続けて拳を繰り出す。

音よりも早い連打。

流石にこの天井全てを破壊するのは無理でも、完全に落ちてくる前に、俺達が入るくらいの穴を開ける事は出来る。

名づけて、ドリフ大作戦！！

……スツゲエかつこ悪い。

「オイーーーーッス」

突然現れたコスプレしたドリフファンの存在に、二児の母は呆気に取られていた。

それはそうだろうなあ。

なぜか鷹揚にそう思いつつ、俺は狂ったように天井を叩く。
そして……。

ズシーンと音を立てて、天井が落ちてきた。

「よっしっ」

会心の出来に思わずガツツポーズ。

作戦通りに二人が余裕で通れる穴を開けて、念のために水城さん

のお母さんの上に覆い被さっていた俺は勢いをつけて立ち上がった。
「いやゝ、ここまで上手くいくとはなあゝ。すげゝ完全にドリフじやん」

「あの、すいません」

変な方向に興奮してた俺に、申し訳無さそうな声が掛かる。
辺りを見回していた俺は、慌てて彼女のそばに駆け寄った。

…… 水城茅乃さん。

水城さん達の母親だ。

彼女達はどうかやら正確に彼女の遺伝子を引き継いだらしい。
顔は煤まみれだったが、かなりの美人だった。

「あなたは？」

そう問われてもなんと答えたものか。

「……と、通りすがりのヒーローです……」

「……はあ」

なんか可哀相なものを見る目で見られた。

「それで……つつ」

呆れたような表情をしていた茅乃さんが急に顔をしかめた。

「あ、ちよつと待ってて」

そう言って足に力を籠める。

「ヒート、キック」

彼女の足に乗っていた瓦礫を文字通り一蹴する。

重みから解放された茅乃さんが立ち上がろうとして、苦鳴をもらす。

「いや、無理っすよ。ほら、抱えてくんでしっかり掴まって」

彼女を抱きかかえて、来た道を戻ろうと走る。

何とか助けることは出来たが、決してのんびりしてる暇は無い。

「ま、待って、娘がまだいるんです。どこに居るかは分からないんですけど、私のことはいいから助けて」

そう言っただけ俺の頭をブンブン振り回す。

「い、い、や、だいじょ、ぶ、なんす。あの子は……」

もう直ぐ出口だった。

探している時間がなければ、ものの一分と掛からず入ってきた裏庭が見えた。

「だ、いじよぶ、だ、あ、っす。消防士が……」

そう言い掛けて、脳裏に水城さんの声が響く。

……どうして、……見せたりしたの？

あの火傷の跡。

——あんなに嫌がってたのに

……あんなの、無い方が良いに決まってるよな。

……うん。

裏庭に出ると、嬉しそうに八二子が駆け寄ってくる。

「時間ぴったりである。やるでは……あ、おいっ」

彼女に茅乃さんを預けて、俺は踵を返した。

「八二子、悪いけど五分くれ」

「はあっ？」

茅乃さんに手を貸しつつ、素っ頓狂な声を上げる。

「そ、そんなの無理であるっ。もうホントに時間が無いのである」

「もたせて見せるよ！美少女アンドロイド！」

悲鳴のような八二子の絶叫を無視して、俺は再び炎の中に飛び込んだ。

彼女は直ぐに見つかった。

俺達の時代での、佳乃さんの言葉。

——玄関に倒れていたところをやって来た消防士さんに助けもらったの

言っていたとおりに、この時代の佳乃さんは玄関付近で倒れていた。

小さな体に火の手が及ぼうとする所を間一髪で掬い上げる。

しっかりと抱えなおすと、軽いからだが一瞬身じろいだ。

……良かった生きてる。

助かる事は知ってたんだけど、なんとなくホッとしてしまう。

顔についた煤を優しく払ってやり、確かめる。

今に通じる面影。

幼いながら整った顔立ちの、どこにも、火傷の跡は無い。

「……っし」

小さく拳を握り、炎から小さな体をかばう。

しかつりと抱え込み、そのまま、玄関を飛び出した。

転がる様に飛び出した俺達を見つけて、野次馬達の歓声響く。

その声で、佳乃さん……ちゃん？が目を覚ました。

「ん、……誰？」

「通りすがりのヒーローです」

芸の無い事だが、そう名乗って体を起こすのを手伝ってやる。

立ち上がる様子を見てると、顔の火傷以外にも怪我はどこにも無いようだ。

「ヒーロー？……助けてくれたの？」

「まあ、うん」

「……ありがとう」

花も恥じ入るような笑顔で感謝の言葉を口にする。

まだ、ちっさいのにしっかりした子だ。

……これがあんな感じになっちゃうのか…。

なんか複雑だった。

「……………っ、おかあさんは？！」

跳ね上がって家に駆け戻ろうとする佳乃さんを抱えあげて止める。

「大丈夫、お母さんも助けたから」

「コラッ！サンレッド！」

折りよく八二子が裏庭から姿を現した。

茅乃さんに肩を貸しつつ、鬼の形相で迫ってくる。

「佳乃っ！」

「あ、こら」

佳乃ちゃんの姿を見て、堪らず駆け寄ろうとした茅乃さんが、ハニ子の肩から手を離して転んでしまう。

「おかあさんっ」

代わりに佳乃さんが駆け寄って、二人は抱き合った。

茅乃さんは一通り佳乃さんの体を確かめてから、またギュウツと体を抱きしめる。

嗚咽を漏らしつつ、娘の名前を呼んでいる。

周囲から拍手が沸き起こった。

タイミングを見計らったように、サイレンの音が聞こえてくる。

「大丈夫だよ、おかあさん。あの人に助けてもらったから」

そう言っただけのほうを指差した。

邪魔しちゃう悪いと思って距離を置いていた俺は、頭を掻きつつ二人に歩み寄る。

「本当にありがとうございました、サンレッドさん」

ガンツ。

あたまたから転んで、地面とキスをした。

「お、お前何言っただっ!!」

「何って…」

さも当然だと言わんばかりに、ハニ子は腕を組んでいる。

「貴様の名前だろうっ」

その言葉に周囲が反応した。

「サンレッド…あの勇気ある人はサンレッドと言っらしいぞ」

「なるほど確かに赤い」

「でも、サンって？」

「馬鹿、太陽のような存在だって事だ」

「そうか、よしこの名前はこの町で永遠に語り継ごう」

そして伝説へ。

……勘弁してくれ。

「そんな事より、早く帰るぞ」

ハニ子が裏庭に走っていく。

一見無謀な行動に周囲に制止の声が上がる。

「……じゃ、またっ何年後かで」

「あ、ありがとうございます」

軽く手を上げ、俺もハ二子に続く。

「………そうだ。」

思いついたことがあつて俺は足を止めた。

屈みこんで、母親の胸できょんとしている佳乃さんに視線を合わす。

「ねえ、佳乃ちゃん。今は意味が分からないだろうけど、覚えてて欲しいことがあるんだ」

「……どうして私の名前知ってるの？」

その言葉には答えずに、佳乃さんの頭を撫でながら、俺はなるべく優しく聞こえるように、そして、ちゃんと覚えててくれる事を祈りながら、口を開いた。

「……『お願いだから、週に一度くらいにして下さい』……いい？今は意味が分からないだろうけど、絶対覚えててね」

「………うん」

「ありがとう」

「何やってるんだっ！」

ハ二子に怒鳴られて、俺は立ち上がる。

「いい？週に一度だよっ、それからなるべく放課後にして。覚えててよ！絶対だよ」

裏庭に駆け戻りながら、振り返りつつ振り返りつつ、手を振った。

「……覚えててくれると良いな！ホントに。」

「遅いぞ、時間にルーズな人間は信用されないのであるっ！」

「悪かったよ」

「むっ、じゃあ、いくぞっ。………アクセス」

そして光に包まれた。

光の中に入ってしばらく。

「イヤ〜ここまで上手くいくとなんか怖いくらいだな」
自然と楽しげな声になる。

まあ、いいよな。こんだけちゃんと出来たんだ。

しかも商店街での闘いでは得られなかった、この充足感。

「あゝ、なんか気分良いな。俺消防士とかなろうかな」

「……………」

「や、まあ、それは言い過ぎか、…それにしても助かって良かった」

「……………」

「うおっ、ほら、見てみる今頃手が震えてきてる。あゝゝゝホン
ト助けられてよかった」

「……………」

「……………どうした？」

さつきからやけに静かなハニ子の顔を覗く。

じつと、”フィックス”を見つめてキュッと唇を引き結んでいる。

「……………やっぱり」

「な、何がやっぱり？」

その表情にもの凄い嫌な予感の波が。

「……………転移先の軸がずれてる気がする」

「はああゝゝゝ？」

そ、それってどういう事？

「つまり、もと来た時間に帰れないって事だ」

「な、なに、じゃあいつに行くの？」

「わからん」

わからんって、何でそんな落ち着いてんの？

「何でそんなことになったんだよ」

「やっぱり、焦ってアクセスしたのが良くなかったのか」

「冷静に言っとなっ！…！」

「むっ、わたくしは貴様に言われたとおり、ちゃんと五分時間を持たせたぞ」

エピローグ　〜後日談　例えばそれは八月五日〜

雲さえ蒸発しそうな陽射し。

葡萄の房の形をした真珠色の雲は、遠くの空に浮かんで、遠くの地上に影を落としている。

その恩恵に与る機会を逃した真琴は、額の汗を拭いあずかつつ学校の門をくぐった。

――八月五日。

学校は夏休みに入っていた。

平日の喧騒が嘘のように、校内は静まり返っていた。

廊下を占める静謐な雰囲気は、校庭から聞こえてくるクラブ活動に励む声を、どこか別の世界のものになっている。

足音すら飲み込む沈黙。

嫌いではなかったが、今の真琴からは随分遠くにあるものだ。

その現状を思うと、溜め息が出るやら、苦笑が漏れるやら。取り敢えず後者を選択しておいてから、真琴は足を止めた。

目の前にある扉をノックして、返事を待つ。

部屋の存在意義を示すプレートには職員室と書かれていた。

直ぐに「どうぞ」と声がして、真琴は扉を開いた。

「失礼します」

中に入ると、千葉玲子の手招きしているのが見えた。

後ろ手に扉を閉めて、そちらに駆け寄る。

「他の先生方は？」

「クラブとか補習とか、おかげで私がここに詰めてるわけ」

他に誰もいない職員室を見回して溜め息を吐く。

「……呼び出して悪かったね」

いえ、と真琴は小さく首を振った。

殆どキツイ思いはしていない。

彼女の家には、ここまでほぼ直通で来られる移動手段があるのだ。

たらたらと、今日までのお互いのことを話しながらも、自然と話題は本題へと入っていく。

「……それで、今日だっけ？帰ってくるの」

玲子はペットボトルのお茶に口をつけながら、そう訊ねた。

頷きつつ、真琴も手に持ったペットボトルに口を持っていく。

「……お祖父ちゃんからの手紙には、そう書いてありましたけど」

「……そっか。……で、どう？お母さんとの暮らしは？」

「……そうですね」

真琴は俯き加減で微笑んだ。

”フィックス”を使ったあの日以来、水城家には真琴たちの母親である茅乃の姿があった。

火事で家を失い、そのまま善一郎の家に厄介になっている、と、そういう事になっている。

”フィックス”の近くにいた影響からか、真琴たちには以前の記憶が残っていた。

あの後「おかえり」と彼女に出迎えられた時には、感動よりも驚きが勝ってしまった。

今ではそんな事もあまり無くなっている。

世界はどうやら、思い出す、という形で、真琴たちの新しい記憶を作っているらしい。

その感覚は真琴には奇妙に感じられたが、おかげで、恙つつがな無く日常を送れていた。

「……普通ですよ」

「良かったね」

祝福の笑顔を浮かべる玲子に、真琴は礼を述べる機会を失していたことを思い出した。

「遅れましたけど、本当にありがとうございました」
そう言って頭を下げる。

玲子は意に介した様子も無くヒラヒラと手を振ってみせた。
「いいよいいよ。前もちよつと言ったと思うけど、事後処理は殆ど渡君がやってくれたから」

あの日から、真琴と玲子は妙に忙しく、まともに話す機会をなくしていた。

こんな風に話すのは実に二ヶ月以上ぶりの事である。

それでも、事あるごとに、（人目もあるし、少しの時間だったが）玲子は真琴に状況を伝えてくれた。

それによると、随分とあの渡 康平が奔走してくれたらしい。

真琴としては二人にきちんと礼をしたいのだが、康平とは何しろ接点が少なすぎた。

玲子を頼るうにも、お互いテストやなんかの学校の用事で忙しかつたため、自然と先送りになっていき、彼女への御礼も今日まで出来なかったというわけだ。

「そんな事、先生には感謝しています」

そう言ってから、聞きにくそうに真琴は続ける。

「それで…あのう、先生は大丈夫だったんですか？…その、処分とか」

心配そうなその質問に、しかし、玲子は一笑と共に答える。

「大丈夫。…だって、私これでも公務員だもん」

あう、と、なんとも言えない表情の真琴に笑顔のまま付け加えた。

「冗談よ。本当は取り敢えず現状維持つてのが上からのお達し。渡君の根回しが効いたみたい」

何て笑えない冗談なんだ。

玲子は続ける。

「上は随分と恩着せがましい事言ってたけど、人手不足だからつてのが本当のところでしょうね。お為こかしもいいところよ」

「はあ」

としか真琴には答えようがない。

「……これって悪循環よね。人手不足だから、ミスも起こるし、それも許される。そんな人がやってる仕事だから、仕事の質が落ちて、周りの人から信用されなくなる。信用されなくなるから人も集まらない。……まあ、私はそのおかげで助かったんだけど、……考えてみると複雑な気分だわ」

秘密組織も一般公募したりするのだろうか。

……もの凄く気になる真琴だった。

「そろそろ失礼します」

気付けば随分な時間がたっていた。
慌てたようにそう言っただけで席を立つ。

「え、もう少しゆっくりして行けばいいのに」

一人職員室にお留守番の玲子は、もう少し引き止めたいようだった。

「その、色々準備とかもあるんで」

「あ、そっか。……それって、本当に私も行っていいの？」

「もちろんですよ！先生達へのお礼も兼ねてるんですから、ぜひ来てください……出来れば、渡さんも一緒に」

「……それは、分かんないけど。でも、そういうことなら寄らせてもらうわ」

嬉しそうに笑って玲子は頷いた。

「はい。それじゃあ失礼します」

「はい」

機嫌の良くなった玲子の声を背にしつつ、真琴は出口に向かった。
しかし、扉の前で急に足を止める。

「……そう言えば、先生に一つ聞きたかった事があるんですけど」
「何？」

「……どうしてあの時、私達のことを許してくれたんですか？」

「あゝ……うん」

真琴が振り返って、玲子の顔を見る。

彼女は照れくさそうな笑顔を浮かべていた。

「この仕事をやろうと思った理由を思い出したから、かな」

「り、ゆう？」

「うん。……水城さん達のこと見てて、思い出したの。私は人を助けたくてこの仕事にいたんであって、規則を守る為じゃないって……そしたら、良くなって思っちゃた、ま、全然良くは無いんだけどね。けど、もし、この事実が悪用されそうになったら、私達が頑張ればいいんだし」

その時はきつと渡さんが苦勞するんだろうなあ、と、多少の申し訳なさを感じながら真琴は苦笑する。

「と、言うわけで、君達が気にする必要は無し。……これが私の仕事だからね」

照れくさを誤魔化すように、それでもどこかすつきりした顔で、玲子は笑った。

「はい。……失礼します」

今度こそ真琴は扉を開けて、職員室を後にした。

職員室を出ると、真琴の体に途端に暑気が戻った。

窓ガラスを貫く光は、既に赤みを帯びている。

窓枠ごとの影は別に涼気をもたらす訳でもなく、細めた目に間^まを与えて、いかにも鬱陶しい。

うんざりと額に小手を翳し、陽を避けながら歩く真琴に、背後から声が掛かった。

「アレ？水城さん？」

思わず寄っていきそうになる眉間の皺を意志の力でねじ伏せつつ、振り返る。

「国東君……」

が、意志の力といっても万能ではない。

こと、本人にその意思が希薄ならなおの事だ。

思いつき引き攣った笑顔で笑う真琴に、国東 歩は心底楽しそうな笑顔を浮かべた。

「久しぶり、元気だった？」

「うん」

そう答える声もどこかそっけない。

真琴はこの男が苦手だった。

……いや、自分に嘘をつくのは良くない、ぶっちゃけ嫌いだったのだ。

理由は特に無い。あえて言うならば生理的にダメと言うことなのだが、それも正鵠を射てはいない。

好きになれる可能性がある分、好きになれそうにない、よりはいくらかマシだが、それでも現在いまの彼のランキングは下水処理場以下だ。そんな彼女の感情を知ってか知らずか、地下よりなお深い位置にいる男は、笑顔を崩すことなく語りかける。

「今日はどうしたの？」

「先生に呼ばれて」

そんな歩の態度を見ると、自分だけが取り繕っているのが馬鹿馬鹿しくなつて、真琴は顔の筋肉を解放した。

自由を得た表情は嬉しそうに跳ね回り、直ぐに不機嫌な形に収まっていく。

「国東君は？」

「友達の付き添い、あれ」

そう言つて校庭の方を指差す。

「ソフト部の娘でさあ、ついてきてつて言うから付いて来たんだ」
そう、とだけ答える。

相変わらずモテモテの様だ。

なら自分一人くらい嫌つてても問題無いだろう。
そう結論付けて、真琴は踵を返す。

「じゃあ、用があるから」

冷たいとすら感じる声を気にする風も無く、歩も答える。

「うん、じゃあね。秋名よろしく」

手を振りながら、廊下の角に消えていく。

ああいうさっぱりした所だけは、少しだけ羨ましかった。

東町商店街。

空から見ると巨大な食パンの様な外観をしている。

腹に抱えている店舗数は二十弱。

ファーストフード店から、金物屋、八百屋から帽子屋なんてもので、百貨店には店の種類で及ばないまでも、日常の全てをここでもかなえる。

大きく開いたアーケードの口を見上げながら、真琴はそこへ足を踏み入れた。

二ヶ月前、ここで一つの繋がりが切れた。

代理の代理によってもたらせられた結末は、更に新しい繋がりを生んだが、一つの終わりは確かにあった。

そう思うと、とても事に関わっていたとは言えない真琴の中にも、幾らか複雑なものも浮かぶ。

人ごみを掻き分けつつ、真琴は歩く。

「あ」

八百屋の前、その人物を見つけて、思わず声が出た。

「お母さん」

人の渦の中、小声で呟いたその声が聞こえた訳でもないだろうが、茅乃は振り返って娘の姿を認めた。

「真琴、おかえり」

母親の笑顔でそういう。

地元の人間からすれば、ここはもう『おかえり』の範疇である。

「ただいま、お買い物？」

「うん、今日の夕食の」

そう言って大きな袋を持ち上げてみせる。

「もう、大変よ。こんなにかくさんお料理するのなんて久しぶりだから……真琴？」

首を傾げながら娘の視線を追う。

真琴の視線は、もう片方の手に持たれたあるモノに釘付けになっていた。

——それは杖だった。

スチール製の機能重視の杖。

あの火事の日以来、茅乃の手には、常に杖が握られている。

そう記憶にもあるものの、二ヶ月たった今でも、時折視界に入っては真琴の感情を揺さぶる。

「あつ、持つよ」

「いいよ、エレベーターだってあるし」

隠し通路、大活躍。

「ハイ、二百円のおつり、あと、おまけしといたから」

「ありがと」

八百屋の親父がやに下がりながら、茅乃に商品の入った袋を渡した。

茅乃が愛想よく笑いながらそれを受け取ると、八百屋の親父は「まいったな」とか言いながら、奥に引っ込んでいった。

……何が、まいったな、だ。

「お母さんって自分の事分かってるよね」

実の娘から見ても、嫌味なくらい綺麗な母親の顔を見ながら、真琴は呆れ顔になる。

「真琴にも出来るわよ」

無理だ。

言外にそう思うと、頭を撫でられた。

袋は杖と同じ手で持たれている。

「真琴は自分の事を知らなすぎるね。真琴がちよっと本気を出せば

この商店街なんて一拳に手玉に取れるわよ」

それは、かなり微妙だけど。

そう思いながらも、撫でられるのが気持ちよくて、何も言わない。

「じゃあ、私は先に帰るわね」

ガサツと音を立てて、袋を反対の手に持ち替える。

杖を突きながら踵を返す茅乃が、背中越しに真琴に声を掛けた。

「あ、そうだ。佳乃に今日は早く帰るように言っておいてね」

お姉ちゃん？

真琴が首を傾げた時、けたたましい警告音が鳴り出し、それにも負けないくらいの高笑いが聞こえてきた。

白いうねうねと動く十本の足。

三角のてっぺんに、細く長く白いからだ。

——どう見てもイカ。

活きの良さそうなイカが、網の上でこんがりと紫色に色を変える代わりに、活きの良さそうなまま、人の体の上に乗っかっていた。

……頭のつもりなのだろう。

誰もが怖気立ちそうなビジュアルのイカ男は、人間の方の手で、まるでヒゲにするようにうごめく足をしごく。

その隣に居るのは、相変わらず露出度の高いブルームこと、水城佳乃だった。

過去が変化して最も変わったのは彼女だった。

それは心身共に。

彼女の格好は、今までの衣装をベースに多少は露出を抑えたデザインになっている。

「ほら改変期改変期」

そう真琴は説明されたが、良く分からない。

ただ分かるのは、佳乃がもう仮面を被る必要がなくなったということだ。

イカ男の隣に立つ佳乃は（凄い文章だ）派手なメイクをする事も無く、素顔を曝していた。

そこに、引き攣った火傷の痕は無い。

長かった髪も切り、前髪も常識的な長さに揃えられて、目にした誰もが声を失うような、きめ細かい陶器の肌が、ただ白く輝いている。「んゝもう」

急に頬を膨らます佳乃。

拗ねた様に唇を尖らせて、腰に手を当てるその姿はかなり可愛いかった。

それだけで、そこに居た野次馬の半分を骨抜きにしてしまう。

「何で来ないのよ」

不機嫌になった上司に、オロオロと口に手を当てるイカ男。

……お前はムツクか。

真琴はため息を吐きつつも野次馬の一部に混じる。

最前列に行こうとしている途中で肩を叩かれた。

「……や、元気？」

最初からそこに居ただろうに、疲労困憊を思わせる声を耳に捉えて、真琴は苦笑した。

「元気です。橘さん」

橘美晴の眠そうな体がそこにあった。

「そう言えば橘さん推薦決まったんですね」

「……うん」

こくんと子供のように頷く。

自分から声を掛けたくせに、かなり面倒くさそうに見える。

「おめでとうございます」

「ありがとう」

率直な褒め言葉にも、その表情は揺るがない。

ただダルそうに顔を動かして、輪の中心に視線を向けた。

「……あの人いつも元気よね」
「す、すいません」

何故か謝ってしまう真琴である。

それにも興味を見せずに、橘美晴は頬を掻いた。

「別に。ただ、あの人はどうして今も闘っているのかなって」
不思議そうに佳乃の方を見る。

「……それが、私にも分からないんですよ」

そう言つて首を捻る真琴。

「……ただ……」

「ただ？」

「約束、って」

「約束？」

「はい」

「また、約束……」

「約束」

「「……うん」」

二人で首を傾げる。

……意味は分かりそうになかった。

悩める若人を別にして、輪の中心は一気に騒がしくなった。

「あのなあ、今日は忙しいって知ってるだろう……」

うんざりした様に現れる赤い人影。

肩を落とすその人物に、嬉しそうに表情を輝かせる佳乃。

「やつと来たわね」

ビツと指を差すその先に、もう二つ人影が現れた。

「いや、やっぱり退院してよかったな」

「良い事あるかつ！ 貴様は安静という言葉を知らないのであるかつ」
心底楽しそうに腕を組むのは枝村樹だ。

予定より一月近く早い退院。

医者 of 許可を無理矢理取り付けての自主退院である。

そんな彼女に文句を垂れつつも、健気に付き添っているのは、ア

ンドロイドの如月八二子だった。

自称樹の終生ライバルとしては、彼女の健康状態は最重要事項である。

姦しい背後の非常識コンビにもため息を吐きつつ、秋名大地はやりいっそう深く肩を落とした。

…唐突に、二ヶ月と少し前。

大地と八二子が未来に行った後、空き地に残った面々は顔を突き合わせていた。

皆一様に不安そうで、いつも余裕の表情を崩さない康平でさえ、この時ばかりは落ち着かないように煙草をふかしていた。
ちなみに、奥さんに言われて、目下禁煙中のはずである。

「どれくらいで戻ってくるの？」

玲子がそう尋ねる。

「一応、出発の時間から余裕を持たせて設定してあるから、もう少し……」

そう、答えかけたとき、再び、地面が震えだした。

佳乃が悲鳴のような声を上げる。

「そんなんっ！まだ、十五分も早いのに」

「た、ただの地震ってことは無いの？」

「いや、これは……」

それは確かに、時間移動によって起こる振動だった。

そんなことは、康平に言われるでもなく、玲子には分かっていた。

「みんな伏せてっ。衝撃が来るわよ」

声を張り上げる玲子に、慌てて従う一同。

皆が伏せるタイミングを見計らったように起こる、光の爆発。

台風の只中に放りこまれたみたいに、衝撃が風となって四人を襲った。

それぞれ、顔やら目やらを庇っていると、それは唐突に終わりを告

げた。

まるで何も無かったかのように、そよ風の名残分程の余韻も残していない。

恐る恐る立ち上がる一同の中心に、二人の姿はあった。

「……イエーイ無事帰還」

そう言つて、肩で息をする大地。

隣には停止して、ピクリとも動かないハニ子。

呆氣にとられる一同の面前で、竹馬の友のように肩を抱き合う二人。何故か、“フィックス”は大地が脇に抱えるようにして持っていた。

咄嗟に大地が“フィックス”に触れたのは僥倖とも言えた。

確信があつてやつた事ではない。

しかし「で、なければおかしい」くらいは思っていた。

「こいつでエネルギー供給の代行を出来ると思つたんです」

粗方過去での事情を説明し終えて、話がハニ子が止まつた件くだりになると、大地はベルトを叩きながらそう言つた。

既に変身はといていて、一同車座になつて耳を傾ける。

ちなみに、ハニ子も用意された重油を補給して、その輪に加わっていた。

……その補給方法は、あまり美しいとはいえない光景だったので、割愛させていただく。

「分の悪い賭けとは思つてなかったけど、流石に冷や汗掻いたよ」

笑顔を浮かべる大地に真琴が素直な疑問を向ける。

「どうして分の悪い賭けとは思つてなかったの？」

「だって、水城さんのお父さんの隣にはハニ子なんていなかっただろ」

「あ、そっか」

もしかしたら、他にも要因はあつたかもしれないが、重要なのは、

賭けに勝って、こうして戻って来たということだ。

「……とりあえず大団円って事ね」

玲子が立ち上がりつつ、ズボンについた汚れを叩く。

「そうですね」

皆もそれに続いて立ち上がった。

「じゃあ、渡君。今から尤もらしい理由考えなきゃ」

「だから、何度も言うように俺は………あ、はい」

視線だけで、御しえる男、渡康平。

「本当にありがとう」

別の一隅では、そう言って大地の手をとる佳乃の姿があった。

「いや、別にいいですよ」

照れくさそうに大地がそう答えたとき、突然強い風が吹いた。

「きゃっ」

髪を押さえながら、小さく悲鳴を上げる佳乃。

もぐと、零しつつ髪を撫で付けていると、大地と目が合った。

………なんだか驚いているように見えた。

「え、っと、どうしたの？」

戸惑いつつ、他に目を向けると、みんな佳乃の方を向いていた。

一様に口を半開きにして、間拔けな顔を曝している。

「な、なに？ちよっと、みんな、どうしたの？」

誰も答えない。

間の抜けた表情のまま、真琴が「これ」と言っ手鏡を差し出した。

「う……」

ソレに少し後じさる。

こんな物はもう長いこと使っていない。

でも、まあちゃんはその事知っているはずだし、そう思って、佳乃は手鏡に手を伸ばした。

背になっていたソレを、くると反転させて、恐る恐る顔の前に持っていく。

「……う………あれ？」

前後反対の世界に、佳乃の驚いたような表情が映っていた。
少し赤みが刺した頬に、なお赤い唇。

髪は風のせいでグシャグシャに乱れていて、手で撫で付けたくらいでは太刀打ちできなかったらしい。

問題はそこから覗く顔だった。

……いや、何も問題は無い。

だからこそ、おかしい。

佳乃はゆっくりと、自分の顔に手を伸ばした。

希代の嘘つきが、分を越えた嘘をついていないか確かめるために。
震える指先に滑らかな感触が乗る。

「……なくな、つてる」

何度も何度も手の平を頬に滑らせる。

まるで、信じられない事実を縫い付けるようだった。

そうしていると、いつかの思い出が浮かんできた。

あの火事の時の記憶。

それはデジャヴのように唐突で、作りかけのクレイアニメのように不細工だったが、それでも、佳乃の目から涙を溢れさせる。

「思い出した。ううん、ちょっと、違う気がするけど、でも」

大地の方にその泣き顔を向ける。

「……えーと、全然そんな感じしないけど……おひさしぶりっす、で、いいのかな？」

大地は頭を掻きつつ、それから納得がいったような顔になる。

「過去が変わると、そういう風になるん、うわあっ」

彼の言葉は最後まで言わせてはもらえなかった。

感極まった佳乃が駆け寄っていつて、その首っ玉に飛びついたのだ。
「思い出した、約束っ！」

ギューと力強く柔らかい感触に顔を真っ赤にさせる大地、嬉しそうに抱きつく佳乃。

「ありがとう、ありがとう」

ゼロ距離感謝攻撃に、もはや撃沈寸前の大地だった。

佳乃は頷くと、イカ男に顔を向けた。

「いいけど、この子強いわよ」

「イカゝカツカツカツ」

胸をそらしながら、ベタな笑い声をあげるイカ男。

「強いのか、やってみたいな……」

「だから、貴様はまだ骨もちゃんとはくつついていないんだぞ」

大地の背後からは随分勝手な遣り取りが聞こえてくる。

「……たく、どいつもこいつも……大体あの不良老人共だ、なーんで突然帰ってくるんだ」

「あなたは自分の祖母の誕生日も忘れたんですか？」

ヒュツと風を切る音。

……あ、この音は覚えてる。

錆びた音を立ててゆっくりと大地の首が動く。

視界の端から表れる鈍く光る刀身には見覚えもあった。

「お、お、おおおおお御祖母様？」

「はい」

上ずった声を上げながら、大地は思い切って後ろを振り返った。すると、いた。

彼の祖母である秋名薫が。

品のいい藍色の着物に旅行鞆を持って、反対の手で大地に突きつけているのは、やはり日本刀だ。

「な、何でそんな物を……」

「……海外は何かと物騒でしたからね」

ココよりもですか、とは思っててもいいわない。

なんせ首筋には、まだ刀の切れる方が当たっているのだ。

「久しぶりじゃな」

その更に後ろからは、重そうな荷物を持った水城善一郎が現れる。相変わらず仕立てのいいスーツに身を包み、シュツと姿勢を正した姿は、幾つも逆にさばを読んでいるようだ。

「おかえりなさい」

佳乃がそう言い、真琴が彼に駆け寄った。

「お帰り、お祖父ちゃん」

「うん」

どういう経路からか、旅行中だったにも拘らず、二人は事の顛末を知っていた。

「茅乃さんは家にいるんじゃない」

「うん、二人の為に料理してる」

嬉しそうな表情の真琴に、善一郎も笑顔を浮かべる。

心和む光景を優しい笑顔で見つめる薫。

ただし、手にした物騒なものは孫に突きつけたまま。

「そ、そろそろ、これ外して欲しいんですけど」

暫くの沈思の後、鮮やかな手つきで刀身を鞘に収める。

大地は深く息を吐き、その場に屈みこんだ。

そのタイミングを見計らったように、美晴は薫に声を掛けた。

「お誕生日おめでとうございます」

「…この歳になると嬉しさも半分ですけどね」

そう言つてにこやかに笑む。

「でも、ありがとう。……どこかの薄情な孫は誕生日すら覚えてはいなかったようですしね」

「覚えてましたよ。でも、今までそんなの気にした事無かったじゃないですか」

屈んだままの大地が恨みがましい目でそう言う。

見下ろしていた薫の顔に、何故かポツと赤みが差した。

「…だって、善一郎さんが皆でお祝いした方がいって」

頬を押さえながら身を擦る薫。

（ファ、ファーストネームで呼び合う仲なのか）

二ヶ月の間何があったと想像しかけて、慌てて大地は首を振った。

「と、とにかく、俺は忘れてたわけじゃないですからね」

勢いをつけて立ち上がると大地は佳乃の方へと駆けて行った。

「ほら、とつとと、始めるぞ」

「なんなら私が代わっても……イタ」

横から出てきた樹が、八二子に小突かれガミガミと説教をされていた。

呆れたようなため息を吐いた薫の隣に善一郎が寄り添う。

旅行の間中そうしていたように、そつと薫の手を握った。

「……相変わらずですね」

「そつみたいですね」

二人してニツコリと顔を見合わせる。

「……それで帰って来ましたけど、これから、どうするんですか？」

「あら、これは言わば小休止ですよ」

「は？」

「あら？お嫌ですか？」

そう言つて薫は殊更に楽しそうに微笑んでみせる。

（敵わないな）

頭を掻きつつ善一郎は苦笑を漏らした。

「いいえ、どこまでもお供いたしましょう」

「さあ、行きなさい、イカちゃん」

「ツマミかつ……うわあ、又メ又メしてるっ」

「だから、私が……」

「ダメだっ！」

「あ、そつだ、お姉ちゃん。お母さんが今日は早く帰つてきなさいつて」

「は……い」

「なんでっそんな普通の会話をあんた達はっ、て又メ又メが……!!」

「イカゝカツカツカツカツ」

「うるせえ、笑うな！」

「だ、だから、私が闘つと……」

「だゝめゝだっ！」

「じゃあ、私先に帰ってるね」

「はい、気をつけてね」

「だから、何でそんな普段通りなんだよ」

再開された闘いに歓声を上げる野次馬の中、橘美晴は本当に疲れた声で呟く。

「まあ、今更よね」

少しだけ楽しそうな顔で。

こうして、東町商店街のいつもの日常は、まだ当分続いていく。
……ヒーローの哀れな悲鳴と共に。

エピソード 〱 後日談 例えばそれは八月五日 〱 (後書き)

一生懸命書きました。

今はこれが精一杯です。

長々とお付き合いいただいて本当にありがとうございました。

番外編に向けて……各話解説とキャラ設定紹介＋告知みたいなもの

まずはご挨拶から。

この度は、「ヒーローの条件」を最後までお読み頂き、真に有難う御座いました。

思ったより読んでくださってる方がいて、本当に驚きと喜びでいっぱいです。

……いかがでしたか？

ちよつとでも楽しんでいただけたなら幸いなのですが。

えーと、それですね、今回ちよつと、番外編とか書きたいなーとか思い至ったものでして……「あつそ、なら読んでやるよ」と仰つてくださる方が話に入りやすいように、それと、僕自身のパイナツブルのような頭を整理する為に、この様なページを用意させてもらった次第でございます。

作品内意外で、その作品の事を語られる事に抵抗がある方や「誰が見るか、オメ、ツマンネ、ペツ」って方は、読み飛ばしていただいで結構です。

ただ、出て行く際はなるべくドアをそつと閉めていってください。シャーペンの芯より折れやすい心を持っているので。

……
はい。

残ってくださった方どうも有り難う御座います。

おかげ様で、おらワクワクしてきました。

早速ですが、この物語について少しおしゃべりさせて頂きます。

まずは、この物語のコンセプトを。

と言いましてもこれは、読者様方に伝えたい事ではなく、僕自身にかけたテーマみたいなもので、それは、裏切りでした。

これも、読んでくださる方をという意味では無く、ある程度形のあ
るセオリーへの、です。

なので、一話目からいきなりヒーローの正体を暴いてみました。

やってみて、もっと困るかなー、とか思っていたんですが、書き終
わったくらいには大オチへの流れは大体決まっていました。

とにかく、この時点でウルトラセブンエンドは消えました。

次に幕間ですが、これは、いわば先行ネタばらしでした。

僕自身が、あまり謎を多くしめされるモノが好きじゃないので（見
ている側に隠す為に作品世界の中で言葉を濁らせたりするキャラが
最近多い気がします。勿論推理モノ等は別ですが）もう先に全部ば
らしちゃおうと思って用意したものです。

なので例えば、主人公よりも先に、読者の方に真琴の正体がばれる
ようになっていたりしています。

二話目は戦闘シーンが先に思い浮かんだんで、とにかくそこに行き
着くように書いていました。

割と気に入って書いていたんで、とても反応が気になっています。

復活怪人が強いっていうのも、順風に逆らってみた結果です。

敵が蜘蛛男なのは、やはり最初の敵は蜘蛛男だろうということ。

次の幕間は、伏線を散らせることが目的でした。

先程、謎の多いものは好きじゃない、とか言っておいて、途端にこれです。

この辺りに書き手のいい加減さが表れていると思います。反省。

三話目です。

ここら辺から、キャラぶれが酷くなってきました。

完全な書き手の力量、努力不足でした。

もしご不快に思われたり、残念に感じてくれた方が居たならば申し訳ありませんでした。

次の幕間は………なんでしたっけ？ あんまり印象に残ってな………

…いや！ ハニ子だ！ ハニ子出ました！

このキャラはずっと考えていたキャラで、それが証拠にキーワードの所にも書いています！

そうそう、ハニ子だよ………あつぶねー。

四話目………最初で最後の前後編。

本当ならこの前後編の間に、学校編があったんですが、ストーリーの進みを優先してカットしちゃいました。

………それはそれとして、この話が一番辛かったです。

書き始めがまったく思いつかなくて、気持ちが悪いくらいでした。中身の構造は全部分かってるのに、入り口がどこか分からない迷路を前にした口惜しさ。

この物語の鬼門でしたね。

この幕間のテーマは、終わりの始まりです。

なので、転調を意識して、多少硬い文を意識して書いています。
でも失敗しています。
おかしい
滑稽ね。

最終話です。

前の幕間をものすごく引きずった書き方です。

主人公のキャラまで変わっちゃってます。

あわれた
滑稽ね。

エピローグ。

は、いわば小ネタ拾いですね。

祖母さんの誕生日とか、佳乃との約束とか、あの辺りです。

書き終わったときは、ものすごくホッとしたのを覚えています。

以上が、各話の解説……になっただけ、と云うかばかりだけど、とにかく解説でした。

勢いでノートに書いたプロローグから、何とか終わらせる事ができましたのも、ひとえに、読んでくださった方々のおかげで御座います！

あと、ちょっとだけ、僕の頑張りもあります！

褒めてください！ 褒められるの大好きなんです！ 気持は籠もってなくていいですから！ 絶対泣きませんから！

……えーと、続きましては、キャラの設定、ないし、死に設定の説明です。

秋名薫

いきなり祖母さんかよ！　と思われるかもしれませんが、全部の始まりの人です。

細かいプロフィールは考えてなかったですし、今更考えても、って感じなんで大まかに。

身長は低くありません、背筋もしっかりしてます。

品のある整った顔立ちをしていて、若い頃は、彼女目当てで道場に来る人も居たって話です。

基本的には優しい人なのですが、ものすごく我侭で、負けず嫌い。ちなみに、いつも振り回している刀は、旦那さんの和巳さんに貰ったものです。

水城善一郎

流れで、次はお祖父さんの方を。

背は高いです。

歳よりも大分若く見られます、限度はありますが。

孫大好きおじいちゃんです、と言っても血は繋がっていません。

人の絆ってのは、そういうこっちゃないっすよね。

若い頃はモテモテで相当遊んでましたが、ある事がきっかけで、パタリと止めます。

その辺の事を番外編で書けたらナーと思っています。

渡康平

年齢順って事で、次はこの人です。

千葉ちゃんと同僚で、大学時代の友人。

マッチョと言うよりは引き締まった体をしていて、二枚目ではないですけど、人好きのする顔をしています。

既婚者、一児の父でもあります。

休日出勤当たり前の、減点パパです。

この人はもう少し色々考えてたんですが、これもカットしてしまい

ました。

多分別の話に出ることになると思いますので、その時こそはと思っています。

千葉玲子

千葉ちゃんです。

この人は、本当は“外”の人でした。

外と言うのは事件の外という意味です。

事実は何も知らずに、主人公に関わってくる人物として出てきたんですが、学校編のカットと、これ以上登場人物が増えたら只でさえ纏まっていない物が余計纏まらなくなる、と、フィクション対策部要員として、泣く泣く“中”に入れた人です。

この物語の中で最も心残りのあるキャラでございます。

Sっ気が強く、打たれ弱い。

康平の事が、大学時代から好きだったりします。

水城佳乃

ブルームこと悪の大幹部、とネタ帳に書いてありました。

全く意味が分かりません。

ブルームと言う単語は、確か国によって意味が違い、煙とか、蝶々とか、あと家の辞書には、マントル内部で上下する対流の動き、と書いてありました。

この話の場合は勿論三番目の意味です。嘘です。

お母さんを助ける事と、妹を守ることを目標にずっと生きてきた人で、“フィックス”の場所を教えてもらう事を条件に、お祖父ちゃんの手伝いをしていました。

作品一の美女のはずなんですが、その意図が伝わってる気が全くしません。

僕の中でオチに一番納得が行っているのは、彼女のだったりします。

橘美晴

これと言って特に何も思いつかないのですが、割と最初の方からできてたキャラです。

もの凄く便利に動いてくれたんですが、特に印象に残ってる事が無い…… やっぱり手のかかる子のほうが可愛いつてことですかね。

ちなみに、名前の“美晴”は“見張る”とのダブルミーニングだったりしますが、良く考えたら、無意識の内にガンダムをパクッてたのかも。

秋名大地

やっとかさ主人公です。

万能キャラ。

勉強も運動もそこそこ出来ます。

祖母さん似の男前だったりするんですが、一人称だとその辺表現する方法を僕は知りません。

誰か教えてください。

この作品を書いてて、僕は強い女の子が好きだけど、それ以上に、強い女の子に弱い男の子が好きなんだなって事に気付かされました。性格や考え方が最も僕に似ているキャラです、ってこの流れで書くって僕が只のナルシストになってしまつので、どうか無かった事に。

水城真琴

当事者であり部外者。

幸福な愚者。

一番最初の考えでは、家業（悪の組織）が恥ずかしくて、家に友達を呼べない為仮面を被って人を近づけず、クラスで孤立している、という設定がありました。

一話辺りにはその名残があったりします。

その為、最初と最後で性格が全然違う事になってしまつという事態に。

猛省しきりです。

枝村樹

説明が苦手で説明をしようとすると震えてしまっ、というキャラ設定を思いついた時には、自分の中に今迄無かったキャラだ！と小躍りしたものの、活かしきれず。

あの時の小躍りを返せって感じです。

いや、返されても困りますけど。

悔しいので別の作品で使いまわします。

喧嘩十段、ファッションセンス皆無（ああ、これも活かせなかった

……）好奇心旺盛で、田舎者。

薫の従姉妹のお孫さんです。

国東歩

大地の日常の友達。

何も知らずに……って、千葉ちゃんと同じ理由で、割を食った全面カット君。

最後只の軽いヤツで終わってしまいました。

普通に好青年だったりします。

もてるしね。

付き合ってた女の子達は、皆向こうから告白してきて、勝手に幻滅して去っていく、って感じです。

もう少し違う感じにしてやりたかったんだけどなーと思う今日この頃です。

如月ハニ子

美少女アンドロイド。

名前はキューティーハニーをもじった物。

ハニ子のコンセプトは善一郎が言っていた通りで、僕がずっと思っていた事でした。

出て来るヤツ出てくるヤツ、何でこんなに（ヒーロー側が）戦いやすい格好してるんだろう？　って子供の頃からの疑問を生かしたキアラです。

最近、女の子でも容赦無く殺されたりする漫画とかアニメとかがあります、どうにも苦手です。

どうせなら好きな風に書こうと出来たキャラです。

喋り口調は軍人さんをイメージ。

水城家の人間には軍人口調。一般人には命令口調。敵にはため口。ペタンコでありますの元ネタはアラレちゃんです。

茅乃、ノゾミ、和巳

この辺は正直全然イジれてません。
番外編でも書くかどうか微妙。

……見たいですか？

フィックス、ベルト

人ではありませんが、こちらも割りと不完全燃焼だったので、一応説明を。

フィックスの“時間固定”は、僕が思う、タイムマシンが生む最大の矛盾、を解消する為の機能でした。

それは、タイムマシーンを使う事によって、タイムマシンが作られなくなる未来が生まれる可能性、もしくは可能性の存在それ自体です。

これも作品の中で説明しなかったんですが、流れ上カット。

他にも色々機能があったのに……。

ベルトの方は、少し補足情報を。

ベルトのコマンドは音声入力式になっています。

初期設定で、キーワードとそれに連動する運動を決めます。

今のキーワードは全て薫が決めていました。

最初は「熱波正拳突き」とか「轟熱手刀」とかだったんですが、時

代の変遷と共に、やがて横文字に。

と、こんな感じなんです。果たしてここまで付き合ってくれてくれる方がいるのかどうか？

いつの間にか僕一人で喋ってた、なんてサバイ状況になっていない事を祈りつつ、そろそろ幕にしたいと思います。

番外編の方は、一応、カットした学校の話から“もしも”の話を一つ、薫と善一郎の話を、現在視点、過去視点でそれぞれ一つずつ。

後は、何かリクエストがありましたら受け付けさせていただきますが、本当にココで一人で喋っている可能性が高いので、期待しないで待っています。

年内には何とかしたいなーと思っているんですが、予定は未定なんです（笑）

長々と駄文にお付き合い頂いてどうも有難う御座います。

それから、もう一度、拙作に付き合っていただきました感謝を込めて。

それでは失礼致します。

番外編 1

” 約束 ”

——これは、東町商店街にアーケードが出来る前の話。

月が夜空の表情を変えるように、太陽は世界の表情を変える。

朝には東の空を紫に染める朝日陰。あさひかげ

中天に昇れば恵みと災厄をもたらすお天道様。

そして今、赤く黒く町を染め上げながら、夕陽が架梶山かすぎに連なる小山の向こうへと落ちていくとしている。

腕に女の子をぶら下げて、善一郎ぜんいちろうはそんな光景に見入っていた。
(あー沈んでいく)

今日が終わるといってしまうような寂寥感に、歩いていた足を止めた。

突然立ち止まった彼に対して、腕を絡ませている女の子が不満そうな声を上げた。

「どうしたの？」

溶けたミルクキャンディのような声だ。

殊更に制服に包まれた体を押し付けては、善一郎の意識を自分に向かせようとする。

「あ、いや……好きにできるのも今日までだなんて」

頭の中とは違う事を答えて、笑って見せる。

覗きこむように彼女が視線を合わせてきた。

「おじさん達どこに行ってるんだっけ？」

「横浜」

大切な商談がある。

と、聞いている。

親の仕事について、善一郎は何も知らなかった。
知りたいたいと思っていない。

だから淡白にそう答えたのだが、彼女には伝わらなかったのか、それとも、伝わらなかったフリをしているのか。
とにかく続けて訊ねてきた。

「仕事ってどんなことしてるの？」

「さあ？」

「そうなの？ でも、いいな、夫婦揃って横浜かあ。……そだ、今度中華食べに行こうよ」

「……機会があればね」

それだけ言って、善一郎は再び歩き出す。

「えー」

と、ぼやいて見せたものの、彼女は善一郎の肩に頭を預けて素直に歩き出した。

景色は人通りの少ない裏道から、人目の多い商店街に変わっていた。周囲には善一郎達と同じ学生の姿もあったが、彼女に気にした様子は無い。

しな垂れる彼女の髪から、シャンプーの良い匂いが香ってきた。

「ねえ」

それを見越したような声で、彼女が口を開く。

「今日泊まってっていいでしょ」

「ダメ」

「どうして？」

立ち止まった彼女に合わせて、善一郎も足を止める。

「今日の夜中に帰ってくるんだって、だから無理」

「そっか」

特に頓着することなくそう言って彼女は体を離れた。
夕陽をバックに細い体のシルエットが映える。

「じゃあ……」

善一郎のほうを振り返って、彼女が何か言いかけた時。

「おかえりー！」

「がほっ」

突然背中に受けた衝撃で、善一郎は顔から地面に倒れこんでしまった。

転んだ際口の中に大量に砂が入ってしまい、何だかジャリジャリする。

うつ伏せのまま動かない彼の背中には、クツキリと小さな靴跡がついていた。

「このくらいで倒れんなよ。相変わらずヒョロいな善一郎は」

呆れたような声でそう言って、襲撃者は小さな体で胸を張る。

善一郎を蹴倒したのは、小学生くらいの子供だった。

「む、無茶苦茶言っな！ どうせい言うんじゃない！」

がばつと勢い良く立ち上がると、善一郎は砂を吐きながら叫んだ。その姿が面白かったのか、ケタケタと笑い声が聞こえて来る。

「あはははは！ す、砂吐いた！ お前は砂漠製のマーライオンか！」

耐えられないと言うように、その場を転げまわる。

善一郎も言い返したかったが、口はペッペッと砂を吐き出すのに使われていた。

「えっと、水城君？」

善一郎が声の方を向くと、呆気に取られている彼の連れの姿があった。

彼女は突然現れた子供のほうに、疑問の矢を向けている。

子供の方も彼女の存在に気付いたのか、笑うのをやめて立ち上がった。

「なあ、この人誰？」

そう言って、真っ直ぐな目で彼女の方を見ってくる。

砂を吐くのに必死の善一郎を見て、彼女は自己紹介の必要を感じた。

屈んで、目線を合わせる。

「私は水城君と同じクラスの綾峰晴子。あやみね はるこよろしくね」

彼女は名前のように晴れ晴れと笑って見せた。

その笑い顔につられたか、襲撃者の方も子供らしい笑顔返す。

鼻の頭を掻きながら、照れ臭そうに笑うのが可愛くて、思わずその頭を撫でてしまう。

「それにしても、水城君にこんな可愛い弟が居たなんて知らなかった」

「ぶっ、ぶわっはっは」

善一郎がひととき大きく砂を吐いて笑い声をあげた。

晴子が、何？　と思う間もなく、機嫌よさ気に撫でられていた子供の笑顔が凍った。

撫でている晴子の手を外すと、一言も口を利かないまま、善一郎の前に立った。

「……………えい！」

子供は可愛い声を出して、躊躇うことなく思いっきり善一郎の脛を蹴りあげた。

「――」

一気に表情を青くしながら、声にならない悲鳴を上げてその場に蹲る善一郎。

蹴ったのはつま先。蹴られたのは弁慶の泣き所である。

それも、十年に一度当たるか当たらないかという位の激痛ポイント、言わば弁慶のスイートスポットに当たったのだから、目に涙が浮かんでいても仕方がない。

脛を高速でさすりながら、それでも無言でもがき苦しむ。

口を開くとそのまま泣いてしまいそうだった。

そんな姿を見て少しは気が晴れたのか、仕方がないか、というような顔で晴子の方を向いた。

「あのさ、お姉ちゃん。私一応女の子なんだよね」

そう言った少女は、申し訳無さそうに頬を掻いた。

「え、あ、ごめん」

その言葉に慌てて晴子は頭を下げようとした。

しかし、少女が手の平を見せて、それを止められる。

「いっていいって」

あつけらかんとした声で彼女は笑った。

「こんなナリしてんだもん。間違ってもしょうがないって」

そう言っで自分の着ているものを抓つまんだ。

彼女が着ていたのは着古した道着だった。

所々ほつれている所を見ると、随分長いこと使っているもののようにだ。

そう言えば、善一郎に喰らわせたあの飛び蹴りは見事だった。

「だから気にしなくていいよ。よく間違われるからさ」

また、大声で笑う。

自棄でもなんでもなく、本当に気にしていないのが伝わる声だった。

晴子は笑っている少女の方に近づいていって地面に膝をついた。

そうして、真っ直ぐに彼女の目を見つめる。

綺麗な眼だと思った。

「えっと……」

「薫。秋名薫」
あきなかおる

はきはきと名乗る彼女に、思わず笑みがこぼれる。

……賢い子だ。

「じゃあ、薫ちゃんでもいい？」

「うん」

「薫ちゃん。貴方みたいな女の子を男の子と間違えてごめんなさい」

「だからそれは……」

唇に人差し指をあてて、黙らせる。

フワリと良いにおいがして、薫、何故かどぎまぎする。

「私の目が悪かっただけ、だからごめん。……うん。薫ちゃんは将来絶対美人になる」

自信に満ちた声でそう言った。

今だっっても可愛いけどね、と付け加えてから、ニッコリと笑った晴子は、薫の頬を抓んだ。

薫の心音がラテンバージョンにアレンジされる。

「ふえええ〜?」

顔を真っ赤にして、晴子を見つめる。

「私の事許してくれる?」

「ゆ、許すも何も、別に姉ちゃんの事怒ってないし……」

「じゃあ、お友達になってくれる?」

「な、なるなる」

水飲み鳥のようにヒョコヒョコ首を動かして薫は頷いた。

可笑しそうに手を口元にあてながら、スッと晴子は反対の手を差し出す。

顔を真っ赤にしたまま、その意図を悟って薫は直ぐにそれを握り返した。

「じゃあこれで私達友達ね」

握手を交わして嬉しそうに笑った晴子の顔を見て、何だか可笑しくなつて薫も笑った。

「ああ、そうだな!」

くすぐったそうな二人の笑い声があたりに響いた。

そんな二人を見守るように、ゆつくりと夕陽が沈んでいく。町全部がその光景を眺めていた。

——今日も今日が終わる。

皆の胸にそんな気持が訪れる中。

……善一郎は完全に忘れられていた。

その後、二人は再会を約束して別れた。

帰っていく晴子の背中を見送りながら、彼女が全く善一郎に触れなかった事に薫は気付いた。

多少は哀れな気持になったが、直ぐに稽古があることを思い出して、結局放っておいた。

……いつまでもそんな事にかかずらってはいられない。

自宅に帰って道場の方に行くと、既に稽古は始まっていた。

師範である父親の始はじには叱しられたが、薫はスッキリとした気分で稽古の列に加わった。

物心付いた時から、周りには男の人のほうが多かった。

母親は薫を産んだ時に亡くなっていて、道場経営をしている父親の手一つで育てられてきた。

少しずつ大きくなるにつれ、薫は門下生に混じって武術を習うようになり、物心ついた頃には既に道着はぼろぼろだった。

始は娘が武術を習う事を賛成せずに彼女を説得していたが、少しでも長く父親と一緒に居たかった薫は、頑として首を縦には振らなかった。

髪も格闘技に向くように短く切り揃え、周りの影響から口調も自然と男っぽいものになっていった。

それが、所謂”普通の女の子”とは違うと言う事に気付いたのは、薫が小学校に上がった時だった。

周りを見回しても自分以外の女の子達は、何だかナヨツとしていて頼りない。

押せばすぐに倒れそうだし、蹴れば何もかも壊れてしまいそうだった。

きつと彼女達は、近所の人に男の子と間違われることもないのだろう。

そんな事を幼馴染の善一郎に話すと、それが普通だ、と言われた。しかし、男の癖に誰よりも頼りない彼に言われても、何だかピンと来なかった。

だから薫は気にしないことにした。

相変わらず男子に混じって遊んだし、武術の方も本格的に習いだした。

始はやはり良い顔はしなかったが、善一郎は、良いんじゃないかと笑っていた。

薫自身もそれで良いと思っていた。

そして今日。

薫の耳に晴子に言われた言葉が蘇ってくる。

——薫ちゃんは将来絶対美人になる。

自分でも意外なくらい嬉しかったらしい。

（そりゃあ、最初は男と間違われたけどさ）

それでも、あの言葉は途方もない力でもって、薫を、薫の意識を変えていった。

まるで月にかかった雲を吹き払う風のように、冴え冴えとした光を薫に与えてくれた。

（綺麗で、柔らかくて、優しく、良い匂いで、いいよなあ晴子姉ちゃん）

ボーツと動きを止めた薫に、師範の叱責の声が向けられた。

（いけね）

薫は慌てて気を引き締め直す。

まだ稽古は終わっていない。

この日秋名薫に三つの重大事があった。

一つは、綾峰晴子という友人を得た事。

もう一つは、彼女の中に初めて意識が芽生えた事。
コンプレックス

……そして最後の一つは、彼女が夕食をとっていたときに起こった。

父親と二人きりの食卓は、いつも賑やかだった。

食事の用意をするのは、いつからか薫の仕事の一つになっていた。
小学校から帰ってきて、稽古に参加し、台所に立つ。

大人でも大した重労働だ。

にも拘らず、薫が作る料理について、始は彼あれこれは文句を言った。

「何だかお前の母さんの味と違う気がするんだよな」とチクチクチ

クチク地味に不満を言ってくる。

薫も負けずに「じゃあ、もう食うな」と言って食事を下げようとする。

慌てて父親が平身低頭で謝って、渋々薫が食事を元に戻す。

男所帯であるため、こういう時飛び交う言葉は品を欠いている事が多いが、それなりに楽しい食事風景である。

この日も始は味噌汁が辛いと文句をつけた。

「そんな事ないだろ」

薫は味噌汁に目を落とした。

揚げと豆腐のオーソドックスな味噌汁。

作る際に味見はしているが、一口啜ってみて、薫は顔をしかめた。

「……なんだこれ？」

始の言う通りいつもより辛かった。

恐らく、また晴子の言葉でトリップしている内に、煮立たせてしまったのが原因だろう。

ダシの風味がとび、塩気が強くなっている。

自分で作っておいてそんな事を言う薫に、父親は鬼の首を取ったように笑ってみせる。

「ほら見る！ 辛いだろう！」

嬉しそうな彼の顔に、薫も力チンと来た。

確かにいつもより大分辛かったが、作って貰っておいてその態度はないだろう。

「なら食うなよ！」

いつもの様にそう言われて、父親の表情が情けなく変わった。

自分の前に置かれた食事を抱え込むようにして、「いや、食う、食う」と連呼する。

こうなるのが分かっていて、何故か文句を言うのをやめない。

コミュニケーションの心算^{つもり}かも知れないが、だとすれば不器用を通り越して救えない馬鹿である。

それにしても、最近「なら食うなよ」が飛び出すのが、どんどん

早くなつてきている気がする始だった。

「ったく」

顔をしかめつつも席について箸を手に取る薫に、始がホッと息をついた時、部屋の外で電話の音が鳴った。

「こんな時間に誰だ？」

怪訝な顔をしながら、始は席を立つ。

不安そうに部屋を出て行ったのは、夜の電話には厭なものしかないと彼が思っているからだ。

あまり気にする事もなく薫が食事を続けていると、直ぐに父親が戻ってきた。

珍しく青い顔をして、呆然と薫を見ている。

「誰からだった？」

そんな父親の様子に、薫も箸を置いた。

どうやら、厭なニュースだったらしいと気付いたのだ。

「あ、ああ」

はっとしたように呟いて、父親が口を開いた。

「電話は善一郎君からだった」

そう言った声が、震えている。

「善一郎？」

その名を聞いて、薫は首を傾げた。

「善一郎がどうかしたのか？」

「あ、いや、彼自身はなんともないんだが」

言葉を選んでいるような父親を見て、薫は善一郎が今一人で居る事を思い出していた。

……嫌な予感がする。

「彼の両親が」

善一郎の家は、薫の家から道を挟んで直ぐ隣に建っている。

敷地の広い家の多いこのあたりで、唯一秋名家と交流があるのが、水城家だった。

薫はもどかしいような思いで父親の言葉を待った。

彼の態度に、知りたくもない言葉の先を感じた。

……無いのは確信だけである。

一刻も早く善一郎のもとに駆けつけたかった。

「出先から帰ってくる途中、車で事故に合われた。市内の病院に運ばれたらしい」

その言葉を聞いた途端、薫は席を立って駆け出した。

部屋から出ようとする所で、始に手を掴まれる。

「待ちなさい、薫」

「……放せっ！」

「今お前が行っても迷惑になるだけだ」

「そんな事……いいから放せよ！」

パチン。

遠くで乾いた音が聞こえた気がした。

頬が痛いことに気付いて、自分が殴られたことに気付く。

「良く考える。今お前が行ったら、善一郎君は気を使ってしまう」

厳しい顔つきなのに、父親の声は落ち着いていた。

そのアンバランスさが薫の視界をにじませた。

行った所で薫には何も出来ることが無い。

そう言われている様だった。

寂しい。悲しい。悔しい。

——優しくった水城のおじさん達が、居なくなるかもしれない事が寂しい。

——きつとそれ以上に、寂しい思いをしている善一郎が悲しい。

——それなのに、何も出来ない自分が悔しい。

歯を食いしばり薫は痛いくらい拳を握り締めた。

どうして自分は子供なんだろう。

そんな姿を見て、父親が優しく頭を撫でてくれる。

「お父さんは今から善一郎君を連れて二人が運ばれた病院に行ってくる。お前は辛いだろが、留守番していてくれ」

痛む頬を押さえて、薫は頷いた。

「……分かった。お父さんも気をつけて」

なんとかそれだけ言う事ができた。

ポンツと優しく薫の頭を叩いて父親は笑って見せた。

「分かってる。なに、行ってみると大事無かったって事もある。あまり気を張らずにお前は寝ていなさい」

そう言っただけは出かけていった。

父親の言葉が気休めだとは分かっていたが、おかげで何とか薫は眠ることが出来た。

今の自分にできる事は周りの邪魔にならないことだけ。
無理矢理にそう言い聞かせて薫は目を瞑った。

果たして、翌日目を覚ました薫は、水城夫妻の死を知らされた。

二人の葬式は、人の多さに反して涙の少ない静かなものとなった。
その大きな理由として、喪主を務めた息子、善一郎の態度がある。
彼は、式の間中むっつりと押し黙ったまま、ジッとどこかを見つめていた。

その目に涙はなく、その口に嗚咽はなかった。
力なく口を閉じて、真剣とも空虚ともいえない視線で、どこか遠くの景色を捉えていた。

訪れた弔問客たちは、彼を差し置いては泣くに泣けない。

“お通夜のような”という比喩がここでは正しいかどうか。

とにかく皆が声を失ったような、静かな時間が流れて行った。

そんな善一郎の姿を、遠くから弔問客の一人として薫も見ていた。
親戚や親の会社の人間に囲まれて、彼らの放つ言葉に時折思い出したように視線だけを向ける善一郎の姿を見ていると、涙が出てきた。
車での衝突事故だったにも拘らず、二人の遺体に目立った損傷はなかったらしい。

打ち所が悪かった。

そう父親は言っていた。

白い装束を着て、綺麗になって棺に横たわる二人。

それを目にしたとき、薫は衝撃からその場にへたり込んでしまった。足に力が入らず、普段涙を止めている何かがその機能を失って、赤ん坊のように声をあげて泣いた。

薫は母親を亡くしてはいたが、目の前に死を突きつけられたのはこれが初めてだった。

この時初めて、生と死の曖昧で強烈な違いを思い知った。

その感覚を彼女は生涯忘れる事はないのだが……それはいい。

そんな薫にも、善一郎は無感動な視線を向けていた。

他人を見るような、それどころか、初めて目にする人間を見るような目で、善一郎は泣きじゃくる薫の姿を見ていた。

視線には力がある。

その力に引かれて視線を動かした薫は、後悔とともに顔を俯けた。そこには彼女の知らない善一郎が居た。

俯いたまま震える体を抑え、泣き声を噛み殺した。

胸の前で手を組み、心の中で祈りの言葉を吐く。

（おじさん、おばさん……お母さん。どうか善一郎を元に戻してください。あんな目で私を見させないでください）

父親に抱え上げられて席に戻る間中、葬儀が終わるまでの間中、薫は祈り続けていた。

その祈りが届かないまま、三日が経っている。

薫は道場があるだけの、何の色気もない庭で、善一郎の家を見上げていた。

そこはまるで、人が住んでいないかのような風情で静かに佇んでい

る。

小さな物音すら聞こえてはこない。

毎日様子を見に行っている始が言うには、食事だけは彼が無理矢理採らせているらしいのだが、それ以外、善一郎は全く動く事が無いのだという。

両親の部屋の中に座って、一日中窓の外の景色を見ているらしい。

あの日以来、薫は善一郎には会っていない。

恐くて会いに行けないというのが正しい。

何度か家を訪れようとはしたのだが、その度に葬式の時の善一郎の目が思い出されて、足がすくんでしまう。

道一本隔てただけの隣同士。

三日前までは誰よりも近かった距離が、今はこんなにも遠かった。

この日も学校から帰ってきて、着替えもせずにと水城家のほうを見つめていたのだが、どうしても踏ん切りがつかずに薫は溜息をついた。

もう直ぐ稽古の時間だった。

着替えなきゃと呟いて、薫は自分自身をぶん殴りたい衝動に駆られる。

（何が着替えなきゃだ。恐くて会いにいけないだけの癖に）

家の壁に拳を打ちつけようとしたとき、薫の耳にその音が聞こえてきた。

ガラガラガラ……。

隣から聞こえてきた、玄関戸を開く音。

弾かれたように薫は駆け出した。

頭の中は真っ白で、何を話すかも考えてはいない。

あれだけ怖がっていた気持ちも、どこかに吹き飛んでいた。

二十メートルもない距離を全速力で走る。

クラスで一番速いはずの足が、今は絞め殺してやりたくなくなるくらいに遅く感じた。

永遠よりもゆっくりと進む時間、実際は十秒も掛かってはいないだ

ろつが、ようやく、薫は善一郎の家の前に着いた。

「薫ちゃん？」

そこに居たのは、綾峰晴子だった。

晴子は善一郎の家から出てきたところらしく、後ろ手に扉を閉めながら、驚いた顔で薫を見ていた。

「晴子姉ちゃん……」

薫。脱力して地べたに座り込んでしまう。

「ちよつと薫ちゃん大丈夫？」

突然力を失った薫に、慌てて晴子が駆け寄った。

「大丈夫大丈夫。ちよつとびっくりしたただけだから」

そう言つて、情けない笑顔を作ってみせる。

それが可笑しかったのか、晴子はクスツと笑うと、薫を立ち上げらせてくれた。

「薫ちゃんは水城君に会いにきたの？」

スカートに付いた砂を払ってくれながら、晴子が聞いてくる。

されるがままになりつつも、薫には答える事ができない。

……そう言えば何しにきたんだっけ？

戸の開く音が聞こえたときには、一も二もなく駆け出していた。

その時何も考えていなかった事に、薫は気付いた。

冷静になってみるとココにいること自体が酷く滑稽に思える。

何故か、あの時の善一郎の目が頭にちらついた。

「いや」

と、だけ答えて、上目遣いで晴子のほうを見た。

一旦手を止めた彼女は、不思議そうに首を傾げながら、薫の言葉を待っている様子だった。

「は、晴子姉ちゃんこそ、そんな格好でどうしたんだ？」

彼女は、前に会った時と違い私服姿だった。

可愛らしい服のすそを揺らして、再び薫のスカートのクリーニング

に掛かる。

ついでに、他の乱れているところも直してやっていた。

「今日学校が創立記念日で休みだったから、水城君のお見舞いにね…… よしつと」

そう言つて満足げな声を上げた。

どうやら、薫のスカートは完璧にもとの姿を取り戻したらしい。

「……善一郎は、どんなだった？」

身綺麗になった薫が、彼女らしくない元氣のない声で尋ねた。

その事を不思議に思いながらも、晴子は答えた。

「どうつて、そうだなあ。……くつらゝくて、ジメジメしてたけど」

「そ、そっか」

「うん。一回もこっちを向いてくれなかったしね」

言葉と違い、晴子の声は明るい。

「それで？ あれから薫ちゃんは水城君に会つた？」

薫は黙つて首を振つた。

会うのが恐いなんて、自分の情けない気持ちを見透かされそうで、何だかそのまま顔を俯けてしまう。

「会うのが恐い？」

ズバリ指摘されて慌てて顔を上げる。

晴子は笑っていた。

馬鹿にするでなく、只、ひたすらに優しく。

その顔を見ていると意地を張つて嘘をつく気にはなれなかった。黙つたまま正直に首をたてに振る。

「……そうだよね」

小さく零して晴子はゆっくりと歩き出した。

地面を踏む音が、薫の背後で止まる。

沈黙。

黙っている晴子を、薫が振り返ろうとしたとき。

「えい！」

突然晴子が可愛らしく声を上げた。

体を押し付けるようにして、背後から抱きつかれる。

「は、晴子姉ちゃん？」

肩から伸びてきた手に力が込める。

ギューと抱きしめられて、彼女の良い匂いが鼻をついた。顔が熱くなるのが分かった。

晴子、薫の髪の毛の匂いを嗅ぎ出す。

薫、何故かまたどきまぎする。

「ちょ、ちよつと姉ちゃん止めてくれって」

「あのね」

髪の中に顔を埋めたまま、晴子が声を出した。

直接息がかかって、旋毛の辺りがくすぐったい。

「将来薫ちゃんが美人になるときは、私の千倍綺麗になっててね」
千倍って……。

何だか頭の悪い数字である。

それは無理なんじゃないかなーっと、頭天边がくすぐったいま
んま、薫は冷静に思った。

「……じゃないと悔しいから」

聞き返す間もなく、薫の体が解放される。

振り返つてみると、そこには、初めて見たときと同じ笑顔があった。

「会っておいで」

笑ったまま晴子は言った。

「……………でも、大丈夫かな？」

不安そうに薫は言った。

晴子はそんな薫を見つめる。

大丈夫かなんて、神様じゃないんだから分かるわけがない。
でも、神様にはきつと分らない部分で、大丈夫だと確信できた。

「大丈夫」

だから、そう請け負う。

晴子はニツコリ笑って、薫の背中を押してくれた。

勇気を奮って、薫は先程晴子が閉めた戸に手をかけた。

ガラガラガラと音を立てて、戸が開いた。

恐る恐る家の中を窺う薫の背中が可愛い。

家に入る直前足を止めて、こちらを振り返る。

「晴子姉ちゃん。ありがとう」

照れ臭そうに鼻の頭を掻き、返事も待たずに戸を閉めてしまう。

可笑しくて晴子は笑った。

「……さてと、帰るかな」

ひとしきり笑った後、目尻に浮かんだ涙を払って、晴子は歩き出した。

暖かい滴が夕焼けの中に散っていく。

涙の正体には興味がなかった。

家路を歩き、商店街に差し掛かった時、晴子は声を出す。

「あ」

赤く染まりかけている空を見て思い出した事があった。

「……中華食べそびれちゃった」

……。

「……まあいいか。」

一度だけ心底残念そうにため息をついて、エビチリのような空の下を晴子は帰っていった。

家の中は夜よりも暗かった。

灯りが全て消され、窓から差し込む夕陽が、影を一層濃いものに変えていた。

シンと静まり返った廊下を薫は恐々（こわごわ）歩く。

壁に手をつき、キョロキョロと視線を動かしながら、目的の部屋を

探す。

そうして歩いていると、何だか泥棒か幽霊にでもなった気がしてくる。

そのどちらでもないと思い知らされたのは、声を掛けられたからだ。

「薫か？」

善一郎の声だった。

小さな足音が聞こえたのだろう、疲れたような声が、薫の目の前にある襖の向こうから響いてきた。

「うん。薫」

小さな声でそう答えると、「入って良いよ」と言ってきた。

少し考えた後、思い切って襖を開けた。

部屋の中を見て、薫の足がまた震えだす。

（おじさんとおばさんの部屋）

室内は大方片付けられていた。

親戚の人が、もしかしたら始が片付けたのかもしれない。

人の暮らす部屋でなくなった空間に、思い出の欠片みたいにして薫達が付けた柱の傷などが見て取れた。

寒々しい印象を受ける部屋の中央で、善一郎は胡座あぐらをかいて座っていた。

訪問者に背を向け、窓の外に意識を飛ばしている。

「よう」

しばらくの沈黙の後、善一郎がゆっくり顔だけ振り返った。

薫は思わず下がりがりそうになる足に力を込める。

あの目だった。

知らないものを見る目で、善一郎は笑っていた。

「何やってんだ？ 座れよ」

「……うん」

言われて、薫は躊躇いながらも善一郎の背後に座る。

彼はまだ体を窓の方に向けたままだ。

座るのを確認してから、またゆっくりと視線を窓の外に戻した。

「えと、げ、元気だったか？」

言って馬鹿な質問だったと反省する。

「いやーあんまり」

予想通りの答えが返ってきて、薫は首を縮めた。

「そっか、あー……飯は？」

「おじさんに無理矢理食わされてる。……あの腕力は犯罪だぞ多分」

「そっか……犯罪か」

薫の脳裏に腕力で犯罪者にされた父親の顔が浮かぶ。

そう言えば、稽古があることをすっかり忘れていた。

怒っているだろうか？

「それで？ お前の方は？」

「私も……あんまり」

「そっか……」

それきり、薫は言葉を見失う。

正直、善一郎には会えたものの、まだ何も考えてはいなかった。

それどころか、糸が纏れ合っているかのように思考が混乱している。

恐くて会えなかったのは事実。

でも、会いたかったのも事実。

晴子に背中を押された勢いでここまで来たのも事実。

でも、最後の一步は自分の意思で踏み出したのも事実。

……結局、今の善一郎に何をしてあげれば良いのか分からないのが、一番大きな事実だった。

「薫さあ」

善一郎が体ごと振り返る。

頭がこんがらがっていた薫は、虚を突かれて何も答えられない。

「人が死ぬって知ってた？」

少しだけ、善一郎の空っぽだった目に、影のようなものが過ぎよっていった。

薫はその質問に黙ったまま首を振った。

言葉として……知識としては知っていた。

人だけじゃなくて、生き物全部は生まれたら死ぬ。
善一郎も薫もいつか必ず死ぬ。
そこに例外は無い。

頭の中では、多分二人ともそう思っていた筈だ。

でも、実感したのはあのお葬式の時が初めてだった。

眠るように横たわっていたおじさんとおばさん。

目立った傷もなく、立っている自分と何にも変わらないように見える二人。

薫はあの時、悲しいのと一緒に、恐くて泣いていた。

二人の死体と生きている自分。

確かな違いは感じる事ができても、その間にあるモノはどこまでも曖昧だった。

そのときに彼女は悟った。

人はいつか死ぬんじゃない。

人はいつでも死ぬんだ。

その事に気付いた時、薫は恐くなって大声を上げて泣いた。

悲しかったのは事実。

けれど、それ以上に恐かったのが本当の事実。

薫は薄情な自分を思う。

でも、人は死ぬ、なんて、只の空っぽの言葉だった。

だから、薫は目を瞑って、黙って、必死で首を振った。

「俺も」

それを見て自嘲気味に善一郎は笑ってみせる。

「多分知らなかったんだろ？ 知ったらどうしようもなく恐くなっちゃってさ。それが悲しいに勝っちゃまって。お前葬式の時俺のこ
とチラチラ見てたろ？ だから知ってると思うけど……俺未だに泣
けないんだよな」

善一郎は振り返って窓の外を見た。

薫は悲しくなってきた。

「自分が大した事ない人間だったのは知ってたけど、まさか、ここ

まで冷たい人間だとは思ってなかったな」

自分と善一郎の違いを思う。

子供だから泣く事を許された薫。

子供じゃなくあろうとしたから泣く事を許さなかった善一郎。

それはきつと、ちよつとしたきっかけから、無理を通してしまっただけの事。

「そんな事ない」

薫の声に振り返って、善一郎は驚いた。

薫が涙を流していた。

彼女自身も意外だったのか、その事に気付いて服の袖で涙を拭うが、拭っても拭っても、止まることなく溢れてくる。

やがて諦めた。

「善一郎は優しい……多分」

涙目で善一郎を見据えて、しつかりした声でそう言う。

「多分かよ」

小さく笑った善一郎の前に泣き顔のまま薫が立った。

すつと腕が伸びてきて、善一郎は頭を抱え込まれる。

「薫？」

「お前が泣けないのは、きつと心がまだ気付いてないからだよ」

善一郎の望むもの。

薫はそれに気付いた。

そんなの考えるまでもなかった。

それは、死んでしまった両親を生き返らせる事。

残念だけど薫には叶えてやる事ができない。

だから、代わりに自分がされて嬉しかった事をすることにした。

お葬式で泣いた時、始に抱え上げられると、とても心が落ち着いた。

抱きしめて背中を撫でてくれた手から「大丈夫だよ」という彼の気持が伝わってきた。

嬉しくて、安心した。

「無理して泣かなくても良いよ」

だから、小さな手で、善一郎の頭を撫でてやる。

大丈夫だよ、大丈夫だよ。

「……だから、安心して泣いて良いんだぞ」

一生懸命気持を込めて、何度も何度も。

「お前……」

善一郎の悔しそうな声。

「……不意打ちは汚ねーぞ」

そう言つて、抱き返すように薫の背中の服を掴む。

少し痛かったが、何でも無いように薫は頭を撫で続けた。

大丈夫だよ、大丈夫だよ。

「……不意打ちは……あ……っく、……くっ、そ……な、んで……死
んじやうんだよ……」

薫のお腹の辺りから、善一郎のくぐもった嗚咽の音が聞こえてき
た。

吐く息と涙が熱く、一緒にジンワリと暖かくなった。

「うん」

「……言いた、い事とか、言つてやりたい、事とかあつたのに……」

「うん」

「……父さ……ん……かあ……」

最後は言葉にならなかった。

後は嗚咽が漏れるばかり。

薫も黙つて泣いた。

善一郎が泣き続けている間ずっと、大丈夫だからと、彼の頭を撫で
ていた。

「あああああ」

なんか凄い泣いたなあ。

善一郎は窓の外の、炎のような色で燃える空を見ながら、ボンヤリとそんな事を考えていた。

水泳の後のような倦怠感が体中を支配していた。

「……この野郎」

呟いて視線を下げる。

薫は、泣き疲れて寝てしまっていた。

床にそのまま寝かせておくのも可哀相だったので、仕方なく自分の膝を枕として提供している。

善一郎の膝の上で、気持良さそうに寝息を立てている薫。

その顔を随分久しぶりに見た気がした。

「……………」

鼻を抓んでみる。

苦しそうにジタバタし、ぶはつと口を開いて息をついた。

また直ぐにスースーと、安らかな寝息を立て始める。

「……………」

善一郎。口を押さえて笑いを堪える。

笑いを堪えつつ、今度は頬っぺたを引っ張ってみた。

「ん……………」

眉を顰めて、フラフラと両手をさまよわせる薫。

どこが痛いのか分からないのだろう。

やがて、ふらついていた手がサツと動いて……。

ぺちん。

何故か自分の太ももを叩いた。

（いや、遠っ！）

「く、つつ……ぷふ……………」

そんな薫に、善一郎、涙目で床を叩く。

堪えるのに必死である。

キョロキョロと辺りを見回して、他に悪戯する為の道具がないか探す。

視線の先、部屋の片隅に何故か習字セットがあった。

にやりと口元が歪む。

何だか無性に、額に肉と書かなくてはいけない気がしてきた。

薫を起こさないよう、上半身を伸ばしてそれを取ろうとする善一郎。

が。

「善一郎！」

「は、はいいい」

突然名前を叫ばれて、弾かれたように姿勢を正す。

調子に乗りすぎた。

そう思つて、恐る恐る視線を下げるが、未だに薫は目を瞑つて善一郎の膝の上から動かない。

寝言のようだった。

「は……脅かすなよ」

ホツと息をつく。

「うー、善一郎」

どうやら夢の中の相手は自分らしい。

今度は静かに名を呼んで、薫は顔をしかめている。

「はい、はい」

ため息の様に答えて、善一郎は続きを待つ。

寝言と会話をしてはいけない、と何処かで聞いた気がしたが、気にしなかった。

それよりも、夢の中で自分達がどんなやり取りをしているかの方が気にかかる。

返事があつたことに少し満足したような顔をして、薫は口を開く。

「善一郎」

「なんですか？」

「うー」

「いや、なによ」

「……………な……………」

「ん？」

「泣くな」

……………。

「ぶっは、あはは、お前、ぶふっ」

今度は我慢できなかった。

声を立てて善一郎は笑う。

言っている事が百八十度違う。

言った薫自身は何だか威張ったような顔をしていた。

「あは、く、はは……… ったく、どうしろつつうんだよ」

小さく呟いて、薫の寝顔を見つめる。

重なるように、さっきまでの泣き顔が浮かんできた。

「…………… 気付いてないだけ、か」

考えてみると、人はまず心で泣くのかもしれない。

だから、涙を流すのを堪えたり、堪えられなかったりするのだから。

けれど、我慢をしてしまうと、心はいつまでも泣き続ける。

（…………… 俺がそうだったみたいに）

笑い顔を浮かべたまま、薫の髪に指を入れる。

梳くようにして頭を撫でてやった。

気持良さそうに笑う寝顔。

（多分、人は心で泣き止む為に涙を流して、大きな声で泣き声をあげるんだろうな）

薫の幸せそうな寝顔を見ていると、素直にそんな風に思えた。

「そうだな……………」

悲しさから色をなくしていた世界が、本来の姿を取り戻していく。涙で灼けた声が、赤い世界に溶けていった。

悲しみがなくなったわけではない。

でも、それ以外のモノにも気がついた。
気がつかせてくれた。

「そろそろ俺も、泣きやむかね」

いししと笑ってから、もう一度薫の鼻を抓んだ。

「……何やってんだお前？」

「いいいいいい！？」

しかし、今度開いたのは、口ではなく目だった。

意志の強そうな黒色とばつちり目が合ってしまった。

子ウサギくらいだったら、それだけで射殺せそうな視線が善一郎の顔を射抜いている。

「なんか、さつきから寝にくいと思ってたら」

「いや、ちよつと待て、ほ、ほら、俺ずつとお前の事膝枕してやってたんだぞ」

「そんなの……」

薫から、ゆらりと立ち上がる鬨気。

「知るかああああああああ！」

「ぐええええええええええ」

それはもう酷い暴力だったと言う。

——問。

最近貴方に気になっている事がありますか？

誰かにそう聞かれれば、秋名薫は黙って頷いた後、むつつりした顔のまま、ピースサインをそいつに向ける事だろう。

戦争が何時まで経っても世界から無くならない事に対する無言の

抗議ではない。

——二つある。

という事である。

一つはここ最近、善一郎が夕飯を秋名家でとっている事にあつた。いつだったか、薫の父親の始が、彼を夕食に招いた時から始まつた。一人では味気ないだろうと、父親がそれを毎日続けているうちに、何だか当たり前のように、いつの間にか食器棚に善一郎の茶碗があつた。

……それはいい。

一人増えた所為で、食費がかさむと言う事もない。

善一郎がいつも食材を持参してくるからだ。

困窮している秋名家では、逆に助かつてるくらいだった。

……いや、それもいい。

問題は、ここの所彼からの注文が多くなってきたという事と、とにかく食卓が煩くなつたという事だ。

自宅の庭にある小さな道場の中で、他の生徒達に混じつて呼吸を整えていた薫は、昨日の夕飯時のやり取りを思い出していた。

最初は、善一郎が味噌汁を辛いといった事から始まつた。

「そうか？」

一口啜つてみて、薫は眉を顰める。

「普通だと思うけど」

「いや辛い」

そう言つて、碗を置いてしまふ。

「……普通と思つただけだな」

もう一口啜つてみて首を傾げる薫。

どうでも良いことだが、何でこいつらはこんなに味噌汁の味にう

るさいんだ、と思う。

（飲めりゃあ良いじゃねえか飲めりゃあ）

べらんめえ口調でそう思うものの、全員が美味しいと思うに越した事はない。

「わかった。じゃあ、明日からもうちよつと薄味で作ってみるよ」

薫が言くと、善一郎は嬉しそうに笑って頷いた。

しょうがないヤツだ。

私より子供だな。

薫が呆れたようにそう思って、話はそれで終わるはずだった。

「俺は今日の味噌汁ちよつと薄い気がしてたんだが」

と、始が言い出したから、ややこしくなってしまった。

「えー、そんな事ないですって」

そう言つて、厭そうな顔で味噌汁を口に運ぶ善一郎。

「んっ、ほらーこんなに辛いのに」

べーっと舌を出してアピールする彼に、始が反論する。

「いや、薄いつて……ほら、こんなに薄い」

そう言つて凄くおいしく無さそうにする始。

そんな態度を見て、怒りに震える薫。

しかし、目を瞑つてぐつと堪える。

何も、自分からこいつらと同じレベルに落ちてやる事はない。

「……何でも良いけど、私は味噌汁二つも作るのなんか嫌だぞ」

アホらしい喧嘩を始めた年上二人に、薫は冷たい声で言う。

それを無視するように。

「辛いですってこれ」

「いや、薄いつて」

平行線のまま（好みの問題だから交わりようがないのだが）、それでも二人の喧嘩は続く。

「どう考えても薄いだろっ善一郎君！」

バンツと卓を叩いて立ち上がる始。

「わっかんねえ、おっさんだな！ こんな辛い味噌汁初めてだって

言ってるでしょ！」

つられる様に立ち上がる善一郎。

「こ、こいつら……」

額のバツテンを大きくしていく薫。

「表に出たまえ善一郎君」

「お断りだよ！ あんた強いもん！」

「くっ、卑怯な」

「どっちがだ！？」

「もういい！ お前らどっちも食うんじゃねえ！！」

薫が叫んだのは、それから二分後のことだった。

道場では、型の稽古が始まっていた。

追憶から戻ってきた薫は型の練習に加わる。

そして、ため息をつく。

確かに、夕飯時に毎回のようにかかるゴタゴタは鬱陶しかったが、今薫の頭を悩ませているのはそちらではない。

（くっそ）

目の前に善一郎の顔が浮かんでいる。

あの日、二人で大泣きした時以来、何故か、ふとした拍子に善一郎の顔が現れては、薫の目に張り付いて中々消えなくなっていた。幾ら振り払おうとしても、しつこく頭の中に浮かんでくる。

これがもう一つの気になっている事。

先程から、型の練習にかこつけて幾度も拳を打ちつけているのだが、気が晴れるどころか、余計にイライラが募ってくる。

「はじめ！」

父親の声がかかり、体の動きが型の練習へと移行する。

打つ。捌く。体をいれかえ、もう一度打つ。

これの繰り返し。

打撃の向く先は、全て幻ぜんいちきあうしよの人中である。

打つ。捌く。体をいれかえ、もう一度打つ。

……。

……。

……蹴ってみる。これは型には無い。

蹴る。蹴る。更に打つ。膝。頭突き頭突き頭突き……。

「薫？」

このあたりで流石に見咎められ、父親に止められた。

気付くと他の生徒達も、何事かと薫の方を見ていた。

突然何も無い空間で頭を振り出したのだから無理も無い。

「調子でも悪いのか？」

心配そうに聞いてくる始。

顔を上げて首を振った。

「いや、大丈夫。……けど、ちょっと風に当たってくる」

そう言って薫は道場を出た。

そのまま家の敷地内からも出て、当所あてどなく歩き始める。

一度、この事を晴子に相談してみたことがあった。

しかし、彼女は意味深に笑うばかりで、結局要領を得なかった。

薫は晴子とよく会っていた。

下校時に待ち合わせをしては、帰り道にある児童公園で、小一時間ほど話をするのが日課になっている。

何時いつだったか、そこであの約束について薫は懇願した事がある。

「なあ、晴子姉ちゃん。千倍って言うのはどう考えても無理だから、

一・二倍位にしてくんねえかな？」

情けない顔で薫がそう言っていると、彼女は大笑いした。

結局ダメだ、という事だった。

顔を上げると景色が変わっていた。

架梶山に続く山道。

「よし」

頷いて薫はそこを歩き出した。

ここには、彼女のお気に入り場所があった。

「ちわーっす」

善一郎が秋名家を訪れると、庭でクールダウンしている始がいた。他に生徒達がいらないから、稽古は終わったのだらう。

こちらに気付いて「やあ」と手を上げてくる。

それに軽く頭を下げて、持っていた包みを掲げてみせる。

「今日はすき焼き用の肉もって来ました」

始の目の色が変わる。

大好物の内の一品である。

「いや、おっさん涎涎」

「お、すまん」

そう言ってジュルリと口元を拭う。

まんま肉食獣である。

「で、薫は？」

辺りを見回してみても、姿が無かった。

「飯の準備もう始めてました？」

「いや」

始が首を振った。

「稽古中にふらつと何処かに行ったきり、帰ってきてないな」

「こんな時間までですか？」

胸ポケットから懐中時計を取り出す。

見ると時刻は七時に差しかかるうとしていた。

「どこ行くて言っていました？」

「うん。……風に当たってくるって言っていたな」

腕を組んで記憶を探る始。

「……………分かりました。ちょっと心当たりあるんで俺探してきま

す」

そう言つて善一郎は駆け出した。

「おっさん肉先に食つてんなよ！」

「わかじゅるてる」

……釘を刺しておいて正解だったらしい。

善一郎は急ぎ足で架梶山にむかった。

架梶山の中腹辺り。

開けた視界に町が一望できる場所に、薫はいた。

「……やっぱココに居たか」

乱れた息を整えて、善一郎は薫に近づく。

少しは鍛えた方が良いのかもしれない。

「探したぞ」

そう思いながら、その場に腰を下ろして彼女に声を掛ける。

足に乳酸が溜まっていた。

疲れた声に、驚いたように薫が振り返った。

……そこからの一連の薫の行動は、後々になっても善一郎には良
く理解できていない。

振り返つて善一郎の顔を見る。

見る見るうちに情けなく表情が変わっていく。

泣きそうな目で、口をへの字にした後、俯いて深くため息をつく。

しばらく肩を落として、不幸のどん底みたいな空気を漂わせる。

諦めたように顔を上げると、ブンブ力腕を回し始める。

静かに善一郎に近づいていって、至近でジーッと顔を見た後。

もう一度、今度は諦観の混じったため息を吐く。

フウツと強い呼気が流れ、次いで腕を振りかぶった。

善一郎の視界で拳が大きくなっていく。

「ぐああああああああああああああああ」

「あ、あれ？」

鼻と唇の間を押さえて転がる善一郎。

「な、何で手ごたえがあるんだ？」

薫は不思議そうに自分の拳を見ている。

善一郎はそれ所ではない。

死ぬほどの痛さではなかった。

死ぬ痛さだった。

「ぐあああ。なに？ なにこれ？ 何でこんなに痛いのか？」

ごろごろと転げまわっている善一郎は、何故か笑顔だった。

「……しかも何でか俺ちよつと笑ってるし」

あまりの痛さに神経伝達が上手く行かなかつたらしい。

笑いながら痛みを訴えている姿はかなり不気味だった。

「あれ？ 善一郎？」

今気付いたと言わんばかりの薫の声に、痛みを堪えて善一郎は立ち上がる。

「そつだよ！ いきなり何しやがんだ！」

そう喚き立てる善一郎を、要領を得ない顔で薫が見つめる。

「なに？ お前本物？」

「俺の偽者がいたらつれて来い！ 真つ先にお前の危険性を説いてやる！」

「あ、あはは」

誤魔化すように頭を掻きながら、薫が笑う。

「いや、悪い悪い」

まさかそれで済ませる気だろうか？

「俺はお前に殺されかけたんだぞ！」

「もう大袈裟だな！。ほら、ま、ココに座れ」

「おい！」

「まあまあ、ほら見ろよ夕陽が綺麗だぞ」

「とつくに沈んでるだろ！」

熱^いり立つ善一郎の頭上に、星空のカーテンが引かれていた。

夜の帳が下りた山の中。

緑が謳歌するそこに風が吹いた。

山の空気をたつぷり搔き抱いた風は、心を落ち着かせる匂いを纏っていた。

「だから謝ってるだろー」

「反省が足らん。急所にいきなり拳を叩き込むってのはどういう了見だ」

親の顔が見て見たい、と思い、直ぐに始の顔が浮かぶ。妙に納得してしまう善一郎である。

「……こんな所で何やってたんだよ」

隣を見ながら言うと、薫はバツが悪そうに頭を掻いている。「いや、ちよつと考え事を……」

要領を得ない薫の物言いに、善一郎は首を傾げる。

薫はというと、三角座りでやけに心細そうにしていた。

「それで？　なんか分かったんか？」

静かに首を振った。

「ううん。しかもお前の所為で余計わかんなくなった」

なんだとこのやろつ、と思うものの、膝に顔を埋めて沈んでいる薫を見ると何も言えなくなる。

はぐと大きくため息を吐いて、善一郎は胸ポケットを探った。中のあるものを取り出す。

「……何これ？」

それを薫の前にぶら下げると、怪訝そうな声を出した。「時計」

それは懐中時計だった。

大航海時代ヨーロッパで作られたもので、キャプテンウォッチとかいうらしい。

細い金鎖に同色の本体、蓋は開いていて、デュアルタイムの装飾自体はシンプルな文字盤が、薫の方を向いていた。

「くれんの？」

「だつ、やるか！ お前意地汚いぞ」

ちえッと言った薫が両手で受け皿を作ったので、そこに落としてやる。

じやらつと音を立てて、鎖が手の上でとぐろを巻いた。

「お前のか？」

「いや」

首を振った善一郎を、薫が見つめる。

「父さんの」

「え？」

驚いた顔で、時計を見る薫。

難しい顔をして、どうやら記憶を探っているらしい。

「家のもの整理してたら見つかった」

「……そうか」

善一郎は立ち上がった。

大事そうに時計を触っている薫の頭をクシャリと撫でる。

不思議そうに見上げる視線と指の隙間から目が合った。

「薫のおかげだよ」

「……なにが？」

「……これ見つけたの。お前が一緒になって泣いてくれただろ。おかげで、ちゃんと片付ける気になった。……ありがとな」

照れ臭くなって、そっぽを向いてしまう。

「そっか……」

チラッ、と薫の方を窺うと、嬉しそうに時計を撫でていた。

「なあ」

急にこちらを向く薫。

慌てて前を向く善一郎。

「これ一日貸してくれねえかな？」
「ん？」

見ると、真剣な眼差しで、善一郎を見つめる薫の顔がある。

「うーん……」

顎に手を当てて考え込む。

正直言つと、あげて良いとも思っている。

遺品は他にも残っていたし、父母が可愛がっていた薫に、何か形見分けしたいとも思っていたからだ。

只、薫の真意が気になった。

時計を一日借りたところで、どうするといふのだろつ。

よっぽど気に入ったという可能性もあるが。

「……いいけど、なんでだ？」

だから素直にそう聞いた。

「……私だけのおかげじゃないからだよ。おじさんとおばさんに、まだちゃんとお礼言っていないからな」

「はあ……」

そう言つてニツコリ笑う薫だが、善一郎にはサッパリ分からない。おじさんおばさんつて言うのは、自分の父と母のことだろうか。

「あゝ、なんか分かんねえけど。いいよ。つつか、やる」

「え！ いいのか！？」

驚いて顔を上げた薫に笑つて頷いてみせる。

「ありがとう！」

すっかり元気になっている薫に苦笑が漏れた。

「ああ。……あゝけど、それが無いと、俺、時間が分かんねえや」
だから意地悪でそう言つてみた。

「そんならさ」

大事そうに時計を見つつ、薫が笑いながら言つ。

「ずっと一緒にいれば良いじゃん」

「は？」

驚く善一郎の前で、時計を持ったまま頭の後ろで手を組む薫。

「そしたら、いつだって時間教えてやるからさ」

「そりゃそうだろうけど……じゃ、なにか？ お前が行くところに俺は付いて行かならんのか？」

そんな事を言いながらも、何だかくすぐったくなつて、善一郎は笑つてしまう。

それにつられる様に、薫もより一層笑顔を深くする。

「当たり前だろ。どこに行こうとだよ。アメリカだろうと、インドだろうと、マーライオンだろうと」

「マーライオンは場所じゃない」

そう言つた善一郎に、少しだけ笑いを引つ込めた声が向けられる。
「嫌か？」

善一郎の目に映る、ちよつとだけ不安そうな笑顔。

「……………わかつたよ！ 付いていけば良いんだろ！ ハワイだろうがガンジス川だろうがマチュ・ピチュ遺跡だろうが八甲田山だろうが！ どこだって付いていつてやるよ！」

自棄つぽくそう叫んだ善一郎に、びっくりしたような顔をした後、薫が大きく笑い声を上げた。

町には明かりがともっていた。

夜空の星が湖に写つたような町灯りが見える場所で、二人はいつまでも笑いあつていた。

その頃。

「じゅるじゅるじゅるじゅるじゅる……」

すき焼きの肉の前で、始の涎がガンジス川にも負けない勢いで流れてい……………いや、それは、まあいい。

——これは、東町商店街にアーケードが出来る前の、二人が初めて約束を交わした時の話。

番外編 1 ”約束”（後書き）

読んでいただいてありがとうございます。
お久しぶりでございます。

ヒーローの条件、番外編でございました。

えー、いかがだったでしょうか？

少しでも楽しんでいただけたなら良いんですけど。

他の二話。

年内には無理かもです（笑
すいません。

なるべく早く書き上げますんでその時はまた読んでください。
感想お待ちしております。

それでは失礼させていただきます。

番外編 2

”欠伸”（前書き）

大っっっつ……変！ お待たせいたしました！

ヒーローの条件番外編二話目でございます。

待っててくださった皆様、ありがとうございます。それから、すみませんでした。

…本当ならこんなに時間がかかる筈ではなかったんですけど……。
スランプと言いますか、なんと言いますか。

まあ、とりあえず言える事は、使わなかったネタ消化しようとして、新しく没ネタ作ってりや世話ねえなあ、と。

…えーと気を取り直しまして…この話は、商店街最後の闘い前の三日間の間に何があったのかなー？ っていう話です。

幾つか細かい部分で本編と繋がっていない所がありますが、番外編という事で笑って許してくれると有り難いです。

それでは、暇つぶしの一助にでもなれば幸いです。

…ホント、遅くなってすみませんでした！

番外編 2

” 欠伸 ”

決して優しくもない午後の陽射しにも負けず、引つ張られるような強烈な眠気が襲ってきた。

がくんがくん頭が落ちながらも、分厚い陽の光が眠りの国への道を塞いでいるのだから、始末に困る。

体の中にはいつまでも睡魔が居座り、その状況に抗議するように欠伸がこぼれた。

「くあ……」

大きく口を開けると、目の端に水気を感じた。

滲んだ視界の向こうに触発されたように口元を押さえるクラスメイト達の姿が見える。

欠伸がうつつたか、それとただ単に世界史の授業が子守唄の効果を持っているのか……。

—— だって……。

そんな光景のどこかに、閃くように記憶の一つが反応した。

ぼんやりとした頭で正体を探るが、蔓延る眠気の所為でどうにもハッキリしない。

…… この声は誰の声だったけ？

全てを包む陽だまりのような優しさ、とは違う……… 雨？

そう雨だ。

傷ついた部分に柔らかく染み込む、暖かい雨を思わせる落ち着いた声。

—— 欠伸って……。

じれったいほどゆっくりと記憶が蘇っていく。

それとは裏腹に、その先にあるものの正体を頭のどこかで解っているのか、現実が一つの光景をずっととらえていた。

そうだ、だったらこいつは何なんだ。

…… まあ、その疑問はあらゆる意味でずっと纏わり付いているのだ

けど。

堪えるように顔をしかめていたそいつが、とうとう諦めたように大口を開けた。

ふあゝと声を出しながら、情けなく皺のよった顔を晒す。

……まるで人間みたいに。

——だって、欠伸って…。

…思い出した。

いつだったか、家に祖母さんの昔からの友達だと言う人が来たことがあった。

コレはその人が言っていた言葉だ。

……確か。

——だって、欠伸って…。

——^{かたき}敵にはうつらないって言うでしょう。

……この度その説が間違いだと判明いたしました。

^{ゴールデンウィーク}黄金週間が明けて初日。

すっかり金色のメツキが剥れて鉛色の正体を見た俺とは違い、クラスメイト達は有意義な休日を過ごしたらしい。

当然のように聞こえて来る、どこそこに行っただの、何それをしただの、土産話とも自慢話とも取れる話の数々は、俺にとって耳の毒にしかならなかったが…。

中には海外に泳ぎに行ったとかで、綺麗なチョコレート色をしている女子の集団まであった。

わざわざ海を渡ってまで海に入りに行く気持ちは理解できないが、

外国の方がきつと海開きが早いのだろう。

……何でもいいけど海海言い過ぎた。

そんな楽しそうな話の輪には加わらず、俺は一人席に着き、分厚い紙の束で顔を仰いでいた。

暑気を嫉妬心ごと吹き飛ばすように必死で風を送りつけるものの、引いていく汗より浮き上がるそれの方が圧倒的に多い。

暦は五月に入ったばかりだというのに、太陽は一足早く夏を先取りしていた。

火の国と言えば熊本だとばかり思っていたが、ここ、映都東も負けないくらい熱い日が続いている。

クラスを見回しても、自主的に衣替えを行っている生徒ばかりだ。強烈な日光を体いっぱい浴びている現状では、蝉の声がしないのが不思議なくらいだった。

「はよ〜っす」

外の陽射しと同じくらいのワット数を持つ明るい声が、俺の手から紙の束をひったくって行った。

こちらを窺うような少しの沈黙のあと、

「秋名君…嫉みなんて不幸のもとだよ？」

そう言って、ちゃっかり俺の机の一部を陣取ってしまう。

「弾けて混ざれ」

「要求がエスカレートしてるよね」

鞆を肩に掛けたままの国東が、ご丁寧に空いてる椅子まで引つ張ってきて、俺の前に鎮座していた。

視線はペラペラとめくる課題に落としたまま、楽しそうに口を開く。

「……見る限りじゃあ、充実した休日をお過ごしただけど」

「うっせ」

「あはは。ごめん、けどよく終わらせられたね〜」

机の上に、厚さ五センチはある紙の束を放りながら、簡単にのたまってくれる。

……本当によく終わったもんだ。

そう思うと嫌でも昨夜の記憶が蘇ってきた。

課題は、そのまま出題者の性格が表れるような底意地の悪さに満ちていた。

口にしたくもないような事情で色々と忙しかった連休中にも、何とか残り数ページという所まで課題を片付ける事が出来たものの、これまた口にしたくないような用事から帰宅した俺は、その残りを開いてみてそのまま固まってしまった。

そこには、小さな字で書かれた無数の数式が、残りの数ページに亘^{わた}ってひしめき合うようにして存在していた。

ページの隅にいた可愛らしいウサギのイラストが「頑張れ！もう少し！」なんて応援してくれていたが、どう考えてもこいつは出題者の使い魔だ。

心なしか、浮かべる笑顔にも悪意が見え隠れしている気がする。

そのまま、ウサギ型の低級魔族を睨んでいてもしょうがないので、折れそうな心を奮起させて課題に取り掛かった。

始めてみると、問題自体はこれまでの応用ばかりで特に難しいところは無い。

しかし、如何せん量が尋常じゃなかった。

作業は深夜にまで及び、最後にはしばらく滞在する事になった居候まで駆り出しての（と言ってもほとんど役には立たなかったけど）総力戦となった。

ようやくデスマラソンのゴールが見えてきたところには、俺の顔に朝日が降り注いでいた。

この時、頼れる助っ人は課題のあまりの辛さに「故郷^{くに}に帰りたい」と強烈なホームシックに罹ってしまったあと、いつの間にか隣で寝息を立てていた。

ジリッ…と音を上げかけた目覚ましの頭を叩いて彼女を寢床に運んだあと、救援の期待できない戦いを強いられながらも、何とかな

ったから現在に至る、という訳だ。

おかげで一睡も出来ていない。

「死人のような顔だね」

……それを何故弾んだ声で口にする。

国東はうつすらと隈の浮かんだ俺の目元を見ながら、楽しくてしようがないって顔をしている。

「楽しそうだな」

「まあね。うん。実際よくやったと思うしね」

「……俺には千葉ちゃんの課題をサボる度胸なんて無い！」

「強い弱気だな」

見本市にも並んでそんな虚勢を張る俺に国東は呆れたような声を出す。言葉自体に反論は無いらしい。

コクコクと頷いていたかと思うと、ぱんツと手を打った。

「そうだ、その千葉ちゃんに来る途中会ったんだけど」

表情はどこまでも軽薄で、その癖声には秘密を少しだけ含めながら、国東は小声を耳に寄せてきた。

「なんかウチのクラスに転入生が来るらしいよ」

「転入生？」

うん、と頷いて、途端に表情が崩れる。

作りだけは無駄に良い顔が、頭に花が咲いちゃったように緩んだ。

「どんな娘こだろうね。楽しみだね」

彼にしか行けない花畑に行ってしまった友人は放って置くとしても……転入生ねえ。

意識した所為か、他の生徒達の声の中にもその言葉が含まれていることに気付いた。

「転入生だって。女の子らしいよ」

「ふん。何か事情でもあるのかな？」

「何で？」

「だってこんな時期に転入してくるなんて……」

「二人ともなんでボーっとしてるの？」

「なんでって………うわあっ！」

驚いて顔を上げると、水城さんがびっくりした様な顔でそこに立っていた。

他の生徒たちと同様夏服に身を包んで、いつものように丁寧に編みこまれた三つ編みを心細げに弄っている。

気持ちを落ち着ける作用でもあるのか、徐々に表情にいつもの平静さが戻ってくる。

「おはよう。何してたの？」

「お、おはよ」

別に関心したい事をしてた訳でもないのに、妙に言葉に詰まってしまう。

「い、いや、何かうちのクラスに転入生が来るらしくて」

スムーズに出て来ない言葉で何とかそれだけを伝えようと、転入生？ と水城さんは首を傾げた。

そのまま考え込むように顎に手を当てていたかと思うと、サーッと顔が青くなっていた。

知らず内だろうが、手がまた三つ編みに伸びている。

「……まさか、あれって……じゃあ、今朝のあれも!？」

「え、あ、あの」

今朝のあれってなんですか？

どこまでも不穏な独り言を撒き散らしながら、水城さんは自分の席に向っていった。

何度かクラスメイトと肩をぶつけ頭を下げていたが、やがて発条が切れたようにストンと椅子に腰が落ちた。

「……今朝のあれ」

——何か事情でもあるのかな？

級友たちの会話の一部が頭の中で再現される。

事情のある転入生と水城家の今朝のあれ、か。

……臃げながら、イコールの先にあるモノが見えた気がした。

嫌な予感ばかり当たるのはどうしてだろう。

チャイムとほぼ同時に現れた千葉ちゃんは、意味深な視線を俺に向けたあと、溜息のような声でこう言った。

「……うちのクラスに新しいお友達が来ます」
言葉とは裏腹にその声に力が無い。

入って、という声に促されて、教室に現れた新しいお友達の姿を見て、教室は水を打ったように静まり返った。

……無理も無い。

あらかじめ予想していた俺だって、実際目の当たりにした光景にはうめき声すら出て来ない。

「只今教官殿のご紹介にあつた通り、今日から皆のクラスの一員となる……」

転校生と言えばココツという位置に立つた彼女は、カッカツと軽快にチヨークの音を走らせて名前を板書していく。

広い黒板を目一杯使って名前を書いた人物が、スカートを揺らしながらクルリとこちらを振り返った。

「如月ハニ子である。以後よろしく頼むのである」

デッカク白い文字で書かれた名前は、何度読んでも、どれだけ角度を変えてみたところで如月ハニ子だった。

加えて、青っぱい髪と、顔の中心で印象強く輝くエメラルドグリーンが、現実には裏づけを与えてくれる。

蘇える東町商店街の悪夢。

自称美少女型アンドロイド、水城さんちの新兵器が、制服に身を包んだ無い胸を反らして腰に手を当てて立っていた。

窓の方に視線を向けると、そこん家の次女が嘆くように頭を抱えて

いる。

「い」

と最初に言ったのは誰だったか。

その一声でタガがはじけ飛んだように、途端に教室内が喧騒に包まれた。

「いいの！？ 学校にアンドロイドってっ！？」

この学校に通っているのは殆どが地元生まれの地元っ子だ。

事情通じゃなくなつて、商店街の事は知っている。

「あ、じゃあ、やっぱり商店街の子なんだ…」

「まあ、可愛いからいいんじゃない」

大騒ぎしだした生徒達に千葉ちゃんがパンパンと手を打ちながら声を上げた。

「こら、うるさい！ 他の教室も朝礼やってるんだから！」

騒がしい中でも簡単にはかき消せないほどの大音声だったが、直ぐに声の渦に飲み込まれて意味をなくしてしまう。

「あ、はい、如月さん誕生日はー？」

「おととい産声を上げたばかりである」

「じゃあじゃあ、好きな食べ物とか」

「重油」

重油…？

立て続けに起こる質問にハニ子が一々答えていく。

どう見ても機嫌良さそうなのが見ていて解るが、隣に居る千葉ちゃんの怖い顔が気にかかる。

「どうして学校に来たんですかー？」

その質問に思わず顔がハニ子のほうに向かった。

誰かの口から上ったその質問は、意識を向けさせるには十分だった。見ると、千葉ちゃんも険しい表情を、少しだけ意味を変えたものになっている。

「それは…」

ハニ子が言いかけたとき、ばちつと俺と目が合った。

何事かを考える素振りを見せたあと、弾けたように指を差される。

「あーーーーー！」

突然叫び声を上げた転入生に、周囲の耳目が彼女が指差した方向に向かった。

静けさを取り戻した教室でロック・オン・ミーだ。

「き、き、き、き……」

…一生吃^{ども}つて欲しい。

急激に注目度を増した俺の背中に冷や汗が流れ始める。

どう考えても、ここからじゃ八二子の口を塞ぐ事はできない。

「貴様！ サンレッツ……ひだっ」

あわやと言う所で、千葉ちゃんが平手打ちでハタくように、八二子の口を塞いでくれた。

据わった目と引き結んだ唇で、怯えるような涙目で見上げられても知らんぷりだ。

「ああーっと…秋名君。今から如月さんと一緒に彼女の机とって来てくれる？」

話の転換としてはかなり強引な気はしたが、俺は椅子を蹴って立ち上がった。

「よ、喜んで！」

この機会を逃してなるものと、駆け寄って八二子を抱え上げ…

…重っ！

「ごめん、よろしく…」

八二子の意外な重さでプルプルなってる俺の耳元で千葉ちゃんが小さく囁いた。

教室を飛び出して俺が向ったのは同じ校舎の一階だった。

このフロアは殆どの教室が倉庫と化していて、入っているクラスは一つもない。

一日が始まったばかりだと言うのに、廊下は放課後のような静けさ

に包まれていた。

廊下に満ちた静けさを足音で蹴散らしながら、その最奥にある用具室へと飛び込んだ。

「お前何キ口あんだよっ!？」

机が乱雑に並んだ室内にサーフボードのように抱えていたハニ子を下ろし、息も絶え絶え開口一番そう叫んだのは、右腕の震えが止まらないからだ。

「八十一キ口」

臆面も無くそう答えられる。

「はちっ……」

思わず右腕を見てしまった。

緊急事態とは言え、よく持ち上げたものだ。

「じゃなくって……貴様!」

絶賛マナーモード中の右腕から視線を上げると、ハニ子に指を突きつけられていた。

どこかの国だと指差しがトンでもない失礼に当たるそうだが、その気持ち少し解る。

「なんだよ?」

こいつの次の言葉は解っているし聞かれて困る人も居ないから、特に慌てる必要も無い。

余裕を持って答える俺に、ハニ子が少しばかりたじろいだ。

「何って、貴様サンレッドだろう?」

サンレッドだった事なんて一度も無い! と叫びたかったが、雑ぜつ返しても仕方がない。

「もう違う」

「へ?」

あっさり言うと、ハニ子が上擦った変な声を上げた。

口をぽかんと開けたマヌケ面で、指先からもしおしおと力が抜けていく。

「もう違うって言ったの」

「なんで？」

無邪気に聞かれて思わず嘖き出しそうになった。

「お前の所為だ」

「…え？…え？」

わざと深刻ぶって言うのと、困惑したような表情で目が泳ぎだす。精神的な打たれ弱さはともかく、そんな人が良さそうなりアクションで果たして悪の組織が務まるのか。

「ぶつ、な、何だその顔は」

笑いながら言った言葉に、一瞬きよとした顔を見せたあと、跳ね橋みたいに眉毛が吊り上った。

「貴様騙したな！」

「……いいや、ほれ」

俺はシャツをめくり上げる。

腰に巻かれたのはどこにでも売ってる様な何の変哲も無いベルト。光を反射する銀色のバックルの、どこにも秘密は無いはずだ。

……というか、あつたら嫌だ。

「……あ、あれ？ 本当だ」

ハニ子が哑然とした表情で俺の顔とベルトの間で視線を彷徨わせる。

顔全体でなんで？ と問いかけていた。

「お前……自分で言ってた事もう忘れたのか」

——だ、だって、わたくしはそういう目的で造られたのだ。相手が油断し、なおかつ攻撃を躊躇^{ためら}つてしまうようにと。その為可愛らしい容姿をしているらしい。

「……それにまんまと嵌まつただけ」

「嵌まつただけって、だったらベルトは！？」

「今樹がしてる」

「イ、イッチーが？」

だから何故イッチー？

未だにそのあだ名は良く解らないが、俺は頷いた。

ただ、ベルトを託した頼れる助っ人は、今頃布団の中で故郷の夢を見ている。

「…何で解った？」

「何がだ？」

「何がって、その、俺の、正体」

何となく言葉が詰まってしまうのは、正体なんて単語を使う日が来ようとは思ってなかったから。

気恥ずかしさ全開の俺とは対照的に、八二子は鼻を鳴らしてふんぞり返る。

「それくらいわたくしにとっては朝飯前なのである。この体に内蔵されたありとあらゆるセンサーが貴様をサンレッドだと雄弁に物語っていた」

「お前がそんな事出来るわけないだろう」

「貴様、わたくしを何だと思ってる…」

「……言ってるの？」

俺が真剣に驚いていると、八二子が悲しそうな顔をしていた。

「……話を変えよう。」

「んで、そのお前が何しにこんな所に来たんだよ？」

「……こんな所って、貴様が担いで来たんだろう」
「違ーう。」

何故か可哀相なモノを見る目で見られながら、額に手を伸ばされる。

「い、熱なんかない！ そうじゃなくて、何で学校なんかに来たんだって聞いてんだよ」

「何だそっちか」

伸ばしかけてた手を引っ込めて、それをそのまま腰に持つていく。
「まあ、貴様などに聞かせてやる理由は全く、これっぽっちも無いのだが、どうしても言うなら……いいだろう教えてやる」

そう言って、これでもかという位にふんぞり返られた。

しかし、そんな態度を取るんなら、まずその嬉しそうな顔を引っ込

める。

ハニ子はキラキラ輝く瞳で、入学理由を話し出した。

「それは勿論わたくしに課せられた任務だからである」

「に、任務って、お前ここで何かやらかすつもりなのか？」

「……何かって、何をだ？」

知るわけ無いだろう。

まさか真顔でそんな返しをされるとは思わなかったから一瞬言葉に詰まる。

てか、なんだか話がかみ合っていないような。

「な、なあ、任務って何？」

「決まっている。学生の本分とは学業を修めることだ。それ以外に何がある」

またも真顔。それに若干の軽侮が混じっている気が。

…もう何て聞けばいいのか解りません。

「えええつと、じゃあ…えーと、あ、わかった！ 何て言われて学校に来たんだ！？」

これだ！ これならハニ子の向こうにいるヤツの意図がわかる。

あの蝶々女の意図が。

うーんと顎に手を当てたハニ子が、抜群の再現度でブルームの口調を真似た。

「こんな所に閉じ籠もってても退屈でしょう、学校にでも通ってなさい。って言われた」

ここは託児所か。

耳に慣れた声音を聞いた途端、膝から崩れ落ちそうになった。

…まさかの丸投げだ。

まあ、昨日の暴走を思えば、放逐したくなる気持ちも解らないではない。

「ど、どうした？ やはり熱があるのか？ そう言えば顔色が悪いのである」

それは徹夜による寝不足の為だ。

倒れてしまうとそのまま起き上がれない気がするので、何とか踏ん張る。

「いや、大丈夫。それより大体解ったから、とつと机選べ」
頭がクラクラするのは果たして眠気の所為だけだろうか。

近くにあった机に手をつき、しっしつと八二子に手を振る。
極めて不満そうな顔をしながら、机の森に入っていく八二子の背中が、何故か休日のお父さんのそれとダブって見えた。

幸い、と言うかなんと言うか、一時間目は千葉ちゃんの数学だった。

授業終わりに課題を回収する手伝いを兼ねて、職員室まで帯同する。

「……もの凄く本当っぽいんだけど」

用具室でのやり取りを話し終えての、千葉ちゃんの第一声がこれだった。

「笑えないのが、多分本当の本当だって所なんすよね」

職員室の千葉ちゃんの机の上は相変わらず混乱を極めていた。

（これどこに置いたらいいんだろ？）

手荷物をどうしていいか解らないまま、机の周りをうろろろしていると、さつと横から掠め取られた。

そのまま、詰めあがった書類の上にポンと投げられる。

……何でも良いけど扱いが軽いぞ。

「私もそう思う」

答えながらも、次の授業の準備なのか、器用に机の上から必要な教材だけを取り出していく。

「学校の手続きとかってどうなってるんですか？」

あった、と呟いてでかいコンパスを取り出した千葉ちゃんは、それが、と頭を掻いた。

「上からの直々のお達しでね。あ、本業じゃない方のね」
て事は学校の？

「なんでも理事長の知人の娘さんを預かるって事になってるらしくて、それ以外は何も情報は無し。ま、あるわけ無いんだけど」

更に何冊か教材を掘り当てた所でチャームが鳴った。

片付ければいいのと思うものの、本人に不便そうな様子も無い以上何も言えない。

「だから、悪いけど、あの子の事君が面倒見てよね」

「そう俺が………なに？」

微妙なバランスで揺れている書類タワーに目がいった為、反応が遅れた。

「だって、君意外に本当の意味で頼める子っていないんだもん」

何て嬉しくない言葉だろう。

一瞬脳裏に水城さんの顔が浮かんだが、千葉ちゃんは彼女の家の事を知らない為当てにはできない。

他に良い言い訳はないものとまごまごしている内に、千葉ちゃんが立ち上がった。

「秋名君が闘うわけじゃないっていうのは聞いたけど、情報は多いに越した事ないでしょ？」

ポンと肩に手を置かれる。

何かとんでもないものをタッチされた気がして、慌てて手を伸ばすが、千葉ちゃんの姿はいつの間にか職員室の出口付近にあった。

「じゃ頼んだね。あ、それから、顔色があんまり良くないよ。辛かったら保健室でちゃんと休みなさい」

急に教師らしい事を言ったかと思うと音を立てて扉が閉まり、千葉ちゃんはずっとと出て行ってしまった。

「………なんか………余計やるが増えた気がする……」

しかも既に両立出来そうもない。

人の居なくなつた職員室の中で、眠りながらどうやったら人の面倒をみれるか、割りと真剣に考えた。

「やっぱり私も何か手伝うよ」

申し訳無さそうにする水城さんに、俺は首を振った。

「いや、俺一人の方がいいと思う。一緒に居たら水城さんとはとかく、ハニ子は何言うか解んないし。だいいち千葉ちゃんに見つかった時の言い訳が思いつかない」

言いながら、自分の立ち位置がメチャクチャ複雑になってることに気が付いた。

しかもどの陣営でも極めて末端にいる気が……止めよう。

考え始めたら泣いてしまいそうだ。

「でも……」

なおも何かを言おうとする水城さんを手で制して、俺はストローを銜えた。

昼休みの屋上は日差しを嫌ってか人の姿はまるで無かった。

空を見上げると、旅人のコートを脱がそうと太陽が必死で頑張っている。

級友達が外に出たくなる気持ちも解らないではなかったが、屋上の出入り口になっている建物の壁際には日陰が出来ていて、意外なほど涼しかった。

安全策として周りを金網で囲まれてはいるものの、開放感は教室内とはまるで比べ物にならない。

温くなった乳酸飲料をズルズル吸っていると、大人しくしていたはずの眠気が頭をもたげてきた。

横を見ると、水城さんの膝を枕に、ハニ子が寝息を立てている。

省エネ対策のスリープモードと本人は言っていたが、どう見てもただの熟睡だ。

これで鼻ちようちんがあれば完璧。

「ふあ…… あああ」

そんな妙に長閑な光景と、食後で体もあつたまっていた所為か、抑えていた眠気が欠伸になって表れた。

一緒に背筋を伸ばすと、バキバキッと大きく鳴き声を上げる。

「……眠いの？」

八二子の頭を撫でていた水城さんが俺の様子に気付いて声をかけてきた。

「あ、うん。ほら課題で徹夜して。……最後でつかい落とし穴があったし」

暗い顔で答えると、水城さんは目を細めて口元に手を当てた。三つ編みを微かに揺らしながら、確かに、と小さく口にする。

……そう言えば、水城さんも課題出されてたな……。

その割には血色も良いし、課題もきちんと提出していた。色々あったとは言え、増援を繰り出してまで徹夜した俺とは大違いだ。

「だから結局昨日から起きっぱなしで」

なんだか急に情けなくなつて、頭を掻いてしまう。

「……じゃあ……」

視線を八二子に落としたまま、水城さんがボソリと呟いた。

「………使う？」

「…な」

何を？

と俺が続ける前に、水城さんが、がばつと顔を上げた。

眼鏡が微妙にずれて、目が真ん丸になっている。…何故俺より驚いた表情をしているのかは解らない。

その顔が超スローカメラで撮影したように、ゆっくりと赤くなっていく。

こちらはこちらで、何を？　なんて思ったものの、視線が先程から気持ち良さそうに寝息を立てている八二子に釘付けになっている。もつと言えは彼女が枕にしているもの。

……使う、って言うのはつまり……。

なんだか急に気温が二度くらい高くなった気がする。

「え、ええつと……」

こ、言葉が続かない。

じゃあ、失礼して、何て言えるわけないし、それ以前に勘違いだった場合、俺はヘイソウ送りでグンポウカイギだ。
い、いや、違う、多分何か違う。

熱を持った脳みそとまとまらない思考が、もう一度「何を？」と口にさせようとしたところで、

――ガチャン…。

扉が開いた。

「あ、居た、秋名〱先生が…」

「ふん！ と、あーちよつとスライス気味か」

「……ふあ、ふあ〱」

グッジョブだ。

座ったままの水城さんが控えめながらノツてきてくれる。

屋上で不自然なゴルフ場コントを繰り返す俺たちの姿を見て、現れた人影、国東が「あ〱」と言っただけで手を押さえた。

こいつにしては本当に珍しい真剣な声で「しまった」とかなんとか呟くのが聞こえた。

空手でフルスイングをした俺の視界の隅で、申し訳なさそうに扉の隙間から退散していく。

「何か用事があったみたいだけど、代わりに僕が聞いてくね〱」

扉が閉じる寸前、隙間から手を合わせる姿が見えた。

――カチャン…。

「……」

「……」

……。

「はああああ〱」

扉が閉まった瞬間、緊張と驚きから固まっていた筋肉が一気にほぐれた。

コンニャクかトロテンか、とにかく煮て固める系クニャクニャ群よろしく、体が地面とこんなにちわる。

水城さんも同様のようで、脱力から肩を落とした姿が小柄な体を

いつもより一回り程小さく見せていた。

「び、びっくりしたー」

灰色のコンクリートを見ながら呟くと、一緒に汗が零れ落ちた。小さく歪んだ円の分だけ灰色が濃くなる。

「うん」

顔を上げると、こくんと水城さんが頷いた。

数秒前の名残が微かに頬を赤く染めていて、つられるみたいにして体温が上がるのを感じた。

照れ隠しから、俺は口を開く。

「眠気、飛んじやったな」

ボンツと音を立てそうなくらいに赤面したのを見ると、どうやら失言だったらしい。

いつもの帰り道に、二つの長い影が伸びている。

一日を季節に例えるなら、さしずめ今は秋だった。

景色を赤く染め上げ、食欲が増し食事がおいしく感じる時間。

あちこちにオレンジの手を伸ばしている夕焼けを眺めながら、俺は溜息をついた。

「はああ〜」

結局解消される事のなかった眠気もさることながら、一日中どこかしら緊張していた所為で、体にももの凄い疲労感がある。

なし崩し的にお騒がせポンコツロボの学校での保護者になった俺は、今日一日をハニ子の行動に目を光らせて過ごした。

特に大きな問題は無かったものの、頻発する小トラブルの所為で俺のMPは一日の終わりを前にして既にエンプティゾーンに差し掛かっている。

そんな疲れる学校を出て、大通りを商店街の方向へと歩いていた。架枳川に架かる橋を渡り、道が細くなり景色に住宅が目立ち始めると直ぐに、遠景に東町商店街のアーケードの丸い頭が見えてくる。

そこを抜けて、道を左に折れば暖かい我が家が待っているのだ。

「なあ、おい」

……待っていると言っのに。

ついついとシャツの裾を引かれて、そちらに顔を向けた。

俺の肩より少し低いくらいの高さに青い頭がある。

自分をアンドロイドだと言い張る少女（手が取れるからって何だ）が、エメラルドグリーンの瞳を近くの公園に向けていた。

そこは、今はかなり寂れていて、人気もなく、鉄棒とブランコ意外公衆トイレしかないような場所だった。

「……どうした？」

終礼のあと、主に周囲の護衛としてハニ子と帰るように命じられた。

どうして学校の外まで、と食って掛かった俺に、笑顔を向けながら「帰るまでが遠足」と千葉ちゃんは一言で説明してくれた。

それならバナナくらい出せと、愚痴っていた所での、ついつい、だ。当然声にもトゲが生えている。

しかし、そんなものの微塵も気にした様子の無いハニ子が、スッと手を上げ「あれ」っと公園内を指差した。

銀色の凶器を隠した食指が、鉄棒付近に居た学生服を着た集団に向けられていた。

全員男のようで、彼らの制服を見たところ、俺も通っていた近くの中学の生徒のようだ。

その様子がおかしい。

一人の男子を、数人——六人ほどか——の他の男子が半円を作って取り囲んでいる。

最近ローティーンの間で流行ってる新しい遊び、なんて穿った見方をしなければ、何か揉めているように見えた。

「なんか、揉めてんな……って、おい！」

「ぐえっ」

いきなり現場に走っていかうとしたハニ子の襟を掴んで止めた。

潰れた蛙みたいな声を出した八二子が非難の眼差しを向けてくる…

…まあ、当然か。

「何する気だよ？」

「助太刀するに決まってるだろう」

決然とした眼つきと、迷いの感じられない声が返ってくる。

「加わってどうするんだよ！ もし喧嘩とかだったにしても、止めるだけで良いの！ あとは警察かなんかに言えば…」

「はああ〜」

…溜息を吐かれた。

「それでは、今は良くても問題の解決にはならんだろう。問題が噴出した時に突き詰めて事に当たらねば抜本的な解決にはならないのである」

「……………」

…ちよつと、驚いた。

果たして意味が解って言ってるんだろうか？

それ以前にその常識力を商店街で発揮しろ。

「…という訳で行くのである！」

「……え、ああ……じゃねえ！ 待て！」

「ぐええっ」

再び蛙の断末魔を披露した八二子が、涙目で俺に向かって臨戦態勢を取る。

……右手を外すな右手を。

「何かわたくしに恨みでもあるのか貴様…」

それは有るけど…。

「そうじゃないって。お前手加減なんか出来るのか？」

こいつを初めて見たときの光景がリプレイされる。

満足そうに笑う八二子の傍らで、ボコボコにノサレタ男達が山積みになれていた。

後から人づてに聞いたところ、彼らはナンパ君たちだったらしい。

……流石に後輩達をあんな目には合わせられない。

「……う……」

自覚はあるのかハ二子は口を噤んだ。

いきなり凶器を使おうとするような身では無理もない。

「お前が行ったらややこしくなるだけだろ。……話しに行くだけだったら俺が行くから、とりあえずここで待ってろ」

ハ二子は頷く代わりに、静かに腕をはめた。

そのあと、思い出したように「それなら」と言っつて鞆から何かを取り出した。

手渡されたそれを見て、俺は言葉を失ってしまった。

「ま、待てええーい！」

やけにくぐもった声が、公園内に響き渡る。

この時、事態はいくらか進行していた。

中心に居た男の子が、取り囲んだ内の一人に胸倉を掴まれている。待ったのタイミングとしてはばっちりだ。

「だ、誰だ！」

一瞬体をびくりとさせた中学生達だったが、直ぐに気を取り直して誰何してきた。

ただ、相手が警察官おとこなだった時の事を考慮してか、いつでも逃げられるような姿勢は取っていた。

「何処だ！ 出て来い！」

そう声を張り上げたのは、胸倉を掴んでいた、中学生たちの中でも特に目立つ髪色をしたヤツだった。

なんて言うか、ちょっとでも森の深い所にいたら、鞭を持った考古学者に狙われそんな感じの黄金色。

「こ、ここだ！」

そんな最後の秘宝に、俺はまだ吹っ切れていない叫び声を返した。轟いた声の後を追って中学生達の視線が上がっていく。

やがて、公衆トイレの屋根の上に視線が届くと、見ていた全員が言

葉を失った。

胸倉を掴まれてる子まで目を丸くしていたのが悲しい。

「……お前正気か？」

トイレの屋根の上で、腰に手をあて仁王立ちになっている俺に、いち早く自分を取り戻した最後の秘宝が失礼な事を聞いてくる。

「正気に決まってるだろ！」

だからこんなに恥ずかしいんだよっ！

半ば自棄気味に叫びながら、羞恥心が掻かせた汗を握り締めて中学生達を指差す。

「イジメカツコ悪い！ イジメやめる！」

何故かネイティブ訛りの俺の言葉に、ギャーギャーなんか言い出した中学生達を無視して、これでいいのか？ という意味を込めて振り返った。

トイレの裏の茂みの中に隠れていたハ二子が、満足そうに頷く。

ハ二子の鞆から取り出されたのは、何の変哲もない安っぽいお面だった。

縁日で売っている様なそれは、何の皮肉かヒーローをモチーフにしていた。

……ちなみに色は紅一点のピンク色。

それを手渡されて絶句してしまった俺にされた説明が。

「いざという時、特に顔を隠したい時に使うようにと、よ…ブルーム様に渡されたものである。仮にもわたくしの敵だった男へのせめてもの武士の情けだ」

どんないざ？ 何の情けだった？

困惑しきりで固まっていた俺の背中を強引に押して、しかも登場くらい凝った方が良いとアドバイスまでよこしたハ二子は、俺がトイレの屋根に上るのを態々待ってから茂みに隠れた。

そこですばらく途方に暮れていた俺だったが、最後の秘宝が何か言いながら男の子に掴みかかった為、已む無く最初の叫びに繋がったというわけだ。

「とーおー！」

掛け声だけは格好良く、実際はズルリって感じで屋根の上から飛び降りる。

着地した際の足の衝撃を思えば、こちらを選択して正解だった。着地の時の屈んだ姿勢のまま、足の状態をチェックする。

……うん、どこも問題ない。

「だ、誰だてめえ」

立ち上がった俺に、最後の秘宝の隣に居た、船の前、みたいな髪型のヤツが、おっかなびつくり聞いてくる。

「……………ど、どうしても言わなきゃだめか？」

お面に開いた除き穴から、潤んだ目を彼に向ける。

「こ、こつち見んな！」

…ビビられた。

オールドヤンキー風のファッションに身を包んだ後輩たちにビビられる我が身の哀しさを思いながらも、その態度に密かに覚悟が決まった。

「なら後悔するなよお前ら……俺の名前は……正義のヒーロー紅戦士サンレッド……」

吹っ切れた叫び声に鋭角なポージング。

それを見て茂みの中から拍手が起こる。

これで赤い爆煙でも起これば完璧なのだが、背中にあるモノを思うと結果は只の大惨事だ。

「て、てめえ、どピンクじゃねえか！」

お面を差して最後の秘宝がいいトコに気づく。

けど、そういうのは公園の外で既に散々ハニ子とやった。

「うるさい！そこはもう良い！そんな事より大人数で一人を取り囲むというのは感心しないぞ！」

線の切れた精神と睡魔に侵されて良い具合に発酵した脳が、スラ

スラと口から言葉を吐き出す。

「何か事情があるなら話してみろよ。いきなり胸倉掴むつてのは…

……っつて、おわあっ」

「ウルセエ！ この変態野郎！」

掴んでいた男の子を突き飛ばして、最後の秘宝が殴りかかってきた。

「ま、待てっつて、まずは話し合いを……っあぶねっ！」

只のヤンキーのものとは思えない蹴りをしゃがんでかわすと、最後の秘宝が舌打ちをした。

「チッ、お前只の変態じゃねえな……」

「最初っから変態じゃない！」

微妙にかみ合っていない会話を交わしながらも、最後の秘宝の手は止まない。

…もとい、足だ。

考えてる間に、基本に忠実なローキックが放たれる。片足に体重をかけてそれを受け止めると、続けざまに頭を狙ってハイキックが飛んできた。教科書にお手本として載っているような連続攻撃を、両手で防いで何とか受けきる。

不本意ながら、毎日毎日祖母さんや良く解らないモノの相手をしている身としては、流石にまだ子供の体をしている中学生に負ける気はしなかった。

が、それだけに反撃をするのが難しい。

……一体どの程度、加減をすればいいのか。

（今まで全力でいける相手ばかりだったからなあ）

そんな風に余裕ぶっている、思い出したように残りの面子が駆け寄って攻撃に加わってきた。

「待てっ、い、いっぺんに来るな……いたっ」

背後から蹴られて、前につんのめる。

解っていた事だけとお面を被っていると視界が極端に狭い。

呼吸もしづらいし、こめかみの辺りから後ろは全くの死角といって

良かった。

そんなお面越しに、近い距離で最後の秘宝と目が合った。意外と力強くしっかりと目をしている。

……しかし、一対一で闘う気も他の奴等を止めるつもりも無いらしい。

唐突に目の前に繰り出された正拳突きを受け止め、相手の体を軸にして外側から背後に回りこむ。

がら空きの背中を蹴ってやると、手をワタワタさせながら夕焼けに溶けるような頭がこけそうになっていた。

「はあ、はあ……し、しんどい」

目の前に対峙している中学生達を見ていると嫌になってくる。

どいつもこいつもピンピンしていて、体力も有り余っている。

対してこちらは、徹夜明けの寝不足に今日一日の精神的疲労が重なって、心身ともにレッドゾーンに突入していた。

「は、はなして！ はなして下さい！」

いい加減とつと片付けるかと考え始めた時、背後で甲高い声がした。

「あ」と反応するように、最後の秘宝が俺の後ろを指差す。

「その手に乗るか！」

叫びながら後ろを振り返った。

……もう色々と限界らしい。

狭い視界の中に、いつの間にか茂みから出てきていたハニ子が立っていた。

「……こいつが逃げようとしていたのである」

俺と視線を合わすと、言い訳をするようにそう呟く。

先程までオールドヤンキーズに胸倉を掴まれていた少年が、今度はハニ子に襟首を掴まれていた。

抜け出そうと必死でもがいているが、いかにも華奢なあの体では体重八十キロを跳ね返すのは無理だろう。

しばらく頑張って動いていたが、諦めたのかやがてグッタリと静か

になった。

…力尽きたのかもしれない。

突然現れた美少女（見た目だけは）に、呆けている後輩たちは放つておいて、俺は八二子のほうに駆け寄って行った。

「逃げようと、って、うわっ」

近づいていった俺に放り投げるように少年を寄越す。

条件反射的に腕を掴んでしまう。

「捕まえておけ。逃亡者である」

…今度はお医者さんのハリソンさんだ。

顔を見ようとすると、力のない瞳が逃げるように逸らされた。

「で、お前はどつするんだよ？」

「五分で片付けるのである」

視線を上げて訊ねると、八二子が嬉しそうにそう言った。

不穏な言葉に声を上げかけるが、俺の体力も限界だ。

「手加減な手加減！」

そう妥協しておいて、ぐったりしてる少年と事の成り行きを見守る事にする。

「解っている」

……果たして…。

五分も必要なかった。

目の前に立った美少女に最初はヘラヘラしていた中学生たちだったが、八二子が一暴れすると途端に悲鳴を上げて逃げ出した。

唯一最後まで粘っていた金髪が、今は地面で伸びている。

「お前手加減しろって言っただろ！」

お面を外して怒鳴りつける俺の声にも、運動後の満足そうな八二子の返事は軽い。

「したのである」

それでこれか。

仰向けに気絶している最後の秘宝の姿を見る。

着ている物は砂埃でうす汚れ、あちこちがぼつれたり破れたりしていた。

顔を覗き込むと、微妙に色んな所が腫れていて、鼻からは血が流れて既に乾いた色をしている。

「あ、あの、死んでないですよね？」

「え？」

俺の隣で四つん這いになって一緒に顔を覗き込んでいた少年が、不安そうに聞いてきた。

「ああ、うん。骨も折れてないみたいだし、氣い失ってるだけ」

「そうですか」

そう答えると少年はあからさまにホッとしたような顔で胸を撫で下ろした。

胸倉掴まれていた相手に対する態度にしてはオカシイ気がして、脊髄を嫌な予感が駆け抜ける。

「えっと、何か揉めてたんだよね？」

窺うようにそう訊ねる。

不謹慎にも、そうであってくれと心のどこかで願っている自分が嫌だ。

「あ、多分、はい。別に虐められてた訳では無いですけど」

少年ははにかんだ様な笑顔で頬を掻いた。

まだまだ若さを羨む歳でもないが、純真そうな笑顔がとても眩しい。その輝きが、お面を外した俺には強すぎる。

「だったら何をやっていたんだ？」

制服に付いた埃を払っていたハニ子が、そう言いながら少年の隣に腰をおろした。

はしたないにも程が有るヤンキー座りで、思春期真っ只中の男二人は思わず視線を逸らしてしまう。

「え、えっと、出来ればその前に座り方を変えて欲しいんですけど」「むー」

不満そうにしながらも、座り方を……胡坐に変えた。

地べたに胡坐もどうかと思うが、一応危険地帯は隠れている。

「そ、それで？」

「あ、はい」

気を取り直して聞くと、少年は一瞬だけ迷ったような視線を金髪の方に向けてから、腹を決めたように顔を上げた。

たけなほ

橘海斗と名乗った少年は、何でか苦悶の表情を浮かべている最後の秘宝を気にしながらも、事のあらましを語りだした。

「大宮……こいつ、大宮浩次おおみや こうじって言うんですけど。大宮とは中学に入ってから知り合ったんです」

シャツにインクを落としたみたいで、それでもハキハキとしゃべった口で彼の口は言葉をつむぐ。

それなのに、聞いている俺は気もそそ漫ろ、言葉も殆ど耳に入っていない。涼しくもない風に煽られた少年の顔に、浮かんだ疑問をそのまま投げかける。

「ちょ、ちょっと待って。名前なんだって？」

「え？ 海斗……」

「上の。苗字は？」

「はあ……橘ですけど」

そう言っただけで海斗は首を傾げた。

「兄弟っている？」

「上に、姉が一人……あ」

何かに気付いたように、ハニ子に視線を向ける。

「そう言えば、同じ高校の制服ですね」

振り返った海斗に俺は頷いてみせた。

「君のお姉さんって、美晴みはるって名前じゃない？」

「はい！」

……やっぱり。

元気いっぱい答えて、海斗が大きく頷いた。

橘って苗字自体そうそう聞くモノじゃないし、まさかとは思ったけど…。

「知ってるんですね」

「…お世話になってる先輩だよ」

こんな所で弟さんに出会おうとは……性格はまるで違うが、言われて見れば目元とか似てるような気がするから不思議だ。

……まあ、取り敢えず裸を見られた事は黙っておこう。

へーっと感じたような声を出していた海斗に、ハニ子が横槍を入れてくる。

「そんな事どうでも良いのである」

さては放ったらかしで寂しくなったか。

裾を引つ張られて、「そうでした」と彼は頬を掻いた。

「大宮は入学した当初からこんな感じだったんですけど、同じクラスになって席も隣同士でしたから、何度か話す機会があつて」

喋ってみると、この金髪の少年は案外人当たりもよく、海斗とも不思議と馬が合ったらしい。

「今年のクラス替えてクラスは別々になっちゃたんですけど」

それでも二人は仲良くやっていた。

……それが。

「一週間くらい前に、大宮のお祖父さんが亡くなって、それで実家に帰ってたんです」

大宮浩次の実家は県外に有るらしい。

ゴールデンウィーク前の事で、彼は忌引きを取って学校を休んだ。

「次の日帰ってきて学校に来たんですけど、何だか態度が妙によそしくて」

「どんな風に？」

「えっと、話すとき目を合わせなかったりとか、何だか避けられるみたいで」

それでも、お祖父さんが亡くなったばかりだったし、落ち込んで

いるのかもと考えて、海斗は気にしなかった。

「根が真面目なヤツですから、遊んで気を紛らわすみたいな事も出来なくて。それでゴールデンウィーク中も放つて置いたんですけど」
連休が明けて初日。…つまり今日だ。

気になって様子を見に行くと、彼の態度は連休前と同じで、それどころか頑なにさえなっていた。

これはオカシイと、公園で仲間と屯^{たむろ}していた大宮の所へ行つて、事情を聞こうとした。

「……そこに俺たちがしゃしゃり出て来たわけか…」

「あ、いえ、そういう風に見えても仕方なかったですから」

胸倉を掴まれたのは、しつこく自分が理由を聞いた所為だ、と海斗は説明した。

「全部勘違いかよ…」

大きく溜息をついて、思わず八二子のほうを見てしまう。

今回は早とちりした俺も悪いとは解つていても、視線が勝手に向いてしまうのだから仕方がない。

「ふん、所詮は逃亡者の言う事である」

居心地悪そうにツンとそっぽを向いた八二子に、海斗が言いづらそうに訂正を入れる。

「あ、あれは逃げようとしたんじゃないかって……そ、その……だ、誰か人を……」

「うん。解つてる。マジでごめん」

尻すぼみになっていく言葉後を引き取つて、俺は頭を下げた。

友達が急に現れた仮面……いや、お面の男と争い出したら、そりゃ心配で警察にも駆け出すだろう。

目線を逸らすのも無理のないことだ。

軽拳妄動した自分にかなり落ち込みかけたものの、申し訳なさからもう一度頭を下げようとした俺に、海斗は顔の前で手を振った。

「それはもういいんです。それより…あ、えっと」

「ああ、悪い。…こいつが如月八二子で、俺は秋名大地」

「えっ……！」

ハ二子を見て驚きの声を、と思いきや、見開いた目を向けられたのは俺だった。

「……先輩が…あの？」

…どの？

一体何をどんな風に聞いているのか、海斗の表情に微妙な色が浮ぶ。好奇心と同情が徐々に興奮に変わって頬を染めていた。

「ま、まあ、いいや、で？」

「え、あ、はい」

海斗は何か聞きたそうな顔をしていたが、先を促がすと気になることを口にした。

「秋名さんは、昔……多分僕らのお祖父ちゃん達くらいの代の頃に、商店街で何かあったの知ってますか？」

「商店街で？」

それは、うちの祖母さん達の事だろうか？

自然に、殆ど伝統芸能並みに続いている水城さんの祖父さん達と戦ってる事か、訊ねていた。

もちろん固有名詞は省いて。

海斗は多分違つと首を振った。

「ここで問い詰めた時に、大宮が言ったんです。何だかお祖父さんが言つてた事らしいんですけど、商店街の連中とは仲良くするなつて、特に橘とは口も聞くなつて」

「はあゝあ？」

思わず声が裏返つてしまう。

どつという意味か全く解らない。

大体何でそんな事を他人に決められなきゃいけないんだ？
嫌う相手くらい自分で決めればいいものを。

寝ている金髪に目を下ろすと、ピクリと瞼が動いた気がした。

「だから、商店街でのドタバタとは関係ないと思います」

うちはあんまり関係ないですから、と小さく呟く。

そんな彼の父姉が祖母さんの強力な支持者だと知ったらどんな顔をするか。……知らないみたいだから言わないけど。

それにしても、友達の事で頭が一杯になっているとは言え、ドタバタとは随分本音が出たもんだ。

ドタバタやらされてる当の本人としては更に落ち込みそうになるが、隣に目をやっても八二子はキョトンとしていたので、俺も気にしないことにする。

「悪いけど心当たり無いな」

「そうですか」

そう言つと海斗の表情に翳がさした。

冬の日に太陽にかかる雲みたいにな、不安な寒さを瞳に湛える。

「……えっと、じゃあ、悪いけど俺たちもう帰るな」

少しばかり不安は残るものの、俺はそう言つて立ち上がった。

「あれ？ いいのか？」

珍しく気を使つたように八二子が言うが、俺は彼女に頷いた。

「うん」

……だつて邪魔になるし。

「そうか」

八二子も立ち上がつて、スカートについた砂を払う。

「仲直りできる事を祈つてるのである」

綺麗にし終わると海斗の方を向いて、満面の笑みでそう言った。

「ありがとうございます」

返す笑顔も、ピカピカの向日葵みたいな笑顔だ。

無垢な人間しか出来ない笑顔をかわしあう二人に眩しい思いをしながらも、俺は二人に声をかける。

……海斗と、後ろで寝たふりをしているその友人に。

「ホントに悪かったな。何か引つ搔き回すだけ引つ搔き回して」

「いえ、おかげでちゃんと話しができますし。……嫌われるんならちゃんと嫌われたいですから」

変な言い回しだったと言いたい事は分かる。

後ろの狸の臉がまたピクリと動いた。

「そうだな」

じゃあ、あとは若い者同士で、なんて間違った座の外し方をしつつ、俺たちは出口に向って歩き出した。

「あ、あの！」

躊躇いがちにかけられた声に、足を止めて振り返った。

「なんだ？」

海斗は黙ったまま真剣な顔をして、曲げた指を口に当てて何事か考え込んでいた。

迷ったように首を振りつつしていたが、やがて決意したように顔を上げる。

「その……秋名さんが、熊と戦った事があるって言うのは本当ですか？」

ずつと何が気になってたんだお前は……

まったく、姉ちゃんに何を吹き込まれたか知らないが、そんな事あ……… 本当です。

トラウマを刺激しないように、俺は小さく頷いた。

公園を出てしばらく歩いていると、八二子の足が急に止まった。

この辺りになると流石に人通りも増えていて、通り過ぎる中には遠慮がちにこちらに視線をやる人もいた。

「ほら、八二子、今こそあのお面の出番だって……あ、いや、待て。

あれって余計に視線を集めるんじゃない……！」

お面で顔を隠す作戦の構造的欠陥に気付いた時、既に隣に八二子の姿は無かった。

正面から歩いてきた親子が、ママあれー、ほら見ちゃいけません的なやり取りをしながら通り過ぎていく。

顔を真っ赤にしている自分を思い浮かべつつ、それを後ろに振り向ける。

直ぐ近くの狭い路地の前に立った八二子が、呆れたような表情で俺を見ていた。

「な、なんでそんな所で止まってんだよ！」

逆切れ気味に駆け寄ると、心底嫌そうな顔でしっしっ手を振られる。

「近寄るな。わたくしまでスベツたみたいに思われるのである」

「ネタじゃねえよ」

疑わしそうな視線を送ってくる八二子を見無視して、路地に目を向けた。

一人がやつと通れるくらいの狭い道幅の、常用者は猫やせいぜい子供だろうという隙間だ。

薄暗く、視界一杯の赤と相まって、妙な雰囲気醸し出していた。

「何か、雰囲気あんな。ちよっと、怖いって言うか」

「貴様のスベリっぷりの方が怖い」

…それはもう良いって。

「こんなトコで止まってどうしたんだよ」

「どうって帰るのである」

相変わらず話の繋がりが解りにくい。

「ここから？」

コクンと首肯する。

「流石に人目が多くてあそこは歩けないのである」

家々の屋根の隙間から、少しだけ見えるアーケードの屋根を指差した。

「けどここから家まで帰れるのか？」

「近道がある」

そう言って婀娜^{あだ}っぽく笑う。

雰囲気当てられてか、人ならざるモノの美しさをその時改めて感じた。

「秋名大地。今日一日世話になったのである。……ありがとございました」

ハ二子がバカ丁寧なお辞儀をしてみせた。

「重ねて明日からもよろしく頼むのである」

顔を上げたハ二子の表情に、夕闇を吹き飛ばすような笑顔があった。

思わず「ああ」と言いかけて慌てて口元を押さえる。

…まあ、押さえた所でどうなるものでもないか。

「それじゃあ、イッチーによろしく言つといてくれ」

そう言つて、ハ二子は路地に飛び込んでいった。

しばらく呆然とした後、何気なく見上げた空に、置いてけぼりを食ったような雲がプカリと一つ浮かんでいた。

体の中で静かにしていた眠気が、家に帰った途端突然発光した。

白い視界とふらつく足取りで、とつくに起き出していた樹の言葉にも適当な返事を返しつつ、部屋に入って直ちに意識を手放した。

果たしてきちんとベッドに着地出来たのかどうかも解らないまま、心地よい脱力感が体を包んだ。

「なんですか、だらしない顔をして」

…だからこれは夢だ。

部屋から出てきたばかりの寝起きの俺に、祖母さんの声がかかった。

夢だと解っているのに、祖母さんからそんな事を言われると、条件反射的に背筋が伸びてしまう。

現実の世界で痙攣した体が、なにかを叩いた感触があった。

どさつとモノが落ちる音がする。

…何となく、ベッドへの着地は失敗した気がする。

不思議そうに手を見つめる夢の中の俺に、祖母さんから声がかかる。

「どうかしたんですか？」

「…いえ、何だか急に手が痛くなって」

しかも、何でか微妙にリンクしてるし。

夢の中での光景には見覚えがあった。

俯瞰で俺自身も捉えている光景は夢ならではだが、祖母さんの後ろに家人のものではない人影があるのは、一昨年の光景を基にしている為だろう。

祖母さんの後ろで控えめに頭を下げた麗人が、一瞬で俺の視点を中学三年生の主観にする。

「こんにちわ」

目の前で頭を下げられて、俺は戸惑った表情を見せた。

「こ、こんにちわ」

目顔で誰か訊ねると、祖母さんが喜色を表した。

「私の昔からのお友達で、大畠晴子さんです」
おおはた はるこ

「大畠晴子です」

ニコリと笑った顔が少女めいていて、瞬間ドキリとしてしまう。

……いやいや。

流石に祖母さんと同年代の人にときめいてる場合じゃないから、これは単純に意外な表情を見た反応だろう。

……いくらなんでも年上趣味過ぎる。

ただ、綺麗な人というのは間違いなかった。

背筋が伸び佇まいは凛としていて、いかにも清潔そうな風情が年をあまり感じさせない。

小さな顔に濁りの無い大きな瞳、丁寧に結い上げられた髪は白というより銀色で、降り注ぐ陽光を煌めく様に反射していた。

ウチの祖母さんも大概綺麗な人だとは思うが、この人には落ち着いた静かな美しさがあった。

ふと、当時の意識から出て思う。

（……なんか……ハ二子に似てるような……）

……いや、どこが！？

自分の直感に直ぐに自分で反問してしまう。

まあ、どこが、と改まって聞かれると答えることは多分出来ないのだろうが、チラリと覗く、言ってしまうえば気のせいの様な段階で、

何かが重なって見えたのだ。

「え、いつてええっ！」

「ご・あ・い・さ・つ・は？」

太ももに激痛を感じて俺は飛び上がった。

アホのように呆けていた俺の太ももを、笑顔のまんま祖母さんが力いっぱい抓つかっていた。

「秋名大地です！」

それこそ夢から醒めるような思いで名前を叫んで、直角に腰を折る。

——くすくすくす…。

起き上がり小法師のように姿勢を戻すと、晴子さんが口に手をあて控えめに笑っていた。

「…ごめんなさい」

細めたままの目をこちらに向け、とんでもない事を口にする。

「仲がよろしいのね」

「「気のせいでしょう？」」

異口同音で思わず顔を見合わせた俺と祖母さんに、余計に肩を震わせた。

それを見て赤面した祖母さんが、理不尽にも俺の頬を抓った。

「…ふおれのせいれふか？」

「当たり前です」

痛い思いをしながらも、何だか妙に子供っぽい祖母さんを見てみると、ああ本当に昔からの友達なんだと実感できた。

出来れば痛みを伴わない実感の方がよかったけど。

「本当にごめんなさい。さあ、いつまでもこんな所にいないで」

ようやく頼つぺたを解放してくれた祖母さんは、まだ笑いの火種がくすぶっている晴子さんを促して、この場を後にしようとした。

——どうぞごゆっくり。

横を通る晴子さんに、そう言おうとした時だった。

「ど……ふぁ……」

ヤバイと思つたときにはもう遅い。

散々痛い目に合わされて目は冴えていた筈なのに、ホツとした所為か欠伸が口から出て行つた。

「ふあああ……あああああ」

後半は嘆きになっている。

溜息をつくときと幸せが逃げるといふが、この場合、欠伸をすると日本刀がやってくる。

ある程度覚悟を決めつつ顔を上げると、祖母さんがまた赤い顔をしながら、俺の方を睨んでいた。

無言のまま近づいてきて、ぎゅううううと頬を抓られる。寸分たがわず同じ場所だ。

「……あの、もの凄く痛いんですけど」

それでも無言の祖母さんの目元に、微かに涙が浮かんでいるのが見えた。

……ああ、欠伸がうつったんですね……。

完全に目が覚めた俺の耳にくすぐすとまた、笑い声が聞こえてきた。

泣きそうな目で見ると、晴子さんがバツが悪そうに首をすくめる。

「ご、ごめんなさい。でも、良い事じゃない……？」

この状況がですか！？

そつ目で訴えると、晴子さんは悪戯っぽい笑顔を浮かべてこう言つた。

「だって、欠伸かたきって敵にはうつらないって言うでしょう」

「それ、間違つてるんじゃない……ああ……夢か」

目を覚ますと、予想通り俺は床に転がって寝ていた。

上半身を起こす。誰かがかけてくれたのか、シーツがしゅるっと床に落ちた。

ぼーっと部屋を眺めながら頭を掻いた。

昨日から着っぱなしの制服が汗に絡んで気持ち悪い。

シャワーでも浴びるか、立ち上がって、時計を探した。

「……何故そんなところに転がっているの？」

いつもはベッドの枕元に置かれているはずの目覚まし時計が、同衾するように俺の隣に転がっていた。……しかも。

「……何で、電池が外に出ているの？」

小さな単三電池を吐き出して、時計は冷たくなっていた。

拾い上げて見る限り、死亡時刻は二時二十五分頃。

落ちた衝撃で針が動いたりしていなければ、これでは間違いないだろう。

「……どうして、起こしてくれなかったの？」

(……それはね……電池が抜けていたからサーー！)

何てやってる場合じゃない。

「くっそ今何時だ!？」

一気に醒めた目で、慌てて腕時計に目をやると。

——八時十二分。

「とっ、えっと、ギリギリ？」

何にしてもゆっくりしている暇はない。

この際、制服を着たまま寝たのが幸いした。

下着だけ替えて鞆を引っつかんで部屋を飛び出すと、朝稽古終わりの樹が道着姿で庭に姿を現した。

「よ、おはよう」

「全然おはようじゃねーよ」

「そう言えばそうだな。今から朝ご飯らしいけど、どうする？」

「食ってる暇無い」

「そうか。じゃあ、気をつけてな」

暢気にそう言われては、八つ当たりの一つもしたくなってくる。

「そっぴいやお前の好きな食い物って聞いてなかったな」

——びく。

「……お前何が好きなんだ？」

学校はもう目の前まで迫っている。

時計を見ても、始業までまだ後十分くらいあった。
五分弱でここまでできたのは、これが初めてだ。

……人間って凄い。

なんとか息も整い、再び歩き始める。

空を見上げると、暦を勘違いした太陽が、相変わらずの過剰なデ
ンションで人類に汗をかかせていた。

自業自得の状況とは言え、文句の一つも言いたくなってくる。

「もうちょつと冷えてください」

「誰と話してるんだ？」

「ひいうわあああ！」

路地から急に現れたハニ子が……って、何でどいつもこいつも突
然現れるんだ！？

頼むから、もうちょつとゆっくり現れて欲しい。

朝から暴れまくる心臓に手を当てていると、ハニ子に続いて路地
からは水城さんも姿を現した。

「あ、あれ？ 秋名君？」

「……どつから出て来てんの？」

おはようも無いままそう聞くと、水城さんが「あはは」と笑う。
誤魔化すように頬を掻いて、別にずれてもない眼鏡を押し上げた。

「い、いやー、きよ、今日も暑いねえ」

な、何てお茶を濁すのが下手な子なんだ。

なんだか可哀相になって、白々しくそれには気付かないフリをして
しまう。

「……そうだね」

「なあ、誰と話してたんだ？」

しつこいっつーの。

なんだか、ここまでだけでもう一日分の体力を使った気がして、
グッタリと屈みこんでしまった。

「あの顔色がよくないけど」

その一因であろう水城さんが心配そうに覗き込んでくる。

「だ、大丈夫」

そう答えるが、覗き込む会に八二子も入会してきた。

「顔色より、寝癖が酷いのである」

そう言つて、鞆から取り出した小さな手鏡を渡してくれる。

「うわーホントだボツサボサ……じゃねえよ！ お前なあ！ 一応敵対してるんだから……ふああああ……聞いてくれる？」

その前にどういう原理で欠伸なんかしてるんだお前は。

はしたなく大口を開け、目元に涙のオプションまで付けた八二子が、なぜか晴子さんの顔とダブって見えた。

（だから似てないんだってば）

首を傾げていると、脳に行った分だけ体が酸素を求めてきた。

「くふ、ふああああ」

釣られるみたいにして欠伸を浮かべた俺に、水城さんが笑いながら言つた。

「あは、八二ちゃんの欠伸がうつつたね」

「ふが」

「えー」

八二子が嫌そうに顔をしかめる。

……こつちの台詞だこのやろう。

——だって、欠伸って……。

耳の奥で晴子さんの言葉が蘇えってきた。

——敵にはうつらないって言うでしょう。

……絶対間違つてますよそれ。

「……あれ！？ つつか時間もうやべえ！」

「え？」

「貴様がとろとろしてるからだろう」

八二子がそう言ったのをキツカケに、二人は駆け出した。

うつるはずの無い欠伸が、陽射しに当てられ渴いた空に溶けていく。

蒸発していった疑問を目で追うと、世の中の全部の答えみたいな顔をして太陽が輝いていた。

「……どうでもいいけど、やっぱ似てない」

頭では、どうせ今日も一日暑いんだろうなあ、とか思いながら、俺は二人の後を追って走り出した。

番外編2 ”欠伸”（後書き）

お疲れ様でした。

いかがだったでしょうか？

番外編という事で変身はあんなで、バトルもあんなで、話もこんなでしたが、楽しんで欲しいなあと思いながら書かせていただきました。

えーと、次で一応最後です。

番外編でチラチラッと出て来たちよつと意味の分からない部分を解消して終わりたいと思ってるんですが、どうにもまだ固まっております。

今回ほど間は空かないと思いますが、気長に待っていてくださると嬉しいです。

本当にお付き合いどうもでした。

それじゃあ失礼します。

番外編3

”希望”

1（前書き）

ごめんなさい、続きます。

八月も半ばをすぎると、東町上空は健康的な表情を取り戻していた。

先ごろの春の狂躁が嘘のように、今では例年通りの気温を示している。

それは、すなわち。

「暑い」

という事になるのだが。

かんかん^{わたじうへい}に照り付ける太陽の下、誰の所為でもないのに迷惑そうに額の汗を拭くと、渡康平はベンチに腰掛けた。

彼が今いるのは映都東町にある、東公園だ。

敷地だけがやたらと広く、特に楽しめる遊具もなし。

広場としても大半を大きな池として水族に提供しているため、陸上歩行生物にはあまり人気がない。

体裁を整えるようにしてある遊歩道（のようなもの）にも人の姿はなく、脇に設けられたベンチの一つを悠々と占拠し、康平はだらしく背もたれた。

ミンミンとうるさい夏の沈黙に顔を顰めながら、ジITTERと汗の浮かぶ腕にはめられた時計に目をやる。

針は一時五分を差していた。

「一時間、か」

それを確認しても、彼の表情に変化はない。

一々怒る余裕もないのか、今にも口の端から舌が出てきそうな酷い有様である。

それでも、ここは木陰になっていて他よりは幾分涼しかった。

この季節蝉がうるさいのは日本国内どこでもだし、暑い事さえ除けば……。

「いや、除けんな、やっぱり」

溜息が暑気に溶けていく。

待ち合わせ時刻は十二時ちょうどだった。

合流後、昼食をとって行動を開始する予定だったのだが、待ち人である少年二人はいまだもって姿を現さない。

「先にどっかで食べてるってことはないよ…な」

口にしてみて、首を振った。

あの子たちはそういう人間じゃないよなあ、と一人ごちるが、それなら、遅刻をしているのも変な感じである。

何かあったかと少し嫌な想像をしつつ、ケータイを取り出してみた。

もっと早くに使っていても良さそうなものの、康平はあまりこのコンパクトな家電が好きではなかった。
なにしろ邪魔くさいのだ。

こちらの都合などお構い無しでプップカ鳴っては、「今暇ー？」とか能天気な声で訊ねられると、ぬええーい！と遠くに投げ捨てまいたくなる。

そういう気持ちがあったから、康平はなるべくコレを使わないようにしているのだが。

流石に一時間も音沙汰がないと心配になってくる。

アドレスから秋名大地の名前を見つけると、うーんと唸ってから、ダイヤルしてみる。

少ししてコール音が聞こえてきて、相手が出る。

それと同時に、目の前に影が差した。

「なんすか？」

ケータイを耳に当てた大地が、不思議そうに康平を見下ろしていた。

彼の隣に立っている少年も、怪訝そうに呆然とする康平を見つめている。

「あ、いや、随分遅いような気がしたから」

気まずい照れ臭さを感じながら、康平は腕時計を示した。

キョトンとして、顔を見合わせる少年二人。

「時間通りつすけど？」

そう言つて、大地は開いていたケータイの画面を見せてくる。

デジタルで表示された時刻は、十二時二分。

「あれ?!」

あたふたと二つの時間を見比べた。

視線を往復させると、一時間のずれがある。

「壊れてるんじゃないデスか？」

顔の近くにずっと出てきた眩しい色に、大地が目を細めた。

康平の目の前に現われたのは金髪碧眼。

どちらも天然ものである。

少年らしいテノールが奏でる日本語は流暢に流れていたが、幾らか言葉の端々に違和感もあった。

「そうかも」

あははと笑つて誤魔化すと、二人は再び顔を見合わせて首をかしげた。

「それより俺腹減ったんですけど。……おごりなんすよね」

にこりと微笑んで、大地が白い歯を見せた。

なんだかんだで最初に会ったときより、図太くなっている。

「それは勿論」

気持ち良く奢り宣言をすると、初来日の少年が嬉しそうにバツと両手を上げた。

「ボクお寿司が食べたい」

「回るやつ？」

「ウン、下駄はいてるヤツ」

どこでそんな言葉を覚えたのかはともかく、財布との緊急会議の結果満場一致で否決。

次善策を問うも。

「スキヤキ」

パス。

「テンプーラ」

パス。

「……ゲイシャ？」

パス。

康平の経済状況を鑑みるに、どれも昼には（↑つよがり）食べられないものばかりである。

と言うか、最後のは食べ物ですらないし。

単純に、日本と言えば、というモノを挙げていつているだけかもしれないが、外国人が軽々しく口にするものは何故かどれも軒並み高い。

「もう回る寿司でいいじゃないの？」

空腹に耐えかねたのか、めんどくさそうな顔で大地が呟いた。

「うーん、分かりまシタ」

どこか不服そうではあったものの、となりの少年が頷くのを見て、康平はホッとした。

「よし、それじゃあ行こうか」

ズボンの尻をたたきつつ、ベンチから立ち上がった。

近くの回転寿司屋を目指して、先頭きつて歩き出す。

内心で、高いものを回避できた安堵でいっぱいになるが、康平には一つ忘れていた事があった。

この時、高校生男子のほとんど無尽蔵とも言える食欲の事を思い出すには、この日は暑すぎたのだ。

康平が、お寿司の回るベルトコンベアの前で、ちびりそうな位散財している間に、時間は二日ほど戻る。

ベタなくらい散らかっている仕事机の前に、千葉玲子はうーんと背筋を伸ばした。

椅子の背もたれが、突然かかった負荷に不満そうにきしんだ声を上げた。

夏休み真っ最中の映都東高校。

校舎内のほとんどが静かな代わりに、朝から部活の音が盛況である。遠くから聞こえるような吹奏楽部の演奏の音、野外クラブの応援の声、誰かが冗談でも言ったのか、楽しそうな笑声。

そんな声達を、クーラーの効いた職員室で聞いているというのは、特権のようでもあり、どこか寂しいような気もする。

ビミョーに感傷的な気持ちになりながら、玲子はコーヒーを入れるために立ち上がった。

夏休みと言えど、教師に仕事がないわけでは、勿論ない。

康平などはその辺り誤解して単純に羨ましがっているが、机の上の書類と同じようにやる事は山積していた。

特に、クラスの担任を受け持つ身として、そろそろ生徒たちの進路の事なども考えなくてはならず、中々悩ましい日々を送っているのだ。

給湯器の前で、インスタントコーヒーの粉をカップに入れ、ポットからお湯を落としていく。

極上の香り、とは言わないまでも、嗅ぎ慣れた馴染みのある香りには、疲れた気持ちから目を逸らさせる位の効果はあった。

カップを手に机に戻り、さてもう一頑張りするかと気合を入れたところで、その電話は鳴った。

出端を挫かれた形となり、思わず眉間に皺がよっていく。

この間の悪さは、と、能天気な同級生の顔を思い浮かべるが、液晶に表示された名前を見て、玲子は素っ頓狂な声をあげた。

「あれ、那乃川さん？」

彼女のケータイを鳴らしていたのは、上司の名前だった。

と言って、学校関係者ではない。

彼女のもう一つのお仕事の方で、立場の近い上役をやっている人物だ。

基本的に、教師は副業を禁止されている。

ただ、どちらかと言えばこちらが本業であるし、本業の方には教師を副業にしてはならないという決まりがない。

そんな妙な図式を勝手に成り立たせているため、校内であるにもかかわらず悪びれる様子もなく玲子は電話に出た。

「おはようございます。珍しいですね、今時分に掛けてくるなんて、多少声を落として言いながら、チラリと時計を見る。

時刻は十時十八分。

那乃川からの電話は、大抵昼休みや帰宅後にかかることが多く、午前中に連絡が有る事はほとんどない。

そこから考えても、ただ事ではない事がわかった。

コーヒード口の中を湿らせると、玲子は言葉を待った。直ぐに渋みのある声が返ってくる。

「おはようございます」

落ち着きを感じる男の、カフェイン以上に目覚めの効果のある声だ。

久しぶりに聞いた、とそんな雑感を抱きつつ、沈黙。

「実はお仕事の話です。報告し難い事なんですが……」

それは確かにただ事ではなかった。

段階で言つと、青赤白。

見る見る顔色を変えながら、あぐりと口が開いていく。

「……と、言うわけなんですが」

相手の声に変化はあまりない。

自分の顔色を見せてやりたいと、ちよつと現実逃避。

「……ご、ごめんなさい。え、えと、それじゃあ」

ごくりと喉が鳴った。

「……本当に、アレ、盗られちゃったんですか？」

「はい」

あつさりした、微塵も申し訳なさを感じさせない返答に、ピキッと、額に三叉路が浮き上がる。

隠し通路に流れるは、沸騰間際の赤い血潮だ。

「いや、まあ、あはは、うーん……………うん。……………またあつ!？」

一歩手前（ブチギレ）の叫びは、溜息に良く似た音色にのって響いたとか。

まだまだ暑い日の続く、八月十二日の事であった。

その少年の名は、ノゾミと言った。

年のころは五歳から八歳の間と言った所。

幼い外見と発育の状態から見て、十を越えているという事はないだろう。

しかし、一口に幼いといっても、この間には存外大きな広がりがある。

ノゾミ自身は、自分の出生に興味もこだわりも持っていなかったが、これは、彼が生まれたときには、既に身近に暦を数える習慣がなかったからで、おかげで精しい年齢は本人にも分かっていない。体格を見ても、節々が痩せて尖っていて、年齢の通りに正しく体が成長しているようには見えなかった。

ただ、目には大人びた思慮深さが宿っており、それがまた、彼が積み重ねた年月をあやふやにしていた。

ノゾミが座っていたのは、とある乾いた一室だった。

四方を灰色のコンクリートが囲み、蛍光灯ばかりが明るく、どこか寒々しい。

唯一ある扉から右一面の壁に大きな鏡がはられ、その中央には愛想のない机と、高さをもてあますように足をブラブラさせて椅子に腰掛けた、ノゾミの姿が映っている。

机の上には首の長い卓上灯があつて、彼を見張るように黄色い目を光らせていた。

鏡は、正しく状況を写し取っていた。

彼の目の前にある良き隣人であるはずの現実、この小さく幼い人間の為だけに、この部屋を用意したらしい。

ノックの音が響き、はい、と少年が返事をして、彼は扉を叩いた大人達を迎え入れた。

入ってきたのは、男女の二人組だった。

年齢の方は女の方が若干若く見え、その分男の方には落ち着きが見て取れた。

両者とも黒のスーツに身を包み、女の方にいたっては、仰々しくサングラスまでかけている。

それを外しながら、椅子に腰をおろした後ろに、神経質そうな男の方が立った。

室内に、ノゾミが占拠している物も含めて、椅子は二つ。

彼はどうやら紳士であるらしい。

単に立場の問題かもしれない。

ふう〜と一息分の間を作ったあと、机に身を乗り出し、女はノゾミに顔を近づけてきた。

眉間には皺がより、その表情はずいぶんと険しい。

ノゾミがコクリと喉を鳴らしたのは、二人の鼻先が今にもくっつきそうになった所。

そこで動きを止めて、にぱっ、と音を立てるように女は破顔した。

「……どう？」

「……うん。TVでみたスパイみたいでカッコイイ」

ノゾミもくすぐったそうにクスクスと声を立てた。

その成果に満足したのか、「だろ〜〜」と言って、ズガガ〜と椅子を後ろに引いていく。

同行者である男の方に背もたれを寄せて、笑顔に向けた。

「な、着て来て良かっただろ？」

「デパートまで走らされた甲斐がありました」

特に皮肉でも無さそうに、男は淡々と返した。

「こんにちはノゾミ君」

女から顔を外して、ノゾミに向って挨拶をしてくる。

表情筋が小さく動いて、より良く誤解するなら、それは笑顔に見えた。

「こんにちわ」

ノゾミも笑顔を返して、それに応えた。

乾いた部屋が、潤いを伴って、いつもの雰囲気に戻っていく。

「で、どうだい、水城君との暮らしは？」

またズ〜コズ〜コと椅子を戻すと、頬杖をつきつつ、女は足を組んだ。

彼女らしい快活な声が室内に響く。

「楽しい」

屈託なく答える少年に向けて、そいつあ良かった、と満足そうな笑顔を見せた。

彼女の名前は、沖島望。

少年の名と一音違い、のぞむ、と読む。

比べるとこちらの方が男っぽく感じるが、竹を割ったような性格の彼女には良く似合っていた。

「それでこそ紹介した甲斐があるってもんだ」

「正確には、あちらが我々を紹介したんですが」

熱のこもらない声で男が訂正したのも意に介さず、沖島は足を組みかえると、身を引いて自身の衣装を楽しそうに眺めた。

スーッタイプの上着とスカート。

カッチリとした佇まいは必要以上に大人っぽく、驚くほど彼女に良く似合った。

キツカケは、先月の事。

新しい生活を始めたノゾミが、経過報告をしにこちらを訪れた時にあった。

「普段着ってなんだか秘密組織っぽくないね」

と、何気なく呟いた彼に、ムキになって応じたのが沖島だった。

このとき、彼女はジーンズにＴシャツ姿だった。

「よ〜し、だったら来月見てろ！」

言葉ほど声は冷静さを欠いてはいなかったが、ビツと指差されて、ノゾミはオズオズと頷いてしまった。

その為、何故か後ろの男も巻き込んだの、このような状況が出来た。男の方の着こなしも見事なもので、ノゾミの評価は多少的外れだ

ったものの、本当にどこかの腕利きスパイのように見える。
女王陛下最強の武器でマードーライセンスを持つ男。

実際は、目の前の年下の上司の着せ替え人形でしかなかったが。

「まあ……」

女王になり損ねた女は、顔を上げてノゾミを見た。

表情は幾らか引き締まっていたが、どうしようもない位優しい光が瞳に宿っている。

「私たちは絶対”諦めない”から、君は安心して幸せになりなさいな」

それは、ノゾミが彼女たちに最初に放った言葉であり、彼女たちと最初に交わした約束だった。

頭の後ろで手を組んだ沖島の言葉に、顔を輝かせながらノゾミがしっかりと頷くのを見て、後ろに立った男は不思議な気持ちになった。

思えば、その質問をしたのは彼である。

『我々はどうしたらいいですか？』

小さな体から覗く絶望的な未来に、冷静なはずの彼が思わず発した言葉だ。

その質問をした途端、少年は顔を上げた。

酷く疲れたような瞳に、縋るような色が滲んだ。

『……諦めないで』

それまで、一切の質問に答えず黙って俯いていた少年の声は、酷く掠れていた。

聞き返す間もなく、今度ははっきりとした声が届いた。

『例え何があったとしても、諦めないでください』

「ディストピアと言う言葉を知っていますか？」

突然声を掛けられて、一瞬、言葉の内容を掴み損ねた。

「デイスピア、ですか？」

そう返したものの、この質問にさして意味はない。

単なる間つなぎである。

「はい」

と、言う答えを聞きながら、康平は必死で頭の中の辞書を探った。後部座席に座った那乃川は、相変わらず悠々と漫画雑誌をめくっている。

老紳士然とした彼が漫画を読んでいる姿はどこか滑稽だったが、その脇には、未読の漫画雑誌が山のように積まれていた。

彼らに乗せた車は街中を快走していた。

運転手を任じられた康平は、彼の愛車の三分の一ほどの実力を保ちながら、目的地へとアクセルを踏んでいる。

車中の人となった那乃川は、その間ずっと漫画雑誌を読んでいた。暇つぶしに、と言うわけではなく、彼らの特殊な業務上、コレも立派な仕事のひとつである。

ページをめくる音は常に一定で、コマを見つめる目はどこまでも真剣そのもの。

てつきり熟読しているものと思っていた康平は、ようやくその言葉を辞書の中から見つけ出した。

「確か、空想上の理想社会、明るい未来像——ユートピアに対して、暗黒社会、暗い未来像を差す言葉ですよね。SF小説とかで、特に暗い未来像をテーマにしたものを差して『デイスピアもの』みたいな使われ方をするそうですけど」

ルームミラーを窺いながら、自信無げにそう答えると、那乃川は満足そうな声で一度頷いた。

「ちゃんとお勉強はしているようですね」

内心ホツとしながら、ハンドルを右に切る。

「”知る事で損はしない”は、耳タコですから」

「結構です。……まあ、私は最近知ったんですが……」

いや、おい。

危うくハンドルを切り損ねて、康平は慌てて車の姿勢を戻す。

「ったく。で？　なんだって急にそんな事聞くんです？」

読んでいた雑誌を閉じ、那乃川は次の雑誌に手を伸ばしていた。

「SF小説に限らずですが、最近その『デイストピアもの』が増えてきている気がして」

那乃川の声が静かに響くのはいつもの事として、そこからは幾らか覇気が欠けている様な気がした。

そのことに気づきながらも、康平の言葉は、つい現実的なものとなった。

「それは仕方がないんじゃないですかね。今の社会で、明るいだけのユートピアを見せられても、誰も信じないでしょう」

こちらの答えは、どうやらお気に召さなかったらしい。

つまらなそうに小さく鼻を鳴らすと、手にした本を閉じ、むつつりと黙り込んでしまった。

表情に変化はなかったが、目を瞑った為、それ以上の感情の動きは見取れない。

「渡君は自転車に乗ったことがありますか？」

やがて、ポツリと零すようにされた質問は、ずいぶん突飛なモノに思えた。

「自転車ですか？」

先ほどと同じように返してしまっただが、質問自体が不可解であった為、なおさら意味のないものになる。

いくら考えても質問の意図が分からず、那乃川からの返答もない。

康平は素直に答えてみる事にした。

「そりゃあ、ありますけど」

「きちんと乗れますか？」

「はあ、まあ」

どうしても、不明瞭な受け返しになる。

「お父上と練習をしたんですか？」

「そう、ですね」

答えながらボンヤリと思い出す。

もう遠い昔。

世界は今より圧倒的に欠けていたのに、何故か満たされていた日々の事。

練習場所は近くの河原だった。

父親の仕事おわりに、夕暮れを背景に繰り広げられる、絶対離さないでよー、からの一連のやり取り。

最終的に、父親にユダの烙印を押して、随分落ち込ませたのを覚えている。

（……なんか、えらい酷いことしてるな俺）

康平自身父親となつて分かる、親父の心境と言うやつだった。

もし、自分の娘に裏切り者呼ばわりされたとしたら。

多分ソツコーで手頃な縄を買いに商店街辺りに走っていることだろう。

（……こ、今度、夫婦で温泉旅行にでも招待するかな）

俗っぽい贖罪方法が思いついたところで、那乃川の話は続いていた。

「私も父親と練習したんですが、その時に一つアドバイスを貰いましてね。彼は『行きたい方向を真っ直ぐ向いて、背筋をピンと伸ばしていれば、こける事はない』と、こう言っんですよ」

「あー、俺もなんか似たような事言われましたね。『行きたい方向を向けば、自然に曲がる。手で運転するんじゃなくて顔で運転しろ』って」

二人して、父親の台詞の部分で声を低めているのがおかしかった。しかし、一世代以上も年の離れた二人の思い出の中から共通点を見つけたところで、嬉しくもなんともない。

康平が、意味ありげな視線をルームミラー越しに投げかけると、那乃川は彼自身の低い声で呟いた。

「人の未来も同じなのではないかと思ひましてね」

その言葉を聞いて、康平はようやく気づいた。

先ほどからされていた奇妙な質問には、前提があったのだ。それを悟ると、康平の口はこれまでより滑らかに動いた。

「人の未来も、向いている方向に進む……いや、向いている方向にしか進めないって言った方がいいのかな」

車窓からは街中らしい背の高い建物が消え、どんぐりの背比べのような無個性の屋根が並び始めている。

その中でも一際古めかしい雰囲気屋根が、フロントガラスに映った。

「だからこそ、俺たちのような者が蠢動^{しゅんどう}してるんでしょ」

別に皮肉でもなんでもなく、康平はそう言った。

例え、自分たちが大地を揺るがす事はできなくても、それによって混ざった土は、何かを芽吹かせるかもしれない。

現状を捉え、それでいて希望を失っていない発言のつもりである。

そして、今度こそ康平の言いようは気に入られたようだ。

那乃川は、体を目一杯仰け反らせて、声も無く笑っていた。

「……………バンバン（↑なんかシート叩いてる）」

「あー、えーえーそうでしょうよ」

どうせ、ここでの話もあと数秒の事である。

いじけたように呟きながら、康平はブレーキに右足を乗せた。滑るように、車は目的の家へと横付けされた。

「ふふふ……いや、良い言い種でした」

二日酔いのように衝動は抜けきっていないようで、呼気からは微かに笑いの香りが漂っている。

「もういいですよ！ それより、水城善一郎の協力は得られたんでしょうね！」

シートベルトを外しながら、康平は赤い顔で叫んでいた。

「ふ、いやいや、うん。勿論です。……さあ、では、君の言う、明るい未来への悪巧みといきましょうか……………ぷふ」

そう言って車を降りた那乃川のあとで、悔しそうに康平が降車し

た。

そんなおかしな二人の来訪にも、水城家は動揺することなく、そこにジッと佇んでいた。

番外編3

”希望”

2（後書き）

お待たせしました、お久しぶりでございます。

今回は出来上がり次第、投稿（あつぷ？）して行きたいと思っているんですが、このペースは恐らく保たれないでしょう（笑）いえ、勿論努力はしますが。

そんなわけで、何でこんな不定期なんだ、と叱られつつでも、最後までお付き合いいただけると嬉しいです。それでは失礼致します。

以前、誰かに言われた事がある。

「何年も土の中に居たんだからさ、一夏鳴き続けるくらい我慢してやろうよ」

蝉の事だ。

夏の風物詩。

季語になっているかどうかは知らない。

橘美晴は、疲れたような声で返した。

「目の前に、一週間何も食べてないライオンの親子。それだけ我慢してたんだから、あなたは黙って食べられてあげるのね」

もの凄い極論だった。

条件は同じだが、差し出すものの重さが違う。

それでもそいつは黙った。

大体、と、美晴は思う。

蝉にとって土の中に居ることが苦痛だと、どうして決め付る事が出来るのか。

ヤツらは、地上に出なければならぬ己の不幸を嘆いて泣いているかもしれないではないか。

もしそうだとしたら、夏中泣き言を聞かされる身にもなって欲しい。……というか、そもそも、アレは鳴くと表現していいのか。

羽を震わせて音を出すのだったら、人が拍手するのも鳴くと言っているではないのか。

足は本当に六本もいるのか。

真ん中の足を上手く活用しているヤツなんか見た事ないぞ、こら。

要するに、虫全般が嫌いな美晴である。

色々いちゃもんをつけてみたが、本当は想像するのも嫌なのだった。それなのに、ミンミンジョワジョワと聞こえて来る鳴き声は、いやでもその姿を脳裏に浮かばせる。

ふう、と表情には出さずに冷や汗を拭った。

黙ってテレビの音量を上げてみる。

「あ、おい」

不満が拳がったのは、ソファから。

ランニングにトランクスト、今年も下着で行きますけどみたいな格好で、父親が甲子園を見ていた。

右手に団扇、目の前にはビールと枝豆。

直ぐそばに置かれていたテレビのリモコンは、美晴に奪われた。

ぐてつと体を弛緩させた父親を見て、これは、何て言うか相当見苦しいのではないか、と思う。

かえりみて彼女の格好はと言うと、モスグリーンのタンクトップに、デニム地のホットパンツ姿。

型紙に大差はなさそうだが、観賞価値では雲泥の差がある。

溜息をついて、美晴はテレビの方を見た。

音量を上げたため、内容が耳に入ってきたのだ。

大きくサイレンが鳴っている。

試合の決着がついたらしい。

敗戦校の生徒の一人が、泣きながらチームメイトに慰められていた。実況によると、彼はエラーを犯し、それが決勝点に繋がったそうだ。「……あんな小さい球使ってるから」

そつという問題か？ と父親は首をかしげたが、黙っておいた。

娘が高校野球を嫌っているのを思い出したからだ。

彼女にとって、嫌い、は、苦手、と同義のようであった。

どうして好き好んで、こんな切ない光景を見なければならぬ、と言うのが彼女の言い分だった。

総じて、夏に楽しみの少ない女である。

逃げるように視線を逸らすと、そのタイミングを窺っていたかのよう電話が鳴った。

リビングの入り口付近に据え置かれている電話台から、受話器を持ち上げる。

「はい、橘です」

「こんにちわ、こちら映都祭運営委員のモノなんですが」

声は男のものだった。

いやに軽妙な喋り方は、軽薄さよりも世慣れた感じがする。

「……………ああ、夏祭りの」

しばらく考えた後、思い当たった。

八月の第四週。

夏の終わりと言うよりは、秋の入り口に近い頃にある中々大きなお祭りだ。

「そうです、そうです」

受話器の向こうで声が弾む。

「去年はどうもお世話になりました、今年は我々西町商店街が当番をやらせていただきます」

「……………はい」

伝わるわけもないのに、美晴は頷いていた。

この夏祭りは、商店街が主体となり、その運営は各商店街で毎年持ち回りで行われている。

去年の当番は東町商店街だった。

美晴自身も何故か運営にかり出され、内情について、あれやこれや記憶していることは多い。

そんな事情もあったから、何となく用件を尋ねてしまっていた。

「……………それで、どういったご用件で？」

彼女の声には相変わらず疲労感が漂っていたが、相手は気にした様子もなく言葉を続ける。

「はい。実は今年の祭りでステージを設置する事になったんですよ。ところが、予定していた地元出身の歌手を押さえる事が出来ませんで」

「……………それは残念でしたね」

美晴としては、そうとしか言いようがない。

しかし、相手はそれではすまなかったらしい。

「それが、ただ残念ではすまなくて。実は、もう資材やらなにやらの搬入はすんでるんですわ」

そのワリに暢気な声で言ってくる。

「……そうなんですか」

と、こちらは、今年の委員会の段取りの悪さに、多少苛立ちを覚えていてる。

東町商店街だつて出資はしているのだ。

「あのー、そこですね、一つお願いがありました」

声に、窺うような音色が混じり始めた。

明るかったり、媚びてみたり。

なんとも忙しい交渉術だ。

「そちらでいつも演^やつてらっしゃる、ヒーローショーをですね、そのステージで演^やつて欲しいんですが」

……。

……。

「は？」

いかがでしょう？ と訊ねてくる向こう側で、ミン、と、蝉が一鳴きしたようだった。

その言い種に、美晴は正直首を傾げざるをえない。

彼らはいつから、職業、役者になつたのだらう。

劇団何わりで、何メルボックスなのだらうか？

疑問はつきなかったが、無下に断るわけにもいかず、返事は保留とした。

受話器を置き、しばし黙考。

「なんだった？」

父親が尋ねてきた。

「……………出演依頼？」

何故か疑問系で答える。

「なんの？ お前に？」

「……まさか。夏祭りの役員から、ここでやってるヒーローショーをやってくれって」

「ふーん……って、二代目にか？」

大仰な呼び名は、殆ど彼の趣味である。

ぽよんとしたお腹で何言ってんだかな趣味だが、慣れているので頷いた。

「それは……何て言うか……共食い？ いや、逆輸入？」

言いたい事は分かってても、どれも的を射ない。

セルフカバー、自虐ネタ、言葉は何でもいいが、演出からキャスティング、はては脚本主演までこなす監督に抱くような、何となく不健康なイメージは拭えない。

「……問題は、アキナ君がうんと言ってくれるかどうかだけど」

あえてそこからは目を逸らし、美晴はしかつめらしく呟いた。

「いや、無理だろう」

妥当な即答だった。

「嫌^やだ」

斯くして、橘親子の予想は当たった。

東町商店街からも程近い、駅前のドーナツショップの店内。

そこに、東町商店街所属、劇団無名座の面々は集められていた。

大手のチェーン店……を模して作られたその店は、見倣った通りの概観と内装で、恥ずかしげも無く本日も元気に営業している。

本店？ と同様ほぼ全面ガラス張りで、椅子やテーブルにも偽者ならではのどこかチグハグな統一感がある。

ただ、店主はカンバン泥棒ではあっても、調理人としての良心は残しているらしく、味にはそこその評判がついた。

で、その一席。

窓際四人掛けのテーブルに、四つの人影があつた。

秋名大地、水城佳乃、橘美晴、如月八二子、の三人と一体だ。

八二子を除く劇団員二人の前には、飲茶中心のランチセットが供されていた。

前払いの会計は美晴が持ったが、財布から伸びた紐を辿っていけば、西町商店街に繋がっている。

どうも奢りと言う言葉に素直になれないらしい大地は、疑わしげに美晴を見ていたが、空腹時を狙った甲斐もあって、プレート上の食事は直ぐに片付けられた。

食後のタイミングを狙って、美晴は前日の電話の内容を二人と一体に語った。

なので、上記の返答は、セット内容のウーロン茶を啜りながらのものである。

ズズズズ……と、蓋のされたカップから突き出たストローで音を出しながら、目の前に座った美晴に向って大地は首を振った。

「……て言うか、やっぱりタダじゃなかったんすね」

どこかガツカリした様子の大地を見て、少しだけ前傾していた美晴は姿勢を正し、何を当たり前の事を、と言う顔をした。

「当然でしょう」

少し前まで、彼女を含めた東町商店街の一部の人間は、無償で大地達——と言うか、秋名薫を支援していた。

過去に、知る機会が無かった為に招いたある事に対しての罪滅ぼしのつもりだったのだが、およそ三ヶ月前に何とか大団円を迎える事ができている。

「今回は全然別口からのお願いだから」

疲れたようにそう言うと、視線をチラリと大地の横にやった。

「あなたはどうか？」

食事を終え、楽しそうに二人のやり取りを見ていた佳乃は、んー、と、これまた楽しそうに唇に指をあてた。

「……私は別にいいけど」

「嫌っす」

「ですって」

大して悪びれた様子も無く、佳乃は微笑んだ。

ふうと息をついて、美晴は背もたれに身を預けた。

腕を組み、考える素振りになった。

将を射んと欲すれば……考え方としては間違っていないはずだ。

この場合、どちらが将か馬かは微妙な所だったが、ただ、目の前の二人の力関係は意識してか無意識にか、美晴が考えているほどには単純では無さそうだった。

（そう言えば……）

ふと、以前も顔を出した疑問が浮かんた。

（この二人はどうして今も闘っているんだろう）

以前までの闘いは、佳乃はともかくとして、大地の方は、薫のわがままに巻き込まれていただけの筈である。

その事を不満に思っていたはずだし、現に今も態度自体は不満そうなのだ。

佳乃の妹である水城真琴が言うには、コレも”約束”らしいのだが。或いは、その辺りを突いてみれば何か突破口が開けるのかも。

表情にはあまり出ないが、美晴も一所懸命だった。

夏祭りの成否は、商店街、ひいては橘家の財政にとってもかなり重要な事だった。

もし仮に上手くいかなかったとして、食卓から一品おかずが消えると言うのは、商売人の娘として中々プライドを傷つけられる。

美晴が黙った事による沈黙は長くは続かなかった。

言い訳がましいことを、大地が気まずそうに述べ立てていた。

「大体、仮にも本物が偽物を演じるなんて不健康だ。どうして好き好んでこんな罰ゲームみたいな事をしなくちゃいけないんですか」

「……アキナ君、”don't think don't fee

1”」

「……な、なんすか、その恐ろしい標語は」

たかがお祭りくらいで、思考と感受の権利を奪われそうになった大地に、美晴は冷ややかとも取れる溜息を漏らす。

「町を愛する一員として、地域に貢献したいと思わない？」

「商店街への貢献なら今だって十分にしてるでしょ」

この言葉は事実だった。

本物のヒーローという世にも珍しい客引きによって、集客数に伴い、各店舗とも以前より売り上げを伸ばしている。

薫が関わっていない分、商店街の人間に遠慮がなくなった結果だった。

痛い所をつかれた思いで押し黙った美晴だったが、助け舟は意外なところから出された。

「なら問題ないのではないか？」

「は？」

一同の視線が発言者——八二子に向って伸びた。

放って置かれた（飯食えないし）為、不満気な表情で、それでも突然集まった視線に、やや居心地の悪そうな態度で言を繋ぐ。

「今までやっていた事を、これから出来ない道理はないのである」

「そ……れも、そうねえ」

明快な言い様に、感心したような口調で佳乃が応えた。

きつちり三秒後、褒められたと気づく八二子。

嬉しそうに口元が綻ぶ。

「い、いやいや、問題あるって」

「む、どこがだ？ 人目についているのは今も同じであるし、違いと言えば場所が決められているくらいで、それも大きな違いではないのである」

「う、ぐ……」

言い返されて、言いよどんでしまう。

「そう考えれば、いつもやってる事をやって、アルバイト代も出るんだもんね」

佳乃が頷きながら言ったのを見て、美晴はこの流れに乗ることにした。

「急に頼んだ事だし、バイト代の事はきちんと交渉させてもらうから」

大地が何か言い出す前にそう付け加えると、佳乃が身を乗り出すようにして八二子の頭を撫でた。

「えらいえらい」

「当然であります」

頑是無い笑顔で、心なし、頭を佳乃の方に差し出している。

「よかった。皆にOKしてもらえて」

「え、お、俺もなの?!」

慌てたように大地が視線を向けると、水城家の二人はコクリと頷いた。

「だって」

「何も問題ないのである」

ねー、と二人は仲良さ気に視線を合わせた。

「そ、そうなのかな? 本当にそうなのかな?」

どこか納得のいかない様子の大地を尻目に、満足そうに頷いている美晴であった。

と、いう事があったのが、実は三日ほど前。
そして、現在。

八月十二日の空は、丁寧に濾したカスタードクリームのように、濃く滑らかな青を地平へと伸ばしていた。

膨らんだシュー生地を思わせる巨大な雲が、段々に陰を作りながら、青色の下に大きく広がっている。

日本中の彼方此方でグラスの中の氷がミシミシと軋み、時折カランと大きく音を立てる。

八月も半ばに差し掛かり、蝉の声は益々盛況だ。

彼方へと遠ざかっているはずの夏の音を聞きながら、家へと帰る秋名大地の足取りはやや重かった。

三日前に無理矢理取り付けられた予定は、大地の心を一時暗くした。

しかし、そこはそれ、いつまでも悩んでいたからと言って、事態が彼にとっていいように転がるわけでもない。

早々に諦めて、諦める事に軽く慣れてしまった自分に溜息をつきながらでも、この日、気持ちはようやく上向きになり始めていた。

（確かに考えてみれば、やってる事は変わらない訳だし、夏休みのバイトと思えば、割りの良いモノではあるんだよな）

その点において、橘美晴は信用できるマネージャーであった。

時給にして、五パーセントのアップを取り付けてきた旨を知らされたのは、つい昨日の事だ。

（まあ、人生どっかで辻褄は合うそうだし、不運の前借りをしたと思えば、悪い話じゃない、の、か？）

自分で首を捻ってしまうような理屈だった。

強引な割りに消極的な希望にすぎりながら、大地はいつの間にか目の前にあつた自宅の玄関を開けた。

「ただいま」

帰宅の声を上げ、直ぐにそれに気が付いた。

行儀良く揃えられた革靴。

黒く磨き上げられた、高価そうな。

見覚えがあつた。

「これ、渡さんの……」

それを見た途端、脳裏に閃いたのは、嫌な知識だった。

靴を脱ぎ踵を揃えて置いて、駆けるように居間へと向う。

勢い良く開け放った障子の向こうに、談笑する二人の姿があつた。

「おかえり」

その内の一つ、枝村樹が声をかける。

「あがらせてもらってるよ」

彼女に対座している、渡康平が顔を向けた。
胡散臭いくらいにこやかに微笑まれて、寒くもないのに背筋が震える。

(……闇金より酷えんじゃねえか?)

どうやら、不運にも利子はつくようだった。

同日、ほぼ同時刻。

「またあ?!」

奇矯な声を上げた玲子は、思わず周囲を窺っていた。
職員室内をキヨロキヨロと見回す。

……よし、誰もいない。

「いえ、そういう芝居をしてほしいんです」

「あん?」

続いた那乃川の言葉に、上司に対するモノとは思えない声を返す。

「……どういう事ですか?」

「説明しましょう」

コホンとわざとらしい咳払いが聞こえた。

「えーと、およそ三ヶ月前ですか、あなた達がフィックスを不当に使用したのは」

「んがっ、そ、それは……」

な、何故知っている!

玲子は慌てかけたが、直ぐに理由に思い至った。

「もしかして……渡君ですか?」

「……あろう事が、私を懐柔しに来ましたね、彼」

ケータイの向こうで、くいつと眼鏡を押し上げたのが分かった。

(あの馬鹿)

吐き捨てるように、心中で零す玲子。

よりによつて、監査する立場の人間に共犯をそそのかすとは。

不正を暴く人間と秘密を共有してしまえば、罪自体に問われない、
と言つのは確かに一つの理屈ではあつたが。

……世の中には、屁理屈と言つ言葉も存在する。

「えーっと、そ……れで？」

か細く窺うような玲子の声には構わず、那乃川の説明は続く。

「我々のように、日常的に非日常と接する機会の多い職業であつても、フィックスは破格の存在でしてね。タイムマシーンと言えば夢のアイテムですから、これまでも一部の人間にとっては興味の対象でした」

それは玲子の知るところでもあつた。

だからこそ三ヶ月前、あの場で彼女は最初反対を示していたのだ。

「日本支部はアレの研究には消極的で、以前から不満を持つてる人たちも結構いたみたいですね。それが、あなた達が三ヶ月前に使つちやつた所為で、そんな人たちが悪い具合に刺激しましてね……まあ、一応調査による実動試験としておきましたが、こちらとしても何らかの対応が必要なんです」

「……でもフィックスは」

「そうですね。あの玉ころには確かに大きな力はありません。人助けは出来ても、世の中を変えることは出来ない。現状を固定して、時間移動による変動はありえないと言うルールがある限り。あれは歴史の教材としては優秀でも、はつきり言つて、この機能がある所為で価値は半減してますし、何よりこの機能自体存在する意味があまりないように思われる」

少しの間のあと、ただ、と前置いた。

「我々の理念を覚えてますか？」

「」 空想できるものは、存在できるもの」

「そうです。このなんとも懐の広い標語の所為で、少しばかり困つた想像が成立してしまうんです」

「困つた、想像？」

「そ。……もしかしたら、世の中を変えることの出来るタイムマシンもあるのではないか、という夢」

あ、と玲子は声を上げた。

言われるまで、そんな事思いもよらなかった。

なまじっか中途半端な本物がある所為で、変な固定観念が出来ていた。

よくよく考えてみれば、こちらの方が異端なのだ。

「今のところ、そんなモノの存在は確認されていません。もともと目的はあっても目標はないような組織ですから、それは良いんですが。困った夢に取り付かれた人たちは、血眼になってそれを探しています。……しかし、見つからない。すると、どうなると思います？」

答えは玲子にも分かった。

「……都合よく、事実の方を解釈するんだと思います。現状をセーブするという一見意味の無さそうな機能。……これには、本当に意味がないのではないか？ って」

「その通りです」

今にも良く出来ましたと続きそうな声色。

「現状を固定する機能には意味がなく、有ったとしてもそれは飽くまで機能の一つで、フィックスこそが、そのタイムマシンなのではないか。……というのが夢想家達の見ている夢です。しかも、遅々として進まない日本支部の研究に対して、実は説明はすんでいて日本支部は装置の独占を計っている、なんて事まで言われちゃいます」

いや、言われちゃいましてって。

それは結構、大事なんじゃねーかなー、とか思いながら、玲子は溜息をついた。

それにしても、なんとも想像力豊かな事だった。

この場合純粹に想像力と言って良いかどうかは分からなかったが、少なくとも自分より多くの可能性を見ている人たちなのだろう。

ふと思いついて、玲子は聞いてみた。

「まさか、那乃川さんも夢想家の一人だったりしませんよね」

「……」

向こうから、どっちとも取りにくい、すごく困る沈黙が降りる。

「……え？ 凶星？」

その言葉を何とか飲み込んだとき、通話口から反応があった。

「……ここだけの話なんですが」

なんとも深刻そうな声。嫌な予感を煽るような。

「本当言つと、実際これっぽっちも進展がなくて、全く何も分かってないんで……あれ？」

がちゃーんと言つ音が聞こえたのだろう、もしもーしと心配そうな声が聞こえてきた。

「だ、大丈夫です。ちょっと椅子からこけちゃっただけで」

「気をつけてくださいよ、君も若くないんですから」

「……なんだと、このやろう。」

めでたく額の三叉路が復活した所で、打って変わって明るい声が。「そんな具合だね。そういった諸々がばれる前に、とっとこ盗まれちゃいましょう」

夏休みの宿題が終わっていない小学生が、学校燃えねーかなーって言つと同じトーンだった。

「そんなこと言つて、具体的にどうするんですか？」

「ここは、経験者優遇という事で。水城佳乃さんに話は通してあります」

なんつーバイトだ。

絶対履歴書に書き込めない職歴だった。

「でも、いつまで……」

と問いかけて、思い出す。

「あ、そうか、だからこのタイミングなのか。確かアメリカ力支部から視察が来るんでしたね」

「そうです。フィックスの件で一名エージェントが送られてきます」

「あー。……あ、だったら秋名君の方にも？」

「はい。渡君が話をしに言ってます」

どっちもどっちに思える共犯関係だった。

「嫌、です」

と言うわけで、再び秋名家。

一通り康平に話を聞いた大地の返答だった。

「そこを何とか」

懇願するように、目の前で康平が手を合わせてきた。

しかし、拝み倒されたって、聞けることと聞けないことがあった。ただ、今回の話をどっちの箱に詰めるかは、正直引越し業者の頑張り次第だったりする。

なんと言っても、三ヶ月前の後始末なら、責任の一端は大地にもあったからだ。

「で、でも、だって俺要らないじゃん！ エージェントだかジェントルマンだかが来るんだったら！」

「そうもいかないんだって。…あ、良い？」

と、樹に煙草の箱を見せる。

「ちよつと待って」と言って、樹はどこからかごつい灰皿を持ってきた。

喫煙者に寛容な家、秋名ハウス。

「そいつにばれちゃいけない以上、ある程度は本気でやらなきゃいけないんだよ。そうなった時、俺じゃあ説得力無いだろう？」

灰皿に灰を落しながら、それに、と続ける。

「視察に来るヤツ、元々協力者だったらしいんだよ。つまり君と同類」

激しく反論したかったが、意見をさしはさむゆとりは無い。

「なんか力を持つてるとしたら、展開次第じゃあ佳乃さんにも危険

「が及ぶ可能性がある。いいの？ 彼女が怪我しても？」

「……そりゃあ…嫌、ですけど……」

「だったら、頼むよ。相手が本気でどうこうしてくる前に、未解決で事を解決しなくちゃいけない。それには適当な力を持った人間が必要なんだ」

「……………」

沈黙は長くは続かず、溜息がそれに報いた。

続く言葉はなかったが、受諾と同じ意味だ。

「よかった」

「……まあ、この件に関しちゃあ、俺にも責任はあるわけだし、しようがないっすね」

それにしても、と、大地は思う。

「……なんか最近こんなばっかりだ」

「あははは」

樹になんかウケた。

「よし、それじゃあ行こうか」

「え、どこに？」

「空港」

康平は煙草を消して、立ち上がった。

キョトンとしている大地に向けて、なんでもないように言う。

「なんで？」

「ジャックを迎えに行かなきゃ」

「えと……そのリゲインなしで二十四時間闘ってそんな人誰？」

「視察に来るエージエントだよ。もう直ぐこっちに着くんだ」

「え！ 今日！？」

勢い良く立ちあがろうとして、膝を強かにテーブルに打つ。それを見て、樹がきゃっきゃ喜んだ。……楽しそうで良かった。

「……いったー。だ、だって心の準備とか」

「悪いけど車の中でしてくれ。千葉を拾っていくから、少し時間あるし」

そんなこと言われても、とか口の中でもごもごしているうちに、腕を引かれた。

「じゃ、行こうか」

「だ、で、が、ちょ、無理、心の準備無理!」

無理―――! と廊下に消えていく声を聞きながら、
「いつてらっしゃーい」

暢気に樹が送り出した。

番外編 3

” 希望 ”

3 (後書き)

魔法が飛び交う異世界なんかより、アメリカのエージェントって言葉の方が書いてて嘘くさいのはどうしてなんでしょう。

慌しく、しかも強引に後部座席に積み込まれたワリに、車は人が押し出したようにユルユルと発車した。

不本意ながら渡康平と同乗者になった大地であったが、こうなった以上は文句を言っても始まらない。

この上は効率的に行動するのが理性ある現代人と言うべきで、脳裏に聞こえてくる不満やら何やらから耳を塞いで、代わりに口を動かした。

「それで、芝居って言っても俺は具体的に何をしたらいいんすか？」

「実は、それがビミョーに決まってない」

「は？」

剣呑な声を出した大地に、いや、と慌てたように康平は首を振る。「大筋は決まってるんだよ大筋は。でも細かい所がちゃんと煮詰まってる無いうか」

本当にどこかの劇作家のような言い訳を口にして、幾らか不満気に零し始める。

「大体、今回の視察自体急に知らされたんだ。完璧な又キウチで大地などは、そもそも視察とかは又キウチでしなけりや意味ねーんじゃ……」とか思うのだが、大人には大人の理屈があるらしい。

「それで、那乃川さん——あ、俺の上司で今回の発案者な——が、丁度良いから、って」

——なるほど、そいつが今回の首謀者か……。

冷静に閻魔帳にその名を刻みつつ、大地は顔を上げる。

見慣れた通学路上、それが行き着く先に、映都東高の校門が見えた。そこに、人待ち顔で佇む千葉玲子の姿があった。

夏休みだと言うのに、普段学校で見かける姿と同じ服装なのは、教師に夏休みは無いという噂の真偽を示しているようだ。

康平がゆつくりと路肩に車を寄せると、玲子がこちらに気づいて

駆け寄ってきた。

そうして助手席のドアを開けるや。

「秋名君ごめんね。付き合わせちゃって」

申し訳無さそうにそう口にした。

ボタンと音を立ててドアが閉まると、玲子の服についていたのだらう、コーヒーの香りが薄く車内に漂った。

「いや、まあ、今回はしょうがないって言うか、もう慣れたって言うか」

「あ、君ねえ、若いうちからそんな枯れたこと言っちゃだめよ」

一体それは誰の所為でしょうか？ と閻魔帳を捲り、あ、お祖母様だ、と答えが出たところで、康平がしんみりと呟く。

「大人になるって言うのは、大事な宝物を一つずつ壊してくって事なんだよな」

分かったような分からないような言葉が、車内に沈黙をもたらして、車は出発。

三人は一路空港へと向った。

日本の空の玄関。

と言うだけあって、人の多さより、まず人種の多彩さが目に付く。

空港のエントランスに入るなり、多種多彩な髪、肌の色が視界に飛び込んできた。

まるで、ここだけで日本と言う仮面を外して、世界と言う素顔を晒したような、どこか開放感に満ちた活気がある。

頭上を飛び交う言語も様々だった。

辛うじて聞き取れるものから、ホントに舌とかでどうこうなんの？

と疑問に思ってしまうものまで。

日ごろ外国どころか、空港と言う場所自体に馴染みの無い大地には、殆ど異世界といってよかった。

雰囲気にも少気を飲まれながら、それでも感心したように隣に立つ康平を見た。

「……それにしても、渡さんって英語できたんすね」

来訪者の名前は、ジャックである。

道中、本名ではないと説明されたが、まさかまんま日本人が来るわけでも無いだろう。

という事は、当然喋りは英語だろうし、一人だという事だから、こちらに通訳代わりがいてしかるべきだ。

……と、大地は思っていたのだが、どうやら違らしい。

苦笑しながら康平は首を横に振った。

「いや、俺はからきし。でも、千葉が出来るから」

「ちよ、ちよっと、私英語なんて喋れないわよ」

「え？」

突然名前を出されて、玲子が慌てたように顔の前で手を振った。

「あ、だって、お前高校の教師だし……」

「あのねえ、世の中には”専門”って言葉があるの。私の専門数学だもん」

「な、なにっ?! それじゃあ何のためにお前連れてきたのかワカシネーじゃん!」

「え、なに? じゃあ、そのために私連れてこられたのっ?!」

それぞれ驚きを口にしながら、先ほどまで落ち着いていた大人二人は、巢に水を注ぎ込まれた蟻のように慌て始めた。

「そ、そんなこと言っつて、ホントは出来るんだろ?」

「どんだけつまんだないドッキリなのよ……。教師って言ったって、英語の先生でも無い限り学校で英語に触れてる時間なんて全く無いんだから。生徒達の方が私なんかよりよっぽど……」

ハッと気づいたように、二人の顔が大地のほうへ向いた。

「い、いやいや、俺だって無理っすよ。ヒアリング苦手だし、テレビでも受験英語って言ってなんか批判されてるじゃないですか」

飛び火してきた。

観光客だろう外国人の一団が、物珍しげに三人を眺めやりながら入り口へと向っていく。

なにやら揉めている日本人達を見て、何やってんだろうね、くらいは英語で話していたかもしれない。

それすら三人にはわからない。

「そ、それじゃあ、なにか？ 誰一人英語は喋れないと……そう言うのか？」

康平が言うつと、うつてかわって沈黙が再び訪れた。

「……」

「……」

「……」

「……えーっと……タイム……」

タイムの宣言は聞き入れられず、折りよく案内板が表示され、飛行機の到着を知らせるアナウンスが場内にかかった。

康平は恨めしげにカウンターを睨んだが、睨まれた職員達こそいい迷惑だったろう。

山を越え谷を越え僕らの町にやってくるというのは、現代において、一部忍者だけの特権ではなくなった。

海さえ越えてやってきたおよそ四百名の乗客達の内、キャップをかぶった少年が、見送りをするキャビンアテンダントの一人に礼を言っていた。

癖の無い英語で、丁寧に旅の間のサービスに対して、微笑みと共に感謝の意を述べている。

瞬く間に彼女を赤面させた。

羨ましそうに、顔を赤くしている彼女と飛行機を降りていく背中を見送りながら、同僚の一人が声をかけてきた。

「あの子なんだって？」

「……色々ありがとうって」

「いいな、私三回くらいしか声掛けられなかった」

真剣に悔しそうな声を発した同僚に対し、彼女は陶然とした笑顔で応えた。

飛行中、彼の少年は、彼女たちの間でちょっとした話題になった。なんかもスゲー格好良い子いんぞ、と言うわけである。

代わる代わるといった調子で、何か不足は無いか、などと聞きに言っ
ては少年を困惑させ、控えに帰っては低声で嬌声を上げた。

フライトの間、明らかにサービスに偏重が見られたが、幸い他の乗客に気づかれた様子は無く、この航空会社は失点を免れた。

しかし、失点は免れたからといって、それで済ませないのがプロ意識である。

私語に勤しむ二人の下に、プロ意識の塊のような影が降りかかってきた。

「楽しそうなところ口出して悪いんだけど……仕事しろよ」

冷たい声をかけられて、実際に冷水を浴びせられたように二人は身をすくめた。

恐縮しながら周りを見ると、いつの間にかお客さんの姿が無い。

恐る恐る、視線を声がしたほうへと戻す。

見えない空バケツを抱えていたのは、二人と同じ制服を着て、腰に手を当てた背の高い女性だった。

彼女達と同僚で、三年ほど先輩に当たる。

密かにラビットと言うあだ名が付いていたが、これはウサギのように愛らしいからでも、関根と言う苗字だからでもなく、単に得意技が殺人パンチだからだ。

大半の格闘技協会から出禁を喰らいそうなあだ名を冠した先輩が、真剣な表情で二人を見つめる。

「そうやってはしゃぐのは、せめて仕事が終わってからにしない」

「でも、先輩だって見たで……あた」

「いたい……私もですか？」

コツ、コツ、と、小気味良い音を立てて、二人の頭を小突いた。口答えしようとした方は仕方ないとして、もう一人が不満そうな声を上げる。

「連帯責任」とは先輩は言わなかった。

効果の程はともかく、理屈の通らない仕組みだからだ。

彼女達を小突いたのは、単純に仕事をないがしろにした罰である。

「返事は？」

それだけ簡潔に問うと、「はい」と渋々といった感じで二人は仕事に戻った。

溜息まじりにそれを見送りつつ、チラリと通路へ目をやる。

「……まあ、確かに格好良い子だったわ」

誰にも聞こえないような声で呟き、くるりと背を向けて、あとは手際よく仕事を再開させた。

そんな風に話題になっていた事なんか知りもしない少年は、トラブルもなく無事入国を済ませ、日本へと続く人の流れに合流した。

キャップを目深にかぶり、小さなリュックを背負っている。

バックパッカーなどに見えないのは、年齢と軽装と清潔感の所為だろう。

夏らしい爽やかな青い装いで、Ｔシャツにジーパンと近所のコンビニにでも出かけたような気軽さだ。

初めて外国を訪れたような緊張が見て取れ、いかにも初々しい。

やがて前方に人の溜りが見えてきて、少年は足を止めた。

キョロキョロと視線を動かし、直ぐに目的の顔を見出して、右手を上げた。

結局、なんちゃって外交官には康平が選ばれた。

民主主義に則り、責任があるべき場所に帰結した結果だ。

恨めしげに後方に立つ二人を見た後、康平はやってくる人の流れに顔を向けた。

と、言つても、直ぐに探す必要がなくなった。

歩く足を止めて、こちらに手を上げる少年がいる。

ホツとしたような笑顔を浮かべながら、康平の前に立った。

「コーヘイ？」

写真などで顔を見知っていたのだろう、疑問調ながら確信のこもった声でそう問いかけてくる。

青い瞳を見つめながら、若干上擦った声を康平は出した。

「ハ、ハイ。マイネーム、イズ、コウヘイワタリ。ウエルカム、ジャパン！ アイキヤンスピークイングリッシュベリーリトル」

昭和の結婚詐欺師みたいな英語で握手を求めてくる日本人に、一瞬呆気にとられたような顔をした後、少年はクスリと口元に手を当てて笑う。

「こんにちわ、ジャックです。日本語が少し出来マス」

流暢な日本語が、指の隙間からこぼれてきた。

笑いの余韻を残しつつ、握手を求める形のまま固まってしまったコウヘイの手を、少年はしっかりと握り返した。

そんな光景の少し後ろ、他人の距離を保ちながら、固まってしまった知人を大地達は生あったかい目で見つめている。

「……渡さんが大人になってる」

「確かに、一瞬で大事なものが壊れたみたい」

煤けた背中と対照的に、にこやかに握手をしている少年を見ながら、はくと溜息をついた。

視線を交わしあい、内心、少年が日本語を喋れる事にホツとしながら、悲劇的な出会いの現場へと二人は足を進めたのだった。

おまけ ”番外編2（没）編”（前書き）

こんにちわ、 中路太郎です。

今、番外編3の次話を書いているのですが、どうも少し時間が掛かりそうなので、その間こちらでお楽しみいただければと……………えー、没作です。

と言いましても、別に気に入らなかったとかそう言うわけではなく、番外編を一つのテーマで纏めたら良いかなーとか思つて、番外編2を一杯フリを入れた方に差し替えたんですが、いざ3を書き始めてみると、他のことがやりたくなつてしまつてですね……………はい、本末転倒です。

今となつてはこちらにしておけばと……………なんだか言い訳ばかりですが、良ければ最後まで読んでくださると嬉しいですよ。
それでは失礼致します。

おまけ ”番外編2（没）編”

身構える俺にブルームが笑って見せた。

「……一つ提案があるんだけど」

いつもと同じ艶然とした微笑。

「……だけど、どこか……」

「今日はこれで終わりにして……次で最後にしない？」

「………は？」

「……え？何？どういう……」

「だから………」

いや、やっぱり、いつもと同じ表情で。

「次が最後の闘いつて事で」

からかうようににっこりと。

ゴールドデンウィークが明けて初日。

時計の針が八時を差したばかりの教室では、休日中の土産話を披露し合うクラスメイト達の声で賑わっている。

聞くと無く耳に入ってくる、どこそこに行っただの、なにそれをしただのの楽しそうな会話の輪には加わらず、俺は分厚い紙の束で顔を仰いでいた。

青葉茂る五月。

しかし、ゴールドデンウィーク中からの先走った夏の訪れで、室内はサウナのように蒸し暑い。

窓を全開にしても五月とは思えない陽射しが、俺の腕をメディア

ムレアにすべく奮闘するばかり。

一向に涼しい風などは入ってこなかった。

the・異常気象。

……あわてんぼうのサンタクロースだって、一ヶ月前にはまだ衣装もクリーニングに出してないだろうに。

「おはよゝぐるてん」

暑さで呆けている俺の上に、人の形をした影が落ちた。

態々顔を向ける気にもならなくて、そのままの体勢で答えてやる。

「…弾けて混ざれ」

「要求は高まる一方だねー」

何故か嬉しそうな声でそう言ったのは、国東歩くにさきあゆむだった。

鞆を肩にかけたまま、近くにあった椅子を引き寄せて、さっさと机の一部を陣取ってしまう。

「連休どうだ……あつこめ〜ん」

わざとらしく言つて、俺が団扇代わりに使っていた紙の束をひったくった。

「そついや、秋名は課題とデートだったんだよね」

「お前わざとらしいんだよ…」

「あはは、ごめん。あ、スゴイ終わってるじゃん」

ペラペラと俺の五日間の成果をめくりつつ、国東が感心したような声を出した。

「当たり前だろ。千葉ちゃんの課題サボる勇気なんぞ俺には無い！」

「強い弱気だな〜。……そついえばその千葉ちゃんが言つてたんだけどさ。なんか今日このクラスに転入生が来るらしいよ」

「転入生？」

聞き返す俺に国東の顔が輝く。

左右の黒目の中で大きくなる一番星。

「そつ。どんな娘こだろうね？ 楽しみだね」

こいつの中では転入生は既に女の子と決まっているらしい。

もしかしたら千葉ちゃんから詳細を聞いているのかもしれないけど。

国東の作りだけは無駄にいい顔が、頭に花が咲いちゃったように緩んだ。

……転入生か。

他に耳を傾けてみると、クラスメイトの何人かもその情報を拾っているらしく、やってくる新たな出会いに期待に胸膨らませる言葉を交わしていた。

残念ながら俺にそんな余裕は無かった。

暑さに脳の色々大事な部分をやられながらも、いや、だからこそ、か……頭の中で、一つの言葉が只只繰り返されていた。

俺の目の前で、ハニ子の頭を撫でながら、ブルームがいたずらに成功した子供ののように笑った。

「……な、なに？ 最後つて……最後お？」

事態が飲み込めずに反復した言葉に、楽しそうな笑声が重なる。

「そう。最後」

立ち尽くす一堂を見回して、もう一度、今度は言い含めるように。「次の闘いを、最後の闘いにしましょう」

そう言い切った。

さ、最後の闘いつて。

あ、あれか、道場六……は料理の鉄人か、って全然遠い。

……だめだ、頭がまともに働かない。

「まいったな」

最初に立ち直った、と言うよりは最初からショックなど受けていなかったような暢気のんきな声で、樹が口を開いた。

「私はこつちに呼ばれたばかりだったんだが、だとすると、いきなりお役ごめんかな？」

あはは、と朗らかな笑い声を上げて樹は頭を掻いた。
その姿に何だか妙な貫禄を感じる。

きつと、様々な事を夜の街で経験した所為だろう。

「じゃあ、そういう事で、また逢いましょう」

全員が笑う樹に視線を向けていた隙を突いて、ブルームが音を立ててマントを翻した。

そのままハニ子の手を引いて、駆け去って行ってしまふ。

「覚えてろよー！ イツチイイイー！」

お手本のような捨て台詞を残し、ハニ子達は人ごみの中に消えていった。

あんなに強く引つ張って手は抜けないのだろうか？ とは多分要らぬ世話だろう。

「……薫様に報告しないと」

橘さんがしんどそうに呟いた。

「最後、か」

頭の中に渦巻いている言葉を、一つ取り出してみる。

それは、どこにも届くことなく消えて行って、俺は撫でるようにベルトに触れた。

……そりゃ、この闘いが永遠に続くとは思っていなかったけどさ。それどころか、早く終わって欲しいとすら願っていた。

でも、これも唐突に終わりを示されると、胸中は複雑だったりする。遣る方ない思いで溜息を零した時、教室の入り口がカラカラカラカラ……と、力ない音を立てて開いた。

俺に負けるとも劣らない大きな溜息をつきつつ、入り口に姿を現したのは水城真琴^{みずき まこと}だった。

教室に入ってきた彼女は”俺達いまいち当事者になりきれてねえ同盟”の唯一の同志である俺の顔を見つけると、にへらっと、自棄っぽい笑顔を浮かべながら、こちらに近づいてきた。

疲れた体に鞭打つような足取りで歩いてくる水城さんには悪いが、

非常に嫌な予感がしている。

「おはよ……」

「お、おはよう」

か細い声で挨拶をしてくる水城さんに、引き攣った顔で何とか笑顔を見せつつ挨拶を返す。

「ど、どうした？　なんか顔が青いけど」

俺がそう言うと、水城さんはもう一度、ぞっとするような笑顔を見せて首を振った。

心なしか揺れる三つ編みにも元気が無い。

「詳しい事はいえないけど……」

チラツとだけ、不思議な花園で遊ぶ国東を見てから、小さく頭を下げた。

「取り敢えず先に謝っておくね……」

「え？　ちょ、ちよつと、あの」

ごめんなさいと言ったきり、踵を返して彼女は自分の席へと行ってしまった。

不穏な言葉を残された俺の耳に聞こえてきた、はあ〜という重たい溜息がやけに心に残った。

「な」

千葉ちゃんの紹介に俺は椅子を蹴って立ち上がっていた。

訪れたホームルームの時間。

新しいお友達として教室に姿を現した人物に、クラス中が息を呑んでいる。

その中で水城さんだけが、堪忍してくだせえ、とばかりに俺に向けて手を合わせていた。

「只今教官殿が仰ったとおり、今日から皆のクラスの一員となる……」
カッカツと軽快にチヨークを走らせて名前を板書していく。

広い黒板を目一杯使って名前を書いた人物が、制服のスカートと青い髪を揺らしてこちらを振り返った。

「如月八二子である。以後宜しく頼む」

そう言って転入生がニツカと笑った。

瞬間、クラスメイト達を縛っていたタガが、バキンと音を立てて壊れたような気がした。

「え？ 転入生って、あの子商店街に出て来てた子じゃないの？！」

「いや、わかんねえよ！」

「いいの？ アンドロイドって。何ていうか、いいの？」

大騒ぎする生徒達に千葉ちゃんが叫び声を上げる。

「ほら！ 静かに！ 他のクラスも今ホームルームやってるんだから！」

しかし、ボルテージが上がった十代の暴走は、教師の声くらいじや止まらない。

「あ、はい、しつもん。如月さんはどこから来たんですかー？」

「軍事機密である」

「軍事じゃねえだろ。」

「じゃあじゃあ、誕生日はー？」

「一昨日産声を上げたばかりだ」

「好きな食べ物はー？」

「重油」

クラス中から起こる引切り無しの質問に、ゴキゲンで答えていく八二子。

やっぱり注目されるのは好きらし……重油？

大騒ぎの級友たちに若干置いてけぼりを食らっていた俺は、目の前に恐ろしい光景を捉えた。

フルフルと震えながら、額に血管で出来た交差点を浮かび上がらせる、千葉女史の姿。

ゆっくりと両腕を上げ、ガツと手の爪を黒板に立てて、躊躇うことなく、思いつきり、黒板を引っ掻きはじめた。

いは余程カルピスも冷えていないと見る事は出来ないだろう。

「真琴様ー」

恐る恐る音波兵器が鳴り止んだ事を確認して、水城さんがその声に小さく手を振って応える。

反応があつた事が嬉しかったのか、八二子はよりいっそう強く腕を振り始めた。

その隣で、千葉ちゃんの流麗に流れを打った眉が不審に顰められる。

「真琴……さま？」

し、しまった。

胡乱気な千葉ちゃんの声に、背中を冷や汗が流れる。

千葉ちゃんは水城家の事知らなかったんだ。

水城さんもその事に気付いたのか、慌てて手を引つ込めるがもう遅い。

どうしてか水城さんだけでなく俺までがもの凄い目で見られてる。

「水城さん、秋名くん……ちょっと」

「ああー……」

その時、千葉ちゃんの言葉を遮るように八二子が大声を上げた。

見つかるはずの無いものを見つけたような表情で、何故かその視線は俺を捉えている。

ビツと指まで差されていた。

「き、き、き、き、き、……貴様！……」

がつつり吃りながら指を振るわせる八二子に、嫌な予感が駆け巡る。

「貴様！ サンレッ……ひだっ」

あわやというところを、千葉ちゃんが平手打ちのような勢いで、八二子の口をふさいでくれた。

急に口を叩かれた八二子は、驚いた顔を千葉ちゃんに向けている。目尻にはきらりと光るものが…。

「あーっと。秋名君と水城さん。転入生連れて彼女の机取りに行っ

てくれる？」

ハ二子の口を押さえたまま、話の転換としてはかなり強引な感じで千葉ちゃんが叫んだ。

「喜んで！」

二人して居酒屋のバイトのような掛け声を上げて、直ぐに教壇に駆け寄る。

「事情は後から聞くからね……」

「よ、喜んで……」

背中が冷や汗が凍るような千葉ちゃんの言葉から逃げるようにして、俺たちはハ二子を抱えて教室から出て行った。

「あ、あの教官殿は、何かわたくしに思う所でもあるのでありますか？」

目に涙を浮かべたハ二子が、水城さんに取り付くようにして服の裾を引っ張っている。

……まあ、ない事はないだろうけど。

サーフボードのようにハ二子を担いで俺たちが逃げ込んだのは、中央棟の校舎裏だった。

周りを壁に囲まれた、小さな花壇があるだけのかかなり人目に付き難いスポットだ。

寒々しい雰囲気身に晒していると、いつかの事が思い出された。

……そういえば、初めて橘さんに会ったのもこの場所だったわけ。たった六日前の事なのに、なんだか半年も経った様な感じがするから不思議だった。

……まあ、それは良いんだけど。いや、良くはないけど。

とにかく、ここですら落ち着いて話が出来るだろうと言う事で、俺たちはこの場所にいた。

「ハ二子ちゃんが皆の前で秋名君の正体を叫ぼうとしちゃうからだ

よ」

「いや、逆、逆」

仕方ねーな！って感じで腕を組んで言う水城さんに、首を振る。系統で言うと、俺は大きい人でなくバイク乗りの方だ。

生身の方が正体ですから。

小さい子に言い聞かせるような水城さんの言葉に、ハツとした様にハニ子が飛び上がり、彼女を庇うようにして俺の前に立ちはだかる。

「真琴様下がって下さい！ 危険であります！ わたくしに内蔵された全てのセンサーが、ヤツをサンレッドだと言っております！」

全然話を聞いていないような事を言って、ハニ子の左手が彼女自身の右手首に伸びた。

だから、サンレッド止めろ、まず。

ハニ子がフンヌつと力を入れると、手首から右手が抜け、そこから物騒な銀色が飛び出した。

——四十二ミリハニ子 ^{カノン} 砲。

本当ならもつと相応しい呼び方もあるんだろうけど、俺にとっては関係なく脅威だ。

その砲口が完全にこちらをロックオンしている。

「ダメだよ、ハニ子ちゃん。冗談でもそんなもの向けたら」

「本気だから大丈夫であります」

鼻息も荒く血走ったような目がその言葉に真実味を与えている。

「余計悪いわ！」

威勢の良いのは言葉だけで、俺自身は完全ホールドアップ状態。あの銀色の筒から発射された黄色い光の映像は、忘れようたつて中々忘れられるものじゃない。

なんだか足場を固め始めたハニ子の肩を、慌てたように水城さんが掴む。

「だ、ダメ！ だって、えーと、ほ、ほら！ コレって、公私混同でしょ！」

この場合、学校と闘い、どちらが公で、どちらが私であるかが微妙な所だが、八二子の表情は一変した。

「こ、公私混同……！ な、なるほど、確かに言われてみればそうであります。今はプライベートタイムでありました」

やっぱ私なのか。

「え、あ、わ、分かってもらえて嬉しいよ」

水城さんが引き攣った顔で八二子の肩を叩く。

「やはり公私の区別は大切でありますからな。サンレッド。と言うわけで、今日から同じ釜の飯を食らう仲間としてよろしく頼むぞ」

なんだかやけに恩着せがましい口調でそう言っ、八二子が鷹揚に頷いた。

「……だったら、まず、その物騒な物を下ろしてくれ……」

万歳の格好のまま力なく零した俺の言葉に反応するように、花壇の花が小さく揺れた。

「どういう事なんですか！？」

半泣きだった。

あの後、用具室に寄った俺たちは、八二子の机を確保して教室に戻った。

戻った時にはHRも終わっていて、ちょうど教室を出て来るところだった千葉ちゃんを、俺は半ば縋り付くようにして捕まえた。

「そ、そんなに興奮しないで」

千葉ちゃんは周囲を確認するように首を動かして、大きく溜息をついた。

水城さんたちには先に教室に戻ってもらっている。

「私だって分かんないの」

朝礼終わりの廊下にはちらほらと人影があり、それを意識してか千葉ちゃんは小声で話し始める。

「校長からのお達しなのよ。知り合いから頼まれて昨日急に決まったって。なんでも勉強の為とか何とか」

勉強って……今のあいつに必要なのは賤教育のような気がするんだけど。

「どうやってかは知らないけど、手続きはちゃんと踏んでるみたいだし……まあだから悪いけど、秋名君。君、彼女の面倒見てくれる？」

「どこでそうなったっ!？」

要するに八二子はより人間らしい所作を学ぶ為に、この学校に来たってことなんだろう。

その手助けを俺がするって、もう意味が分からない。

……何で自分の首を絞めるような事をしなきゃならない。

「だって、君あの子に勝つ糸口すら掴めてないでしょ」

「いや、まあ」

と、言うか、それ以前に闘いにすらなっていないのが現状だ。

女の子は殴れない。

……祖母さんは”女の子”じゃないから別。

稽古中その事を本人に言った所……まあ、ぶっ飛ばされたんだけど。(あの頃からだったなあ……祖母さんが日本刀振り回すようになったのは……)

「だったら、これは君にとってもチャンスなのよ」

苦酸っぱ辛不味い思い出に浸っていた俺を、千葉ちゃんの言葉が引き戻した。

「は、はあ……?」

話が全く見えてこない俺に、千葉ちゃんの目は爛々と輝く。

「あの子の成長にどれだけ期待できるかは分からないけど。学校にいる間だけでも一緒に居れば、ちよつとは情だって湧くかも知れないでしょう?」

「はあ……なるほど」

目には目をという訳か。

次に戦う時、こっちが攻撃できない代わりに、向こうにも躊躇うぐらいの心を期待しようという、どこまでも茨の道くさい戦法だ。

「大丈夫よ。ここで何か悪さをする感じでもないし。私もいざとなったら……」

慰めるように千葉ちゃんが言い掛けた時、背後の教室が急に騒がしくなった。

「っきゃーーーーー！」

「た、大変だ！ 転校生が机を叩き割った！！」

激しい破壊音と、絹を裂くような叫び声。

何事かその他のクラスからも野次馬達が集まる中、俺たちの間に訪れる真顔と沈黙。

「……………」

「……………」

「……………じゃあ、私授業があるから」

「待て」

いそいそと立ち去ろうとする千葉ちゃんの肩に手を伸ばすが、手で叩き落される。

「疲れかなあ、何も聞こえない」

疲れているという割には競歩選手並みの早足で、廊下を突き進む。

「千葉ちゃん今がいざって時だって！ ……いざーーーーっ！」

何て厳しい審査基準なんだろう。

廊下に響き渡った道場破りのような叫び声も、生徒達の不振を煽るばかりになった。

水城さんの家の事情を深く突っ込まれなくて助かりはしたけど、後始末が大変だった。

恐る恐る教室に入ると、どういう状況だところなるんだ？ と聞きたくなるくらい机が真つ二つになっていた。

鋭利な凶器を思わせる断面を眺めながら、やけに憤慨している八二子を宥めつつ、水城さんと三人、新しい机をとりに行く。

千葉ちゃんも提案を無条件に受け入れるわけではないが、こうなつては八二子にはやはり監視が必要のようだった。

その役目を自分が仰せ付かるというのは全く持つてありがたくない話だけだ。

まあ、火の勢いが増してから消火作業に当たるよりは、火種の内に手の出せる位置にいる方が後悔が少なそうだ、というのが最終的な言い訳になった。

既にどこかの段階で関わる事を覚悟しているあたり救われない気もするけど、精神衛生上も関わってたほうが幾らか楽そうなのはしている。

使い物にならなくなった机をゴミ捨て場に投棄して、俺たちは用具室に向かった。

その道すがら、どうして机を真つ二つにしなければならなかったのか事情を聞いた。

「八二子ちゃんも最初は嬉しそうに質問に答えてたんだけど、途中から皆がいつせいに違う事聞き始めちゃって……」

突然、机を叩き割ったんだそう。

……処理能力の限界を超えちゃったんだね、きつと。

「一度に聞かれても分からないのである」

水城さんの説明に拗ねたように八二子が呟く。

……お前は本当にアンドロイドか？

隣を歩くのが、只の馬鹿だという説が濃厚になった頃、短い行程を終えて目の前に用具室を向えた。

目的地に着いた途端、八二子は飛び込むように部屋の中に入ってしまった。

その勢いのまま、状態の良い品を見つけるべく、机の吟味に入る。

「ホントにごめんね」

蚊の鳴くような声で水城さんが言った。

乱雑に詰まれた机の間を器用に駆け回る八二子を見ながら、もじもじと三つ編みを弄っている。

「いや、まあ、そういうのは、もう言いつこなしてことで」
それに首を振って答える。

仕方ないって諦めるには大分理不尽な気はしているが、それは多分俺たちの間で言い合っても解決しないものだ。

「だから、気にするなって言われても無理かもしれないけど、……なるべく努力してみて」

そう言って笑うと、水城さんも笑顔を返してきた。

どう見ても苦笑いだ。

「これに決めたであります！」

渋い笑いを浮かべあっていた俺たちの耳に、快活に叫びを上げる八二子の声が聞こえた。

彼女の指差す先、うずたかく詰まれた机の群れの中、クライマックス・ザ・ジェンガって感じの重なりがそこにはあった。

「……あの、本当にごめんね」

「……まあ……うん」

にこやかに、ジェンガの土台みたいな位置にある机を指差す八二子を見て、俺たちは何とか乾いた笑い声を搾り出すのだった。

窓外でユルユルと太陽が移動し、いつもと変わらない景色が訪れようとしている。

目の端でその光景を眺めつつ、本日最後の授業である世界史を、俺は、重たい瞼の向こうで透かし見ていた。

二代目の机を持って戻ってきてからは、そう大きなトラブルも無く、一日が過ぎていった。

昼食時に、八二子の食事風景が弁当組の食欲を根こそぎ奪っていくという惨事があったものの、それ以外は拍子抜けするくらい静かな日だった。

…… 八二子を取り巻いていた俄レポーター達も、朝の机両断事件を聞いてからは、ぱったりと姿を見せなくなったし。

欠伸を一つ噛み殺して、俺は八二子に視線を向けた。

見ると、彼女は青い髪を小さく揺らしながら、黒板の内容を必死でノートに書き写している。

何故ノートをとる必要があるのかとか、まさかこいつテストが始まる時期まで学校にいる気かとか、そういう細かい事は置いておくとして、俺が今考えているのは、これから何をすべきかだった。

大まかな計画としては、千葉ちゃんの言っていた通りでいいと思う。

八二子が何時^{いつ}まで学校に居るつもりかは知らないが、基本的には四六時中くっ付いて回って、出来るだけ仲良くなっておく。
今日一日過ごした実感として、思ったより酷い目にもあわなかったし。

ただ、やっぱりそれだけじゃあ不安があった。

実際この作戦が上手くいくかどうかとは関係なく、何もしないというのはそれだけで不安だ。

先生の声を斜めに聞きながら、頬杖をついて首を動かす。

視界に再び外の光景が映った。

まだ強い日差しに当てられた校庭の隅に、小さく色の群れが見える。
光に反射し、鮮やかな色を揺らすそれを見て、脳裏に微かに閃くものがあつた。

「…… 何もしないよりは……」

ココからだと一粒三百メートル分くらいの大きさの花壇を見ながら、俺は一人呟いた。

校庭の方から運動部の練習の声が聞こえて来る。

校舎一枚挟んでいるというのに、元気のいいことだ。

辺りは放課後だという事実を否定するには十分なくらいに、まだ明

るかった。

俺と八二子の前には、ニコニコと人の良さそうな表情の女の子。彼女は、つい六日前、千葉ちゃんに嵌められて花の水遣りを手伝う事になった時に知り合った、園芸部の一年生の子だ。

八二子を見ても特にびびった様子もなく、その時と変わらぬ笑顔で俺たちの前に立っている。

「それじゃあ、先輩達には、この間やつてもらった花壇の水遣りをお願いします」

そう言って手渡されたホースを、頷いて、そのまま八二子に渡す。
「なんだこれは？」

「これはホースというモノだ」
「それくらい分かっている。何故わたくしが花の水遣りなどしなければならぬのだ？」

いかにも不満そうに言う八二子の頭をぺしぺし叩く。

「お前は何しにココに来たんだ？」
「決まっている。学校で色々な事を学び、より完成度の高い存在となる為である」

俺の手を払いながら、八二子が答える。
より完成度の高い存在とやらがどんなものかは分からないが、叩かれた右手の激痛を思うとそれも遠そうだ。

「そうだな。だから俺が手伝ってやろうというんだ」

痛む右手をさすりながらそう言くと、分からないという顔をしながら八二子が首を傾げた。

「いいか。生き物を育てる。これは情操教育の基本だ」
情操教育。

ドラマや漫画などで、子供が犬を拾ってくると、必ずと言って良いほど家族会議で出て来る言葉だ。

俺が思いついたのはこれだった。

流石にこいつに哺乳類を預ける気にはなれなかったから、目の前にいる心優しい後輩に頭を下げたというわけだ。

今日は園芸部のほかの部員も居るらしく、彼女の後ろで遠巻きにこちらの様子を窺っていた。

「つまり、花に水をやることで、お前はより完成度の高い存在に近づけるというわけだ」

……多分。

「んーむ」

園芸部員達の視線に気付いた様子もなく、八二子は腕組みをはじめた。

「本当なら真琴様のお手伝いをしたかったのであるが」
どうやら気になっているのは水城さんのことらしい。

彼女は既に帰宅済みだった。

水遣りの事を言うと、一緒に残ろうとしてくれたのだが、夕食の準備があるらしいので無理矢理に帰ってもらった。

彼女には水城家のお腹を満たしてもらわなければ。

でないと、どこからどんな苦情が来るかわからない。

「……分かったのである。他ならぬサンレ……いたい……そうだった」
ペロツと秘密を洩らしそうになった八二子の頭を小突き、俺は園芸部の面々に顔を向ける。

「じゃあ、本当にありがとうな。こっちは任せてくれていいから」
近くにいる、後輩の子が笑みを深めて頷いた。

「はい。よろしく願います」

そう言つてぺこりと頭を下げる。

……本当に何ていい子なんだろうか……。

未だかつて出会ったこともないような、人間の出来た後輩に感動しながら、俺達は中央棟の校舎裏花壇へと向かった。

目の前をとりどりの花が並ぶ。

園芸部の手入れがいいのだろう、この暑さにもへたった様子は無い。
校舎裏まで来ると流石に薄暗く、気温も少し低かった。

オマケに周囲を灰色の壁に囲まれているから、必要以上にお寒い雰囲気になっている。

そんな場所にも拘らず咲いてくれている花たちが、やけに可愛く見えてしまう程だ。

一度水をやった所為か、何となく愛着を持ってしまった花の前で、俺は腰に手を当てた。

「それじゃあ、始めるか」

言っと、ハ二子がこっくり頷いた。

相変わらず花壇の近くにある蛇口は閉められていたから、今回もズルズルとホースを引きずっての事だ。

ホースの先に付いたシャワー部分をハ二子に手渡し水遣りを始めるが。

何故か、シャワーのレバーを引いても水が出てこない。

「……出ないのである」

不思議そうにハ二子がノズル部分を覗き込んだ。

「あれ、何でだ？」

「くうううー……くくっ！」

いや、壊れるから。

何の躊躇いも無く力ずくで何とかしようと、レバーを力いっぱい握りしめるハ二子を止めて、ホースに目をやった。

「……あ、なんだ、あそこで絡まってるじゃん」

校舎の角から出て直ぐのところで、ホースの一部がこんがらがっていた。

「ちよつと解いてくる」

ハ二子に声をかけ、小走りで駆け寄っていく。

「……あーあ」

そこにあつたのは、一言で言くと青い団子虫。

近くで見ると、薄汚れ古びたホースが、鞆から出したイヤホンみたいに絡まっていた。

……ていうか、いつの間にこうなった？！

そのまま呆然と見ているわけにもいかなないので、地面に蹲っている青い団子虫を起こしにかかる。

……えーと、ココがこうなつて、こっちがあつちに行ってるから……あ。馬鹿だ。端っこ持ってこないと解けるわけないや。

そう気付いた時には、出来損ないの毛糸玉に右腕を半ば以上入れていた。

巻き込まれた形の右腕は放っておいて、照れ臭さから左手で頬をかきながら、顔を上げる。

「なあ、そっち側持って………っ」

言葉の先は目に入った光景の所為で遮断された。

健気に色を咲かせる花壇の前で、何を思ったか、ハニ子がホースの先を体に巻きつけていた。

二周ほど腰にそれを巻き付けて、今度はピンと伸びた部分を両手でしっかりと掴んだ。

……ぐつと腰を落とす。

蹴るようにして足場を確かめているその姿は、完全に綱引きのアンカースタイルだ。

「ちょ、待つ……だ、い、いだだだだだだだだだだだだだっ」

ふんつというハニ子のおっさんみたいな気合の声と共に、右腕に信じられない位の激痛が走った。

思いつきり引つ張られた為、腕を巻き込んでいた玉が、見る見るうちに小さくなっていく。

複雑にもつれたホースの中で、右腕がミチミチと音を立てた。

「……んぎいいいいいいい！」

んぎいいい、じゃない。

こちらの様子には一切頓着無く、ハニ子は足を突っ張ってホースを引いている。

それで解けるわけが無い！とか、お前は力を過信している！など、言いたい事は山ほどあったが、口から出て来るのは「あー」とか「うー」とかのゾンビばりの悲鳴と慟哭だけだ。

いい加減腕の色がおかしな具合に変わり始めたころ、決して楽しいとはいえない音が、狭い空間に響き渡った。

——ブチイイイイ。

右腕が、右腕がもげた！

……訳ではなく、古びたホースがネを上げた瞬間だった。

遠く視界の片隅で、ハニ子が勢い余って転がる姿が。

無残にも中途から引きちぎられたホースは、ゴムの性質、もしくはユートピアの法則によって、引っ張られていた力の反動分、唸りを上げてこちらに戻ってきた。

狙ったように顔に来たそれを辛うじてかわす。

俺を打ち損ねたホースは、勢いのまま青い玉の中に吸い込まれていき、反対からの水の力と相まって、ブベベベベベベと音を立てながら、一気に塊をほどいていった。

右腕の解放感と体に当たる水の冷たさも、目の前で起きた出来事から思考を呼び戻すことは出来なかった。

呆然としたまま、のたうちながら水を吐き続けるそれに全身をびしょ濡れにされていると、いつの間にか立ち直ったハニ子が、トテトテとこちらに駆け寄ってきた。

自分の所為で濡れ鼠になってしまった俺を無視するように、制御不能のウルトラホース一号の首根っこをがっとう掴むと、そのまま花壇の方へと取って返して、とっとと水遣りを始めてしまった。

……。

……あ、虹だ。

太陽の位置が変わった所為か、いつの間にか日光の入り込んだ校舎裏に虹の存在がある事に気付いた。

ハニ子がくるりとこちらを振り返って大きく手を振る。

「終わったぞー」

機嫌よく報告してくる生後三日児に應える為、俺は立ち上がる。

「……よし良くやった。じゃあ今のどこが悪かったか教えてやるからこっちに来やがれこの野郎」

口から出てきた呪詛の言葉は届かなかつたらしい。

身振りに応じてハニ子が近寄ってくる。

嬉しそうなその顔は褒めてくれと言わんばかりだ。

ニコニコと顔だけは笑顔を作り、そんな彼女に相応の報いをクレテヤルべく、俺は親指とで丸を作った中指にグツと力を込めた。

………背中に刺さる視線が痛い。

夕方の商店街は買い物客でごった返しているのに、足を進めるごとに人の波が微妙に裂けていく。

気分的にはプチモーゼ。

………すすいすすい進むのに、歩きにくい。

「全く！ 信じられないヤツである！」

視線を横に向けると、その一因であるアツパッパーロボが歩いている。

「お前が悪いんだろうが！」

商店街の皆さんが目になっているのは、昨日現れた規格外アンドロイドと、部屋干しっ！ みたいな生乾き男子高生。

そんなコンビが口論しながら歩いてたんじゃあ、人波だって、そりゃ割れる。

「でこが痛い！」

嬉しくないVIP待遇を受けながら、ハニ子が嫌味つたらしくそう叫んだ。

両手でいかにも大事そうに、赤くなった額を撫でている。

そんなハニ子の横を、若い男が見惚れながら過ぎて行った。

「しつこいぞお前。たかがデコピンくらいで」

背中にもまたぞろ視線を感じつつ俺は答える。

振り返ると、予想通りたった今すれ違った男が、敵意に似た色を湛えた目で俺を見ていた。

肩を落としながら、溜息をついて前を向く。

「……なあ、そんな事より視線が気にならないか？」

「？ いや」

あ、そうっすか。

開発コンセプト通り、見てくれだけは上等なハニ子だ。

連れ立って歩く俺に対して、道行く男達の無言のブーイングが聞こえて来る。

……いや、こいつ手からビーム出るんだぞ？

余程説明してやりたかったが、そういう訳にもいかないので、再び不満を漏らし始めたハニ子に向き直る。

こうして一緒に居ると、ハニ子が確かに人目を引く存在である事が分かる。

青い髪や緑の瞳は日本人離れしているが、逆にその容貌は、いかにも大和魂とかいうモノをくすぐりそうだ。

パツと見清楚な印象に、庇護欲をそるだろう小柄な体躯。

今は手を振り回しながら怒りの表情を露にしているが、その姿も人によつては元気が良いとなるかも知れない。

ただ、こいつの元気は机を叩き割りホースを引きちぎる。

今日一日に学校で出来上がったのは、憐れ二本足の机二つと、鳴き声をあげるようになったホースだけだ。

作り物めいた、とか、人形のような、といった成立していない比喻を使いたくなる程の美意識を持つ、水城さんの祖父さんには感心するが、もっと凄いと思うのはハニ子の細かい所作がいかに人間らしい所だ。

現に今、額を押さえて口を尖らせる姿は、同年代の女の子にしか見えない。

……一般人にはとても見えないけど。

ハニ子を見ていると、わざわざ学校にまで来て、人間の事なんか学ばなくたって良いように思えてくる。

「……お前、何でまた学校なんか来たんだ？」

という訳で俺は素直に質問した。

こいつの場合、必要なのは弁巧よりも率直さだ。

…… なんとって、口が垢すり並みにかるいし。

案の定、嬉しそうにハニ子は顔を輝かせた。

「貴様などに教えてやる理由は、全く、これ——っぼちも無いのだが、いいだろう教えてやる」

嫌みつたらしく言った後、少しの沈黙を前置きにする。

「…… わたくしくらいの歳の人間は、学校に行くものなのだろう？」

…… お前は0歳児だ。

いや、設定年齢の事を言ってるんだらうけど。

自分で言ってて、なんだ設定年齢って。

「…………… それだけ？」

考えてもみなかった答えに、俺の足が止まった。

ちようど俺の頭上、アーケードの一部に、昨日ハニ子がこさえたばかりの人の頭大の穴がポツカリ空いている。

応急処置だろう、上からブルーシートをかぶせていて、足元にはここだけ青い影が落ちていた。

…… お前くらいの歳の人間はあんな所に穴なんか空けないけどね。

どうでもいいけど、こういうのって誰が修繕費出してんだろ？

「それだけだが？」

歩みを止めないで、ハニ子は頷いた。

ぼうつと上を眺めていた俺は、慌ててその後を追いかける。

「それだけって、他になんか無いのか？ ほら、例えば敵を調査するためーとか、人間を知って…………… って、お前言ってたじゃん！

より完成度の高い——とか何とか、あれ」

その疑問に対する答えもとてもシンプルだ。

「貴様達は違うのか？」

…… 違います。

「よ…………… プルム様が言っていたのである。わたくし位の歳の人間は自らを高める為に、みな学校に通っているのである」

普通の事だから。

それが理由……？

頭の中に、白い文字で書かれた「まさか」と「いや、しかし」の二択が浮かぶ。

経験則でいくなら「いや、しかし」さんに5000点だ。

あいつらの性格を考えるに、本当にそんな理由で通わせてそんな気がする。

うじうじと結論を出せないでいると、いつの間にか商店街の端まで来ていた。

アーケード入り口のアーチをくぐり、蛍光灯のついた商店街を抜ける。

俺の直ぐ横を、別の高校の集団が楽しそうに歩いていった。

赤い世界が広がる。

空が濃くなつた分だけ気温は下がっていたが、地熱がまだまだ暑い一日を終わらせてくれない。

ピカピカに磨いたオレンジみたいな夕陽が雲の中に隠れるのを見ながら、ハ二子が呟いた。

「聞きたいことはそれだけか？　ならそろそろ帰るのである」

ここからウチと水城家はちょうど等分くらいの距離で、対極に位置している。

ハ二子が俺が向う方向と反対の方に体を向けて、早速歩き始めた。

輪郭のぼやけた背中に、俺はどうしても聞いておかなければならない質問を慌てて投げた。

「最後に一個だけ……えーと、俺の正体とかつて言っちゃったりする？」

別に正体がばれたからって帰らなければいけない故郷も無い。

その事でこいつらが如何^{どう}こうするとも思えなかったし……だけど悲しいかな、人の口に戸は立てられないと言う。

いつどこでどういった経緯からバレタという事実が祖母さんの耳に入るか分からない以上、秘密を知っている人間は少ない方がいい。

味方にばれる事を恐れて敵に口止めしなければいけない立場は、あ

んまりヒーローのプロフィール向きじゃない気はするけど。

一瞬考えるような間があって、ハニ子は振り返った。

「言つたろう。学校に通っている間はプライベートな時間なのである。その間貴様は只の級友だ。……そうだろうサン……いや、……

……あれ？」

「あん？」

「……まだ名前を聞いてないのである……」

「……大地」

「そうだった」

確かに、自己紹介はしてなかったけどさ……。

「その間貴様は只の……」

「そっからやり直さなくていい」

途中で止めると唇を尖らせ分かりやすく不満を表した。

「ちっ、まあ良い。……また明日なのである。秋名大地」

シユタつと手を上げ、言った途端の全力疾走。

あれで器用に人ごみを避けているから、アンドロイドというのもあながち嘘じゃないのかもしれない。

それでも俺の中では五分五分だが。

だって、

「……どう見ても人間だし」

呟いてみて、なるほど、合点がいった。

……人間だったら学校に来るのは当たり前だ。

「……また強引に整理したわね」

翌日。

HR終わりの千葉ちゃんを捕まえて、昨日の事を報告した。朝の一連の騒ぎから帰宅まで、自主検閲後の大発表だ。

それを聞いた千葉ちゃんの品評が先の言葉だった。

「良いんです。それで良いんですもっ」

腰に手を当てて、呆れたように溜息をつかれる。

「君がいいならそれでいいんだけど」

投げやりっぽく言うのと、それで、と言葉を繋げた。

「上手くいきそう？」

「解らないですけど、なんか無駄っぽいですよ」

ハニ子は基本的にはフアジーな性格のくせに、公私の区別ははっきりとしているようだった。

目の前の不良公務員と違って、公職にでもつけば、しっかりした公人になれるそうだ。

「いくら仲良くなった所で、手心とか加えてくれそうな雰囲気じゃないんすよね」

「そうみたいね。けど、他に良い手も思いつかないし」

茨の道も、いよいよ極まれりだ。

ここに至っても未だ強引な手を提示しないのは千葉ちゃんの人の良さだろう。

「ま、現状維持かな。どうせ受身なのは変わらない訳だし」

「……そうですね」

その辺り何とかなんのかとは思うものの、どうにもならない事も分かってる。

それに、こちらから積極的に動くには情報と動機が無さすぎた。

”俺達いまいち当事者になりきれてねえ同盟”のメンバーとしては、なるようになれが基本方針だ。

「ほら！ 元気出して！」

俺の様子を見かねてか、千葉ちゃんが殊更に声を張った。手に持った出席簿で、痛いくらいに背中を叩かれる。

「今のところ仲良くやってるんだし、それに私もいざとなったら……」

「うわあー！ 転入生が重油零したー！」

お願いですから、慰めるんならバリエーションを増やしてください

い。

間違い探しのような既視感に包まれながら、つんと鼻にくる油っぽい匂い。

集まり始めた野次馬が重油の匂いに顔をしかめた。

「……歯医者に予約してたんだった」

「まだ朝の九時ですけど!？」

繰り出された手刀を受け止めて、千葉ちゃんの腕を掴む。

千葉ちゃんはいばらく俺の手から逃れようと身を振っていたが、それが無理と見るや、直ぐに揺さぶりをかけてきた。

「あのねえ、いつまでも大人の手に頼ってたら成長できないよ」

「あんた今回ほぼノータッチだろ!」

「だから最後までやり通しなさいってば……もう、たーっ!」

無理矢理に俺の手を解き、目の前でパシンと拍手を打った。

……なんだ？ 猫騙し？

「……?」

「……はい。じゃあ、授業があるから」

今までで一番強引な話の転換だった。

「な、なんなんすかその便利な拍手はっ?！」
かしわで

「……大人になれば分かる」

なんだそれ……。

不覚にも膝から崩れてしまった。

いつもより低い視点に、小さくなっていく背中がうつる。

「大人って……」

憐れっぽく呟いて床に手をついた俺の周りに、濃厚な重油の香りが漂っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2983c/>

ヒーローの条件

2010年10月9日01時25分発行